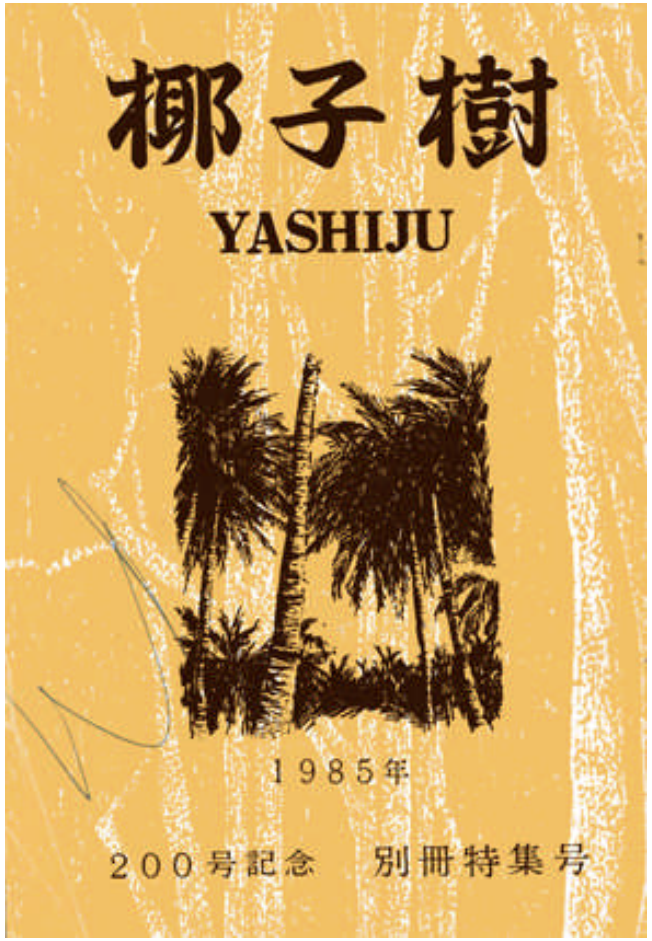
目次

二百号記念別冊刊行に際して　徳尾　渓舟　4
座談会「コロニア歌壇の回顧と展望」　6
富岡さんと椎木さんの手紙　編集部　42
これこそが真の移民短歌（河村哉太郎、小野寺郁子、八巻培夫、小笠原富枝）　44
移民にとって短歌とは何か　森谷　風男　67
全伯短歌大会の歩み　弘中千賀子　75
岩波菊治賞の経過　清谷　益次　89
二〇〇号記念会員作品集（いろは順）　94



訳詩「石川啄木」　１４６
コロニア短歌界の現況　清谷　益次　１４７
児童短歌について　穂島　千代　１６６
二世にとって短歌とは何であったか　１７３
（望月喜恵子、志伊良二世、阿部玲子、秋水三郎）
ブラジルと私の短歌　細江　仙子　１９０
われらが心の遍歴　水本すみ子　１９５
―一五〇号以後に出版された歌集その他―
戦後移住者がみたコロニア短歌　２０９
（石橋テル子、笹波北陽、青柳房治）
わが生涯と短歌　２２２
（植村かず、加藤操、西田季子、米川久、
藤田美沙子、川原比露思、開沼貴代、
山崎益一、森重扶美、住吉光雄、安部栄子、
大西阿哲、賛戸勝子、小石茂行、軒井益代）
田舎に遣る一首の歌　鳥井　稔夫　２７８
一輪の白椿のように　大浦　文雄　２８１
統計に見る椰子樹概史　米沢幹夫　２８２
地方歌会（三浦久和子、久米光春、河村哉太郎、
八巻耕土、中川荒記、春名宏文、大場時夫、初穂、高橋よしみ）　３１７
椰子樹とその運営　３４３

一五〇号以降の物故者と作品　陣内しのぶ　３４５
昭和万葉集のコロニア短歌　３５６
日本へ帰った歌友たち　徳尾渓舟
あとがき　清谷　益次　３６２
コロニア万葉集の位置づけ
現会員名簿

〈カット　上～創刊号表紙・半田知雄。
下～二百号表紙・富岡清治　〉

# 椰子樹二百号記念別冊刊行に際して

徳　尾　渓　舟

コロニア歌壇の中心的存在である「椰子樹」誌が一九三八年に創刊されて以来、その時その時の事情で月刊が難しく隔月刊や季刊に切り変えたりしながらも、この半世紀近い年月を歩み続けて来て、今二百号に達し、その記念別冊号を発行出来ると云うことは、その経路を顧みて、まことに感慨無量でもありまた非常な喜びでもある。

創刊当時私はその刊行にたずさわって居たのだが、果たして何時まで刊行出来るだろうか、誌友達が全面的に支持してくれるだろうか、発行費は大丈夫だろうか、など常に案じた。当時コロニア歌人達はみんな貧しく、僅かな誌代もとどこおり勝な時代だったのである。

そうした中で別な歌誌が一時出たり、発行費の大きな賄い役であった坂根歌人総領事が転任で帰国されたりで先の見通しも立たず途方にくれる思いをしたりしたが、主流歌人達が元気に頑張り歌友達も応援して何とか発行を続けて居るうちに、第二次世界大戦開始と共に、伯国政府の日本語使用禁止となり、その中でほそぼそ発行を続けて居るうちに、印刷所も閉鎖してしまい、すっかり行きづまった。これが最後と云う最終号発送の時は、市内の小さな郵便支局から発送すれば目立ってまずいと云うので、わざわざ中央郵便局まで抱えて行き、大きな郵便受箱に投げこんで足早

に引返しながら誰かに見られなかったか、つけられて居ないかなどの不安から何回も後を振り返りながら帰って来た思い出も今は懐かしい。コロニア歌壇及び歌人の活動はこの時点で中断され、もう「椰子樹」再刊の事も期待出来ないと思って居たが、第二次世界大戦中、「椰子樹」創刊以来の編集人だった武本由夫君が当時聖市近郊モジ市郊外に居住し、附近の歌人達と歌会を時々催し、その作品を集めて謄写版刷りながら「林泉」と云う歌誌を発行して居り、そのうち大戦も終り日本語使用禁止も解除され、日本語新聞もぼつぼつ再刊され始めた頃、確か三号まで発行されて居た「林泉」を中止し、椰子樹再刊の動機が生れ今日に至るもとになったわけで、武本君の絶えない短歌への情熱には敬意を表すべきだと今でも思って居るのである。

爾来数十年間にいろいろな変遷を見ながらも「椰子樹」は歩み続けて、今その二百号記念号発行の喜びを持つわけである。

その間日系コロニアの社会、経済条件も大きく変わり、歌人達の経済も昔と比較にならぬ程よくなり自由な生活が享受出来るようになり、作歌活動も盛んになって来て居るのは喜ばしい。

だがこの半世紀間に先輩歌人達は次々に没し去り、私などが「生き残り」として残骸を曝して居るわけだが、それにしても「椰子樹」創刊にたずさわった私が五十号、百号、百五十号、そして今また二百号記念別冊発行に祝辞を述べ得たことは大変な光栄であり歌友諸氏に厚くお礼を申上げる。

「椰子樹」創刊当初からの「歌人の主義主張、上手下手を問題に

せず、作歌同好者の連帯感を持って勉強、親睦の場とする」と云う主張は今日まで持ち続けられ、今後も変らないと思う。

また「椰子樹」は創刊以来今日まで、聖市在住の一つかみの人の犠牲的奉仕に依って発行がなされて居ることを忘れずに、コロニア歌人諸氏は今後益々短歌に精進されるように祈念し、二百号記念号発刊の祝詞とする。

## 座　談　会

## コロニア歌壇の回顧と展望

出席者＝徳尾渓舟　清谷益次、米沢幹夫、西田季子、

司会～安良田済。

安＝椰子樹はかつて五十号、百号、百五十号と、その分節のおりおりに記念特集号を発行してきました。そして、今回二百号記念特集号を発行することになりました。百五十号の特集号を発行する時点では、あるいは最後の特集号になるのではないか、という疑念もいくらかありました。そういう不安を提供するような状況だったと思います。その難関をのりこえていま二百号に達したことはわれわれの誇りとしていいのではないかと思うわけです。

ところで、いろいろの事情や状況から推量しますと、今度こそいよいよ最後の特集号になるのではないかという予想も相当に現

実味をもっています。これはわれわれに緊張感を強いるわけです。そこで、今日はこれが最後・の特集号とあるという前提のもとに、コロニア短歌を内側からも反省し、歴史的に回顧しながら移民短歌の体質といいますか、主調音といいますか、そういう点を主題的に捉えてみたいと思うのです。

一九三〇年代の文芸的状況

安＝そこで、椰子樹創刊当時の状況を回顧するまえに、一九三〇年代のコロニアの文芸活動について、ことばをかえていえば、移民が背負ったドラマや感情体験が文学的発想としてのひろがりぐあい、そういうものについて簡単にでもふれてみる必要があるのではないかと思われます。

私はまだ子供だったので一九三〇年代初期の文芸活動状態についてはよく知らないのですが、新聞は文芸欄に相当スペースをさいていたように記憶しています。

「農業のブラジル」誌でさえ文芸欄は盛況でした。徳尾さんも投稿者の常連の一人で、歌壇、柳壇で活躍していたのを記憶しています。当時は今からふりかえると文学的質は低かったかもしれませんが、文学的エネルギーの放出という点ではみるべきものがあったと思います。　ところで、エンシャーダに明け暮れる泥くさい移民と文芸とは次元が異なった感じで結びつきがたいように思えるのに、現実は意外にも恰も移民の生理のひとつでもあるかのように文芸と密着して生活してきたように思えます。どうしてそう

いう現象になったのでしょうか。

徳＝それはやはり望郷、ふるさと恋しという感情から文芸的な情緒が生れたからと思う。生活自体が乾燥しているから、内的になにかうるおいを求めざるをえない。特に若い者はそういう状況にいると故郷思慕の心情をいやすために文芸に傾斜していったといえるだろう。それがいちばん大きな理由だと思うな。

安＝米沢さんは短歌に入るまえに詩をやっていましたね。詩というより、文学の世界に魅きつけられた契機とか動機というものは何だったんですか。

米＝ぼくの場合、それはやはり思春期の感傷からでしょう。一本の椰子の樹が立っているのをみただけでも涙がでるというノスタルジーの吐け口のようなものだったかも知れない。それに、渡伯する時、従姉から貰ってきた武者小路実篤の「人類の意思のままに」にかぶれたのが最初にのめりこむ動機となったようです。十二才の頃ですがね。

安＝西田さんも詩作していられたようですが、文芸に興味をもつ特別な契機とか理由があったんですか。それと当時の移民の文学的状況をどういうふうにみていられましたか。

西＝私はね、郷愁というものにおそわれる暇もないほど当時は生活に追いつめられていたんです。ですから新聞をよむ機会もしばらくはない状態でした。どうやら新聞が購読できるようになってから詩の二、三篇も発表したかもしれませんが、それはずっと後のことです。

短歌をはじめたのはもっと後で、徳尾さんが時報紙の選者をしていられた。二回ぐらい投稿した頃に選者をやめられたと記憶しています。

なお当時の文学的状況をどういうふうに捉えていたかというと、

野の果てに隠れて住める移住者のかなしみのせて秋風ぞ吹く

作者の名も新聞の名も記憶していないのですがこの歌が強く胸に応えました。今でも鮮明に記憶しております。

あの当時（昭和の初期）日本の経済の行きづまりから海外に移住した人々の他に、著者の間には思想的に、或いは外国の自由にあこがれるといった風潮に乗って簡単に手近かな移民政策に便乗して、農業移民をよそおいながら移住して来た人々がかなりあったと考えられます。

その人達の心情が泥くさい移民短歌とは一寸遣った型で発表されたようにも思います。それはアリアンサの文化的雰囲気ほどまとまったものでなく、アリアンサを線とすれば、地方の文芸状態、短歌界は点のように散らばっていたといえると思います。

清＝文芸界の歴史的状況といえば、調べてみると移民が一番多く入ったのは一九二六、七年から三五年頃までで、多い年は二万人も入った。そういうわけで、自然植民地もふえるし、植民地の日本語教育も盛んになる。それに青年会などは手書きの会誌を発行するから、多くの文芸作品も寄せられる。そういうかたちを契

機として文芸の世界に入っていくというケースが多かったのではないかと思う。

「地平線」が創刊されたのは一九三七年。「椰子樹」が創刊されたのは一九三八年の十月。その年は三つの新聞が日刊になったという、ブラジルのナショナリズムの昂揚、日本の大陸武力進出などで日本移民に対する批判が高くなり、危機的状況がつい目の前に迫っていながら、日系コロニアとしては最も動きの活発な時代であった。

それ以前に、よく話にでるアリアンサの「おかぼ」はもっと早く一九三二年の創刊であった。そういうふうに、都会化は新聞、雑誌に文芸欄があり、地方には会誌や同人文芸誌などが方々にあったので、自然に文学への目ざめというか、そういうものが澎湃と起ったものと考えられる。

私自身のことをいえば、私は十才のときにきたのですから何もわからなかったのですが、郷愁ということ以外に非常に準二世的飢渇感というか、何かにつけて満たされない、そこで何かによって満たされようとする、そういう心情がたまたま文芸に関りをもつということになったと思いますね。

安＝皆さんの体験とそこからくる認識を総合してごく概略的にいいますと、移民としての不安、愚痴、苦情、あるいは単なる趣味として文学的形式によりかかったという面もありますが、そういうことと共に、日本の文化と伝統を身につけていた移民が異質な文化の中に放りこまれたときのカルチュア・ショックが郷愁と

いう心情をつくる。その心情を縦糸とし、会誌や新聞雑誌の文芸欄という場を横糸とするところに自分の存在性を意識するという自覚が文学的状況をつくったといえるのではないですか。

椰子樹創刊前後の状況

安＝一九三〇年代における文芸界の状況を概観しましたので、次は「椰子樹」の創刊をみるまでの歌壇の動勢について考察していただきたいのですが・・・。

徳＝一九三〇年代は今日から比較するとやはり発表機関のスペースはかなり限られていたな。当時文芸を一番優遇していたのはブラジル時報だった。その文芸欄では短歌が一番盛んだった。といっても、現在の盛況ぶりと比べると問題にならんだろう。

日伯歌壇は岩波先生が担当されていた。全然批評を加えないので〝ヒナ壇歌壇〟といわれていた。それに比べると時報はスペースを大きく提供していたので選歌評も充分に加えられる。そういうわけで多くの作者が集ったものだった。

安＝徳尾さんが時報歌壇を担当したのは一九三六年から三八年までででしたね。その頃の投稿者は通算何人くらいだったですか。

徳＝盛んであったといっても常連は七、八人くらいだったかな。鈴木南樹、中井はじめ、遠山瑞水、古沢典穂、小川碧水などの名がいま思いだされるのだが、あとの多くは散発的に投稿していた。まあ実際はそう多くはなかったかもしれないな。

米＝歌人の数といえば、一九二九年にブラジル時報が鈴木南樹の

選で「歌人競詠」というのをやっています。応募者が百四十人あったから、当時の状況からわりだすとこれは大変な数だと思うね。

それから、池田重二の「植民短歌史概論」によると、一九三八年までに作歌した人口は四百名とあります。どういう統計から得た数字かわかりませんが・・・。

清＝その数には少し誇張があるのではないですか。

（付記＝後で調べたところ、ブラジル時報社主催の第三次懸賞文芸（一九三五年）に応募した歌人は六四五名となっている。第四次は七八名に減っている。第四次の懸賞文芸担当者は徳尾渓舟氏であったのでその数字は信用できるが、第三次の応募者数はあまりにかけはなれているので信憑性がない＝安長田）

安＝ところで、次に「椰子樹」が創刊されるに至った前後の事情については既に誌上に書かれているので、重複することになりますが、当時の情勢からいって、生れるべくして生れたのですか、それとも、坂根総領事と正金銀行の椎木文也氏の二人がいなかったら絶対実現をみなかったものですか。

徳＝もちろん、当時歌人らが自分らの歌誌をもちたいという欲望は充分にあったし、時々話題にのぼったが、経済的な条件でとうてい実現の可能性はゼロだったな。この二人がいなかったら「椰子樹」の誕生はむつかしかったと言えるね。

当時、短歌会のあとでよく短歌雑誌をもちたいと皆で夢のようなことを語り合ったものだ。その頃、私は新聞社の文芸欄を担当していて、社会部の記者としても領事館によく出入りしていた。

そういうわけで機会あるごとに短歌雑誌を発行したい希望を坂根総領事にのべたものだ。

ある日、リオから帰ってきた坂根総領事が私の所へ電話して、リオの椎木文也と打ち合わせをしたから、つまり資金の方は二人で負担するから雑誌発行に踏みきってみよと申しわたされた。今でもその電話の声を思い起こすほどだ。そこで方々に連絡をとって、九月十日に日本クラブで歌会をやり、その席上で短歌雑総発行を決議したんだね。その時に集合したのは二十何人だったから、その数からみても意欲だけは充分あったね。

安＝もし「椰子樹」が生れなかったら「地平線」に合流するという気配はなかったのですか。

徳＝多くの歌人も同人だったがそういう気配も意向もなかったね。

安＝ところで、仮定で話をすすめるのは意味がないかもしれませんが、もしも「椰子樹」が生れなかったらその後の歌壇はどういうかたちで生きのびてきたでしょうか。

徳＝必ず短歌誌は生れただろうが、前にいった経済的な問題で生れたり消えたりというかたちをとるだろう。それは地方の同人誌とか何かのかたちで続くだろうが、永続性をもちうるかどうかね。

ただね、「椰子樹」が今日まで生きのびてきたのは編集部をはじめ皆が奉仕をもって犠牲的サービスをして支えてきた。そういう伝統があるのと、もうひとつは「流派巧拙を問わず」という主旨が

みんなに好く理解され、歌壇を統一して来た一番大きな理由だと思うね。

米＝ちょっとここで聞いておきたいのですが、「椰子樹」創刊号の発行所がサンジョアキン街二一六番になっています。その宛名はどういうところだったのですか。

徳＝うん、そこは当時私が下宿していた所なんだ。今でもある筈だが古い二階だての家だった。

素材とモチーフについて

安＝戦前の短歌における素材とモチーフの関係はどうだったのですか。

徳＝やはりあの当時はみな手さぐりで、見様見真似でやっていた。日本の歌誌を読んで勉強する者は少なかった。作風も大体ロマン的であった。ただ、岩波先生が指導されるようになって、アララギの写実主義の傾向がつよくなったように思うね。

素材とモチーフについていえば、さっきいった望郷、郷愁、生活のきびしさ、やり場のない寂蓼感、そういうものがからまって主観的、抒情的な作品になったのが多かったように思う。特に女性の詠んだ生活に密着したものには今日でも胸をうつものが少なくない。また、苦しいコロノ生活、植民地生活時代に父親として子供をよんだすぐれた歌も少なくないようです。

安＝ところで、満州事変から軍国主義がコロニアの短歌にも大きな影響を及ぼした。軍国主義というよりも国粋主義なんですが、

特に純な青少年は相当深刻な感化を受けましたね。ですから郷愁とは少しちがった心情、つまり愛国心とかあこがれという心情が混交されたかたちで素材とモチーフをなしている作品も少なくないですね。たとえば次のようなのもあります。

故国の幼な友等はすめらぎの軍に起たむ五師団動く（三七年・清谷益次）

戦死者は留吉が友と便りありこの日力なくコーヒーもげり（三九年・いこま・なみを）

徳＝あの時代はいわゆる大和魂が昂揚された時代ですが、それでも時局的なものが素材としてとりあげられたのはわりあい少ないのではないかな。

その理由は多くが私などのように子供のときにこちらにきて実際にそういう苦悩を体験していないからそれほど身に沁まなかったと思うんですよ。だから生活に直結した素材、身辺雑詠というものになる。

安＝さっきの二作品のモチーフは当時の時局的潮流を反映した移民の愛国心の抒情でしょう。特に多感な青少年はふるさとの友人、知人が御国のために生命を投げだして働き戦っている、ブラジルの山奥でエンシャーダひきながら、見通しのない生活をしている自分を対照させて反省する、すると、もし日本にいたら自分も参加して有意義に生きることができるのだが、というかなりつ

よい”うらみ〝が心底にうづまいていたのではないでしょうか。

清＝そういう国を挙げての戦いなのに自分たちはその外にいる、いわば疎外感といったものを詠った作品は案外たくさんありますね。まあブラジルでなにをごろごろしているんだろう、日本の同胞は国のために苦闘しているのに、という反省でもある心境なんですね。

安＝また、当時の実生活の苦闘の一面を反映した次のようなものもあります。

人気なきこの山里に逝きし吾子箱ごと　我は担ぎてぞ行けり
（三六年・河村哉太郎）

長病みのわれはも遂に死なずしてみとりつかれて母死なしめぬ
（三九年・荒木八雲）

清＝移民短歌の素材とモチーフという点に関連してですね。戦前の移民はひどく苦労した、苦悩した、とことあるごとに言いもし言われもして来た。その苦悩というものはどういうことであったのかということが、どう具体的に短歌に詠われているかを分類的にとらえてみようと思って、今年の日伯毎日の新年特集号に書いたんですけれどね。まあ、あそこに戦前の短歌に対する私の分析を一応まとめてみたんです。素材の面でもかなり広い視野からとりあげたつもりです。一つの「試論」のつもりだった訳です。

安＝それでは戦前の歌壇の回顧はこのへんでうちきりたいと思

いますが、ただ、画期的な、歴史的な出来ごとといったら何だったでしょうか。

清＝まあ、やはり中央で専門歌誌を発行したということでしょうな。考えてみるとあの頃活字の歌誌を発行するということは大変な出来事だったですよ、歌人にとっては・・・。

## 敗戦（戦勝）の反応

安＝それでは次に戦後の歌壇の歩み、動向について語っていただきたい。戦後といえば移民にとっても敗戦は何といってもひたむきなテーマです。これは一様に一生に一度しか経験しない強烈なインパクトでした。われわれにとって故郷の国が敗れたということは信仰の崩壊だったわけで、目的喪失からくる虚脱感にみななげこまれたわけです。

この終末意識をどういうふうに詠んできたか、どういうふに脱却してきたかとという点は、今の時点でどうしても回顧してみなければならないテーマだと思います。ところが意外にもあれほど強烈な衝撃、深刻な悲劇であった敗戦を歌人は案外作品にしていないのです。その理由はどこにあるのでしょうか。

米＝それは、歌人仲間はあんがい認識派が多かった。また戦勝派にしてもわりあい早く認識した。衝撃が心理的に緩和された状態にあったのでテーマとしてとらえなかったのではないでしょうか。

清＝”勝ち組〃　の作品についていうと、この問題は勝ち組の

新聞雑誌をよくみないと決定的なことはいえないですね。今は殆どそれをみることは不可能な状態で史料館の資料収集に際しても「勝ち組」新聞は全く集まって来なかった。「輝号」という雑誌は少し集まっているようです。材料が殆どないので勝ち組の心理を分析するチャンスが殆どないわけです。

まあ、そちらの方は別として、さっきの敗戦を題材にした作品は非常にすくないですね。ひとつは、これは戦前からの傾向ですが、いわゆる事局詠あるいは社会詠というものの芽をコロニアの歌壇では摘み取ってきたように私はみている。こういうテーマは短歌になりにくい、詠えない、すぐ行き詰まるんだとか、そういう声がかなり強かった。そういうことが影響したかどうかは断定できませんが、その理由の一つとみていいと思われます。

ただし、少数ではありますが、敗戦をとりあげた人もなかったわけではないのです。小田切剣、仲真美登里、八巻培夫、井本惇、特に井本は敗戦を強く意識し、作品化した数少ない一人でしょう。また岩波先生も相当作っているし、酒井繁一さんはかなりすぐれた作品を残しています。特に中山稠子は最初は戦勝派だったそうですが、認識してから一番多く敗戦の歌を作っています。それでも全体からみればやはり少ないということになりますね。

徳＝まあ絶対に勝つと信じていたものが急転直下だめになったので虚脱状態になって題材として捉える心の余裕がなかったのでしょう。

清＝ぼくも一応は作っている方でしょう。

安＝敗戦のインパクトというものを直ちになまで詠んだのは清谷さんだったね。ほかの人びとは少し時間を経過して作品化している。やはり何年か時間をおくとあの生々しい悲痛、悲憤、慟哭の心情はうすらいでくる。

それから、敗戦を詠んだものが少ないということは、戦争中は日本語禁止という箝口令のせいで作歌が中断されていた、したがって発表機関もなかったので、早急に作歌意欲をかきたてることができなかったという事情も考えられますね。

米＝戦勝派の歌では富吉好人は戦勝派の新聞歌壇の選者をしていたから、もちろん戦勝派的な作品だったわけだが、彼の力量から推してかなり次元の高い作品もあると思えるのですが、当時は没交渉であった為に殆ど読む機会をもたなかった。

清＝戦後、椰子樹が再刊される前にモジで「林泉」というガリ版の短歌雑誌を武本さんが編集していましたが、いわゆる時局詠とか終戦に関する歌は今度調べてみてもほとんどないですね。

安＝青夢も戦勝派のパリパリで、地方に出張しては一席ぶっていた、と椰子樹に書いていますね。しかし流石に戦勝の作品は発表しなかった。文芸春秋に斉藤茂吉の敗戦の歌が載っていた。青夢はその作品をよんだとき、このような短歌が北米で製造されるはずはない、茂吉の作品であると確信した。とたんに目のうろこがとれたと告白していますね。

米＝青夢も戦勝や敗戦に関する歌をのこしていないね。

清＝さっきの「林泉」のなかにこれは明らかに戦勝の歌だが、佐々木重夫の作品にこういうのがある。

勝敗をはるかにこえて八紘に御陵威の　光りあまねくわたる

徳＝ところで、あの戦争中の取り締りのきびしいときによく「林泉」をだしたものだね。結局あの「林泉」があったから、ひとつの契機となって案外早く椰子樹の再刊ができたんだね。これは岩波先生や武本君の大きな功績だった。

## 異質文化との交流と詠嘆性の変化

安＝敗戦というインパクトから立ちあがり現実肯定をすると、移民の生きる姿勢も変化するはずです。そこで生活態度が変われば詠嘆の質にも何らかの変化が生じるのではないか、ということが考えられます。少し抽象的なテーマですが、戦前の作品と比較してみてそういう変化があったかどうか検討してみたいと思います。

米＝ぼくは戦後に短歌を始めたので戦前のと比較するのはむつかしいけれど、ただ言えることは移民感情によって歌をつくってきていた。ひとつは出稼根生をもって生活していた。戦後はブラジルに永住するという決心がつき生活意識がかわってきた。それは移民だけの意識ではなく、歌壇そのものもしてきたわけです。

ですから、その程度の差はあるでしょうが、特別の差之いうものはないのではないですか。

清＝意識の変化についていえば、これは日本でも同じではない

かと思う。その変化を作品の上で現わすというのは非常に限定された範囲内の作者のことで、ましてコロニアでは土くさくわれわれはやっているわけで・・・。

もっとも、意識の変化は確かにある筈ですね。たとえば、子供はブラジル人であるということを否応なしに認識させられるということもある。もっと日本という国を客観的に見ようという気持も生まれるし、これから一生を托すことになるブラジルを、もっと直（じか）に見つめよう、そうしないではおられない、といった気持ですね。それは確かにあるのですが、これが短歌の表現の上でということになるともう少し緻密に調べてみないと言えないですね。ただ、表面にでたよ　うなかたちでは少ないようです。

安＝いま米沢さんが言われたような意味での素材とテーマを詠んだものでこんなのがあります、

何時よりか帰国のことも口にせぬ母が心は思おゆるかも（五〇年・浅田今日志）

それから現実肯定からできたもので、

日系の子らが五官を育てむかフバーを妻が練る音きこゆ（六四年・新納潤魚）

火酒の中にレモンを潰す手つきすら慣れてさびしき老移民ぞ夫は（六九年・西田季子）

新しき親子の倫理という説もいつか受け身の位置にいる吾れ（本庄研一）

などがあります。それから意識に大きな変化をもたらしたのは子供らの国際結婚という現象です。国際結婚は戦争直後の頃は親としてはまだ容易に受諾されがたいドラマであったし、大きなテーマでもあったわけです。

米＝ぼくはこういうことも思っているんですがね。戦前は岩波先生の影響もあったでしょうが、一般に写実を志向していた時代であった。戦後は逆に技巧的なものを志向するようになったのではないか。実際に感化されるのはずっとあとのことですがね。

西＝戦後、一九五五年頃、「蜂鳥」という短歌集団が煙をあげたことがありますね。七、八頁の歌誌でしたが、ブラジル歌壇の中堅を傘下に集めて歌壇の注目をあつめました。日本の一流歌人の批評を載せたりしてなかなか意欲的であり、佳い作品があったと記憶しています。

もう亡くなられた方々もありますが、その方々を含めてみな選者級の人であり、戦後的詠嘆性は日本の戦後歌壇の影響をうけながら、日系社会に立脚した風土性をもった作品を発表しています。こういう作品は、その後の椰子樹、コロニア歌壇に刺戟を与えていると思います。

徳＝戦後は日本から短歌雑誌が沢山入るようになり、ブラジルから日本の歌誌に投稿する人も多くなった。そういうふうに本格

的に勉強しようとする意欲をもりたてたので、やはり作品そのものも文芸的な味わいが深まったとはいえる。

西＝投稿者も増えたし、増えた理由は経済的にも時間的にも余猶ができたということにあるのでしょう。その余猶が日本の文化に目をむけさせたということでしょう。

戦前は強いられた労働からくる文化の枯渇、その枯渇をいやすのが望郷の歌でした。戦後は労働、衣食住のきびしい抑圧からも徐々に解放され、経済的ゆとりの開眼の作品、更に写生を基盤とした作品を発表した人々も、カルチュアーショックをうけ、知的で個性のある作品を発表しています。

米＝戦前のコロニア歌壇は万葉調短歌を無条件で肯定していた。従って作風も一本調子で変化には乏しかったが、作品から受ける触れ合いは直接的な韻をもっていた。しかしそれだけでは充分でない、あきたらない、という考えが戦後の作品に多く見られるようになった。いわゆる心象的な、モダニズム的な傾向への短歌活動のそれです。戦前と戦後を比較してみて、古代に於ける万葉から古今への移行を思わずにはいられない。

安＝ところで、敗戦によって現実肯定を強いられた結果、求心的であった移民の志向は遠心的に回転し、生理的にも心理的にもブラジルの文化に融合することが要求されます。特に二世はブラジル人ですから、否応なしに二世を通じて文化交流をするという図式になります。

ここでとりあげたい主題はカルチュアーショックがどういうか

たちで現われたか、またそれに対応も、消化してきたかという点です。つまり歴史とは誰が何を何処で何ういうふうに理解して生きたかという総合が基本になるわけで、そういう意味で作品に現われた歴史的な、あるいは分節的なものを検討してみたいと思います。

清＝そのあたり非常に微妙なところでむずかしいですね。カルチュアーショックが作品に反映されているものはごく限られているようです。そういうものが心の底にこもっていると思われる作品を残しているのは新納潤魚、それから、自分の兄のことで言いにくいけれど清谷勝馬も作っています。彼等の作品は直接的な表現ではないけれど、カルチュアーショックが心の底にないとできない作品なんだね。そこからブラジルの生活、自然といったものを見る目が他を絶して深く捉えるものとなっている。

西＝それが基盤というか、それからひっぽりだしたものなんですね。あの時代はなかなか主観が排斥されていましたからね。かたちを変えるとか、表現を変えるとか、時局の認識は－肯定－達観－というかたちになると思いますが・・・。

清＝いま呈示されたテーマについて言えばそういうことではないかと思うのですけれども、井本の作品なんかもこまかくみれば移民として日々を生きることの哀歓といったものが多く歌われている。

例えば、異質文化のなかで自分の子供が育っていくということを表面的にではなく、内にこもったかたちで詠んだものが相当あ

りますね。

西＝この問題は、移民創世紀の苦労とはまた違った苦悩なんですね。

戦後の日本文化が大きな変動に巻きこまれ、その上、否と応にかかわらず、異国の文化への順応、二世としての吾子との異和感、それらすべてをない混じえたカルチュアーショックをもろにうけて、移民という人類歴史の流れの中に自分の存在を見つめようとする心境になった、ということでしょうか。

安＝現実肯定に至るまでにはそういう抵抗や煩悶のドラマがあったわけです。たとえば次の作品などその過程を物語っています。

バイヨンの曲に合わせて尻を振る子等をば最早やわれは叱らず（五三年・風間慧一郎）

斯く消ゆる吾が血か伯人娶る子の宴に　吾の位置の小さし（七七年・加藤操）

こういうかたちで抵抗したり煩悶して、次の作品のように現実肯定から異質文化のなかに半身つかっている自分を発見します。

日本語の祝辞もやくして司会する長女の背丈は妻より伸びたり（六四年・八幡与三）

外人の友に味噌汁すすめつつ二世の子等は大らかに育つ（七九

年・仙洞田武定）

徳＝そう、もう日本へ帰れない、帰ってもしょうがない、という諦めから順応へということになるんだね。

清＝詠嘆の質について、これをかたちの上で考えたのですが、戦前のものは直情的であった。感動そのものを直接的、直線的にうたうという傾向があった。これは若かったということもあるでしょうが、別のことばでいえば、生でぶっつけたということです。ところが、戦後になって日本の作品傾向の一部の影響を受けた点もあるか知らないが、前衛的とまではいえないけれど、心理の深いところでの〝ゆれ〟あるいは心の〝うごめき〟、いわゆる心象風景といいますか、そういうものを捉えた作品が多くなった。つまり抒情が底深くなった、沈潜したものになった。したがって戦後の作品の一部のレベルは相当高いところにいっていると思うんです。

戦後のコロニア短歌の詠嘆の質の変化という点についてそういうふうに考えるんです。

安＝自己凝視という内世界に向ってすすんだわけですね。

清＝それともうひとつは作者の知性、表現の知的操作が要求されてくるんです。

米＝ぼくは詠嘆の質については二つの作品を例にあげて簡単にいいますと、

ふるさとの信濃の国の山川は心にしみて永遠に思わむ（岩波菊

治）これはいま清谷さんがいわれた直情的な表現で、われわれの共感を得た作品です。

ところが、椰子樹一九五号の、海山を遠く越え来て木の花の梔子は咲くはたての国に（秋永三郎）は感情の動きがとても屈折している。こういうふうに詠嘆の質に変化があったと思います。

清＝知的操作といいますか、そのへんが非常に緻密になったんですね。永年やっていることだし、複雑な人生経験もつんでいるし・・・・。

安＝戦後は知的抒情ということばが使われはじめた。知的なものに発想を求めたということは、短歌が単なる趣味であったものを越えて、何を詠うべきかという目的意識をもつようになったからでしょう。　清＝西田さんの作品などがまさにそれですね。

西＝移民短歌の詠嘆の質の変化はやはり戦後の文学的思潮として前衛的傾向を多少とも消化してきたので、それだけ変化はあったでしょうね。

徳＝詠嘆の質の問題は結局、帰国意識と永住意識、郷愁と情緒性、そこらへんにわかれるんではないですか。

移民短歌の風土性

安＝移民の風土性（主調音）というテーマについて検討してみたいんです。これも抽象的ですから少し具体的にいいますと、移民がもつ独特の怨念、悔恨、郷愁のドラマが歴史的証言性と文学性（文化性）をもっと風土的な色彩をもつのではないかと考える

のです。これは単純なひとつの捉えかたの例であって、いろいろの視点から捉えてみるべきものだと思うのです。

清＝移民短歌のなかの風土性ということですが、風土というのは非常に大きな問題になるんです。風土という言葉にはいろいろの解釈のしかたがあると思います。ただ、作品の上でいう風土とは地理学上の風土とは別にして考えるべきだと思います。地理学の上でいう、ひとつの国、ひとつの地域、あるいはひとつの地方の自然状況や特殊性、それらを風土というんだけれども、作品の世界ではそこに人間の生活とその地理的・歴史的条件がもつれあった、からみあった、つまり地理的なもの、自然的なものと、人間生活の歴史といったものがないあわさって出来るのが作品の上の風土性ではないかと私は思っているんです。

たとえば、とっぴな例だが山口県の岩国にある錦帯橋でもいいし、どこかその辺の土橋でもいい。この場所にはこれがふさわしいし、条件にかなっているんだ、納得されるものなんだとして作られた、これは自然的条件と人間の営みがそこで触れあって作られたものだ、そういうのが文学上での風土と者えるわけです。

そういう点で、ブラジルの風土的なものが作品のなかに主調音としてでているかということになると、われわれは日常生活の常凡に没してしまって、なかなか捉え得ない。こういうものは或る程度は問題意識をもって捉えないと現われにくいのではないか。

いつか、井本君が人文研のゼミナーで短歌の土着性についてずいぶん言葉を費やしたのですが、どうも核心にふれたような感じ

がしなかった。土着性とは少しちがうかも知れないが、それほど風土と作品の関係は難しいとも言えます。

いま提出されたテーマにピタリと答えになるようなことは言いがたいのですが、でも作品個々について、これは非常にブラジル風土、われわれをふくんだ風土から生れた作品というものはあるわけです。

安＝風土性というものはながい歴史がないと生じないものなのですが、移出が七十年八十年とひとつの土地に住みつくと、そのにおいのようなものが生じる。

たとえば、新移民と旧移民はひと眼でわかった、そういう雰囲気みたいなものも風土性をなすのではないですか。風土とは事物と人事が交叉したところの文化の歴史ですから、次の作品など歴史的な時間をくぐり、自分の生きる場所を認識したときに生れたものです。そういうにおいをもっています。

砂質土にふかく鍬きこむ牛糞と層なさむわが民族の自負（新納潤魚）

伝承の血の執心を削ぐ如く乾季の粗き風吹き抜くる（弘中千賀子）

新しき親子の倫理という説もいつか受け身の位置にいる吾れ（本庄研一）

米＝短歌は日本の風土性の中に生れ、永い歴史を歩みつづけて

いるもので、これを切り離しての論はなりたたなくなりますが、最近の傾向としてブラジル的な作品が非常に目立つようになったと思うんです。以前はもっと「ブラジル的な歌を詠め」という声がありましたが、この頃ではそれが聞かれなくなった。ということは、この国の風土性を身につけだしてきたからだとも言えるんです。それは異質な風土性に慣れ、すっかりブラジル人に成りきったという一つのポイントだとも思えるんだな。つまり意識するとしないとに関らず、大きな同化がとげられつつあることへの証だとも言えるでしょう。

移民短歌の証言性

安＝それではこのへんで移民短歌の証言性というテーマを掘り下げていただきたいと思います。

清＝それでは主題についてキッカケをつくる意味で……。

コロニア万葉集を編集した意図は、まさに短歌による移民の声といいますか、それを拾い上げることが大きな目的だったわけです。米沢さんもそうだと思うんですが、編集者の立場からはこの日的は百パーセント叶えられたとはいえないかもしれません。それは一人二十首に制限されたことや選者過程にも問題があったからですが、最大の原因は、自分は移民であるということ、移民の問題を意識的にとらえ、テーマとした作品が非常に少なかったからです。おおむね自然発生的につくっていたので、どうしても証言性のほうはよわいものになってくる。しかし、さきにいいまし

た私の日毎新聞の一文もこの証言性をさぐる試みだったわけです。

しかし、コロニア万葉集を題材として作品を書いている作家も日本にいるわけです。岡松和夫さんですが、ブラジルに滞在された当時、パウリスタ文学賞の選考委員をされた人で、私も当時同席していました。同校さんは作品のなかの主人公の作品として武田公平の歌を使用していられます。それから今度のは人物はもちろんフィクションですけれども、望月喜息子さんの作品も使っていられます。

その他の本名入りで引用されている作品をみますと、日本の人がみてもみる人がみれば、やはりコロニア万葉集というものはアンソロジーとしてかなりまとまっていると感じられているわけです。

そういうふうに自然発生的に多くの作品が生れたが、やはり移民の証言性になっていると思うのです。

米＝全く同感です。われわれ自身がとやかく言っても小さな範囲をでないが、第三者は別の視野から、より強く証言性を感じとり、選びとるものなんでしょう。

徳＝そうだね、自分は移民であり、移民とは何かという問題意識をかかえているかぎり今まで発表された作品はかなり多くの証言性をもっている筈だね。

安＝文学は、人間とは何であるかという探究なんでしょう。短歌だって自分は何であるかということが常に主題となっています。ですから証言的でなければならない筈です。

ところで、ちょっとそれますが、移民文学のなかの俳句という

形式には証言性というものが稀薄のようですね。川柳などは社会詩といわれており、社会機構のヒズミや二律背反の人間性を追究するに傾きすぎているのか、割合に移民という一つの全体としての証言性は、短歌と比べても稀薄のように思えますね。これは形式と内容の問題と片づけられますが、たとえばコロニア万葉集は移民の絵巻のような物語性をもっているでしょう。そのへんが他の形式とちがうんですね。

清＝コロニア万葉集は新聞や雑誌から一万五、六千首ばかり引き抜き作業をやった、その中から三分の一くらい選出されたんです。まあ作品価値としては幼いものもありますが、証言性という面からみるとかなりのものだと考えられます。

西＝帰化した人の作品がかなりあるでしょう。ああいう特殊な曲折した心理心情なんかやはり移民の強力な証言ではないですか。

清＝コロニア万葉集の編集にとりかかった頃、詩のかたちとして短歌が一番移民の心情を直接的に表現する、だからこれは移民の心の集成だ、とわれわれも折あるごとに言ったし、新聞なんかも記事や社説で書いてくれましたね。

米＝昔の作品ほど濃厚にでていますね。

西＝あの頃はそれが主題でもあってね。

安＝もっとも、現在でも現在なりにひとつの状況をのりこえなければならないように移民は条件づけられているので、それをのりこえようとする姿勢は、特色のようなものでしょう。それがひとつの証言性のかたちともいえるでしょう。

そこで、結論として移民の証言性はコロニア万葉集につきるわけですね。

清＝まあ、あれ以上にまとまったものはないでしょうね。これから後作られることも恐らくないのではないか。

## 歌壇の年令層

安＝まだとりあげたいテーマは沢山あるのですが、このへんで未来を展望してみたいと思います。

〃展望〃といいますと語感からいってなにか明るい未来、美しい予感をもっているようなひびきがありますが、ここでは単なる見とおし、臆測というほどの意味にとっていただきたいと思います。

新陳代謝がほとんどないコロニア歌壇の現状から未来を臆測するには、まず現役歌人の年令層というものを座標にしなければならないわけですが、米沢さんはその点についてなにか見解があるのではないですか。

米＝歌人の年令層については、一九八四年にスザノで地方短歌大会を開催した。そのおりに参考資料として全投稿者に年令を記入してもらった。もっとも末回答者も少数あったので、その分は推定して計算した。それで厳密に正確な数とはいえないが、そのときの平均年令は六五・七才となっていました。大体信用していい結果と思います。

徳＝ほう、それはもう熟年もいいところを越えているなあ…。

清＝私は平均年令についで調べたことはないけれど、いまちょっと考えてみても短歌を作っている人で一番若い年令層でも四十代です。おおむね実力ある歌人は六十、七十才台です。

これはいつも言うんだけれど、コロニア歌壇というものは原子雲みたいなものだと思うんです。傘だけがあって下のほうは細くつながっているにすぎない。傘が消えたらもうなくなる運命という、そういうあわれな状態にあると思うんです。

徳＝それは、ますます高齢化していき、歌人が少なくなるのは必然ですが私は日本人が生きているかぎりは短歌は消滅しないと信じていますがね。

まあ、二世、三世が後継するということは期待できないので椰子樹がいつまで生きのびれるかはわからない。しかし椰子樹が消えでも新聞歌壇はあるし、また一部の歌人がグループで小さな歌誌をつくったり消えたり三号雑誌の道を辿りながらもずっと続いて行くのではないろうか、と思うね。

清＝無くなるとか消滅するということは、ひとつのまとまった活動体としてですね。

徳＝うん、それはそうならざるをえないだろう。

清＝だから原子雲みたいなものです。

徳＝さっきの統計の平均年令から推量すると、十年後も椰子樹を継続発行する力が残るかどうか疑問だね。

安＝一九五九年に米沢さんが椰子樹の編集を担当した。そのときに会員にアンケートを出した。そのなかの一項にコロニア歌壇

の将来の見通しを質問したんです。その解答の七十パーセント位は、あと二十年もすれば歌壇という組織をもった活動体は消滅するだろうという悲観的な予想であったと記憶しています。あのときの平均年令は不明ですが現在から比較するとずいぶん若かったようです。ところで、あれから二十五年以上も経過したにもかかわらず、わりあい落伍者は少なく、椰子樹も健在という嬉しい錯覚をしたんですね。

しかし、二十五年前と現時点では事情が全然ちがいます。そこで、われわれの臆測の基準になるものは、たとえば椰子樹が廃刊しても、新聞歌壇が健在し支えつづけていくか、ということです。

徳＝私がいつも感心しているのは、いま活躍している歌人はだいたい子供の頃にブラジルにきた、しかも作歌という微妙な言葉づかいをこなすほど勉強してきたということです。それがコロニア歌壇を盛んにし、わりあいに長命に支えてきた理由のひとつだと思いますね。

ところで、二世、三世になるとそういう期待は全然できませんから、どうしても先細りと言う悲観的な結果しか予想ができないようです。

西＝私はね、まあ短歌というものはどこかで細ぼそながらつながっていくものではないかと思いますがね、悲観であったり楽観であったり……。

清＝いまの状況からいえば、この数年は新聞が大きくスペースをさいてくれるようになったということが一つ。それから、椰子

樹の会員もだんだん亡くなっていくけれども、それを埋めるように入会する人も若干あり、数の上では現状を保っているわけです。ただ、その若干は相当の年輩の人ばかりなんです。川柳や俳句では自分のおもいが充分に表現しがたいが短歌ならできる、とそういうことで短歌の方へ入ってきたということです。

ただ、作歌姿勢の上で文学性という問題と取り組んでみようという人は少なくなるばかりです。

それは、新聞歌壇があるあいだは続くかもしれませんが、まとまった行動力をもった団体とか組織とかはそろそろなくなるわけですから、そうながくはもたないでしょう。

徳＝とにかく、ブラジルの殆どの歌人は戦前に幼いときにきたんだが、この人たちによって戦後もこんなに隆盛にしてきたということは不思議な現象と思えるんですね。

清＝それはやはり戦前にさかのぼった準二世、準二世的周辺をもった二世、そういうもの達の日本に対する関心、あるいは自己表現欲というものをつよくかきたてる移民の環境が問題を提起したからです。そのためにはやはり七面倒な文章も文字も勉強しなければならない、このままだったら日本人として落伍してしまうというつよい危機感が下敷きにあって勉強してきたということではないですか。

安＝軍国主義とはちがった、歴史と文化に信頼と誇りをよせる日本主義に一種の信仰と愛国心をもっていた。そういう自負的な意識が社会的な問題へ、あるいは文学的な方向へと関心させた、

ということもあったのでしょう。

徳＝とにかく、戦前では四、五人で歌会をやっていたのに、最近は何時も二十人くらい集まるんでしょう。これは驚異的なことだと思う。

ただ、これも進出企業の社長などが、かつての坂根総領事のように短歌を愛し、社員に作歌を奨励するというような一種の歌壇振興運動でもやって呉れればともかく、どちらにしても急激に先きすぼみになる予感があるね。

何を詠み落したか、何を詠うべきか

安＝大体の意見をまとめますと、コロニア歌壇も急速に先き細りになっていくという心細い状態にあるようです。そこで、われわれは移民として詠まねばならない重要なテーマを全部詠んできたか、詠み落したものはないか、と反省しなければならない時点に立たされているのではないでしょうか。

皆それぞれにおのがおもいは詠んできたのですが、自然発生的にではなく、移民というひとつの全体という視点から何かを把握し、テーマとして詠んできたか、詠み落したものはないか、という自問が残されているのではないでしょうか。

こういう設問がでたのは、あの敗戦のショックを移民の立場から捉えて作品にした人が全体からみて非常に少なかったということによります。短歌をやるという姿勢からいってこういう大事件を詠み落していいかどうか、これは反省されねばならないと思い

ます。敗戦を主題とした作品を残さなかった人は現時点では悔をもっているのではないですか。ですから、もし詠み残したテーマがあればいま追求しておかないと永久に機会をのがすことになり、再び悔をのこすことになります。そういう意味で反省してみたいわけです。

清＝まあ、われわれは個人としては自然発生的な態度で作歌しているわけで、これが一番純粋なかたちなんだけれど、ただ、もしこれからやるとすれば、自分自分のテーマを設定してとり組むという以外には詠み落としたテーマの捉えかたも、詠うべき主題もないと思う。詠み落とした主題というものは数かぎりなくあると思うんです。が、さっきから話にでているように、自分自身のことでもいいけれど、移民としての意識の変化とか、定住に至った事態をどう捉えたか、あるいはブラジル人的な思考や生活態度への傾斜、こういうものは今までにも詠われできているけれど、深いところで捉えようとすると、いわゆる社会詠とか事局詠のような理屈ぽいものになりがちです。

しかし、これは一人一人のテーマとして試みないと、ここに提出された「展望」という言葉がでてこないのではないかというのが私の考えです。

それから、さきの詠み落としたテーマと関連して、歌うべき主題は何かという問題に移るのですが、何であれ自分のおもいをうたわねばしょうがないでしょう。

ただ、自分のおもいといっても、自分を含めたブラジルの社会相

といったものです。またそういうことで案外うたわれていないのがブラジルの風物、いわゆる叙景歌です。主題的にとらえてうたったのは青夢の海の歌ぐらいです。まだうたうべき風物はたくさんあるはずです。

徳＝そう、歌人は総体的に風物、つまり草木に関心がうすいな。だから何もかも「名も無き花、名も無き雑草」というふうにかたづける。私自身もそれを痛感するんですね。

安＝花鳥風詠といっても風土性をとらえなければならないのではないですか。

日本の短歌、俳句雑誌の作品中にまぜてかわりばえのないものは、それだけ意味が稀薄になります。

米＝しかし、むつかしい問題ですね。

ぼくは今日的視点からして移民という感情をきりすてて、ここの国民のひとりとして歌を詠むべきだと思いますね。

安＝その今日的視点がブラジルの文化・社会に融合した社会人のひとりの視点であればもちろんいいわけです。

西＝でも、そういう視点で詠むとどうしても社会詠や事局詠になりますね。「椰子樹」ではそういう傾向の作品はあまり評価されませんでしたね。

米＝それは散文化しやすいからです。

安＝それもあります。ただ、社会詠の主題はやはり作者の社会意識の深度によって捉えかたがちがってきます。小さな空間に安住していたんでは発想としてでてこないし、社会正義感は育たな

い。社会正義感が根底になかったら文学としても価値感が生じないのではないですか。

社会詠についてはそういうところに問題があると思いますね。

西＝でもね、現在やは徐々にブラジルの文化に溶けこみつつありますが、初期はほとんど交流がなかった。ですからたまたまテーマとして詠っても消化不良になり、散文調、報告歌と評価されるのでどうしても敬遠することになるんですね。

徳＝ブラジルの社会に交流する、文化に溶けこむといっても、実際はわれわれ一代ではむつかしいね。

西＝そうなんです。その反動で郷愁に向うわけでしょう。でもこれから作歌する人はそういう日的意識をもって欲しいですね。

徳＝だが、急激に先き細りになる展望にあるのだから、これをどうきりぬけるかが先決問題であって、発想の転換とか新しいテーマの発掘とか、そういうところまではいかないだろう。

清＝それでですね、歌壇は今ぎりぎりの線上にいるわけですが、しかし、編集者の立場から考えれば、時間と経済的な余裕さえあれば、その問題以外にもまだやりたいことがいくらでもあるわけです。

それはどういうことかというと、先のテーマ作品の呼びかけに関連して、もっと徹底した作品評釈をする、もう一つは移民短歌のエセンスを編集するということです。これはどういう発想かというと、さきにふれたコロニア万葉集が非常に制限された状況で編集されたので、百パーセント満足できる結果は得られなかった。

そこで、これが移民短歌だ、というものだけ集めて編集する、これもなすべき事業のひとつだと思うのです。

もう一つは、これは八巻培夫君と雑談したときの発想ですが、八巻君は最近啄木の短歌をポ語に翻訳して本にした。次には移民の短歌を翻訳したいという希望をもっているんです。そこで、それではコロニア万葉集をもっと凝縮したらいい移民短歌になる、選歌は私が担当し、翻訳は八巻君がやる、ということを提案したわけです。まだ、〃場当り〃的な話なんですけれどね。

これなんかやりたいことだし、やらねばならないのだが、編集者としての時間がないうえに経済的な問題でそう簡単に解決できないわけです。

そういうふうにやらなければならないものは沢山あるんです。まあそういう気特ではいるんですけれど・・・。

西＝それは大変なことなんですね。でもね、移民短歌のポ語翻訳によって、二、三世やブラジル人に興味をもたせ、それを通しで日本の韻文学、日本文学の目が開かれていくことも考えられます。たとえば、アメリカの日本文学研究家ロナルド・キーン氏のように…。

ですから、是非移民短歌のポ語翻訳を完成していただきたいですね。

安＝いま清谷さんが提起された移民歌集の編集とそのポ語翻訳案は、現在われわれに残されている一番重要な為すべき事業ではないでしょうか。

先きぼそりの展望のなかでこの主題を得たのはいい結論だったと思います。

長時間ありがとうございました。

（文責・安良田）

富岡さんと椎木さんの手紙

一九八五年七月十二日逝去の富岡清治さんが生前、二〇〇号記念の参考にでもと、椎本文也さんの富岡さん宛の古い手紙を編集部宛に送って下さった。

椎木さんは「椰子樹」の創刊には当時の坂根準三総領事と共に大きな力となった人。この人達がなければ、コロニアの専門短歌誌の誕生もまだ後のことになっていたかも分らない。今は故人となった椎木、富岡両氏を偲ぶため、収録することにした。

編集部

九月十六日　清谷様

富岡　清治

ようやく春らしくなりました。今度の椰子樹は大冊になりまし

た。このとし、コロニア短歌界は凶年であったようで、山室、小竹、井本、酒井と他界されたが是ばかりは致し方なしです。

椰子樹創刊の１９３８年に私はポンペイヤの清水さかえさんの第一の夫である福田さんのところに居り、３６、３７、３８と居りサンパウロに帰りました。そのころ椎木文也氏が正金銀行の支店長でしたので、日本送金の手紙の代書をたのまれ、椎木氏に手紙を書いた。その返事が本の間から出て来たので、椰子樹といささかかわりあると思われるので同封します。

そのころ総領事の坂根さん、槻木さん、文教にも歌人が居りよき時代でした　椰子樹一号の表紙は半田さんのかいたヒョロヒョロの椰子の樹でしたが、それが兎も角も二〇〇号を出すまでに生長したのだから奇蹟に近い。おまけに”コロニア万葉集〃まで出たのだから、これはアフリカの黒人ドレイがサンバを移入したよりも交績（まま）が上だろうと思います。

歌集も大場さんの二冊、涛声の二冊、小竹さんの二冊、水本さんと隆盛です。二〇〇号の表紙を今考いて居るところです。俳句の隆盛に及ばないが、歌は宮中の御歌会があるのがほこりです。多田邦治さんによってそれを果していただきました。まだ食欲があるのでも少し生きられそうです。幾日か？、幾月かは分かりませんが、（注・一九八四年九日十六日付清谷宛手紙。椰子樹二〇〇号記念別冊号の表紙は、もうこの頃に依頼してあった。文教の歌人とは阿部青杜と思われる）

椎木氏の返書は

昭和十三年八月十六日

耕村様　リオにて　椎木　文也

拝啓　貴作誠に難有拝誦仕候。聖州歌壇に於ける貴詠常に感深く愛誦仕居候。何卒今後共御指導賜り度御願申上候。近詠御笑覧に奉供候

ポンデアスウカに朝霧かかり其っ下の入海の一ところもっぱら光る

朝凪ぎの青海原をすれすれに一羽の鴎遠去りゆきぬ

朝の光強くみなぎるリオ湾の向うにかすむ州境連山

対岸に船輯つくに澄み透る大気に椰子樹いよよ厚しも

首都遠く離れ来ぬればうらさぶし熱帯樹林のサルビヤの花

朝の光すでに烈しく牧場の狸々木の花かがやけり

入居らぬ大西洋の砂浜を裸にて歩む日中の光

以上

## これこそが真の移民短歌

### 私が選んだもの

河　村　哉太郎

コロニア万葉集の中から、随意に八首選んで、私なりに感想を

述べることとする。前の四首は戦前編、後のは戦後編から抜いたものである。

パトロンとコロノいささか争いて夕べコロニアいたく淋しき

隠岐多春陽

権威者と無産階級との闘争。これは初期移民の辿った、切実な裏話であろう。

当時はパトロンとコロノの立場は、絶対的なものであった。コロノ個人の問題からか、或いは契約上のもつれからか、問題が起きたという。それがコロノ全体に及んでいった。問題はいまいささかだが、うまく解決を見るのだろうか、尚大きくなるのだろうかなど、弱いコロノからしてみれば、死活問題である。そんな険悪な空気の漲るコロニアは、笑いさえ失ったようになる。その状態を、率直に平明に詠んでいる。ありきたりの表現の中にしみじみと作者の真実な詠嘆が迫ってくる。私も少年時代、こんな事件に遭遇したので、その深刻さは身に沁む思いがする。西も東も分らない当時のこと、心細い事である。

住み古す椰子の木壁の下に咲く日本種なる白菊の花

沖田　宵星

古びた椰子壁の家の、軒下に咲いた日本種の白菊の花は、開拓

に挑んだ移民の清純な一途心の権化かも知れない。セードロの木を薄く割いた瓦の代用、椰子を割って作った壁、それが開拓当時の典型的な住居であった。原始林を伐採して、残った切株の間に、棉や米やコーヒーが、家の傍まで植わっている。仮屋とて庭さえなく、無味乾燥な風景が、森に囲まれている。世捨人が住むかと思われる、いまでは見る事も出来ない所である。大望を抱いた、たゆまぬ開拓精神は、旺盛で純で一途なものであった。軒下には日本種の白菊が咲いて、秋陽に清純な花を咲かせていた。作者はそんな環境の中で、取り入れの事や、離れた日本の事など、偲んだのであろう。そして日々その白菊に慰められ、闘志に燃えたのであろう。

古びた椰子壁の家と、日本種の白菊の花との対照が、私にはこのような想像を起こさせる。

富を得て帰る人あり吾子を連れてわが帰りゆくは何時の日ならん　　葛西妙子

人間の願望は時に羨望がつきまとう。戦前の日本人は、古来の島国根性を持っていた。移民は出稼根性の塊ではなかったか。見ていよ、五年もすれば必ず金を儲けて帰って来る、と云いふらして、ブラジルへ渡って来た、旧い人等であった。

幸い努力と運によって、金を溜めて日本に帰る人が居るという。自分はそれに引きかえ、その目（め）処（ど）さえつかずもたも

たしている。彼のように家族を引き連れて、古里へ錦を飾れるのは何時の日であろうか。それも叶わないのであろうか、作者の羨望と焦りが伝わってくるようである。
さりげなく詠み下してある中に、淋しさが滲んでくる。

昔のことは皆忘れたと木田さんは黒人（にぐら）の妻を振り向きて言う　酒井　繁一

余儀なく、早々と同化を遂げた旧移民の呟き、これも一つの逸話である。知る人もなく、放浪生活をしていたであろう木田さんは、黒人を娶った。当時として余程の事情で、余儀なかったのであろうか。過去の色々な事情は、言いたくはない、忘れたと言い切った、木田さんの心情は分るような気がする。日本人はブラジルに同化しないと言う事で、排斥運動まであった当時のこと、型破りと言える。
現代では取上げるまでもない事であるが、稀有の事である。抑制のきいた表現の中に、下旬がしみじみとした余情を伝える。

知る人も少くなりし郷里（くに）に来て紅葉綾なす山に見惚れる　安部　栄子

願い叶って古里に帰って来た、旧移民の感慨。移住して何十年かの年月が流れ、夢にまで見た古里に帰ってみると、知人の多く

は今亡く、僅かしか残っていない。
徒に流れ去った年月を振り返り、寂寞の感に打たれた事であろう。だが、時は移り人は変れど、自分を迎える古里の自然は、昔のまま、秋は紅葉がかくも美しい。澄み切った山辺のせせらぎは、昔さながらの音をたてていた。浦島太郎と違って思わぬ儲け物が授かったのである。
変らぬ自然美に救われた作者の心が、上句を受けて、下句にくっきりと詠まれている。人間の栄枯盛衰を果なむ心が、自然美によって癒されてゆく作者の姿が古里の村道にでも佇んでいるようである。

腕組みて行く二世等のカップルよ移民のすえのかげりさえなし
徳尾渓舟

習慣は時代により、又国によって異なるのは言うまでもない。戦前の日本では、愛人といえども、二人が腕を組んで歩む情景は見られなかったといってよい。ここブラジルの習慣として、恋人同志が腕を組むのは「さま」になり切っている。
この旧い移民の作者は別に驚異とは思わず、当り前として自分らの子孫が身に付けた習わしを温かい目で迎えている。ブラジル人である二世への頼もしさを含む目である。太平洋戦争前後は、移民としての引け目すら感じていたものから見ると、今はむしろ誇りにさえ思われたのだろう。時代の変遷を思い返す心情がそれと

なく滲んでいる。一属目詠だが、下旬で感懐深いものがある。

麻州より牛渡す舟ようやくに間近くなりぬ太笛鳴れり

直木新

ブラジルらしい悠長さと、曠野での牧歌的な人間の営為が目に浮かぶ。広大な牧場をもち、日本の国より大きいマットグロッソ州から牛を積んだバルサがのろのろと大河を渡って来る。岸近くなると、同乗のボヤデイロの鳴らす角笛が長閑にひびく。牛が鳴き人がわめく、こんな情景が展開する。作者はこのような情景に接して、あらためてブラジル国土の雄大さと、悠長さを噛みしめ悠久な時の流れを感じたことであろう。そして大河の流れや、人の動きなども日にちらつくようである。区切ったような言葉の据えかたで、納得性のある太い一首となっている。

縄煙草刻み吸う仕種も物なれて百姓君の荒れし手のひら

坂東　啓二

ブラジルの習慣を完全に身につけた、元気そうな年老いた友との邂逅。陽に焼けた黒い顔、握った手の荒れた感触。百姓になり切った昔の友と達者で久しぶりに逢う事が出来た。回顧の想いが一度に噴きでそうな場面である。懐かしさとうれしさが交錯してものも言えない。あれから何年経ったろうか、慣れきった手付き

で今目の前で煙草を刻む友と、昔弱かった友が別人のように思えてならない。
縄煙草は随分と移民には親しまれたものだった。日雇いに出ても、煙草を刻む間はつったっていても咎められないから体が休まる。それがつい慣らいとなり、私なども用いたものであった。ブラジルの百姓らしい、友の生態の一面がよく表現されている。

感銘するもの幾つ

小野寺　郁　子

錦きて帰るを待つとのたまいし母のおもかげまざまざと見ゆ

ゆき子

夕ざれや樹蔭に泣いてコーヒーもぎ

上塚　周平

このような詩が移民初期には多くの人々の共感を呼び愛誦されたようである。
その作品価値は今も変らぬのであろうが、共感となると少し違ってきていると思う。
日系移民も今年で喜寿を迎え、当然のことながら歌を詠む、ま

た読む者の層が変ってきているからである。現在の日系コロニアを実質的に支えているのは、みずからの意志からではなく、幼い頃、親に連れられて渡伯し、宿命的にこの国に育った準二世と呼ばれる人達である。

そこでわたしは、現在のコロニアに共感を呼び得るような比較的新しい作品に焦点を当てて見たいと思う。

九つの頑是なき日に離れたる故郷なれど思えば恋わるる

井本　惇

同じ九才で渡伯したわたしが共感を持つ歌である。恋わるると言っても、それは思えばであって、切実に一日も早く帰りたい一念に凝って泣いた初期移民の望郷とは差がある。みずからのルーツの地としての、はるかなる祖国なのである。

短かしと言えぬひと世のすぎゆけり生れたる地とも遠く無縁に

弘中千賀子

ふり返って見ればこの国で過ごした歳月も、もう短くはない。自分が移民であるという事も余り意識することなく、ごく自然に日々を過ごしている。生地とも遠く無縁に・・・・・・とは言っても本当はやはり無縁ではない。長い伝統を持つ日本特有の詩、短歌を詠み継いでいるのは、それは日常のすべてを日本語で思考

しているということであろう。たとえ日本に在住した期間の十倍この国に住むとも、それは多分変化することはないであろう。遠く離れていようとも切れない絆。

たわやすく伯語の会話に入りゆけず華やぐ席に湧く疎外感

松尾　紫郎

住み馴れた国の言葉が解らなくはない。生活に仕事に、むしろ伯語の方を多く使っている日常である。それでいて尚、伯譜会話にたわやすくは入ってゆけない。

言葉には魂があるのであろう。何人種の子孫であろうとも、ポ語で思考する者はブラジル人らしい気質になってゆく。それに対し作者は、もっとも日本人らしい精神を持つ歌人である。微妙な心のひだは、とてもポ語では表現し得ない。言葉と共にその気質の差違をも作者は感じるのであろう。しかも伯語のみを使って華やぎ楽しんでいるのはみずからの子孫なのである。作者の寂しさがにじんでいる。

父母の感傷は知らず混血の児を妊りて娘の眸明るし

片岡けい子

上掲のように、さまざまな抵抗、哀しみを経て、現在多くの日系家庭はブラジル人の親戚を持つようになった。そしておおむね

円滑に附合っている。「娘の眸明るし」は短い言葉の中にさまざまな展開を予想させる良い結句と思う。

夜の祈りポ語にて誦する幼な声移民の裔の翳はなかりき

植村　かず

そして又、このように素直な明るい後継の幼子に、過ぎ去りの苦悩は浄められてゆくのである。「幼な声」という所に作者の限りない慈みがある。

掌に重きぶどうの摘果する吾を囲みて小鳥の声の明るさ

西森　覚

一望の牧鋤き終えし夕陽なか風が運べる土の香に佇つ

野村　渓正

ぶどうの重さ、小鳥の声の明るさ、ここにはこの国土をわがものとして自然に親しむ幸が謳われている。まことに爽やかである。土の香に佇ち、広い土地を見渡し明日を描く姿には夢があり、この国に寄与する心構えさえ感じられて心強い。

選ばれし「希望の星」と恃みしが幻に消ゆ新大統領

河村哉太郎

昨年あたりから椰子樹誌上に事時詠が多く載るようになった。

ことにタンクレード大統領候補への期待、当選の喜び、病気快癒への祈願、そしておびただしい追悼歌など。無論大統領の人望によるところが大いにあるのではあるが、日系コロニアが、かつてこれ程、選挙、政治に関心を寄せたことはなかった。大統領の病状に一喜一憂したブラジル国民と日系コロニアも一丸になったのである。「幻に消ゆ」は、ブラジル国民全般の悲しみであり、そのかなしみの中にコロニアも溶け合ったのである。よく整った記念すべき一首である。

この辺り綿作りせしとう夫の言に吾子は車の速力おとす

柴倉　知余

この歌は、今年の全伯短歌大会で「夫の言に」の所に推敲の余地ありと評されたもので、その点はわたしも同感なのであるが、しかし尚、この歌の持つ内容には心惹かれる。

かつて農業にたずさわって、数々の辛苦を舐めたであろうこの作者夫妻は、今はあるいは、もう第一線から引退して悠々自適の日を送っている人達かもしれない。たまたま息子の運転する車に乗って昔の耕地のあたりを通りかかった時、思わず懐旧の言葉が出たのであろう。それを子が聞き止めて車の速力をおとすとは、何という優しい心遣いであろう。現在の平穏な生活、そしてこのように思いやりのある吾がが子を持った母親の満足感が言外に含まれていて読者の心も和むのである。大方の二世は、このように

両親に対し敬意を持つ人間に育った。

負わされし無形のものを肯えば鎮まりてゆくわが真（ひた）ごころ　　陣内しのぶ

はるばると海を越えて来た移民達は、行李の荷物だけ持って来たのではないかった。日本独特の文化をも身にたずさえて来た。そしてこの異土に種を下ろし丹念に培い育（はぐくく）んできた。色々な困難に遇いながらも心くじけることなく…・　しかし昨今のコロニアは、そのような熱意ある先覚者を惜しくも次々と失ってきている。

作者が負った無形のものとは、そのような先達が後進を恃んで遺していった、より精神的なものを指しているのであろう。期待には応えなければならない。

「肯えば」に作者の心定めがあり、「鎮まりてゆく」と言い、大きな哀しみを乗り超えて行こうとする作者の気持に強く胸を打たれる。一世が遺してゆく有形無形のものを受け継いで可能な限り保ってゆこうとする多くの準二世に代って詠まれたような感銘深い現代の歌である。

# ためらいを覚えつつも

八巻培夫

僕としては、正直いって〝移民短歌〟の定義をどこに置くかで種々ためらいを感じた。

そもそも〝移民〟とは何ぞやー。「広辞苑」によれば、それは〝個人または集団が、恒久的または相当長期にわたって一国から他国に移住すること。またその〟人びと〟であり、「新潮国語辞典」によると、〝他所（特に外国）に移住すること〟と至極簡単明瞭であり、「広辞林」では、これが〝移住する一人（こと）労働に従事するため外国に移住する一人（こと）〟となっている。

三冊の辞典で共通している点は、何れも、移住するーという主体性をもった行動を具体的に表わす動詞をもって説明していることであるが、翻って、それではコロニアで作歌している者すべてをこの〟移民〟という塾語で処理してしまってよいのかーという疑問が残った。

移民を生態別に学問的に分類する力倆も学識も僕にはないが、漠然とながらコロニアで生産される短歌の製作者すべてを〝移民〟という一つの鋳型にはめこむわけには行かないような気がしてならない。

移住するという語彙から見ると、自らの意志と判断の結果として起こされる行動を指すはずで、われわれ　ー　いわゆる十代に

もならぬヒトケタの年齢で、西も東もわからず、手をひくように
して連れて来られた準二世には、ブラジルに移住することと隣村
に引ッ越すこととは、余り差がなかった　ー　心情的に　ーと
いっても決して過言ではないのである。
いわんや移住者たちの子孫としてこの国に生を享けたブラジル
人である二世や三世の作品に〃移民短歌〃の銘をうつことに抵抗
が感じられてならない。
これは、短歌というポエマが、日本語でもって作り継がれてゆ
く限り、移された民の子孫も、その原産国を意識のなかに置いて
でなければ、思考もできないーということを意味するのであろう
か・・・。
そういう観点に立って選んだ作品は、殆ど初期移民のものに片
寄って、おのずから〃おしん〃的辛酸を詠ったものが目立つよう
になってしまったが、これも事実がそうであったのであるから仕
方ない。
また、移民短歌探索の手段としては、戦前の「移り来て」と、戦
後の「コロニア万葉集」という二つの代表的アントロジーアと、自
家選集や地方歌会詠草集など数冊にたより、とても移民によって
詠まれた何万という作品を網羅して眼をとおせる条件下になかっ
たことを断っておく。ところで、一九八一年頃、客員教授として
ＵＳＰに派遣され、半年はどサンパウロに住んだ芥川賞作家岡松
和夫の、「コロニア万葉学から抽出した短歌をちりばめた書下し長
篇小説「異郷の歌」を読んでいて、僕は二度北叟笑んだ。最初は

一〇三ページ「しかし、もっと重要なこともありはしないか。それは、日本人移民が文化を持っていたということだ。というくだりで、二度目は、一六八ページ「移民の歌は、やはり根本は望郷なんですから。と、作中人物小森にいわしめている所である。北叟笑みは、自説、すなわち日頃僕が口にしていることが、このような形で活字化された、ということに対しての快心ーでもあったわけである。

縷縷と書きつらね、編集部が期待した文章にはほど遠いものになってしまったきらいがあるが、次に「自選・移民短歌」の秀作を列挙して負わされた責を塞ぐこととする。

胸打たれる望郷の歌

いついつと帰る日知らぬ故里の信濃の国の山川を恋う

岩波　菊治

わが歌をレコードに吹きこみ送りやるとても逢いたき故国の老母に

同

ふるさとの信濃の国の山川は心にしみて永久に思わむ

同

君がみ骨抱きて故郷に帰らなむ願いもいつか失せゆかむとす

志津野華絵

夕かげの次第にながき道を行くついに故郷にかえらぬ歩み

井本　惇

リオ・デ・ジャネイロなみうちぎわにおりたちて「日本」と砂に書きても見たり　富岡　清治

初期移住者苦難の譜

先ず父の疲れを問いて日本の昔噺せがむ子を抱きしむる
久　雄　生

高価でないものであったら蜂蜜を一本ほしいと長く病む妻
金子　秀雄

四十度の熱にうなされ弟は草除る草除ると口走る夜半
渋川不二夫

明日はもう働けぬかと思うほど疲れ疲れて夕支度する
志津野華絵

コンデ街にて腹一杯のまんじゅうを食える身分になりたしと言う　須貝富美子

やがてこの巨木倒れん弟を遠ざからせて吾一人伐る
土屋　満治

学校にも行けず畑に子守りしつつマモンの笛を吹く子よ哀れ
河村哉太郎

丘の道人声すれば走り行くひそけき部落に生い立ちし子よ
神志那紺江

夜半にさめて乏しき銭をかぞえたるはかなき心は耐えて語らず　武本　由夫

## 同化への抵抗と挫折

日本人の血汐もいつかこの国の血にそまり果てうせなむものか　脇坂　一

二人の児その子等のこと思うとき日の本の移民われは嘆かゆ

同

伯語もて話し遊べる吾子見れば淋しと思う日もありにけり

大花きみの

子に孫に理解されざる哀しみをひそめてイミグランチ吾の残生　弘中千賀子

日本を離れ日本人たらんことひたすらなりし歳月すぎぬ

井本　惇

## 傷心癒す相聞と抒情

傘さして夜更けの街を佳き人と共にし行けば心揺ぐも

岩波　菊治

夕迫る君を待つ間の寄りし木に日のぬくもりの未だ残れり

神志那絹江

月赤く野火にかすめる枯野行く二つの騎馬は夫婦あるらし

須員富美子

待つ者は我一人らし田舎駅の暗き灯影のベンチ冷し

沖田　道晴

心よき手ぎわりなるかぬくぬくと柔毛の中にこもる棉種子

中村　幽情

## 生活に向かう具体

小笠原　富　枝

「移民」という言葉を噛みしめながら多くの先輩を、親しくしていた人達をつぎつぎと冥界へ見送り、一つの節目を身にしみて感じるようになった。つまり時代の移りを・・・。このようなとき、歌誌「椰子樹」は二百号を迎え、その記念特集号を刊行する。時期と当を得た企画と言える。文芸の一つの分野に過ぎないが、移住者である私達が生きてゆくために、この土にかけて来た歳月を、その作品によって人それぞれに振り返って見ることは、残された者の責めのようなものであろう。ずっと以前に読んだ五木寛之の言葉に「遠い百年より近い二十年を大事に考えている一人である」とあって心をとどめた記憶がある。約めれば「近い過去を大事に」　の意であろう。仔細は忘れたが、「明治百年」という時点での言葉だったと思う。

「近い過去を・・・」。それは、私達自身が呼吸してきた時代を指すのであり、現在に続いている、の含みも・・・要約された表現と思う。顧る行為そのものが、何かの意味を持ちつづけるのではなかろうか。

この度の特集企画と思い合わせながら考えさせられた。私に与えられた題は「移民の短歌」であって、私なりに振り返り、抽いてみた。

黒こげの木を片づけてよごれたる身をば洗うなりくり抜き風呂に　岩波　菊治

原始林伐り開かれし過程より知りつつわれの目に乾く土　井本　惇

人気なきこの山里に逝きし吾子箱ごと我は担ぎてぞ行けり　河村哉太郎

夜もすがら荒き風吹き外にかけし馬の首輪の鈴鳴りつづく　清谷　益次

綿の花薄暗に咲く畑の径吾が前をゆく母の小さし　陣内しのぶ

弁当を運び来し子に木ぎれもて地に書き教えるふるさとの文字　越村　定雄

おのずから雨期明け近し珈琲の赤実ほつほつ目につくみれば　行方正治郎

何処かで薪割る音し日曜の此のコロニアの明けの静けさ

徳尾　渓舟

うちなびく棉穀燃ゆる裏畑のあかりを浴びて夕餉とるなり

荒木　八雲

土壁の隙ゆ洩れ来る冬の陽を現ともなく我は見ており

米沢　幹夫

これらは、短歌界に深い足跡を印した岩波菊治の作品を始めとして、戦前の作品から抽いたもので、一般的に言われるところの、ローカル・カラー的でなく、生活に対う具体としての、山焼き、珈琲、棉等の表現であって、個々の投影があり、その時期のコロニアの生活状態を、くきやかに現わしている。中でも「地に書き教えるふるさとの文字」の肉声、脱しきれない祖国への想いの具象であろう。

タビンニャの屋根よりもるる朝の日をつかまむとする寝台の嬰子は　神志那絹江

雨水の溜りに遊ぶ裸体の子日系もいてすでに濁せり

清谷　勝馬

客観的に詠まれているが、まぶたが熱くなるような、日と嬰児の調和に注目した。母親ならではの把握であろう。生のイメージを現わす動きを捉えている。次の歌、子等1の世界を写したもので、「日系もいて」の呟きに、二つの国との、通じ合いへの感慨が

こもっている。

手づくりの真綿伸ばしつつ幾年もかえり見ざりし夜着をつくろう　葛西　妙子

マラリアの熱おさまれば起き出でて乱れし髪をととのえにけり　西田　季子

月の夜の野風呂はうれし日焼けせし我が肌さえも真白く見えて　神志那絹江

など、読み過ごせない悲哀感がある。感傷に流れず、自らへの慎ましい日差しに、いわゆる「移民妻」を想わせる特色がある。生活という重い背景を負いながらも、女としての仄かな情感がひそめられている。

抗すべもあらぬ一国の法令の権力（ちから）の前に吾等なげきぬ　井本　惇

二世等の従軍のことも伝われば泥手をさげて我は聞き居る。　酒井　繁一

排日的法令は日に次ぎ布かれつつ吾をこの国になじめしめざり　秋永　三郎

国禁を犯す教師はかむごとく日本の歴史を子等に語るも　積田　三郎

銭撲ちでえらぐ子等見つつ此の国の趨かむ末に想い至りぬ

武本　由夫

暗い記憶であるが、その時代を切実に生きて来た移民の、精神史として貴重な作品集と思う。教育を歌ったものは、親の立場、教師の立場ともに極めて少ないようである。当時の乱れた国際状態より推して、教育問題まで及ばなかったのであろう。準二世、二世への問題を学んでいる時代と言える。

この丘の裾引くところ朝なさな霧は沈めり湖の如くに
　岩波　菊治

野の気配躬にとおりつつ夕ざれば濃度深まるごとし大気は
　水本すみ子

打ち起こす土鮮烈に陶酔の稚きわれを問い詰めてくる
　陣内しのぶ

大西洋の波まともなるこの磯の高潮鳴りは劫初より永劫に
　清谷　益次

赫土の染みたる掌（て）にて一週間溜りおりたる新聞を読む
　青柳　房治

みずからの意志もて去りしふる国に還さむとする母の遺骨は
　弘中千賀子

ひびき合うものは互みに持ちながら会話乏しき子等との日々
　中井　益代

移りゆくひとの噂を聞きいたりひかりあまねき霜晴の朝

大場　時夫

秋空に咲きひろごれるパイネーラの花影に顕つ杳き日のこと

植村　かず

こうしてあげてくると、発想、表現は作者おのおのの個性が感じられて興味深い。初めの二首、作者の経てきた歳月を現わすように、一体となった状景がある。

この土壌が生んだもの。他の作も、個々の対象は異っているが、根を下した者の深いところでの哀感があり、忘れようとする「郷愁」の文字が重なってくる。

祖国とう語感も今は切実に帰化証明書を手提げに仕舞う

森重　扶美

日系の候補も混じるビラの嵩踏みつつ投票場へ急ぎぬ

水本すみ子

庭に植えし松の根付きをよろこびて兄は帰化せし国に老いゆく

小原　睦子

遂に吾が裡なる景とならぬままいのち終らむこの国の土

弘中千賀子

諦念が真となっている作品である。さまざまな過程を経て、この国の内面に定着しつつある個々の姿を、異なる具象によって物語っている。移民私達の締め括りのように。

# 移民にとって短歌とはなにか

## ― 隠微な血に惹かれるもの ―

森谷風男

椰子樹一二二号の「日本の実作者によるブラジル短歌の鑑賞と批評」(その二)で大橋基久氏が、井本惇短歌への私見を書いている。その中にこんなところがある。

寝ころびで読む枕辺の乱れにもいよいよわれのせまくなりつつ

この歌について、大橋氏は(この作品の発想の底にあるもの、それはブラジルの国土に住む邦人の生活環境なり、世代間の思想感情の隔りなり、わたしたちは容易に窺い知れないものであろうが、短歌作品として、この一首に表わされている限りでは普遍的な共感に終りそうに思われてならない)コロニアの生活環境やイデオロギーは、推測出来ないが提示されただけを見れば至って普遍的なものだとし(寝転びながら読書しているところが、東京であっても、サンパウロであっても風土とは何の関わり合いも持っていない)といい(短歌が私達日本民族固有の抒情詩である以上、日本人が感じたことを日本の言葉で現わすしかない)としながらも〈ここで言えることは井本さんを含めて遠い外国に永住しておられる同胞の歌人諸氏が、日本の国ではなく、その国でなければ短歌で詠み得ないものを歌にして欲しいことである〉。この歌では寝転ろんでいるところが、東京だかサンパウロだか解らない、日本の東京と、ブラジルのサンパウロでは大きく違っている筈、あなた

方に望みたいのは、ブラジルでなければ出来ない、その風土と密着した寝転び方を歌にして欲しい。と述べているようだ。

この風土（土地、風俗、習慣）とは特殊な移民の風土を指すものであり日本の歌壇ジャナリズムが、ひとしくコロニア歌人に要求する決まった声なのである。

宮中お歌寄せ(新年、明治神宮春秋大祭の歌会、或いは一時だったようだが、ＮＨＫのラジオ歌壇からの招待に応募、人選するのは決ってブラジルの景物を色濃く添えたものに限られていた。曰く〃雪のようなコーヒーの花〃〃広漠の牧場〃〃牧扉を軋ませ〃また〃アマゾンに鰐〃を配する効果も取り入れたものだ。それは丁度北海道のアイヌが、その誇りを傷つけられながら観光資料として歌い、踊るのと似たものがあり、海を越えるそうした応募歌を「輸出短歌」と称しやや蔑視する傾向がなかったとは言えない。

大橋氏は最後に〈詠嘆の質はあくまで日本人のものであっても、単にゆきずりの旅行者の眼ではない筈…〉とも言っており評者としての行きがかり上、誰もが望む常套的な言葉を用いたことになるのであろうが、実際の旅行者にとって〃サンパウロの空〃であっても永住者としての移民にとってはその空が、ただの〃空〃に過ぎないのである。

その群集は神戸を出帆した瞬間から移民という集団になる。船の中で何らかの予備知識などを仕込まれながら日本政府最後の饗応に接しサントスの港に着岸する。その後は収容所に仮泊、移

民列車という特別仕立ての汽車に揺すられ、ゴットンゴットン目的地に着く頃はある階級的観念がすっかり出来上ってゆく。母国からの絆から離れたのである。耐えることだけを強要する毎日がはじまる。

① コーヒーの僅かなかげにもぐり入り犬の如くに昼寝をいこう
（以下例歌には作者名を付けません）

温帯から来て亜熱帯大陸の日中は堪え難い暑さだ。コーヒーの下陰に憩うとき犬の如くと自虐する作者である。

②日曜を働らく移民と蔑まれわれら働らく金溜めんため
神の恩寵を知らぬ野蛮人と蔑まれながら働らいた。それはそうした階級的蔑視から逃がれるための金が欲しいからだ。

③久々に半壜の石油買い得たりランプ灯すと今宵たぬしき
伝票を貰って山のベンダまで月々の買出しにゆく。一抱えの食料が一と月分だ、灯油など買う余裕がない。今日は無理して石油を半壜だけ買った、日本へ手紙を書くのにカンテラを点けなければならない。

④病む妻を守りて久し外つ国に来し鋭心も失せんとしつつ
妻には毎日の労働が無理だったんだ。パイオニアなどと張り

切ったその頃を、空しく振り返る。

⑤故国などさまで恋しくおもわずと僅かに言いて口をつぐみぬ
　移民に故郷なんてあるもんか、と一口言って目を伏せる大人の感傷。
　この五つの歌は戦前のつまり初期移民の歌であり、素朴な苦悩を正直に叙している。その同じ作者達が戦後になると詠法がかなり違ってくる。

⑥遂にわが裡なる景とならぬままいのち終らんこの国の土
　頑くなにこの国土への同化を拒み通した。色は擬せてしまったが、ふるさとの景は遂に壊れることはなかった。

⑦ふるさとの土は再び見ざるべしわが眼裏に雪降りしきる
　雪に覆れた生活は温かかった。今もなお白一色のあのふるさとは遥かにわたしを呼んでいる。

⑧農を嫌う子が次々に出てゆけば住み馴れし土地も売らねばならぬ　コロニアの世代交替は意外に早かった。子供達は次々に町へ出ていった。自分の命をかけて創りあげた農場になお割り切れない気持で撫然とひとり立っている。

⑨一握りの土なき家に移り住みアルプス菫の鉢置く窓辺

土のない不本意な生活、僅かにアルプス菫を育て、その小さな花を咲かせるだけの土へ執着する。

⑩打ち起こす土鮮烈に陶酔の稚きわれを問いつめてくる

この土の色だった。汝を奮い立たせ矢も楯もなく拓士という種族に仕立てたのは、それが今同じ土に敗残の鍬を入れる。

歌誌「椰子樹」は流派巧拙を問わずを建前にして来たが、①～⑤までの歌はその創刊当初か、それ以前の作であり、荒削りな他から拘束されない詠み方に不思議な侵迫力がある。

しかし椰子樹もこのあと岩波菊治のアララギ系の詠風にいちじるしく傾倒した時期を経て、移民五十年祭に文化使節として来伯した木村捨録や、細江仙子来伯などに刺激されコロニア歌壇は大きく動揺した。

しかしコロニアの歌壇誌としての「椰子樹」が充実するのはそうした摸索の時期を経て、おのずからなる歌論が育ち指導性が一応確立してからである。従って⑥～⑩の詠風には洗練された技法をかいまみせているが、移民史の位置からいって既に終末的深層心理を迫いつめようとする構えを覗かせている。

日本移民は、ペルーにも、アルゼンチン、パラグァイにも、また大口で北米にも渡っている。

北米では今年日本移民百周年を記念、ハワイで豪勢な祭典を

やったらしい。北米には七十万の日系がいるが、文芸面などもかなり賑やかなものがあるようだ。今手元にある林間誌（日本の歌誌）から移民のものとおもわれる北米歌人の数首を抽いてみよう。

⑪原点に帰ることなき過ぎ去りとおもいて永くアメリカに住む
　移民したことが結果的に見てよかったのか悪かったのか、今更それを詮索したところでどうなるものではない。

⑫捨てんとしてまた蔵いおく国籍を離脱せしわが戸籍抄本
　国籍喪失届も完了した。整理する母国官庁の書類の中にふと戸籍抄本を見付け割切れない心の痛みを感じるのである。

⑬少年の日のふるさとが今もなお折に顕ち来て心に灯る
　啄木の歌に「病のごと思郷の心湧く日なり目にあお空の煙かなしも」というのがある。

⑭ふるさとをおもわなくとも雪想う融けてゆくものなべて白色
　故郷を発つ日は吹雪だった。あれから半世紀、瞼の裏に結像しなくなったふるさと、ふるさとは白い雪となって融けてゆく。

⑮人の少なき折を選びて園を訪う癖にも慣れてわれ老いずきし
　これはただ歌だけをみると何も移民の歌でなくともいいのだが、作者が北米に住んでいるというだけで、これはまざれもなく移民

のものだと格付け出来る。

先ず人を避けるというのが移民だからなのだ。人が多い公園に安息はない、白人がチラと投げる視線に思わず目を伏せる卑屈さ、北米の場合ブラジルとはまた違った強烈な疎外感があったであろう。しかしこの歌のように人を避ける気特は移民のものだ。勿論外部との折衝を避け穀を閉じた時期はあったにしてもそれは排他的な性情ではない。

移民とは本来民族として移動する集団なのだが、それが一旦個人として投げ出された場合恐らく非力な存在となり、ただひたすらに生きるという主体的な思惟が自衛本能として行為するのである。従って移民にとって自己は小宇宙であり、外部との折衝に大きな結果を期待することはない。米国の風土、ブラジルの風土といえど、それ程の必然も理由もない。前記の〈その国でなければ短歌で読み得ないものを歌にして欲しい〉という注文も全く意味を持たないし、旅行者にはサンパウロの空であっても移民にはただの空なのだ。

そのように移民の歌は閉鎖的であり、直接的であって発想に於ける修辞の乏しさがかえって感動の内的契機をかき立てる結果となることも見逃がせない。

しかしいずれも自己という小宇宙の中の抒情であり、平穏な移民現地の壁面と激しく対決した姿である。

移民の歌は敗北①②③⑩と挫折④⑥と孤独⑤⑦⑨である。生れは抜きさしならない移民という状況の中にみずからの道を摸索し、自分自身の存在を確保する過程に於ける内的観念であり、一種の被害妄想的心理でないとは言えない。

しかしそうした内的観念が訪日という衝動で連帯感に目覚め客観的に判断する自己を見出だす。

⑯血と言える隠微なものに囚わるる躯を運ばれてゆける日本
⑰みずからの関わるものに触れて来てかなし日本の国土というは

これ程血に惹かれていたのだ。これまでの空白を飛び越えて私の深層に触れてくる国土。

移民の表層意識では、今更日本にいってどうする、日本は体よく私を追い出したのではないかと拒否する気持がある。しかしその憎しみと表裏をなすものが血であり肉である。血という隠微なものを媒体にして民族的実存を確認する他になく、それはかなしい「生」を強調する手段なのだ。

移民は今日も詠っている。敗北の、挫折の、或いは孤独の歌を。それは物理的一つの方向を辿ってひたすらに民族的血に結びつこうとする戦慄なのであり、短歌とは結局移民にとって民族回帰の営為ではなかろうか。

# 全伯短歌大会の歩み

弘　中　千　賀　子

一九四九年二月十日、第一回全伯短歌大会が開催された。それより本年の一九八五年で三七回となる。その記録は第一九回までは一〇〇号記念別冊特集号に、第二〇回から第二八回までは一五〇号記念別冊特集号に発表されている。

## 第二九回

一九七七年九月四日、サンパウロ市「こけし食堂」サロンにて開催。応募歌数四一六首（大人三七二首ー一八六人、少年少女四四首ー二二人）、出席者〜一〇〇名。

司会・水本すみ子。

### 代表選

一位　小笠原富枝

冬の陽を支えて立てる裸木ありいちにんの影とめどなくして

二位　篠田真佐子

通夜より帰り来りて熱き湯に生きねばならぬ裸身を洗う

### 高点歌

一位　川原比露思

意に添わぬ妥協をみずから憎むとき意志もつごとく闘魚動かず

二位　坂　光男

地の果てにある寂寞を埋めくるるまでには遠し麦の青さも

同　　西森　覚

葬りし没陽の陵を降りつつ明日につながる言葉かけ合う

席題「風車」

一位　　遠藤　浩

風車より錆びたる水の雫おつ歴史の跡を残す家並に

二位　　高橋よしみ

心決めかねつつ佇てる逆風にふと鳴り出づる吾が風車

アベック歌合せ

一位　（小笠原富枝、米沢幹夫）

すいれんの咲きいる泉に影ならべ永かりし遍歴の過去語り合う

二位　（高須きみ子、大場時夫）

しばらくも離りて住めば娘と歩む浜の木立に海鳥の声

少年少女作品

一位　　伊藤たつ子

にぎやかに過ごした昨日の運動会円型のコースが白く残ってる

二位　　渡辺　弘美

新聞を目だけで読んでいる父は店の表のいすにすわって

第三〇回

一九七八年九月三日、サンパウロ市「こけし食堂」サロンにて開催。応募歌数三八一首（大人三三四首ー十六七人、少年少女四七首ー二四人）、出席者〜一〇一名。

司会・清谷益次。

代表選

一位　小笠原富枝

陽のかげの伸び豊かなる流れにて聴きおり耳のほてりに委ね

二位　青柳　房治

老眼鏡ずりあげ納屋の灯に寄りて明日かけん農薬の解説を読む

高点歌　一位　北谷まがた

菓子一つ買いし素足の少年が置きたる硬貨汗にぬれおり

〃　西森　覚

再起せん希いこめつつ旱魃に白穂となりし畑を鋤きゆく

席題「木杯」

一位　清谷　益次

黙深く一生を生きて木杯にかかわりもなく清しき一人

二位　寺岡　晃児

訪日もし得ず「木杯」に年足らず老母の猪背に冬場が薄し

アベック歌合せ

一位　（古山孝子、梅崎嘉明）

ゆくりなく巡り会いたる君といて遮断機のあくまでの語らい

二位　（秋山るり、北谷まがた）

思い出の泉のほとり夕暮れて霧立ちくればひぐらしの啼く

少年少女作品　一位　鴫狩　治美

作文も考えながらししゅうする赤い小さな花のふえゆく

二位　麻生　稔

棉つみがまだ終らないぼくの父の歩き方にはせわしさがある

第三一回

一九七九年九月二日、サンパウロ市「文協ビル」五階ーエスペランサ婦人会サロンにて開催。応募歌数四二九首（大人三八八首ー一九四人、少年少女四一首ー二一人）、出席者〜一二一名。

司会・清谷益次。

代表選

一位　水本すみ子

季節感匂える風にゆらぎつつ透明ならざり湖面もわれも

二位　田所　君子

丁寧に白きハンカチ折りたたむ疑心ひとつが解（ほぐ）れゆく夕べ

同　青柳　房治

大霜に焼かれしものの声々がからみ合いつつ野面は臭う

同　高原　万里

午後の茶に呼べば桧葉の香身にたたせ夫は鋏の切れ味をいう

同　小野寺郁子

肩を抱く夫の腕のゆるみゆき娘を嫁がせし夜の睡りは至る

同　小笠原富枝

目覚むれば今日のものなり配られし新聞の文字を端々と陽が

同　河井美津子

積み重ねし煉瓦明るく陽に映えて小さき我が家形なし行く

高点歌

一位　植村　かず

遺されて負うかなしみの重き手に触るる墓石に冬鎮みゆく

二位　川原比露思

いのち尽きし妻の見納めと夜を堪えし眼に寂かなる青葉の光

席題「蘭」

一位　酒井　繁一

頬笑みて見舞いの蘭に手を触れし朝しずかに妻は逝きたり

二位　西田　季子

病む夫の視線のとどく位置におく茎のびやかなシンビジューム一鉢

アベック歌合せ

一位（国兼まさ恵、青柳房泊）

胸うちに君を住ませて幾年か桃の影ゆれて不意に切なし

二位（尾崎都貴子、森谷風男）

イッペーの花のしずくにぬれながら秘めたる言葉尚保ちいき

少年少女作品

一位　平野　慶子

水道の管からもれる滴りがポステの灯りに光って落ちる

〃　伊藤　孝男

ケルメッセが終ったあとのバラッカの柱の穴は淋しい気がする

第三二回

一九八〇年九月七日、サンパウロ市「文協ビル」五階ーエスペランサ婦人会サロンにて開催。応募歌数四四六首（大人四〇八首ー二〇四人、少年少女三八首ー一九人）、出席者〜一〇九名。ゲスト・本堂寛（サンパウロ大学客員教授）。司会・弘中千賀子。

代表選

一位　小野寺郁子

定まらぬ想いに蹲めば葉がくれに一語のごとく咲く白椿

二位　西田　季子

疎外さるる会話に老いの位置ありて視野には花をこぼすユーカリ

高点歌

一位　山崎　益一

陽に干せば膨みもどる布団にて妻なき秋の独りがあわし

二位　入江　美津

それぞれに育ちし子等の吐く理論開きつつ皿の苺をつぶす

席題「春日和、春」

一位　岡本喜代子

ものの芽のはぐるる庭に降り立ちて何するとなく父のいませり

二位　簀戸　勝子

何時となく鎮まりゆきし嘆きあり春の光の充ちし厨に

同　加藤　操

永病みの妻快方に向いいて試歩の園には春陽あまねし

同　　渡部南仙子

あしうらのすわるるおもい引く汐の渚に、春の陽をあびてたつ

アベック歌合せ

一位（弘中千賀子、川上千代三郎）

ひそやかに支え合い来し日々をがし今日も老妻の肩もみほぐす

二位　（古山孝子、蓑毛正淳）

さりげなく交せし言葉胸内にイッペー花散る石畳行く

少年少女作品

一位　　平野　威

おとなりのえんとつを出る青げむり空に高く道つけていく

二位　　岩永　和行

古そうで戸のしまっている家の絵にぼくはだれも住まないと思う

同　　平野満由美

雲間から日差しがもれる平らかに吾等の小さい町を包んで

第三三回

一九八一年八月三十日、サンパウロ市「文協ビル」五階ーエスペランサ婦人会サロンにて開催。応募歌数四三一首（大人三九九首ー二〇〇人、少年少女三二首ー一六人）、出席者〜一一一名。ゲスト・玉井乾介（サンパウロ大学日本文化研究所長）。司会・水本すみ子。

代表選

一位　　米沢　幹夫

齟齬多きひと日なりしよ灯の下に色の褪せたるネクタイをとく

二位　　森重　扶美

息白く吐きつつ街路清掃の少年ら明るき声に呼び合う

同　　多田　邦治

いくばくか体臭残しつめ赤き少女面接の部屋を出でゆく

高点歌

一位　　酒井　繁一

濁る翳いささかも無く吾がなかに亡妻（つま）は椿の其白さに生く

二位　　矢野加寿夫

訪日の父を見送る空港にて初めて握る痩せし父の手

席題「イッペー」

一位　　大場　時夫

あかあかと鋤きかえされし幾起伏こえ来てイッペーの花にくつろぐ

二位　　川原比露思

妻逝きし頃を顕たせて黄イッペＩの花群射せる冬陽寂けし

同　　佐藤　いち

古き景しのぶよすがもなき丘に想い出さそうイッペー一樹

少年少女作品

一位　　大場ぬりか

草の葉にたまった雨が折り折りにしずく落として夜の池光らす

二位　　森田　英樹

トルネーラから水が落ちてるひとつひとつ小さい音が夜は聞こえる

第三四回

一九八二年九月五日、サンパウロ市「文協ビル」五階ーエスペランサ婦人会サロンにて開催。応募歌数三九九首（大人三六八首ー一八四人、少年少女三一首ー一六人）、出席者〜一一三名。ゲスト・前年に続き玉井乾介教授。司会・清谷益次。

代表選

一位　　石塚　やす

かがまりて海の渚の夕映えを掬う如くに員ひろう子等

同　　青柳　ます

とり入れの終えし今宵はしみじみと手足を伸ばす夫のかたわら

高点歌

一位　　米沢　幹夫

死よりかく逃れきし身を確かむと試歩にみどりの芝草を踏む

二位　　石塚　やす

かがまりて海の渚の夕映えを掬う如くに員ひろう子等

席題「陽炎」

一位　　秋山　るり

うたかたのかげろうの如きひと世とも老いて夕べの庭にたたずむ

同　　西森　覚

ようやくに融資定まりて鋤きおこす起伏の涯に春の陽炎

少年少女作品

一位　麻生真由美

秋の月明るく輝きももの木を墨絵のように地に写してる

二位　平野たけし

遠くで土地をたがやすトラトールが赤土ぼこりにぼんやり見える

同　麻生真由美

暗いバスの中で波音を聞きながら海水浴する明日を待ってる

アベック歌合せ

一位　（青柳ます、八巻培夫）

肩なめてことばすくなに歩みつつ秘めし想いは遂に明かさず

二位　（小野政子、酒井繁一）

言葉なく手を重ね合う夜の卓に灯蛾はまつわるうるおいもなく

第三五回

一九八三年九月四日、サンパウロ市「文協ビル」五階ーエスペランサ婦人会サロンにて開催。応募歌数三九〇首（大人三六六首ー一八三人、少年少女二四首ー一二人）、出席者〜一一二人。ゲスト・若松孝司（ソール・ナッセンチ証券代表）。司　会・弘中千賀子。

代表選

一位　井本　惇

店売りてそ少し朝寝する妻をあわれに思うことあり

二位　簀戸　勝子

父母よりも夫よりも齢重ねきて身に重きかな独りの想い

高点歌

一位　岡本　旬狂

久闊の握手を交すてのひらに彼にもありき固き鍬だこ

二位　国兼まさ恵

再びは逢うこと難き母と思いみ手の温もり確かめており

席題「ひこばえ」

一位　清水さかえ

培いし人は逝けども梅の木の春の息吹きのごときひこばえ

二位　八巻　汀石

ひこばえの傍に手製の乳母車置きで開墾の鍬をうち振る

少年少女作品

一位　宮本ルミ子

コスモスは涼しい風に何回も礼言うように花がゆれている

同　麻生真由美

せんたくをしている私の目の前を白雲が黒い影落としゆく

アベック歌合せ

一位（岡本喜代子、梅崎嘉明）

沼百合の時にはげしく匂う夜行きつつ裡の想い告げ得ず

二位　（古山孝子、青柳房泊）

手をとれば言葉にならぬ想いあり花桃の影揺るる苑ゆく

第三六回

「九八四年九月二日、サンパウロ市「文協ビル」五階ーエスペランサ婦人会サロンにて開催。応募歌数四七六首（大人四四二首～二二一人、少年少女三四首ー一七人）、出席者～一三四名、ゲスト・脇坂ジェニー秋子（サンパウロ大学日本文化研究所日本古典文学担当）。司会・水本すすみ子。

代表選

一位　八巻たけ子

いつ売れる当なき風車雑踏の風に圧されてひたすら廻る

二位　加藤　操

住所録書き替えおれば幾人の鬼籍に入りし友の名に会う

同　渡辺　松子

幸薄き園児におくる息子の遺品尽きぬ愛着断ちて包みぬ

同　高野英千代

病む我が手届く限りに物置きて心残しつつ娘は出でて行く

高点歌

一位　渡辺　松子

幸薄き園児におくる息子の遺品尽きぬ愛着断ちて包みぬ

二位　川原此露思

風化して時は逝くのみ移民あまた眠れる墓地に火焔樹は燃ゆ

題詠「氷雨」

一位　河井美津子

覚つかなき夫の歩みを支えゆく氷雨の下に握る手温し

二位　寺田　雪枝

今年のみのことかも知れず氷雨の日老い母のため湯タンポ入れる

少年少女作品

一位　大場ぬりか

顔に当る涼しい風が私の淋しさを次々はぎ取ってゆく

二位　西山　正行

運動会の楽しさはまだ残っている白い線とバラッカのあとの穴

同　平野　慶子

幼なかりし日の友なりし人形が部屋の隅から我を見つめる

アベック歌合せ

一位　（弘中千賀子、森谷風男）

木々の葉にやさしく光る冬の陽よ逡巡はなおありて歩みつ

二位　（小野寺郁子、清谷益次）

消えかけて又深みくる霧の中君との会いの心濡れつつ

第三七回

一九八五年九月八日、サンパウロ市文協ビル五階エスペランサ婦人会サロンで開催。応募歌数四三一（二一六人）、別に少年少女二五（一三人）、出席者一二三人ゲスト・玉井乾介（サンパウロ大学

日本文化研究所長)。司会・弘中千賀子。

代表選

一位　清水さかえ

父を支え庭に出づるも何時までぞ日差しぬくとき山茶花の前

二位　西森　覚

砂糖袋を解きし糸さえ巻き溜めていまも移民の旧き性もつ

高点歌　一位　西森　覚

砂糖袋を解きし糸さえ巻き溜めていまも移民の旧き性もつ

二位　清水さかえ

父を支え庭に出づるも何時までぞ日差しぬくとき山茶花の前

題詠「春雷」

一位　下瀬　みさ

幾月をひでりにたえし農われにとどろき渡る夜半の春雷

二位　川原此露思

決断に挙うこころを鞭うつごと層雲の果てにひびく春雷

少年少女作品

一位　平野由賀子

私の勉強部屋までコーヒーの香りが届く歩みくるように

二位　福井なおみ

長い糸いっぱいに高く飛ぶ凧は世の誤りを見ているだろうか

アベック歌合せ

一位　(不明、梅崎嘉明)

触れ合える掌の温もりを感じつつスイナンの燃ゆる湖岸をゆく

二位　（田辺艶子、清谷益次）

ジャカランダの花かげ君と歩みつつなお捕え得ぬ想いたゆたう

## 岩波菊治賞の経過

第一一回　応募者一八人、選者委員＝酒井繁一、井本惇、大場時夫、小笠原富枝、陣内しのぶ、弘中千賀子、森重扶美。入賞～河口古錨（坂光男）、佳作～加藤操、八巻耕士、青柳房治、中西静世、国東まさ恵、清水さかえ、知花清。

逃げ水の移り　　河口　古錨

逃げ水の移りはげしき道をゆく息保ちいる母念いつつ

呆け佇つ吾が眼に低く垂れながら石榴は熟れて陽をはね返す

ここに来て頬伝いおつる涙ありビルを外れて海に陽は落つ

牡蠣棚の並ぶ海辺の町歩む何事もなかりし如き日の暮

潅木の高さに無蓋車ゆれゆけりはるけきものの如く見とれつ

（入賞作のみ任意に五首抄出、以下同）

第一二回

応募者三三人、選考委員前回と同じ。

入賞～北谷まがた、佳作～多田邦治、知花清、中川原実、森田吉久、清水さかえ、八巻耕土、安部栄子、青柳房治、篠田真佐子。

北谷まがた

呼びかくるものかも知れぬ小鳥らの鳴き交す声の徹る夕庭
草を食む牛にまつわる二三羽のアヌーもぬれて只静かなり
木葡萄の花芽ふくらむ朝にして病みいる妻の歩み始めぬ
過ぎ去りし失敗のみを思う夕シューバ・デ・オウロ重くゆれおり
朝々の落葉を掃けば既にして季の移りのわが庭にあり

第一三回

応募者二九名、入選作なし。佳作一位～青柳房治、佳作～国兼まさ恵、八巻耕土、青柳ます、中川荒記、中西静世、藤田美沙子。

第一四回

応募者三四人、選考委員前回同。入選作品なし。佳作～八巻耕土、多田邦治、寺尾芳子、青柳ます、青柳房治。

第一五回

応募者二七人、選考委員同。入選作なし。佳作一位～清水さかえ、佳作～多田邦治、青柳ます、中川荒記、中西静世、青柳房治。

第一六回

応募者三〇人、選考委員～森重辞退、水本すみ子を加える。入

選〜多田邦治、佳作一位〜青柳ます、佳作〜安部栄子、八巻耕士、森田吉久。

夜のコスモス　　多田　邦治

雨音にめぎめし朝着るシャツは何か哀しき冷たさをもつ
鉄道をたどる家路の人ら見ゆそれぞれいちど没り陽さえぎる
駆けぬける子等の銀輪とめどなき想いを誘う夕ばえの丘
ほそ道に動かぬかげをなげながら風にほのめく夜のコスモス
闇の温度かくありしかと想いつつ容器にあてる朝のてのひら

第一七回

応募者二八人、選考委員〜井本委員逝去により六委員による選者。入選〜高橋政子、佳作〜寺尾芳子、森田吉久、八巻培夫。

地平線　　高橋　暎子

おぎろなき稲田の果てのパラナ河麻州パラナをふたつに分かつ
スコールは天より下がる帯に似て巾拡げつつ間近に迫り来
製油工場のあまたを過ぎれば展け来て果てなく続けり大豆畑は
製珈工場の並べる見えて芳（かぐ）わしき香に包まれしアプカラナの町
黄なる色鮮かにしてからす瓜の花咲き出でし垣沿いを行く

第一八回

応募者三二人。選考委員～酒井委員の逝去により、新たに河村哉太郎、多田邦治を加える。入選～松尾紫郎、佳作一位～下津てる、佳作～安部栄子、高原ます子。

離農してより　　松尾　紫郎

ピラカンサスの朱が眼に沁みし離農の日よ断ち難き思い振り捨てて来し

捨てて来し古き農具のかずかずに秘めし記憶がふいに甦り朱

揺れでいる泡立草の花いくつ雑草のなかなれば眼に沁む

年毎に過疎となりゆく此の村よパイナは風に吹かれ飛びゆく

転業は易しからざり幾度か味わう深き挫折の思い。

（清谷・記）

拾　遺

◎一五〇号記念別冊号をだした年一九七七年度の「椰子樹」会費は一八〇ＣＲ$、二〇〇号に達した一九八五年の会費は二万五〇〇〇ＣＲ$（但し一〇～一二月納入では六万ＣＲ$）。だから、単純な計算でも会費はこの八年間に一三九倍になっている。

◎そして当時の会計中江克巳は、「一九六八年に一〇〇号記念別冊

は一二〇新ＣＲ$で刊行したが、一五〇号記念別冊は二〇〇倍を要することになった」と書いている。二二〇ＣＲ$の二〇〇倍は四万四〇〇〇ＣＲ$となるが、今回の二〇〇号記念別冊は、一五〇号記念号と同じ一五〇頁とした場合はほぼ一〇〇〇万ＣＲ$を要するので、大約二二七倍強の刊行費となる。七～八年毎に二〇〇倍以上の印刷費高騰という数字が出て来る訳だ。

◎地方歌会の状況については、それぞれ別項で詳しい報告があるが、一五〇号当時はスザノ、カンポス、サントス、グワイラ、ロンドリーナ、サンパウロの六つだったものが、二〇〇号を出す現在では、スザノ、福博、カンポス、グワイラ、ロンドリーナ、モジ、クリチーバ、サンパウロの八つとなり、数字の上では二つ増えている。サントスが消えて福博、モジ、クリチーバが増えた訳。これは嬉しい現象でなくはない。

◎一五〇号記念作品集の作者数は一四三名二〇〇号記念号では勿論人は変っているが奇しくも人数は殆ど同市の一四四人。

# 二〇〇号記念
# 現会員作品集（いろは順）

石　橋　テル子　　ニテロイ

市街地を日に幾度かよぎる汽車飼い馴らされしいきものの如

三十一文字の声浄ちかによびかくる黄ばみ紙魚（しみ）ある歌誌の師や友

いさざよく雨に濡れむとバス降りぬわが身に絶えぬ思いがありて

生きているわれらに笑いあることのふと哀しかり師の忌に集いて

再咳血に喘ぎつつ空襲に対処せし伊藤整日記気魄に充てり

石　橋　初　穂　　福　博

夏向う緑かがやく参道を昇りつめれば高千穂の宮

山小屋をめざしてあえぎのぼる道木苺熟れて清音聞こゆ

冷雨降るブエノス空港朝発ちてモンテは曇りで晴れしアレグレ

春航の雲海白き切れ間より蒼き宇宙の深さのぞけり

日本より移せしさくらの苗育ち亜国の春に咲きて人呼ぶ

入　江　美　津　　サンベルナルド

ユーカリの木洩日かすか踏みにつつ暫しを渡る風音を聞く

あおあおと並木一せいに芽吹き初む忘れおりたる一冬の木々
人らみな急ぎつつ行く平穏と言うべし夕べの残照の中
新しき記憶も古き思い出もこの地に埋めて齢重ぬる
それぞれに育ちし子等の吐く理論聞きつつ皿の苺をつぶす

石　塚　や　す　　サンパウロ

身にまとう紙幣しめりつつ鍬ふりし若さかえらず移民六十年祭
意外なる充足ひとつ庭隅に掘りいる生姜の太き凝まり
部屋ぬちに灯はあかあかとともれども吾のかたえに帰る夫亡し
過ぎ去りの翳消しがたく座しおればふくらみながら潮の満ちくる
去来する疑惑の翳りのせゆきて医院のエレベーターの静かな動き

井　本　司都子　　サンパウロ

去年（こぞ）の日は花咲きたるを告げ合いで暖かき思いに過ごししものを
微かなる早春の微風にイペーの花絶え間なぐ散る今百のひと日を
ひたすらに亡夫の好みし花なればまなうら熱く夕映に居り
見つむるは黄金の色のイペーの花重なりで浮ぶ亡夫のおもかげ
二階への階段いつもかけ上りし亡夫の足音ときに思えり

原　君子　　福　博

論文の仕上げに疲れ果てし娘に社員採用の通知とどきぬ
朝光のまぶしき舗道（みち）を肩並めて初出勤の娘を送り来し
一筋に生き抜く意志に立ちながら椰子の芯芽は空に鋭し
害鳥と知れども愛し雀等の声に親しむ町の明けくれ
平仮名をようやく覚えし孫達と調子あわせて童話読みつぐ

浜　田　八　重　　ブラジリア

強風の日毎吹きいて土埃り巻上げゆけり空にごりつつ
谷水を筧に引きで米を搗くカボクロの家は昼寂かなり
朝早く畑に出でし息子は金網をさげて帰りぬタツー取れしと
一日でも長く生きよと老我を笑顔でつつみてくるるよ子等は
花もたぬクローバ愛し夜となれば帰依の姿にその緑葉は

春　名　宏　文　　カンポス

儀仗兵の槍の穂先に映ゆる茜タンクレドの遺体ランパを登る
父がかたりし浄瑠璃耳によみがえり松王丸の嘆き聞き入る
「やまなみ」を互みに育て来し君の移転（うつ）ると言えば身のおきどなし
あやぶまれ居りたる命ながらえて幾人友の死を見送りぬ

四十五年この療院に住みつきて夜の夢にさえ療を離れず

橋　本　元　江　　ミランドポリス

郷愁も孤独感ものり越えて鍬ひく準二世の吾も老いゆく
吾背なを濡らせし君は三人の母となりたる吾声震う
気にとめし便り書きおえ安らげば鍬ひく腕に力こもりぬ
木杯を受けし翁に声かくれば卓につまずき耳よせてきし
吾背丈とおり越したる末の子の後に廻り髪椀きてやる

西　森　　覚　　スザノ

或る時は吾が心さえ欺きて屈折多き世を生きてゆく
夜業の灯納屋にともせば粒ごとに葡萄は灯点（ひい）りし彩に焼く
掌にうずく疲れ揉みつつ遅れたる枇杷剪定の野良靴をはく
冬晴れの空に豆穀噴きあげて脱穀機の音峡に研す
砂糖袋の解きし糸さえ巻き溜めて今も移民の旧き性もつ

西　田　季　子　　サンパウロ

断続の夢みな過古につながるに杜は濃霧の白き夜明けか

（一九七四年於山荘）

彼我の業（ごう）果されゆくか夜濯ぎの襁褓は白く闇にはためく

（一九八〇年夫孝徳　脳溢血にて倒る）

思い断ち立ちよる丘に颯颯と夕べの風は吹きぬけてゆく

（一九八三年孝徳死亡）

しきりにも悔い改めよと説かれいる戸外に強き鳩の羽ばたき

（一九八五年現在）

今我に還り来るもの何もなし光の如く過ぎ去りゆけり

穂　島　千　代　　アサイ

荒家を庇うがに立つ蜜柑樹も永の日照りに葉が反り返る

我がことにかかわりなくば銃声に覚めて再び安らぎて寝る

命あること愛しめり切り傷の痛みに幾度夜を覚めながら

永久に我は孤独と写絵の裏なる文に心引かるる

豌豆を明日は炊かむと放映のニュースを見つつ手は豆をむく

堀　内　秀　子　　アルゼンチン

おのれ老いて子等を育てしこの釜の過ぎにし歴よかたみに思う

長病みのようやく癒えし床の上かみすく櫛に白毛まつわる

灯ともしの河面に時雨降り止まず岸辺の柳風にもつれつつ

小舟より降りし中洲の水すみて流れの砂に足をとられぬ

病むわれに善子の頒ちし愛の血の鼓動をうちつつ命支えつ

本間篤草　　セルタネージャ

タざれば灰かに匂う花にして白粉花と名付けられしか
濁り水ふくれしダムの浮草に紫の花群れ咲きており
吾子の葬式済ませて独り哭かんとて畑に出でしは四十年前
郭公を聞かざるままに出でゆくをひとり想えり離郷を前に
砂山に莱英の葉蔭のつぶら実を友と摘みしはいずべなりしや

千葉美夜　　サンパウロ

日本語の会話乏しき旅重ねこころひもじきわれに海鳴る
椰子青葉もれさす青き月光にこころ鎮めて眠る旅の夜
吉りし寺院の鐘楼たかく晩鐘の胸に沌み入る懐古のひびき
雨やみて野天にかかる虹の門くぐりて翔る野鳥はるかに
こころはずみて飛び立ちゆかむ夕茜あかあか燃える憧憬の空

渡部南仙子　　ロンドリーナ

ひとごとにあらざる寒き喪にこもりいたわられおり疲れ果ており
讃美歌をうたいつつ孫らと朝な詣る妻の墓処のセメント匂う
娘等嫁と涙流して争うは他愛もあらぬ形見の小筥
供華とせるスイナン水を揚げずして墓石固く影を深むる
元朝の一家墓参の家水を孫そそぐなり爪立ちをして

## 渡辺松子　サンパウロ

安住の吾が地と決めて眼に親し風速計は音なく廻る
幸薄き園児におくる息（こ）子の遺品尽きぬ愛着断ちて包みぬ
夫の温み伝うも久し掌をとられ霧立つ山の階上りゆく
如何程に慕いし山ぞそを亡夫に代りて佇てり吾が眼凝らして
新緑のきわまる谷に訪日の別れ惜しみつつにじ鱒を釣る

## 河井美津子　サンパウロ

久々に見る汝が顔という声もうるみて夫の視力戻りぬ
静脈の浮く手の荒れは久しくて厨を出でし時にさすりつ
身もだえるほどの悲しみも湧き上る喜びもありて続く生きの日
遅々と這う蝸牛の歩み樹の幹に一条光る跡残しつつ
覚つかなき夫の歩みを支え行く冷雨の下に握る手温し

## 開沼貴代　サンパウロ

就任式の朝のテレビの「タンクレド病む」唐突なれば呆然と坐す
続けさまの手術に耐える大統領告げる報道官も悲痛な面に
夜を集い病院前に聖像据え快癒を折る市民等のさま
七度の手術効なく遂に逝く嶋呼！名宰相は幻と消ゆ
政策の「モルドミア追放」に国民が熱き期待を寄せいしものを

関東忠吉　　アラサツーバ

拙くも折れず付き来て二〇〇号椰子樹記念に逢える歓び
それぞれの住所と宛名書き込みて便り欲しいと故郷（くに）からの手紙
帰郷してブラジル恋しと思うとき日語でつづれる娘（こ）の便り着く
春の野を歩めば疼く足ダコの老いたる移民の疲れにおわす
汗しぼり一日終えたる夕っ方映える茜に詩情湧かせぬ

唐沢弘直　　グワイラ

リベラルに育てたる娘がみずからを知る年令になりて安らぐ
身につけしもの幾つかは繕いて二世の妻と齢重ねる
移民史のなかに溶けこみ四十年この任地にて還暦を迎う
二代また三代目とに亘る取り引きに過ぎ来し方をしみみに思う
マンダカルの花に託する雨季便りわが楽しみの一つともして

鹿毛正護　　グワイラ

幾十年農に励みて妻ともに訪日する日の真近にせまる
高野杉鳴らせる夜半の木枯しの音遠退けば時雨降り来る
衿正し拍手を打つ二世妻蝉鳴く内宮の森にこだます

錦鯉五十鈴の川を色どりて手すすぎおれば近く寄りくる
ゆくりなく逢えし恩師とふる里の秋の川原を歩き語りぬ

加藤　操　　アチバイア

吾が舟の曳きゆく水脈の広ごりも忽ち消ゆる湖広ければ
コリツカする湖茫茫たり島一つ回れば既に方位失う
聯かの魚信伝わり来る竿に全神経を集めていたり
確かなる魚信に合わすわれの手にコリツカの竿忽ち重し
伸び伸びし糸（コリツカ）の彼方に跳ねる魚の太きあたりは断続にして

笠石春江　　サンパウロ

季すぎて秘かに開く花あやめ若く貧しき亡母をしのべり
ちりばめし宝石のごとつゆ明けの都心に冴えてともる宵の灯
遠く岬のビルをまぶして刷立ちし虹高々と海を渡れり
追わるるに似たる日々なり何時よりかつぼみ稚くつづる花梅
白金の波生む風に逝く秋をカンナの岡は穂に装えり

川田幸子　　マナウス

リオ・ネグロ日毎水増しアンデスは雪溶けならんフレアジン吹く

タパジョース河に虹立つ病癒え帰る瞳に色あざやけく
衣更えすることもなく熱帯の暮らしに慣れて二十年過ぐ
アポロンを慕う乙女の貌顕たせひまわり咲きぬ夏炎ゆるべし
雲一つ無く空澄めば国遠く哀しみ募る今日原爆忌

川上　美枝　　マリンガ

五十年生き耐えて来し国に咲く菊の黄花の一と鉢を抱く
縫い針の糸のもつれをほぐしつつ吾が古里はまぼろしの中
香二本静かに供えぬかづけば逝きにし姉の声音かえりく
レンゲ草芽ばえておりぬこの朝異国にむすぶかその淡き花
それぞれに離れて耐うるさだめ持つ子等を思えば弾く落葉火

川原　此露思　　サンパウロ

痛い癒え今日あるいのちしみじみと秋日を浴びて足の爪切る
他界なる汝に通ずるひびきとも誦経のこえをかさねていたり
一束（ひとつか）の歌あるのみに老い佇てば黄イッペーの花に残る夕映え
珈琲の匂いほのかにたちている街角のビルに射す夕明り
このいのち土に還らむ日はしらず花咲く下を吾が影歩む

河村　哉太郎　　モジ

それぞれに芽立つ木群に葉のなきは花咲く前の一もとの桐
溜池の筧の水の落つる音小降りの雨と交わり聞こゆ
光澄む野径に闌けし草紅葉手ぐさにしつつ紅き愛しむ
片なびく竹むら見えて夕暮るる丘の小径を行く人一人
昼蘭けて松の林に鳴く蝉の声止みしかばたまゆら空し

吉　原　千　蘭（千苗）　　アチバイア

過不足の無き吾が余生の明け暮れに作歌の道に生きて足らえり
六十余年過ぎて今尚顕ち来るは故郷にて眺めし日本アルプス
半ズボンに運動帽のいでたちで朝風の中老い吾は行く
今年また緋寒桜の花咲きぬゲートボールに興じるかたえ
二時間にわたる合唱の練習をすませて覚ゆる老いの身の疲れ

米　沢　幹　夫　　フェラース

求愛のさま美しくビンチビーかたみに熱き声絞りあう
アバカテの飴色若葉かがやかせ吹き移りゆく風あたたかし
駘蕩と陽は照りながら種を蒔く人ら動けり野を明るめて
ロボットがいまに歌書く世も来ると記事にありたり何か寂しき
気負いたる過去もありしよ二百号迎えし椰子樹の節目を讃う

米　川　　久　　クリチーバ

生き伸びむ希いは自らのためならむ行楽の日も薬湯を煮て
影響のまわりまわりて吾に来る苦しみおもう冬近ければ
憎しみはいつしか消えて亡き者の幻きよし神の如くに
床に落ちし銭の転がる音を追う視えざる眼をその方に向け
不遇なる娘の上に想いは及びつつ今日は桃祭り三月三日

吉　田　博　実　　サンパウロ

鄙に着き間もなく細き径（みち）下るいささ流れと筧を見んと
泳げねば限度弁え入る海の砂足裏に崩れゆくなり
ひなどりが愛を求める柵越しの声聞きて過ぐ寒きたそがれ
待ちに待ちし喜雨が混じるに颱風となりて瓦の二三を飛ばす
穫り入れに多忙極めし明暮れか身近かに人夫の体臭の濃き

米　沢　千代子　　サント・アンドレ

来し方の険しさ思う歯科医師となりし子の手をしかと握りて
この国の人とも慣れてなりわいに憂きこともなし子等も育ちて
戦争の悲しきニュース見る度に戦禍の満州野にさ迷いしを思う
夏衣冬着一枚ずつのみ持ち帰り信濃の冬を震えて過ごせり
移り来て三十年は過ぎにけり夫も老いたり我も老いたり

高橋　咲子　　サンパウロ

たれこめし雲の切れ目が一条（ひとすじ）の朱（あけ）となりつつ陽は沈み行く
憂いなどいずれの家にも無きごとく絵画さながら灯ともる街よ
企業縮小を余儀なくされし君の乗る夜間飛行の灯を見送りぬ
それぞれの個性決まりし子の性（さが）を知りて対えりもの言う時も
人群を分けて現金輸送車はゆるやかに午後のビル街を行く

田所　君子　　サンパウロ

泥沼を大葉の下に抱きすくすくと伸びる蓮の花開く朝明け
丁寧に白きハンカチ折りたたむ疑心ひとつが解かれる夕べ
決断のつかぬ心がうとましく佇つ背をついて風は過ぎゆく
あかあかと亜国の空をそめる夕日旅のおわりの心にしみる
解け合えぬ心の隔て佗びしみて帰る背をつく師走の風は

竹内　千枝子　　アルゼンチン

血圧の低きを気にする夫の掌にそっと触れみる冷たきあした
三つきぶり生徒らにむかえば疲れ来て咽喉の乾きを殊更覚ゆ
心こめ墨すりおろし学び舎を明日卒業でゆかん子に証書かく

晴ればれと笑顔明るく留学に発つ娘は二年の別れを告ぐる
早乙女の三人寄れば笑い声絶えずひびかい煩いの無し

辰巳　幸　　ドラセーチ

夕浜に磯の香強くただよいて藻を焼く煙徐々に消えゆく
天平の甍は重く鎮もりいて晩鐘ひくく庭にひろがる
それぞれの重荷を負いて人は生く踏み止まれぬ明日に向いて
残りたる命しみじみ思う夜に心して誦す般若心経
朽ちし垣に寄り添う如く一本の菊咲き残り秋深みゆく.

田口愛子　　ベレン

父母の国と子等の団とをつなぎたる吾は老い初む異国の地にて
漕ぎ出づる小舟の如く若き人等世に出で行きぬ
夜の空の祭典の如く輝ける星等の中の南十字星
東方に黄金に光れる三カ月と金星やがて靄に包まる
霞みたる空につづける野の花よ手折らむ心消えて吾が佇う

高原万里　　カンポス

「異状なし」医師の一言が足のおのずとかろく帰路をば急ぐ
恙なく店を仕舞いて帰る道アンゼラスの鐘遠く聞ゆる

春先の庭にくさぐさの花咲かせ師は逝き給う面やすらかに
弱き身をいたわり生きる夫なれば冬の日暮れをせきたて帰す
汗あえて登り来し吾子の墓所小花咲きいて風にゆれおり

高　原　ます子　　サン・ベルナルド

うす蒼きもやが包みて暮れ行けば子等も散りゆきひそとなりたり
火焔樹の花を嗅ぎつつ少女ゆく波打つ髪に夕日まといて
早咲きの赤き椿の花見えて夕日の光淡くとどまる
笛吹きて綿菓子売りが通り行く若葉の匂う街路樹の下
荒縄を首に下げたる放れ馬萠え木の下に草食みており

滝　夕起緒　　スザノ

三カ月余のセッカの後の雨なれば山の木の芽が一斉に吹く
雑木林の花明りしるき夕茜にセンフィン鳥は啼き移りつつ
朝窓をくれば咲き垂れる藤に来る蜂雀はながきロづけやさし
真白な茅の穂原に夕陽もえ羽蟻は群れて空に舞いたつ
浅緑の野菜畠の夕まぐれイリガソンのしぶきに濡れて映えたつ

竹　山　三　郎　　サンパウロ

思い出の家並みそのまま残りたる古き田舎の町に友あり

満開のパイナもありて街路樹は色とりどりに夕映えの中
枯れ果てしと思われるほど一葉も残らず散りし道のパイネイラ
草むらにまろび遊びし友たちをふと思い出す刈り草の香に
枯草に淡く伸びたる影寒く反芻しつつ牛静かなり

竹　山一郎　　オザスコ

生きて居し証拠に骸さらしおりこの日の中のわれと昆虫
太陽は赤々として昇りくるあの朝光（かげ）は何時の日かえる
ユーカリの梢ほのかに西日射す去りてぞゆきし小鳥帰らず
ピニエイロス川面に釣糸垂れて居し思い出のあり幾年すぎぬ
表町歩けど犬の影もなし無表情なる人等過ぎゆく

高　達　友　猪　　サンパウロ

人住みて愛でいし花か雑草の茂みに咲けるコスモスの花
雨後の月明るく澄みて生き生きとゴムの巻葉は空に向いて
豊けくも涌ける泉の水澄みて繁る木立の影を写せり
移民とう名の寂しさも此の国の基礎となる身に悔は残らず
胸深く消ゆる事なし故郷の山河今も甦り来る

田　中　朝　子　　サンパウロ

唐突にひぐらし鳴きて山の径杳き日の声とどまりて聴く
密やかに落葉の音の韻く路またこの秋を踏みて通りぬ
貝の声密かにきこゆ朝浜を奢り知らざる足裏に踏む
一条のひかりに触るる思いして松毬拾う年の瀬の径
あじさいの毬一斉に揃う辺にわれと子と孫睦むひと刻

高　橋　よしみ　　サンパウロ

灰色の記憶の底にはためくは体臭失せし数多の襤褸（らんる）
花薔薇静かにこぼれ散る夕べ終焉と云う一語に執す
灰白く被ぎ重ねて細りゆく燠の明りのままに終らむ
さみどりの蔭に友等と寛がむ山家ぞ欲しき吾が晩年に
朝夕の話題となりて地球にはハーレイ彗星いよよ近寄る

徳　尾　渓　舟　　サンパウロ

昨日は晴れ今日は雨なり天候の定まらぬまま秋深み行く
残照に光る教会の塔の上二日の月の淡くかかれる
連日の驟雨に舗道を紫に散り敷くジャカランダの花踏み急ぐ
何処までも果てなく続く高架線に添いつつ我がバス走り続くる
望郷は南の国よつぼくろと秋づく日本をおさらばにせむ（訪日）

作　道　禎　子　　福　博

リユウマチの足の痛みに耐えいつつ真夜打つ時計の耳底に重し
紺青に湛えて鎮む摩周湖の漂う神秘に吾去り難し
庭池の如き野風呂に浸りいて風なき朝を桜花の散りくる
訪日の旅より戻る機窓よりリオの夜景は故郷とも見ゆ
杳き日の悌顕たせてフリージアの香り漂う中春（はる）の陽だまり

常本唯生　　ＳＭアルカンジョ

イッペーの花はかなしも八月の枯野の中に鮮かに咲く
尖塔の上に舞う鳥黒き鳥雲早くして冬は来たりぬ
山西を語れば子等は笑えども黄土に埋めし吾の青春
潮みちて渦おさまりし瀬戸のうみ明るき小雨が降りていたりき
皇座山越えて降り来し秋時雨高浜通いの甲板ぬらす

中井益代　　サンパウロ

椰子樹誌に我ら拠り来し歳月の杳けくもあるかな異土ブラジル
二（に）百号重ねし歳月よ創りたるその当時（かみ）の人らおお方は亡く
深層に祖国ひそめつつ詠いつぎ生きつぎゆかむ移住者われら
かそかなるものとこそ思え印し来し椰子樹とかさなるわが足跡の

異国に果つる生（いのち）は思ほゆれなお恋いやまぬふるさとの土

中川荒記　グワイラ

自らピンガを注ぎて内部より酔い痺れくる孤独にひたる
消極は吾が周辺にひそみいてゴムの新芽の伸びに対きおり
十字架に藻のまつわりて湖底より死者が脱げくるごとき泡立ち
ＳＫＯＬの空缶浮ぶ水の面に燃えてパンパの陽は落ちてゆく
ドラム缶並べし上に組まれたる釣場に夜の灯をともす

中西静世　ロンドリーナ

畠土の赤きふみつつ語り合う彼我過ぎゆきし歳月のあと
円とドル数え直しつインフレになお遥かなり祖国日本は
垣に沿うやめもかづらの濃紫午後のけうとき陽をかえし咲く
乙女さぶる娘の胸のうち計りつつ交す言葉はなめらかさ欠く
暮れ方の岡に盛れる桐の花薄紫の空に溶けゆく

中村教二　モジ

畑仕事遠ざかりたる齢にてこのあけくれを短歌（うた）によりゆく

明の月入りなんとしてこの朝け山木も草も霜真白なり
ユダの人形子供ら引きずり喚きゆくその謂（いわれ）さえあわれ
知らなく
夕まぐれわが帰り来る道の辺に一列のラッキョウの花の清しさ
切り取らんとわが手ふるれば甘藍の内よりさける音のするかも

中沢　綾子　　サンパウロ

母吾の日に何事も包むなき吾娘と彼との明るき交わり
火遊びに入るは自ら戒むとほほえむ吾娘を吾疑わず
年月を呑みて黙する朝の河渡ればにわかに都会（まち）の彩濃し
其のかみに芋を運ぶと邦人の牛車連ねしもこの橋と聞く
呑みきれぬ芥を寄する河の面を白く泡立て下水注がる

椋野　寿美　　サンパウロ

吾が生れし伯耆の国を知れと言えど心さだまらぬ日々を追う
子を恋いて母来し謂（いわれ）の伯耆の国我行きて誰にあわん思いに
己が飲むビールを分けて吾にくるる何時よりつきしかかる仕種も
亡父が泳（あ）みし岩の平に一人来ぬ時化吹き上げて水色の中
水を流れて来るとも聞こえパラグワイ河の寂寞を盛る民謡のリズム

梅崎嘉明　　サンパウロ

移り住みで五十年いまだ郷愁につながる行事のあれば観に行く
この地より見れば墓石のごと並ぶビル群に雲影たえず移動す
苦渋多き過去なりしかどとにかくに生きで還暦の日を祝さるる
ほたるぶくろの細き花茎思うことありで外国に老いてゆく吾
四季の変化とぼしき庭に葉を重ね楓は色づかぬままに年越す

浦田輝星　　グワルーリョス

供花ささげ笠戸丸移民の姑の墓に詣づる二世の嫁女
雲南の地図を開きて弟の戦死を偲ぶにこおろぎの鳴く
日本間に満州帰りの旧友と膝交え会う訪日の吾
気は急けど義足の歩み捗らず横断なかばにシグナル替わる
姑の墓に参れば傍の枯木の梢に鴉啼ききおり

植村かず　　サンパウロ

夫逝かしめ己れも病みしひととせの日々きざむ言葉遁れられなく
捧げいる夜の祈りのいつしかに果無ごとなど亡夫（つま）に告げいる
ジャカランダの花の紫に生きのびしわが眼も染まり眩しかりける
病みてより再びの春雲むきて金鳳樹の花黄（きい）にふくらむ

空むきてふくらみ初もる金鳳樹の花の黄日毎に色の増しゆく

内　川　愛　季　　モ　ジ

孫二人が描き散らしいる紙クズがサーラを占むる豊かさがあり
インフレは術なしとめど墜つるのみに不安は一人一人に及ぶ
霜柱踏めば崩るる身のめぐりいずちに向う道も見出でず
国の弊愚痴りて代うるべき何ありや確たるものを持たざるままに
枯いろに粧う冬の畑を鋤くすかれて息吹く土は光れり

内　田　笑　子　　サンパウロ

つけ損じしマッチの軸を積みいつつ何処にも滲む雨期の愁いは
声に立つる独語は淋し自らの齢に重なるあやまち多く
口紅がおとなしき朱になりきたり磨く鏡も年古りてゆく
ほろにがき味のただよう山菜を口直しとし齢は深む
ネックレスの白金光れば自ら衿元整のう慎しみもちて

上　田　幸　吉　　サンパウロ

ひぐらしの一つしきりに鳴きいでて風なき山家に夕顔の咲く
花活けで君を待ちいし日もありき山の畑に草の穂を抜く
風なぎて湖面静かに淀む中夕日抱きて水藻動かず

糸屑の散りたる膝を払いつつ幾度か電話のベルに立ちゆく
主婦の座もはるかになりしこの日頃古びし鍋は片隅にあり

大　月　　博　　ＳＪ・ドス・カンボス

君が伏す療舎の窓や七分咲くクワレズマの花に癒し（いやし）を祈る
あでやかに君純無垢に装われて夫婦を契る聖壇の前
愛のワルツ奏でられつつはめらるる君の細指に契る指環を
ならわしは我が世で終わる若水を汲めば初日が雲間より出づ
三世の孫おかわりのお雑煮を祝ぎ片言でお芽出度うと言う

小　野　政　子　　スザノ

インテリに厳しき土壌の移民国に報いうすき生を師は終りたり
呼吸絶ゆるときの思いも歌のこと花のことにて在わしけむ師は
師の庭に花の彩り絶えぎりき行きませし楽園見する如くに
明るくて凛とましますデスマスク弟子に遺して師は逝きませり
執するものを胸にひそむるものの影くきやかにあれ灼けし地の上

岡　野　でん子　　グワラ

牧場の朝の給水場（アグア）すみかえりイッペーマレロ鮮やかに写る

つづきたる旱りに花の少なきに今朝吾が庭はマナカ咲き満つ
腕白な吾子の仲間でありし子が今医学士として吾が前に佇つ
摂氏九度プールの水面静もりてそこより寒気広ごりて来る
待ちわびし今日の日なりき学業を終えたる吾子の手を振りしむ

小野寺　郁　子　　サンパウロ

まなかいのユーカリ林のうす紅葉ひと所ずつ風に揺れおり
定まらぬ想いに屈めば葉がくれに一語のごとく咲く白椿
培いし君なき秋をひたすらにピラカンザスは朱深めゆく
娘等は嫁き姑母逝きついに一人女となりしを想い長き湯浴みす
訪い来る日　間遠くなりつつ充実の主婦の日送る吾娘等と思う

大　西　阿　哲　　スザノ

下積みの位置に甘んじ幾とせを木下闇に苔は花咲く
朝まだき石に腰据え苔の吐く緑の息を肺一杯吸う
ウインドの破璃に猫背の映りいてわが老醜を如実にさらす
崩れゆく自負を糾せば真陽の中短かき影の吾に従う
文盲にひとしき吾に孫よりのポ語の便りよ心して読む

大　場　時　夫　　ロンドリーナ

おもむろに振り返りみる峠よりさくら吹雪はかぎりなく降る
山襞に埋れしものの甦るあざやかさにて草萌えいたり
かえり来し者のよろこび産土の神の廂は記憶のままに
ひろびろと日はさしいたり八幡の境内のさくら花過ぎしかば
亡き母の鄙唄恋し掛茶屋にところ天など啜りておれば

大　塚　　清　　サンパウロ

移り来て父病みし日の淋しさをふと思い居り五十年後のいま
楽園と思いて移り来し国の汗にまみれて棉畑に佇つ
斧振りで原始の森にいどみたる開拓はやさしき事にあらざり
焼跡に急ぎ建てたる椰子壁のすき間をもるる月を寝て見し
同邦の集いて成せし植民地助け合いつつ過ぎし幾年

岡　本　喜代子　　サンパウロ

哀切のファード聞きつつ飲むワインともしび暗きリスボアの夜
空よりも濃き紺青のエーゲ海なにを想いて佇てる横顔
われの住む地球は青しと人の言う君逝きしくにの色はなにいろ
乞食、捨犬、まなこを逸らして歩みゆく非情の巷のひとりかわれは
いずこより来たるは知らず掌にのせる一期一会の柿のくれない

大和田　房　子　　ジャカレイ

まひるの陽照り反しつつサボテンの花咲かむとし蕾とがれる
今朝をはや霧晴れぬ間を深々と咲きいでにけりサボテンの花
過去の章塗りつぶしたし行間は苦渋の色にまみれてあれば
夫の持つ倫理観故苦しみし過去もありたり今の平安
哀歓も逮きに去りて淡々と金婚むかえぬ日々を足らいて

大　平　綾　子　　ハンディランチス

過ぎし日の苦労を共に語り合う幼時移住の似通う夫と
古里の追憶の中に生きる夫白髪となりて我に優しき
柿食めば優しき亡父（ちち）を想い出づ茸狩りせし古里の秋
時折に死の事墓の事にふれ何時迄続くか老の平安
老い人の死の続く日々悲しかり冷たき風の吹きつのる墓地

奥　野　精　一　　ＳＪ・ドス・カンボス

限られし余生いとしみ旅の宿出湯の滝にひたすら打たるる
湯の中の売店の軒に灯がともり旅愁と共に灯影が揺れる
風化せし移民初期の辛苦などかたみに語る湧き湯の中に
移民らが急坂に収穫競いたる昔偲ばす人参の絵は
山頂に廃駅の見ゆ移民らが馬の背に乗せ人参運びし

太田かよ　　モジ

五十年農を支えしこの吾が手皺のふえたり土の香のして
柿畑の落葉を踏めばしみじみと快さあり植えし人恋う
音もなくそぼ降る雨を欣びてうるおいし畑にひとり出できぬ
心地よき風になびかう野の緑春の息吹きの雨あとをゆく
幼な孫とたわむれ相撲とることも何時までつづく老いゆく我の

岡本美佐雄　　イタケーラ

今日もまた紙と筆とを用意して歌の一首とたたかい抜かん
花枝の桜賜わりぬかって吾が贈りし苗と聞けば親しも

小笠原富枝　　サンパウロ

二百号の歌稿練りつつ熱しおり逝きたるものに残れるものに
二百号の選歌も終り夜の卓に肘つきおれば自らの影
身を緊める潮騒に暁（あけ）を覚めたれば母韻のごとく芙蓉の朱
の
「残生」とう語感しみるも草の実を拾いつつふっと土に手を置き
血縁に係わる想い剥ぐごとく読み続けいる「へんくつの発想」

工藤善子　　サンパウロ

為す事も歩むも難き日々ながらエプロン結ぶ朝のみじまい
七十年日毎結びしエプロンを朝毎結ぶ慣いうとまし
膝関節病み眠れぬ夜半一人酔い痴れし隻脚の歌人正和を想う
酔い痴れて痛み忘れるくすりなら水割ウイスキー飲まむと思う
子と孫に守られて居る幸せも哀れ忘るる脚の激痛

久米光春　　クリチーバ

血をわけし子にさえもてる隔りの空間なでている妻と我
乏しきに堪えきし妻がふと洩らす溜息に似し独語はひくし
衰えと思いたくなし階下る足のもつれを支えられいて
節約の習いが性となりし身を嗤われている一日淋しむ
地に残す何がありやと屈まりて木洩陽の下うすき爪きる

山岡樹代子　　ジアデーマ

電線のおちこちに凧のかかりいて冬陽眩しきバス待つポント
訪いゆけば幼き孫の馳けて来る髪をふりふり笑みこぼしつつ
過ぎゆけば束の間のごとかがよいし園のスイナン裸木のいま
舗(しき)石の間に咲きいしタンポポの刹那せつなを生きる黄の
花

夕かすむ空に咲き満ちジャカランダ夢幻のごとくわれを誘う（いざなう）

山　崎　益一　　スザノ

還暦も古稀も由緒を知らずして祝うことなき孫子と生きる
屯田の歴史を語る本を手に父母の苦難を偲ぶ吾移民にして
日に干せば膨みもどる蒲団にて妻なき秋の一人が淡し
止まるなき物価騰貴に身はそがれ歯車きしむが如き過ぎゆき
軍政二十年の汚れし過去をそしりつつ新共和制の民が前途を育まんとす

八　巻　たけ子　　スザノ

外燈を点せば遠き古里の雪あかりして吹雪草咲く
夜々ふとる月に冴えつつ吹雪草樹氷のごとく浄く咲きつる
雪の道たどりしことも甦りきて白く散りしく吹雪草しむ
吹雪草に雪の幻愛しみて古里遠くブラジルに老ゆ
塀越しの緋寒桜に見ほれしもいつしか散りて光る葉桜

八　巻　耕　土　　スザノ

椰子樹誌の先師らあまた身まかれど残る歌友らと二百号祝ぐ

薬草を啓かん業に妻子らと離りて懇に孤り起き伏す
孫子らにせぬほど日毎いたわりてアマチャヅル苗床に培う
癌らしき証（しよう）を電話に予知しつつ我述療法などを指示する
生涯を娶らず逝きし弟の魂は迷わず黄泉途ゆくべし

山本　操　　バルエリー

麓より項きにかけし秋の色しだいに色ます阿蘇の五岳は
暫くはこだまがこだまを返す汽車峠めぐりて外輪山へ
真下には湖水と紛う阿蘇谷が末だ眠れる朝もやの中
あかね色に外輪山上ゆう映えて噴煙は東に傾きのぼる
野焼き火は阿継中岳をゆらめかし紅蓮の炎もえつづけいる

八巻　培夫　　サンパウロ

幼き日父が聞かせしもろもろの妖怪変化時に恋おしむ
連れられて移り来たりし我なれば二国に分かつ幼時体験
社員中大正生れはひとりにて意識さるらし我の存在
燈を消して睡りつく間のしまらくを妻の手とるはいつ頃よりか
明け近く音みな絶ゆる刻ありて闇に顕ち来るまぼろしの猫

松尾　紫郎　　アチバイア

バス停にバス待ちながら人ら皆黙然として降る雨を見る
喪の家を辞し帰りゆく月の径悲しきまでに沼百合白し
かばかりに寂しき音かわが先を義足の男歩みゆぐ夜寒
鳥一羽空をよぎりて消えし後動くものなし冬の夕焼
デジタルの枕時計は華美なれど病めば悲しや秒音恋し

藤　田　美砂子　　パラナグワ

培えば応うる草花の手入れして無に還りゆく心鎮めむ
掌にのる程の小さき水盤に欠かさぬ供華を鉢に培う
芽を出せしものの命を愛（お）しみつつ花期待つ心となりで和めり
あるなしの藤の花芽をのぞきいる背に早春の陽が沁み透る
うらうらとあまねく小鳥の声あがり皺だちし掌に掬う春の陽

古　山　孝　子　　ＳＭパウリスタ

闇遠く州道を行く自動車（くるま）の燈（ひ）明滅しつつ幻想の中
稜線に茜の残照かすかなる空に三日月ほのかに白し
山々の重なり徐徐にかくれゆく沛然と白き雨脚せまりて
諦観と言うには遠し憎しみのきざす日もあり銀器をみがく
遽巡の心をうちて紅のアマリリスの花真すぐに立てり

藤田富代　　サンパウロ

これが吾が終の住家と思いつつ移りしビルの夕窓に佇つ，
何急ぐ吾にあらねど構内のラッシュウアワーに足並あわす
常々に亡夫が使いいし拡大鏡今しみじみと吾のものとす
幸福は小さき蝶の羽からも来たると孫は壁に詩を貼る
菜種まく春まだ浅きふるさとを去就に迷うごとく去り来ぬ

藤田朝日子　　スザノ

逝く秋を惜しみで独り庭に佇つ木守の柿は今日も無事なり
砕石の岩場遥かに見えて来て其処より白き石粉舞い立つ
貯水湖の成る日を恃み帰らむかセラードは今夕闇の中
内乱の無き世をひたに願いつつこのインフレに耐えて生き居り
この国の肥沃なる地に根を張りで版重ねゆけ啄木歌集

（祝ポ語訳啄木歌集）

古関俊枝　　モジ

雪深き古里語りいる夫の裡に燃えいむ囲炉裏の粗朶火
気負い縫う窓辺を不意に暗くして午後の雨雲西に逸れゆく
趣味、嗜好、体質、性格、ことごとく異なる我等に金婚近し
若きよりひたすら欲りし定年のあとの平安意外と虚し

藤棚に集いで飛び交う蜜蜂は風なき真昼の花房ゆする

小　池　美佐子　　オザスコ

沸くごとく翔び来て一瞬蜂鳥のスイナンの花に翅うち振るう
裸木も混じる冬庭のひとところ咲ききわまりし白梅一樹
登り来し千六百メートル山頂のキリスト御像の足もとに寄る
黄楊の木を文字にかたどる花時計のかたわらに来し午（ひる）一時ころ
水枯れて岩肌見ゆる滝のうえ覆いで咲ける蔦サンジョオン

越　雲　耕　村　　モ　ジ

兄上の身を案じつつふる里の山河恋うる老いし吾が身は
腹這いて浜の白砂に語り合う友の瞳の濡れて目ばたく
万感をこめて額ずくふる里の鎮守の社殿の深き静もり
谿川の急流岩に水しぶき葉を打たせつつ綴る水草
老い吾に残る春秋幾たびか思いつつ聴く除夜の鐘の音

小　石　茂　行　　リンス

我等いまただひたすらにすめらぎの詔勅（みこと）かしこみつかえまつらん（終戦直後）

双手ひろげおぼつかなくも近づける吾子をし抱けば乳の香ただよう

フェイジョンを煮る要領を時々に声かけて聞く臥床の妻に
ひねもすを熱気はらめる埃り空我が想念も清純ならず
意志をもて動く魚の目まのあたり硝子越しに見居る時移るまで

遠藤　すみえ　　サンパウロ

隣家のユーカリ林伐り払われて明るくなりぬ街道周辺
産院の門を出づれば白杖の盲いの青年が路地渡りゆく
冬の陽の清しき一日恵まれて同窓会の庭は華やぐ
みちのくの芭蕉の跡を辿りたき希いを持ちて娘は旅立ちぬ
出雲崎の海岸に佇ち佐渡ケ島碧かりきをかたりつぐ娘よ

寺岡　晃児　　オザスコ

空缶の一つが雨に転がりて白き反射の柁びしき路地裏
一字欠けてそこのみくらきネオン点く葬より帰る夕暮れの街
柿若葉透かしてあかるき窓の辺にインクの匂う新刊書開く
掌の甲にてんとう虫を這わせ居て午後のやさしき秋陽貧る
破れ凧の骨電線に懸る見ゆまなこ鋭き児等遊ぶ街

寺尾・芳子　　福博

けんぽ梨の若木は日々に青葉増しはるかな湖の風の待たるる
この村に関わる人を呑吐せるバス停にイペーは今年も鮮やけし
亡き母と懇ろなりし人の忌に形身のバッグ抱き来て詣ず
間引菜を色よく茹でんと滾（た）ぎる湯に入れしばかりに夫の呼びたつ
ベトナムの虐殺の惨を目の裡にフォルミシーダを畑へ提げゆく

安部栄子　カンボス

大海に浮ぶ小島にさも似たり雲海の中の山項きは
谷ゆ湧く霧は消えつつまた湧きつつかくてひと日は陽の光見ず
陽が昇り徐々に消えゆく雲海は山ひだひだに残り屯す
今此処で汝を死なしてなるものかと怒れる如き夫の眼差し
連れ立ちて帰り行く息子の後影俄かに遠し汝との隔り

阿部玲子　サンパウロ

吾が肩を抱き幾度も礼を言う子よ卒業の式典終りて
杳き日の初入学の姿顕つ卒業の式に並み居る時に
父母と異なる国にて生を受け民俗学を学ぶ吾かも
東洋の調べもこめて牛飼（アポイヨ）の唄はテープより流るる太き音に

マンジオカの葉をもて作るマニソバの煮ゆる大鍋をスライドは映す

安　達　植　野　　サンパウロ

燦然と歌誌の光は目の前に二〇〇号記念苦心の歓び
荒ぶ世を険しき難路越えられて師や先輩の協力に涙
老躯にもあらん限りのこの努力床に臥す日もペンをとりたり
冬の夜に寒さにふるえ歌励む床ぬけ出でて眠るを忘れ
ああ椰子樹二百号記念歌友等とこの歓びぞ険路にたちて

秋　保　香代子　　フェラース

かさこそと庭の落葉をころがして朝の風に秋の声きく
生きる日のきびしきにして靴音をひびかせ歩むガロア降る街
不規則に落ちる雨だれききており孤独が吾を包みゆく夜
生くるものなべで空しと思う日の目に痛きまでスイナンの赤
車椅子の友を見舞いぬふとふれし肩の薄きに涙こぼるる

秋　山　瑠　璃　　サント・アンドレ

煩悩の一つひとつが溶かされて澄みゆく如し老のくらしは
傷つけし傷つけられし過ぎゆきの日々を思えり眠れぬ夜半に

アスファルト熔ける真昼の街をきて枝さし交す並木を仰ぐ
娘の家に湧く笑声ひびききで同じ屋敷に吾一人住む
傘松を点景としてきらめくは起伏果てなき白銀すすき

青　柳　房　冶　　モ　ジ

空鶏舎（とや）の目立ちで続く村ぬちに白き埃がひとしあり舞う
朝市の客の薄きを確かめてバンカの蔭に握り飯食う
洋二つ越えて来しなり今日よりは吾が土地となる境界線に立つ
ひたすらに生きたる証（あかし）岩肌に貼りつきで白き貝の残骸
しっかりと鞄を抱え居眠れる少年工を乗せ夜の通勤車

青　柳　ま　す　　モ　ジ

娘の膝に赤き毛糸のまろびつつ小さき靴下型なしゆく
わが壮さの終の農ぞと気負いつつかなしきまでに日焼けせる夫
言葉少なに働く女中が失業の夫もつことを云いて眼を伏す
洗濯の乾きを頬にてたしかめいる女中はわが家になじみたるらし
邦人と云うのみにして温かし露路ゆぐ媼と礼交しつつ

秋　永　三　郎　　カフェランジア

ひそかなる生きの合間のものとして吐息と云うを人間は持つ

ひっそりと妻と二人の食卓に蝿のひとつがまつわる日なり
ライターの火莨に移すたまゆらは未知なる国の絵が描きたくて
かたわらに眠れる者の頬ありていまほのぼのと朝けの明り
口で舐めいやすにあらず胃を切りて後の食後をひそかにねむる

佐　藤　い　ち　　サンパウロ

打ち上げし波の型の線を引く貝がらすでに渚に達し
あげ潮のとどかぬ位置は老の座に似て錆び果てし漁舟おかるる
もう一度潮寄せくれば崩れ去るところに巧みな砂の塔あり
物の影地に淡々となりながら没りゆくにはやいくぼくもなき陽
吾が植うるこの花の苗想出の語り草ともなるやも知れず

酒　井　嗣　朗　　スザノ

湯上りの吾が弾くギターに母和せし「庭の千草」の楽譜古びぬ
亡き母に庭花手向けし父も亦此処に冥りて佇つに声なし
初盆の父の墓前に供えむと庭の紅葉の一枝選ぶ
父在りし日の如咲かさむ紫陽花を植え直したり株間正しく
人来たり人去る庭に埋もれゆく父の足跡探る日のあり

佐　藤　三つ農　　サンパウロ

波頭白く輝く汀辺に立てば足元の砂崩れゆく
麻酔効きて眠れる夫を看とりつつ掛けし毛布の縞目追いいる
過不足の無き日々にして老い二人夕餉の茄子の味噌漬の色
臥す程は無き風邪なれば亡き姑の教えてくれし生姜湯を作る
窓明ければホテルの庭の梅檀の実は朝日うけかがやきてあり

佐　藤　みつ子　　ＳＪドス・カンボス

末の子の落書いくつかかれおりしまいおきたる由来の鐘に
移植せしベゴニヤ小さき蕾もち陽射し明るき棚におき替う
仮植せし花苗の箱整然と冬さびし花舗の棚をみたせり
花苗を植える手先に土の冷え沁み透る午後客も来たらず
戻り来て厨にたてば残照にもみぢは燃ゆる如き緋の色

桜　井　みつえ　　カルダス・ノーバス

大空に広ごる雲のおおらかにその影落とす山脈の面に
夕暮のなだらかな山脈紺色に麓に温泉町の灯連なり
ひと夜さの雨に鋤きたる土の色深々として潤いたたす
陽の透る畑の流れに顔洗い眩しみにつつ手に絡ませぬ
暮なずみ見上ぐる椰子に啄木鳥は呼び合いながら巣にはいりゆく

酒　井　祥　造　　バウルー

暁の雲もゆる空大いなる鉄塔そびゆ闇しずむ野に
稲刈りに日和きまりて澄める空草露しげき朝の径行く
かぐわしき匂いのこもる刈り稲を取込む夕べあきつ群れとぶ
小川の瀬水音たえて久しくも降るきざしなく今日も暮れ行く
久々の農休みとして雨の日は歌集ひもとき歌詠みで居り

桜　井　正　巳　　グアラ

赫土のポエイラかすかにバルコンを染めて今朝より商いもなし
店先におりたる犬が欠伸一つなして背を延べ競れゆきたり
寡黙なる犬かと思う呼びかくるわれにわずかに尾を振りにけり
たわやすく欺かれるを嗤う声眼つむればつきささりくる
深部より細胞の潰えてゆく様を夢みて現実の如生々し

坂　　光　男　　コ・プロコピオ

人を葬る輪の中に佇ち聞くものか棺に投げあう土塊（くれ）の音
一握の土を柩の上に投げきびすを返す夕映えのなか
フィナードの群衆の中を足ぼやに柩さげ来る一組にあう
地の果ての空へ赭土吹きあげて颱風が来るひでりのはてに
赤き屋根低くミーリオの葉に埋もれ君が新居へ吾ら訪い来ぬ

清谷勝馬　　サンパウロ

たとい今東と西に別るとも君な忘れそ吾は忘れじ（高小卒頃）
広い野原汽車の飛火の燃え熾るその広野原牛群れ遊ぶ
手作りの棺に納めてせめてもの花撒く時に漏らしたる声
久々に訪ね来つるに唐がらし赤くも赤し留守の庭前
再びはあらじと云いし妻逝きてまこと孤りの旅に出で来つ

清谷益次　　サンパウロ

数千キロの長さをぞ持つ支流ふたつここに閲（せめ）ぎて水混じるなし
正（まさ）しくもアマゾンの水をわれは掬（むす）ぶマナオスの街（まち）の遥か沖べに
〃移民妻〃の貌というべく正しくも翳を走らす表情を見す
憧れのごと日々想う十日まりの睦み残して往（い）にし女孫を
三千キロのたやすからざる距離想う何の記憶を持ちで往にしか

水本すみ子　　サンパウロ

林泉の地面華やぐ睡蓮の黄なる花芯にわが吸われつつ
差し交わす竹の秀先の陽に透きで滑りやすかり濡るる小道は
竹むらの青き呼吸に溶け合いつつ小暗き薮の下道をゆく

幾人の永別を見し歳晩の心に痛しジングルベルは
わが代にて終るともよし鏡餅飾りて元朝のけじめとはなす

宮　西　津　多　　ドラセーナ

亡母の齢はるかに越えて老いつつも日々ありがたく家事に迫わる
る
故郷の雨降る秋の栗拾い今だに恋し回想に耽る
移り来て身なりかまわず一すじに拓く田畑の透きを憶う
まつわりし子等の想い出遠のきて孫のまつわり日々たのもしく
移民史が喜寿を迎える同じ年喜寿を迎えし夫のよろこび

蓑　毛　正　淳

相思樹の花はあわれかしじの間に咲きかくれつつ早も散りくる
灰被ぐ燠の赤きが眼に沁みる焚火祭りの果てし夜の更け
この海を越えて来し日のはるけくて流離の思いをゆする潮騒
暁暗の河港にバルサ待つしばし疾風は雨気を含みて過ぎる
共に来しうからは逝きぬこの国に独りの吾の残生を問う

水　田　竜　資　　カンピーナス

赤道を越えゆく吾らの移民船鳴らす汽笛が虚空にひびく

祖国をば発ちて幾洋越え来しか吾が乗る船は南半球に入る(印度洋上)

こだまする斧の響きに青春の命をかけて挑みし山伐り
山焼きの煙にまかれ生きながら火葬かと思いし墾の日が顕つ
軍艦旗仰げば老いの吾が胸に日本男児の血潮がたぎる

三浦　久和子　　サンパウロ

充実はここにもありし石道の裂目に瑞々とたるる草の穂
自然農法に挑む若者が山と積む堆肥は匂う体臭のごと
騒音の束の間絶ゆる時ありてほうせん花の種弾く音する
此の辻にバス待つならいも久しくて無賃乗車の恩典も受く
漸くに至れる老の安らぎか時かけてぶどうのジャムを煮つむる

志村　とく　　サンパウロ

シャーロムの合唱に和すごと鐘の音が塔より響く小さき御堂に
道ばたでバナナ売る子の細き腕甘え許さぬ生活を思う
雨止めばあるかなきかの風向きは変り羊歯の葉静かに揺るる
煙厭う我に背を向け裏庭で煙草吸う夫の銀髪光る
待ちわびし雨の訪れ告げるごと春雷はるか轟く夕べ

陣内　しのぶ　　サンパウロ

もろもろの惟いをわれのつなぎいる「ふる里」と云うを吾子は持たざる
ふる里への憧れ知らぬ複雑な四十路の吾子がわれを直視す
「ふるさと」へのこころ問う子に転々と過ぎし移民の一世省みる
遠き日のこととなり経し幼日の汝守り来しは云う日なからむ
にじむ如き思いを噛めば余生とう残されし「時」に心もとなし

設　楽　昭　五　　グワタパラ

紺碧の空一線に区切りゆく飛行機雲の奇異に美し
宵時雨過ぎし静寂（しじま）に一人居のわれにきこえて木の葉散る音
赤々とテールライトのつらなりが流るる如く道筋示す
丹念に記帳続くる妻にして夕餉の前のソロバンの音
省り見て悔ゆることなしひたすらに明日へと続くわが道を往く

島　田　　普　　ジュサーラ

優雅なる晩年を希い働けど財を成すには程遠きかな
心弾む程にはあらず予想せし商いありしひと日の暮れに
労多く益の少なきこの家業つづけ来しかな二十三年
さまざまに構想練れどつづまりは資本少なき事に起因す
父吾の夢小さかりしと云いし子は半年近く便りよこさぬ

椎　野　トノエ　　モ　ジ

遥かなれど時に鮮明に浮び来る珈琲園に鍬引きし様
潤いのなき日日と言え珈琲の木蔭に子規の歌書繙きし
兄と向い弁当広げし珈琲の木藤はいつも涼しかりにき
弁当の温みを背なに先を行く兄の吐く息いたく白かり
雪の如き珈琲の花の大うねり瞼に佇ちぬ牧場の丘に

柴　倉　知　余　　サンベルナルド

失言の痛み忘れんと来し海の白沙しめりて坐すすべもなし
一刷けの雲を仰ぎつつ思いおり姑に仕える娘の手紙にぎりて
病いえし夫と旅行く車窓より胸はずませて仰ぐ星空
此の辺り綿作りせしとう夫の言に吾子は車の速力おとす
苦労せし昔を思う道の辺に地を這いて咲く赤き花あり

椎　名　千代子　　サンパウロ

老二人茫々と暮す時折に歓声上げて入り来る孫等
健脚をほこりし夫も老深み痛みに耐える日日となりたり
憂う事胸にみつる日足を病む夫の苛立つ声かなしめり
恋愛に結ばれし仲も年古りて会話もなしと嫁の歎かう

地上より人一人消えさみしみて見ている星の永遠のかがやき

滴　草　ひろし　　サンパウロ

帰らざる子を諦めず待ちわびし父母の奥津城に伏して声なし
微風に音も床しく陸奥（みちのく）の郷を顕たせて揺れる風鈴
健かな余生を希い夫婦連れ急かず歩めり霧の街路を
冷えびえと篭れる部屋に一枝を活けて明るし萌える葉桜
痛ましき傷痕さえも一彩に染めて静かに茜雲映ゆ

下　津　て　る　　モ　ジ

疲れたるまなこに眩し市終えて帰る道辺のイッペーの花は
ブロッコリ束ねておれば庭の辺の背高き草を渡る風音
よろこびを頒つ夫あり新しき「椰子樹」に一とき面寄せ合いで
霜枯れと旱に枯れし畑中に背高きえんどうの縁日にしむ
思い出は燠となりゆく父母の位置を顕たせて燃ゆる飯台

清　水　さかえ　　サント・アンドレ

点滴の銀のしずくの落つる音かそけき父の命を支う
寂光の国を恋います父かとも聞きつつ淋し称名の声
浄願院釈宗哲仏骨箱に小さくしづもり香華うけます

われを呼ぶ声温かく耳朶にあり父の遺影に対いてあれば
山茶花の雨に散りしく庭に佇つ父なき家に今日も来たりて

志伊良　二　世　　サンパウロ

農業に見切をつけて来て見れば都会はなおもきびしさのあり
母の手に引かれ歩みし道遠く吾が人生も長き思いす
岩山のカスカチンニャの滝音はしずかに朝の心にひびく
朝霧のほれて明るし野の道に烏龍下げし少年に遇う
いづこより来たる守宮か恐れつつ朝の厨に眼光らす
ポルトゲース会話にひと日おくりつつ夜は日本の言葉を探す

比　良　恵　川　　イタケーラ

尾根を行くバスに見放くるイタペチの山脈遠く雨に煙ろう
立ち並ぶ房に咲き出でし桐の花つぶらに揃い陽にやわらかし
ためらいで買いそびれたる朝市の安き西瓜に未練残れり
一人の男子の息吹き遺歌集の調べ冴えたる「ひぐらしの声」
持て余す包装用紙の一握り汚れし舗道に吾が捨てんとす

平　田　政　子　　モ　ジ

ふりかかる木の花白し身に沁みて亡夫と労せし墾地に佇てば

やわらかき洩れ陽に息ずく竹群の落葉は深し朝の鎮もり
空手など溢るる意気持つ末娘がかりそめに病み我を呼ぶ声
告げざれば知る由もなきふるさと人移民妻なるわれの生きざま
健やかに老母在します海離る我の生家の顕たぬ日とてなし

弘　中　千賀子　　サンパウロ

薮浅くなりたるかたえ新墓にかこまれで寂（さび）たる妹の墓
慰霊祭の経文重く流れおり細枝にアヌー黒くゆれおり
表土流失しるき野中の道達し幼き吾らの歩みしところ
波状形の地上遍き陽のありて幼き愁い育ちたる土地
幼き日の想い出いくつ共にして歩む砂質土熱き陽を吸う

平　木　明　子　　ベレン

師のみ前に憤しむ如くひそみたり添削御文酒井先生逝きましぬ
みずからに問い糺さむと思う時ま昼静けく風わたり来し
有明のアペウの丘を越えゆくはアマゾン河口への木材輸送車
霧雨の降り出でし夕べ白梅草しめりふふみてかそかに揺るる
朝々を昭和万葉集を読むならい雨期に入る今は殊に親しも

森　谷　信　夫（風男）　　ロンドリーナ

母の忌にはるばると来し弟と火酒酌めば酔う愚痴言うまでに
父も母も乏しき語彙に耐えながら谷田の鳥をホーホーと逐う
その思惟と関連もなき山径のすがしさなどを顕たせて眠る
拘わりを持ちで従ききし野の径に蓬髪音を立てて吹かるる
玻璃に見る思慕鮮やかな象にて五線紙にうつこのメモリアル

森　重　扶　美　　バストス

壮年の君が事故死を悼む眼にくらぐら燃ゆるポインセチアは
遺歌集の中なる君が嘆息を共になしつつ読み進みゆく
息白く吐きつつ街路清掃の少年ら明るき声に呼び合う
「気をつけて」やさしきみ声が今もなお耳底にあり十（と）月を経
ても（美智子妃）
日本を去る日機窓に見し富士を何のはづみかしきりに想う

森　久　子　　カンピーナス

イペの黄満開となりて遠来の婿を迎える心となりぬ
竜眼の白き果肉の舌ざわり淡き乙女の想出も含めて
黙々と七夕飾りの花造る有限性の生命（いのち）想いつつ
突風にバラの花弁の飛び散れば束の間ひらめく血汐の惨状
子や孫の行末見るもいつまでか茜さす空に想い馳せゆく

森　谷　春　男　　ロンドリーナ

釣竿を作る焚火の松落葉はぜて小寒き日暮れとなりぬ
今日も来て釣場に流すなけなしの撒き餌沈めてささくるる湖
風のむた光ると見つつみづうみの冬の匂いを嗅ぎいたりけり
明日は消す虚構のうたを詠みながら風砂に頬を打たせていたり
荒れ荒れしひと日の風の吹き落ちて灯ればやさしみづうみの襞

森　元　三　山　　ＳＪドス・カンボス

仕事衣に替えれば心定まりて妻と鍬採る川べりの畑
一万のシンビジュームに農魂を注ぎで山の高きに住めり
混血の孫がまつわる朝庭に火焔樹の花落ちて音立つ
雲間洩る光り移ろう庭土に揚羽の二つ影落し舞う
砲身の錆びしに子らは跨がりて凧上げておりアマゾンの空

簀　戸　勝　子　　リ　オ

おりおりに風が触れゆく窓の音ノックする如し眠れざる夜
眠れざることも老いゆく過程かと風に鳴る窓の音に覚めいる
眠れざる夜をかえり来る俤のなべては既に世にあらぬ人
眠れねば又ひろげ読む遺歌集に顕ちきてわれの不遜なる言葉
アメンドア並木今日より春という光の下に青葉整う

杉本鶴代　　福博

夫と子等候補者あげて交々に意見出しおり選挙日の朝
マスク付け白衣を着れば我が知らぬ子の世界あり面輪きびしき
夕飯時又も降りきし雨音に畑気ずかいて夫の立ち行く
凧上ぐる子等の声音も明るみて風温み来る早春の町
雨のため遅れ遅れし収穫も終りて夫と仰ぐ夏空

末岡芳三　　グワイラ

通りすぐるかぼそき足音夜の闇にききて見えざる哀しみにあう
余情なお残れる部屋にすわりいてしばらく闇に汽笛ききおり
月明の牧場に汽車の音きこゆ月の世界に旅だつ如く
涼をとる夜のベランダに病妻が風の如くに寄り添いにけり
不況ゆえ花を立ち売りせむなどと子の冗談を身に沁みて聞く

住吉光雄　　サンパウロ

もはや何を急ぐにあらず衢ゆく冬陽薄らに射せる朝を
日毎きておうむの餌あさる小禽の近寄れば飛ぶ動作機敏なり
かに仙人掌花咲けり紅絹（もみ）に艶めきて多肉植物のかかるかがやき

蓬ぐさにが菜のたぐい野に萌えて冬去らむとす吾が身のめぐり
ハレー彗星濃藍（らん）の空を載りゆくか報道は来年の事件告げいる

すがはらとしゆき　　サンパウロ

たまわる命（いのち）をかけてたたかいにいでたたむか菊の花折る（一九四三年）
いくたびの十二月八日ぞたたかいにいでたちしより老の今日まで
ふときざすむなしき想いなにならむ恵まれてある日日（ひび）と思えど
幼な子の病は悲し耐えるごと瞳うるみてわれをみつめる
わが生きし時代はかくのごとくなり記録の映画「東京裁判」

後石原　百　合（遅着分）　　サンパウロ

日曜日今日一日の主婦の座か老いつつ今も働くわれに
真夜中にニテロイ海橋渡るときかがやきて居ぬキリストの像
若き日に我に縁談のありし人の歌のりていぬコロニア万葉集
たどたどしき言葉つかいて歌よめどそれなりに我の生きがいありて
あどけなさ残る女が町角に媚売りていぬ孫の年頃か

## 訳詩「石川啄木」

病のごと
思郷のこころ湧く日なり
目にあをぞらの煙かなしも

Fumaca no ceu azul,
O inverno sobre os olhos.
Uma doenca, a nostalgia.

やはらかに柳あをめる
北上の岸辺目に見ゆ
泣けとごとくに

Nos meus olhos, as margens do rio Kitakami,
Salgueiros maciamente esverdeados
Nascente de lagrimas.

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

Sotaque da minha terra
Vou a estacao ouvi-lo
Em meio ao povo.

（八巻・コリーナ訳「石川啄木」より）

## コロニア短歌界の現況

清谷益次

### 椰子樹について

一九五八年六月に刊行された「椰子樹」五〇号記念別冊号に私は「椰子樹と私」という小文を寄せているが、その中でこの雑誌の将来ということについて次のように書いている。

―略―これまでもそうだったが、経営と編集の上で椰子樹は今後一層困難となるであろう。しかもこの困難は、過去の戦争などという特殊な事情から来るものとは異なり、日本人コロニア自身の性質の移り変り（移住して来たものの老齢化と、それに伴う文芸などへの熱情の一般的な退潮や、日本語使用層の減少等種々原因を挙げ得よう）から来るものであって悲観的な見方をすれば、今から十年後に、椰子樹という短歌雑誌が果して存続しているかどうか判らないときえいえると思う。

―略―

今、これを読み返してみると、些か早とちり的悲観論の展開であって、その十年後の一九六八年九月には５０号記念、それからさらに九年後の一九七七年十月には一五〇号記念の別冊号をそれぞれ出しており、五〇号から数えて二七年後の一九八五年現在「椰子樹」は二〇〇号に達してその別冊を出すことになった訳である。予言などを職としている身であれば世の指弾を受けて当然であるべき者が、「椰子樹」とその二〇〇号別冊の編集の衝にある、というのは皮肉な話ではある。

しかし、この現象は喜ぶべきことであると同時に、コロニア短歌という世界の危機状況を如実に示している、と言えないこともないようだ。

（しかし、一九六八年の一〇〇号を機に「椰子樹」を解散しよう、という声は意外にもそれまでこの雑誌を支えて来た、と見られていた人々若干名から挙ったことも事実である。特に付言しておきたい）。

五〇号当時の会員数については残念ながら記録がないが、一〇〇号の時点で二七三名、一五〇号別冊号の会員分布表では二三一名、二〇〇号現在では二二八名となっているので、以前に予想されたような会員数の急速な減少はないにしても、その一路を辿っているのはおおうべくもない事実であろう。特にここ数年における、「椰子樹」を文字通り背負って来た概のある実力作歌者の相次ぐ死去は、存続への危機感を一層切実なものにしている。二五〇号記念別冊を出すことが果して可能であるか、といった想いが関

係者の間で陰に陽にうごめいているのは無理からぬことなのである。

だが、「椰子樹」がかくも永く命脈を保ち得た理由は何だったのだろうか。一つはブラジルの日系人が予想外に長寿であることにあるのではないかと思う。

日本語に拠る文芸において、或る程度の水準の表現をなし得るのには、日本語の高度の習得が不可欠であるが、ブラジル生まれの者たちにとってそれが至難なわざであることは私達がいやというほど体験しているところであり、文芸面で期待をつなぎ得る後続移住者も今では微々たるものとなり、またあったとしても、往時の青少年とは異なり、文芸などに心を寄せる者が皆無に近いとあっては、いやでもおうでも、決して大きくなることはない、益々老令化する作歌者たちの一団が、中の一人一人をこぼれ去らしめながら、時の流れに従うよりほかに手はないといえるのである。

いま試みに五〇、一〇〇、一五〇、二〇〇各普通号の作品、題詠、特別連歌（五〇、一〇〇号当時はこの欄なし）の投稿者数、その年の全伯短歌大会出席者数を見ると次のようになる。

作品　題詠　特別　大会出席者

選歌

五〇号＝８２　３５　　第８　回　　六〇
一〇〇号＝５３　２６　　第２０回　一〇〇
一五〇号＝４８　２７　７３　第２９回　一〇〇

（編者、一九七八年以後の大会参加者数は七八年～一〇一、七九年～一二〇、八〇年～一〇九、八一年～一一一、八二年～一一三、八三年～一一二、八四年～一三四）。

会員の漸減がありながらも、作品発表者数、大会出席者がそれにつれて減るのでなく、近年は却て増えたところでの安定がみられるのは、一体なんの現象なのだろうか。

今からほぼ三十年前の私たちにとっては、六十才、七十才台はまだ遥か彼方のことに属し、とてもそうけう年令まで生き得る確信などはなかった筈だし、旺盛な作歌力を持っている者もやがてはその多くがいなくなってしまうだろうという予想の方が強かったといえるだろう。「椰子樹」消滅論も無理からぬことであったのである。

しかし、幸いに我々は比較的長寿と健康に恵まれて短歌にかかずらうことが出来たのであり、現にその状況は続いているのである。一九八四年三月にスザノで開催された全伯地方短歌大会に際して撥稿者の平均年令が割り出されたが、それによると六五才七カ月という数字が出ている。若い作歌者が出ることに絶望的な状況にあるとしたら、この平均年令はそのまま一年毎に確実に大きくなっている訳である。

現状では、まだ数的に淋しさが感じられない程であるのは、前にちょっと触れたように「椰子樹」による作歌者の長寿というこ

とも一因ではないだろうか。

それに関連してもう一つ、会員の減少が緩慢になったのには、老令期に入った人々の新加入があるだろう。いやでも己が人生の終りをみつめなければならない年令に達して、何かによって自己を表現してみたい、自分の生を見つめるよすがを得たい、と言う気持が、それという強い自覚はなくても、どこかで働いて、短歌という小さい表現形式に拠ってみよう、ということになるのではないかと思われる。六十代、七十代という新加入再の年令は、そういうことを考えさせるのである。

第三の理由として考えられるのは、会員各々の経済的な一応の安定と余裕ではあるまいか。

文芸など（特に短歌）に熱中する者は世事にうとく従って経済的に恵まれない（要するに貧から逃れ植ない）という評価が定まっていたほどであり、それは「椰子樹」の経営維持にいつも重い翳りを投げかけていたのであった。

しかし今に到ってみれば、世事にはうといながらも各々が落ちつくべきところに落ちいて、一応は人並の生活を営み得るまでになっている。「椰子樹」にとっていざ鎌倉とあらば、多少の袖は振ってもいいではないか、というのも必ずしも少なくはないであろう（ここで思い出すのは「コロニア万葉集」刊行の際のことである。出版費に不足が生じるような場合は主要関係者で負担する覚悟で計画に踏み切ったのであった）。現今の激しいインフレ昂進の中で、「椰子樹」の経営が往時は考えられなかった経済的余裕

の中で行われているのは、会員の経済的な安定があるから、と考えられるのである。

五〇号記念号に「果して十年後に椰子樹が存続しているかどうか判らない」と書いた者が、ほぼそれから三十年の後に「椰子樹」の編集に携わり、二〇〇号記念別冊号刊行の衝にあるのは、喜ぶべきことであり、同時にコロニア短歌の危機的状況を示すものだ、とこの文の初めの方に書いたが、喜ぶべきこと、というのは勿論それほどの衰えをみせずコロニアの短歌が存続し得てい′ることであり、危機的状況を示すものだというのは、五〇号当時は「椰子樹」とは寧ろ一つの距離を置くような立場にあった者が、また現在においでも短歌に熱情を傾けているのでもない者が、それ以後、不本意ながらも長い期間を、編集に携わらざるを得ない実情にあることである。

前に掲げた表は、これまで数十年に亘ってコロニアの短歌を支えて来た実力作者を急速に喪って行く時代にありながらも、数の上ではなお一応の線を維持し得ている現状を示すものとしていいようである。現在の我々に残されているのは、この限られた〃手兵〃たちの作品の質的水準を如何に高めるか、の一途であろう。

## 紙・誌歌壇について

コロニアの日語新聞の短歌への扱いは或る一時期に較べて〃厚遇〃といっていいのではあるまいか。これは俳句も同様で、現在

の日系社会における短詩型文芸の存在意義が認められたことの証左としていいようである。新聞にとっての紙面のスペースが如何に大切であるかは、第三者には容易には理解できにくいほどの事柄であって、千美万様の読者層の記事内容への希望の中で、或る特殊な分野に一定のスペースを割くことは、余程の理解がなくては出来ないのである。我々はこのことを理解しておく必要があるし、そこまでの理解を得ることに努力した担当選者及び短歌関係者があることを指摘しておきたい。

以下、現時点における新聞、雑誌の歌壇について触れる。

## パウリスタ新聞

一番歴史の古いパウリスタ新聞歌壇は岩波菊治、行方正治郎の後をうけて一九七一年十月から選を担当した米沢幹夫がちょうど十年間続けたのを機に一九八一年の十月、後を川原比露思に依嘱して退いた。

川原の選担当は一九八五年一月まで続いたが、病いを得て退かざるを得なくなり、新聞社の相談を受けた「椰子樹」では、後任に水本すみ子を推した。

こうして日語新聞三紙の歌壇選者はすべて女性という〝奇現象〟を生じるに至ったのであるが、これは何か！ コロニア歌壇の運命〟を感じさせる現象と受けとれないこともない。

水本選者就任後、月間二回の発表を堅持して、可能な評も加え、

歌壇の活気回復が計られている。この歌壇に拠る主な作歌者の名を挙げると次の通り。

（註・三新聞の投稿者には重複するのがかなりある）。

瀬崎涛声、八巻耕土、八巻たけ子、河口古錨、坪内広代、加藤操、松尾紫郎、清水さかえ、小野政子、住吉光雄、久米川照明、岡本旬狂、久米峰子、滝夕起緒、関東忠吉、川上美枝、川上大作、本山美智子、比良恵川、仙洞田武定、笠石春江、高橋唖蛙子、高橋忠次、崎山洋哲、賀沢朋子、中村教二、高橋圭甫、万利奈、島田普、岩井久雄、寺田雪恵、浮羽杉夫、奥野精一、小石茂行、青野妙子、柴倉知余、今村光子、井唯澄子、中沢昌子、藤野介山、越雲耕村、山崎素子、山田朴、山木葉奈、山司（せんつかさ）、上川内清、丹井光子、富岡のぶ子、田中秋子、上村正治、酒井佳恵子、小坂正光、田中夏子、藤田美砂子、釘宮香代子、安藤孝義、山崎みね子、斉藤久子。

## 日伯毎日新聞

一九七七年から武本由夫、弘中千賀子共選の形をとっていたが、七九年九月から、新たに梅崎嘉明が選者になった。

梅崎の担当は以後一九八四年四月まで続き、同五月から改めて弘中千賀子が選者を依嘱された。日伯毎日は、その俳壇の選者に富重かずまを獲得し得て、従来どの新聞の俳壇にもみられなかったスペースの提供と積極的かつ適切な句評によってコロニア俳句

の新しい展開を計る姿勢を見せたが、歌壇に関してもこれに拮抗させて同じ方針を執ることを実行に移し弘中千賀子の再起用となった訳である。

月二回の発表は守られており、俳句同様のスペースが提供されていることは、これまで新聞歌壇に見られなかったところのものであり、コロニアの作歌者達の意を強くさせている。この歌壇によっている作者は次の通りである。

安藤孝義、遠藤すみえ、石狩早苗、香島一郎、上村正治、奥野精一、酒井祥造、杉けんいち、高柳和子、竹山三郎、内山清、柳沢一枝、石橋てる子、川田幸子、秋永三郎、大城秀貞、武田五百子、柴倉知余、寺岡晃児、小池美佐子、具志堅一二、瀬峰涛声、平野つね、くぼつばな、大平実、吉沢芳文志、高橋光太郎、黒木幸、三須袈裟子、高橋圭甫、浮羽杉夫、木原迪、志牟田一重、木村軟風、桑原たみ、伊藤弘志、吉原千苗、箕輪新七、草刈婦美、矢崎千勝、樋口誌友、岩田要、神崎文、児玉芳文、大庭哲夫、浮田景、比良恵川、小野政子、山田露人、坪内広代、梶田きよ、高橋忠次、崎山洋哲、岡本早視、杉本三千代、河口古錨、橋谷平三、山司。

## サンパウロ新開

小笠原富枝、陣内しのぶ共選によって一九七五年以来続いており、今年で十一年を迎える。息が長いのは、コンビの気息が珍らしく合っているからだろう。編集部との〝スペース獲得戦争〟も

積極的であり、かたがた、新しいコロエアの作歌者の育成と発振、「椰子樹」会員獲得にも積極性をみせてくれている。

昨年十月には、小笠原・陣内共選サンバウロ歌壇二百回を記念して、新聞社から「あゆみ」が刊行された。往時、第二次大戦前に「聖州新報」がその歌壇発表の作品を選集して「移り来て」を発行、これはコロニア短歌のアンソロジーの嚆矢となり、戦後は日伯毎日新聞が同じく同歌壇の作品を抽出して「木綿の花」を一九五三年一月に刊行しているが、「あゆみ」はそれに次ぐもので、両選者と新聞社の、コロニア短歌への理解と熟意を表わすものとして表価されるべきである。この歌壇に拠る作者群は次の通り。

秋山るり、稲垣八重子、荒永清作、井口一義、安達梅野、岩井きみの、朝里留吉、井本司都子、吉沢剣舟、稲津秀夫、福本文子、北村都詩夫、橋本正義、川口ハツ、長谷川美枝子、片桐睦子、本間篤蔵、光田寿男、原田弘、久米川照明、浜田八重、上村正治、畑中繁穂、金子三郎、林田尚年、加藤操、畑本文子、川上大作、比良恵川、木村正和、服部文子、小林美寿子、岩本秋月、栗木清一、石塚玉枝、榑松四郎、伊藤広志、小屋原登、伊藤広恵、河口古錨、神園一生、宮沢半次郎、岡与志夫、松田博、太平綾子、森谷春男、小野寺郁子、宮下春成、小笠原政雄、村上喜文、小笠原正好、村仲ちづ子、小原睦子、森垣正利、岡本早業、松下睦子、大塚清、宗像実、小野政子、三浦久和子、佐藤三つ農、三宅重市、椎名千代子、本山夢路、杉山唯祐、沼島志郎、笹野瑞枝、楢崎巧、下津てる、永野義男、下津武治、成田恵美、佐々木繁治、永村ハツネ、崎

山洋哲、中村教二、東海林寛、西野典子、柴尾勝、西章、坂田洋子、杉山清月、常本唯生、和田つぎ、千葉一美、渡辺つま子、高達友猪、米沢千代子、高尾秀実、横沢幸子、吉本一郎、竹本益雄、山本操、辰巳みゆき、吉田博実、滝秀一、山内準一、田島佐代子、山田朴、富板豊子、谷田部きよ、田所君子、山田市代、高橋忠次、山口春男、寺田雪恵、吉本隆寿、竹内巧、天孫猿人、千葉美夜、田口愛子、竹山三郎、谷川光子、内田笑子。

以上のほかに、「コロニア詩文学」誌に歌壇があり現（一九八五年）担当者は水本すみ子。ここでは任意発表者も数名あるが、文芸各ジャンルの綜合編集であるため、一つの歌壇として力が弱いのはけだしやむを得まい。また全伯老人クラブ連合会の機関誌「老壮の友」の歌壇は八巻培夫担当、「パラナ新聞」歌壇は大場時夫が担当者であるが、事情上、一部的なものであるのは致し方ない。

見る通りコロニア短歌の現況ということになれば、数的にはまだまだ〃今日明日〃という危機感はないにしても、文芸或いは文学としての短歌へ向かう勢い、ということになれば、甚だ心寒い状況にあるといっても間違いではあるまい。

繰り返すことになるが、我々は現在の自らの作品の、文芸・文学的水準の高揚を自覚的に志向する以外にはないのである。あだおろそかなことではあり得ないのである。

水準ということ

「椰子樹」二〇〇号記念別冊を刊行しようという相談会の集まりを持った時、私は井本惇に対して「コロニア歌壇の現況とその質的水準」というテーマについての執筆を依頼したのであった。

その時彼は、まんざらでもないような表情を浮かべながら、「書いておかねばならんことだねー」というような意味の言葉を口にしたのであった。彼の急逝のほんの数日前のことで、この席上で彼ははじめて近く手術することになっていると我々に洩らしたのであった。

コロニアの短歌の「水準」と言うとき、我々はその標準をどこにおいてこれを言うのであろうか。それはどうでも言って置かねばならないことであるのか、ということが一つある。

すぐ我々の思いに浮かんで来るのは「日本の現代短歌の水準との比較」ということだが、これすら、実を言うと雲をつかむような事柄になってしまう。日本の一流作家（歌人）と見做されているいわゆるプロ級の人々の作品なのか、それとも夥しい数に昇る（四～五百といわれる）結社雑誌（無数の同人誌はこの際言わない）に月々現われるその会員の作品或いは大小の新開雑誌に発表される読者の短歌辺りなのか。日の向けどころによって、どのような程度の水準でも設定することができるであろう。

この水準ということに関して、一つの興味ある例を挙げてみたい。それは一九五〇年代の半ば頃から「ブラジル新歌人集団」と銘うつ一グループによって月刊歌誌「はちどり」が刊行されるよ

うになり（一九五五年十二日創刊号）歌誌と言えば全ブラジル的な広がりを持つ唯一の〝中央集権〟的な「椰子樹」があるのみだった当時、それまでひとかたまりの観のあったコロニアの歌壇に思いがけない〝風波〟を起すのではないかという不安と共に、新鮮な何物かがここから生まれるのではないか、との期待を抱かせたのであったが、「はちどり」は日本歌壇の各有名結社にも送られて、それに所属している第一線級作家から批評の言葉がかなり頻繁に寄せられたのであった。その幾つかを紹介してみると、近藤芳美＝略ーどのような心を抱いて、この国と全くちがった風土の国に、移民とよばれる人たちが生きているのか、それを期待できるのは私には何と云っても其の人々のつくる短歌作品の中にだからであります。しかしこの興味は必ずしも私には満たされていないと云えます。

「蜂鳥」を拝見した場合、作品が、この国の歌壇の作品とそれほどかけ離れていない、という不満です。それはあるいは私の勝手な不満かとも思います。風土の違い、生活の違いはあっても、その中に生きている人間の心はそれほどかけ離れたものではない、という事は、私の貧しい経験からも知っています。日本人はどこへ行っても日本人の宿命的な生活と心を、かたつむりのからのように背負ってあるくものである事を知っています。

しかし、それであるからこそ、そうした宿命的なものと周囲の世界との深刻な相剋が、私たちの生きるどのような世界に於ても生じて行く筈だと思います。それをふかく切りさげ、見据えて行

くところから何か新しい短歌作品が生れて来そうです。そのような作品を心から期待しています。

三国玲子＝「蜂鳥」を拝見致し、誰方も大変巧いので感心致しました。これならば日本の現歌壇の水準に較べても決して見劣りは致しません。ー略ー素材の上にも国情や風物の違いがはっきり表れていて興味深く存じました。ー略ー

葛原妙子＝表現の上ではまだ多少の注文があるけれども、作品の水準は一部の内地の作品群をはるかに抜き、見事な開花を予想させるものがある。ー略ー（傍点清谷）。

森岡貞香＝ー略ー作品の基盤となっているものはまさに現代そのものである。

非常にリアルな乾いた表現をとっていて緊度も格調もある作品と思った。ー略ー現代の短歌には、短歌はこうでなくてはならないという定義などはありはしないと私は思う。そしで定義がないという意味は、あるよりもむずかしいことである。ー略ー。

「はちどり」の、私が所有しているのは飛び飛びの十冊ばかりであって、他にも日本の歌壇の第一線級作家の評言が寄せられたのであったかどうか審かにしないが、上掲の数氏の「はちどり」作品を見る目と言葉にいつわりがあったとは考えられない。ただ、三国、葛原両者が言う「日本現歌壇の水準」がどの辺りを指しでのことかは不明だが、コロニアの短歌作品の中で、素材の把え方と表現の質において一つの域に達しているものが、日本の結社雑誌に現われるかなり高水準の作品群に比して見劣りのしないもの

であるのは確かであって、それは当時の「はちどり」の作品だけに限るものではない。また近藤芳美の「この国（日本）の歌壇の作品とそれほどかけ離れていない」というのは、いわゆるブラジルの日本移民としての投影が作品の上に漉く現われていないことであるにしても、「はちどり」にある作品の水準が、日本の短歌に比べれば問題にならないほど低いものと見做しての言葉でないことは、コロニア作家への期待の気持ちが表出されていることからも察しられるのである。つまりコロニア歌人の表現力の水準を認めた上での注文だった訳である。

「はちどり」はやがて終刊を迎えたがこれに拠った作者達は何も「椰子樹」に叛旗を鮮明に翻したというのではなかったから（「はちどり」に拠りながらも「椰子樹」にも作品発表は続けていた）、ごく自然に流れはまた「椰子樹」一本になった。「はちどり」に拠ったものも拠らなかったものも、その後の研鑽は続けられて、現在のコロニア短歌の作品に至るのである。そして「はちどり」時代から三十年を過ぎたこんにち、一群の作者たちのものは当時のコロニア短歌に比べて素材が裡に持つものと表現の質において、さらに一歩深みに到達している、とみることが出来るのである。

また、「一九七三年五月発行の「椰子樹」で一二一号から「日本の実作者によるブラジル短歌の鑑賞・批評」という特集を、在日本の細江仙子の協力を得て五回に亘って組んだことがあった。当時各結社誌の中堅的作者の忌憚のない評言が得られた訳であったが、言葉には厳しいものがあったとしても、その厳しさは、対象

としたコロニア短歌を克明に分析し、その水準を一応評価した上での真向からの注文であった。

もちろん、日本の歌壇のプロ級、準プロ級（この呼び方は些か穏当さを欠くかも知れないが）として評価の定まっている歌人たちは、文芸に携わる上での環境において、コロニアの作者とは比較を絶して恵まれている。従って、さすがに人間の心、社会、自然の風物の機微を掬いとって、確かに「文学」と称するに足る高度の作品を多く持っているが、しかしそれらの作品の総てがそうであるとは限らない。そしてまた、コロニアの短歌作品に、日本の作品の高さに至っているのは皆無だと誰が言えるだろうか。

総合短歌誌、結社誌その他新聞雑誌の歌壇等に発表される作品には、プロ級、準プロ級のものを含めて、凡作以上ではないものがいやというほどある。これは日本の歌人同士、批評家が、殆ど年がら年中言っていることなのである。特に大小結社誌の”その他多勢〃の作品に到っては、目をおおわしめるものさえ決して少なくはない。初歩的な言葉や文法の誤まりさえもが、そのまま見逃されているのに幾らでも出会うのである。かって「はちどり」に寄せられた日本の有力歌人のコロニア短歌評が、日本の短歌のどの辺りの層を対象とし比較したのか知る術もないが、結社誌の”その他多勢〃層ではいことは明らかであろう。

断るまでもなく、我々コロニアの短歌作者は、日本の短歌を「ふるさと」としてブラジルで短歌を作り続けて来た。しかし作られたものは、我々移民が創ったブラジルの短歌なのである。ブラジ

ルに所属している作品なのである。

日本の作品の高度な水準にあるものに学び、刺戟され、自己の作品の中味を肥えさせて行くことはいい。必要でさえある。しかし、日本の作品が絶対に良く、そこでの評価が絶対に正しいという理由はどこにもない。我々が、日本の結社誌紙に作品を投じて勉強の場にするのは結構なことだが、おもねり、あまやかされてはならないと思う。

コロニアの短歌作者たちは、殆ど例外なく労学・文芸的には頗る恵まれないむしろ貧寒たる環境の中で、独りで、手探りでここまで歩いて来、この水準に達し得た。これは誇っていい大切なことだと考えるのである。互いの作歌力と評価の目にもっと自信と信頼を持っていい筈ではないのか。仮に、コロニアの作品が日本の歌壇においてある評価を得ることがあるとしたら、それはその作品が独り評価に耐える水準にあったということではない。コロニア短歌の水準を示すことなのである(事実過去には、「角川短歌賞」に応募して最終選考まで残り得た例は幾つもある)。

我々は、コロニア短歌自らの中に、より高い水準を求めて作歌の道を歩むべきであろう。『「椰子樹」とは行き方が違う』と称して日本の結社誌辺りのみに目を向けた作者をみることもなくはないし、「日本のそこでは優遇されるがブラジルでは・・」といったような言葉を聞くこともあるが、これらは文学・文芸とはかなり次元の異なることと考える。

## 刊行物について

椰子樹一五〇号記念別冊号（一九七七年一〇月）以後の短歌関係刊行物については別項で詳しく触れであり重複する部分もあるが、書名、ー著者、ー刊行年をここに纏めて置く。

◎一九七七年＝「山伐り日記」（歌・文集）～岩佐一歩（静雄）、歌集「軌跡」～梅崎嘉明、◎一九七九年＝「ロデイラ・明日また」（歌・文集）～水本すみ子、◎一九八〇年＝「南回帰線」第二～ロンドリーナ歌会合同歌集、「常燃の秋」（歌・文・詩）～越村定雄（遺族による）、「ジャバクワラ歌会作品集一～歌会同人、「南十字星の許に」～天川狂涛（遺族による）、「面影」（酒井雪江遺歌集）～酒井繁一（手書による）、「深泉集」第一～福博短歌会、◎一九八一年＝「こころの雫」（歌集）～千葉美夜、1「たかむら」（歌集）河村哉太郎、「ジャバクワラ歌会作品集」第二～歌会同人、「福博短歌会五〇回記念作品集」～歌会同人、「コロニア万葉集」同名刊行委員会、◎一九八二年＝「深泉集第二」～補博短歌会、◎一九八三年＝（轍の跡」（歌1文集）～小竹清子、「南回帰線」第三集「ロンドリーナ短歌会、◎一九八四年＝「この道」（短歌・俳句・文集）～内川愛季ー「あゆみ」（サンパウロ新聞歌壇小笠原富枝、陣内しのぶ担当一〇〇回記念読者作品集）～サンパウロ新聞社、「郷愁の花」（短歌・俳句・文集）～浦田光馬、「オスカル・フレイ街」へ歌集）～細江仙子、◎一九八五年＝「やまなみ」二〇号（カンポス歌会作品集、最終号）～歌会同人、「移民の跫音」（文集）～関

東忠吉、「ひぐらしの声」（歌集）～井本惇（遺族による）、「石川啄木」（ポ語訳詩）～八巻培夫、パウロ・コリーナ、「遠い日々のこと」（文・歌集）～清谷益次。

右の中で特筆に価するのは「コロニア万葉集」と「石川啄木」であろう。

前者はブラジル日本移民七〇年を期して刊行されたもので、戦前戦後を通じてコロニアの新聞、雑誌に発表されたものの中から六六三四首が収録されており、二年余を費して完成した。移民が何を感じ、考え、行動したかを、短歌作品によって跡づけようとしたものであり、単に移民社会の一文芸ジャンルというよりも、その社会、文化、歴史に深く繋がるものとして価値づけられている。

「石川啄木」は、短歌を初めて本格的なポ語訳としてブラジルの読書界に紹介した、という大きな意義を持つ刊行であった。ブラジルの新進詩人でかつ文学評論家であるパウロ・コリーナを共訳者に得たことにより、啄木短歌をブラジル語による詩にまで昇華せしめたものと評価され、ブラジルの新聞、雑誌、テレビ等において紹介、論評された。なお刊行には、固際交流基金の資金援助があった。

# 児童短歌について

穂島千代

私が学生に短歌の形式を教え始めて二十年になる。その動機は日本語の知識の範囲を広めさせることと、短歌の綴りが作文指導に叶う処を狙った。

当時アサイには「朝日短歌」誌があり、主宰の山室新太郎先生（故人）の後輩養成の熱意で子供短歌部があった。私の教え児も次々加入させて貰い常に名を連ね恵まれた揺監期であった。

学生に短詩型を学ばせ継続させたい望みは私が教職を引受けた三十余年前よりのものであった。どんな優秀な学生でも卒業後日本文字に触れなければ漢字は愚かひらがなさえ忘れてしまうことを嘆いていた。

一九七一年、山室先生はレジストロに移転され七二年五月で百号に達した「朝日短歌」は休刊に入り、笹波北陽氏を残して主だった人々も短歌中止の状態となった。

「朝日短歌」の休刊によって学生作品の発表場を失うことによって児童の折角の作意を殺ぐことを恐れ、私は「若竹」発刊を思い立った。一先輩は「想像外の苦渋と諭されたが私はこれ以外の道を知らなかった。同年八月に第一号を発行した。

この小冊子も私が暇々に執る鉄筆で毎月発行とはいかず四年間で十六号に達した。その頃より「若竹」だけでは物足りなく思っていた折柄、酒井繁一先生（故人）から椰子樹へのお誘いを受け

た。酒井先生より運営部の先生方へお取り計い頂いたものと思う。椰子樹一四三号の「?かなとこ?６２画像」に初めて五名の学生が登場し、引き続き拙い作品ながら掲載頂くこの栄誉を子供達が判ってくれる日が欲しい。

七七年より少年少女作品として全伯短歌大会へも投稿し特定選者先生方より選んで頂き賞品にも与り、また歌会の雰囲気を味わわせる為、折々二人三人ずつ同伴するが、その度に中央部の方々より好意あるご配慮を頂き深く感謝している。

「若竹」に移って以来六回学生歌会を行ったが、その都度、先輩の方々の選や歌評、またお便りなどは子供達には励みとなり私には心に大きな支柱となっている。

学生達も中学卒業後、上級校への入学や学びつつの就職の関係で作歌など考えておれない時期があるかも知れないが、日語勉強に空間を与えてはいけないと思う。中断すればその年間の日語の怠りは、身心の発育に伴っての思考力を文脈に表現できず結果は日語を疎むことになる。故に数年前より「日語を守る会」を創った。

これは卒業後の人で希望者の集りである。月一回会合し勉強の証左として短歌を作ることにしている。短歌は文面が短く、習う者に納得ゆくように教えることのできる便利さもあるからである。この人達も入学、就職などが一応決まり心の落ち着きを見せてくれるこの頃、私には隙間より入る曙光の思いがする。

短歌は難しいというが「幼時期より古典素読を」とさえいわれ

ている今、小さい時から教えなければ何時覚えるのであろうか。初めは教科書だけでは不足の知識の補いにと発足した短歌であったが、児童達が作品上に折々見せる日本民族の詩情を今は何とかして捨てさせたくないと思う。日本文学の粋であるこの短歌を玩味し作歌に備えて学び続けるなら、やがては父母となるであろうこの人達が、その日、ゆかしい日系人として豊かな才知をもって子弟の養育に臨めるであろう。　日本人は同化しやすい民族といわれる。

しかし日系の誇りと自覚があれば家庭内では日本語が守れる筈である。外地に於ても日語の必要が叫ばれている時、「椰子樹」会員の中にも日語教師は在ると思う。そうした方々と呼応すれば学生に短歌を習得させ促進に継続にまた励みをもたせる方法もあるのではないかと考える。

旧制少学卒の私が当国で教職に携わるとは夢にも思わないことだった。これは運命であり移民の私に課せられた使命と思う。日語を教える傍ら、三千年来培われた日本精神を軸として言葉を次代に伝承する人を造らねばと毎日励んでいる。

私事で気が引けるが、渡伯後貧しくて通学させられない弟妹に夜々豚油の灯で学ばせ、短歌、詩、作文などはパンの包み紙を買って記録した。今も数冊残っている。学校に一日も行けなかった妹等が生活に余裕のできた今、短歌を綴っているのを見ても教えておく責任はあると思う。大人相手でも落胆することはある。まして子供、全く未知数であるが私はこの職にある限り児童と共に短

歌を学ぶ。これを除いては教師の甲斐がないような気がする。後日振り返ってみて努力の不足を悔いることのないように…一喜一憂の日々を重ねることであろう。

## 二世にとって短歌とは何であったか

### 或る自覚の狭間で

望　月　喜恵子

短歌の世界からすっかり離れてしまった。ときどき淋しい思いをしているところへ一通の手紙が届いた。「二世にとって短歌は何であったか」と云うこの思いがけない質問に答えるため私は作歌を始めた時代に心の焦点をあてた。

春になると、龍胆の花咲く山に囲まれたカンポスの療養所が追想の中から甦ってきた。退学、入院、それに続いた精神的放浪ー。「療養」と名付けられた一年余りの空自期間をどのように埋めていったら良いのか……。戸惑いは続いた。

周囲に広がる松林は昼間でも濃霧に覆われていることが多く日が暮れると毎日近くのクッピンに来て鳴く梟の声が耳に沁みた。

そんなある日、療院の窓辺に立って友の詠んだ歌に耳を傾けている時だった。心の一角で何かがパッと開いたような感じがした。「私も作ってみたいー。」この衝動は底深く眠っていた創造性の目

覚めだった。
開かれた扉から出て眺めた現象と造形物のすべてが強い個性を秘めてきらめいていた。常に語りかけてくる大自然は私の内部で息づき、時には孤独となり、時には喜びた満たされることがあった。
雲海の移りゆくなり雲間より一筋の光ほのかに射してまた、生命力の発揮と云ったようなものを誰にも顧られることのない時間に学んだ。
人気なき日暮れの庭に精限り宵待草は咲き競いおり周囲が輝いている時でもサッと曇る瞬間がある。それは人間性の矛盾と云った形で現われることもあった。

血の滲むビッフェ食べつつ屠殺場に向う子牛を憐れむも吾

時には造られた者の能力の限界を意外な所で示されることがあった。

永遠に生魂通うこと無しと巧みなる造花に触れつつ思う

また社会からあまり顧られることのない未開民族との接触は生がい忘れることのできない感動を残した。

弓構えしイピシウナ族の酋長の腕は冷たし触れてみたれば

汚染ただようコンクリートの谷間から遠く来て、むせるほど樹脂の香る緑にふれた時、麻痺状態にあった何かが覚めて空中を翔け巡った。

密林に入りて来たればわが裡に求めし住家のごときがたちくる

どこにいても人間同士の果てしない争いは暗い影を投げかけてくる。逃げ場のない時に思いがけない所から極限の力を見せて芽吹く物に溢れるばかりの愛着と深い安ちぎを覚える。

イ・イ戦のはげしき日々をアパートの花壇に生えしトマト愛しむ

三十一文字で詠みあげる作品の一つ一つが自己確立への経過を語り、精神的な生長に伴う心境の推移の記録となっていった。

しかし歌集を読み、歌を作ると云うことは万葉時代から培われてきた日本人の心を無意識に受け継ぐことでもあった。

年一回の全伯短歌大会にのぞみ、歌人との交流が盛んになりだし、「人間性の探究」と云ったような言葉について考えるようになった時点でハッと息詰るものを感じた。それは眼前に浮かんだ日本人の映像に対する、幼い頃から吸収してきたブラジル文化の反撥であった。二千年に及ぶ伝統の流れの中に溺れ始めたブラジ

ル的な要素がしきりに騒ぎだした。「私はブラジル人でもない、日本人でもない。」と云った自己分裂、国籍の無い人間としての自覚であった。

歌の心を掘り下げていこうとする試みを耐えず阻止するものは、日本人に成り切ってしまうのではないかと云う恐れであった。また一方では完全なブラジル人に成りすましたくない抵抗意識に揺さぶられ続けた。日伯両社会の中間に立っていなければ落着かない不安定な状態……。どちらかに傾いた場合、バランスを失ってしまいそうな気がした。そのような文化的ショックの中にあって歌が詠めなくなり、自然に短歌の世界から遠ざかることになってしまった。

十数年後の今日でも、私はこの二つの相反する社会の間に立ち続けている。しかし現在は日本人の本質と、ブラジル人的な要素が同時に作用して無理なくバランスが保ち得られるようになり、異質の感受性が却って豊かな経験をもたらしてくれるのではないかと云う観念を抱くようになってきた。

一つのグループを形成する種族の特質は、異なった二つの文化の融合の上にあって変化され、新しい人間と社会が作りだされていく。日本語が国際語となりつつある中で、他系伯人、日系人、日系混血人の入り湿ったクラスを前に、私は短歌を通して学んだ日本語および日本人の心をどこまでも伝えていきたい。

また、短歌は作品の優劣にかかわらず、常に深い愛情と誠意を込めて作者の意図を汲み取るようにしなければ決して正しい鑑賞

はできないことも教えてくれた。複雑化していく社会機構の中で、外国人、他系人、日系人に接する機会の多い今日、この態度に終始して国境のない友情を育てていきたい。そして人と人との間、文化と文化との間に立つ壁を崩して新しい社会を築いていく人達の中の一人となりたい。「では作歌の方は」と問われるかも知れない。日毎に喧噪を極め、耐え間なく波立つ都会生活に疲れてくると、ふっと脳裡に広がる言葉がある。

「人の心の奥深い所に深山の湖水のように澄んだ一面がある」「この湖水」を求めながら歩いている中に、いつかまた短歌のの世界にいきつく私ではないかと思う。

## 二世にとって短歌とは何であったか

二世ゆえにこそ　　志伊良　二世

農村の片田舎に生まれ、セルタネーザの唄をききながら育った私はむしろブラジル人であるべきだが、カーラ・ノン・アジユダかやはり日本人という意識が強く日本の雑誌をあさり読んだものです。

此の国に生れ育ちでジャポネースと呼ぼるる事も憎く思わず短歌は二世にとって縁遠いものであったろうが、この道に入ったのも自分ながら不思議なくらい。終戦後の社会に二世が短歌を

作って何になるかと言われた事もあった。この事について今は亡き井本氏に問い合わせた事もあった。長い文面に激励のお言葉のあった事も忘られない。

二世という境遇にあったせいか歌友の先輩諸氏から絶えず励ましのお便りもあった事も有難い一つです。

現在のブラジル歌人が、ブラジルの最後の歌人だろうと或る日本の歌誌にあったけど、それを思うにつけ侘しい思いがする。椰子樹二百号記念号発行にあたり特に今後なお二世三世育成に努力されん事を願う。

## 短歌を件り始めた動機

この問いについては椰子樹何号かに書いたと思うが、やはり少年時代より詩や短歌などをあさり読んだものです。これがきっかけとなり短歌を作り始めた。といっても歌を作る種がなければそう簡単に作れるものではないのです。幼少の頃より自然の中に生きて来たことが歌を作る動機となっかのだろうとも思う。

自然は美しい。季節の移り変り、色とりどりの香に自ら心を引かれる。野辺の草花、夕空の色、何と言っても印象的。また小鳥の声、風の音、せせらぎの音、かくて自然は生きている。それとなくリズムを流している。実に短歌的である。「蝉の声いつしか止めば夕ずきてせせらぎの音澄みてきこゆるL。やはり自然なくて歌はあり得なかったと思う。

## 短歌は何をもたらしたか

都会生活も四年を越えようとしている。それにしても私は土を離れる事は出来ない。所詮は百姓育ちのせがれに過ぎない。学校もろくに行けず、百姓一点ばりの身柄である。或いは百姓が私にもっとも適した職業であったかも知れない。自然という大きなふんいきの中に生き、いささか私なりの歌を詠めたのが大きな収穫の一つだったと思う。たとえ幼稚な歌であろうと自分の生活を詠んで行けたらこれで本望です。かくて短歌とはきっても切れない深いつながりを持つようになった。生ある限り短歌と共に歩み続けてゆくであろう。

## 表現に何をもとめたか

ちょっと私の頭では割切れない問ですが、開沼貴代さんのお手紙を思い出す。

「貴方のお歌は素直な読みぶりであり人々の使い古した流行語など借り着せず、自分の言葉で表現しているのに好感が持たれます。言葉ばかり美しいのを借りて使っても、その作者の視線そのものが深いところをみつめるのでない限り借り着はしょせん借り着に過ぎません」と。

このお言葉を借りて甘えようとかうぬぼれようとか云う事では

ないが、私を励ましてくれた唯一の言葉であった。
もともと私の歌は殆ど生活詠で、自分の言葉そのまま使って表現して来たようなものです。手許に収めてある二千首近く歌の殆どが生活詠です。自分よがりの歌です。良く考えてみると井戸のかわずと言ったようなもの、世間知らずの私だったかも知れない。自分の歌にもっと深みのある言葉があって欲しいものです。
謙虚な作歌態度で勉強するべきだとつくづく感じられるこの頃である。

〃日本の心〃求めて

阿部玲子

むづかしくてなかなか出来ない歌に苦しみつつ、私はふと不思議な想いにとらわれることがある。二世の私が日本人の心であると言うむづかしい短歌を、どうして、また何時の頃から作歌するようになったのかしらと、しみじみ考えてしまう。それは確かまだ少女の頃のことではなかったかしら。
アリアンサの奥地からサンパウロ市へ来て、私は伯語学校へ通う傍ら、父が教鞭をとっていた暁星学園で日本語を学んだ。そして一九四一年に戦前の最後の卒業生となった。六年の間に日本の歴史や地理、修身なども習った。日常の会話は父母や友人とも、すべて日本語を使っていた。その頃にいくらかでも、日本人の心を培うことが出来たのではないかと思う。

学校には作文の時間もあり、毎週良く出来た作文は壁に張り出され、先生が読み上げたりして下さった。自分の作文が読み上げられたりすると、すっかり嬉しくなってしまい、登校の道すがら今度はどんな作文を書こうかしら、などと考えながら歩くのだった。

上級になって来ると今度は詩や短歌も作るように言われた。私は教科書に出て来る和歌などにとても興味を持っていたので、五・七・五と数えながら幾度か作歌したことがあった。

母が亡くなり、戦争が始まり、日語教師だった父は転職しなければならなくなった。少女の私も勉強どころではなく、食料品店を開いたブラジル語のあまり出来ない父を手伝って一生けんめいに働いた。その後義母を迎え、祖母もいたのではあるが、強そうに見えてもさびしい少女だった私は時々短歌を作ったりなどしていた。一九八号にも書いたけれど、戦後スザノの歌会へ行き、はじめて投稿したのがきっかけとなり、作歌を続け「椰子樹」へ投稿する動機となった。

人生の経験も浅く、感じやすい心を持った私の若き日は、些細なことにも苦悩することが多かった。そんな時に歌誌を読むと、心が洗われたようになり慰められるのだった。自分の力ではどうすることも出来ない苦しみを、つたない短歌に託し心の拠り所としたのであった。

結婚して二十数年、短歌から離れて暮した頃のその寂寞さは耐えられないものだった。

また作歌をはじめ、昔の歌友の皆さんともおつき会いをするようになった今は、自分の裡にあるものがだんだんと甦りはじめたような心持である。「玲ちゃん、新しいものを作り出すと言うことはすばらしいことなのだよ」と武本先生は言われたが、それは本当だと思う。作歌によって裡にあるものを発掘している内に、しだいに心が深められて行くのだと思う。字句を書く時でも辞書を調べ、時々新しいことを発見したりして、とても良い勉強になる。

良い歌がすらすらと出来るようになる迄にはまだまだ程遠いものがあるが、短歌は私に生きるための自信と言うものを持たせてくれたと思う。そして心を開いて話すことの出来る友達を得たことも、短歌を作ることに合わせたもう一つのしあわせだと思う。

中江先生がお亡くなりになる前にお訪ねした時、「短歌が出来なくて困ります」と言ったち、「短歌はむずかしいよ」としんみりと言われたことを想い出す。

二世である私が日本の情緒など果して理解出来るようになるかしら、ほんとうに良い歌が出来るようになるかしら、と時々想い迷うこともある。「良い本を読み、心を豊かにするように」と友達であり師である陣内先生がはげましで下さった。

結婚して三十年近くなり、理解のある主人のおかげで私は今書を習ったり、コーラスに加入したりして、若き日に成し得なかったことをいくらかでも果たすことが出来たらと思い、はげんでいる。

二世である私は、ブラジルのことも勿論知らなければならない

義務があると思い、先頃民俗学の講習を受けた(ポ語)。九カ月間であったけれど、良い勉強になった。「椰子樹」も二百号を迎えて悦ばしいことであるが、師と仰いだ方々も次々とお亡くなりになり淋しい限りである。徳尾先生はじめ他の師の方々が何時までも益々御健在でいらっしゃるように心から祈って止まない。

これからも一そう努力して、若くして逝った亡母の趣味であった短歌の道を深かめ良い歌を作り、その霊を慰めて上げたいと思う。

## 「二世と短歌」とその周辺

秋　永　三　郎

今回椰子樹二〇〇号の記念特集号が企画されるに当り、編集部が私に指定された前記の題名を読みながら忽ち一つの困惑を感じた。この国に生れ育った数多い日系人の中の一人であったのに過ぎず、「二世と短歌」の関連に就いて広汎な視点から何かを書くための調査資料などは実在せず可能性のない事と思われたのである。唯単に私と云う非才な一個人が、たまたま短歌に関連を持った実に偶然の成り行きそのものが、局外者から見れば幾らかの興味を呼ぶことに焦点があるものと理解して書けば・限りなく書き度いようで、また書いても詮無い私事と云う想いに迷った挙句の果て、責だけを果たそうとしてペンを取る事にした。

俳句、和歌と称ぶ古い伝統を持つ日本独自のこの韻文学が日本

語に依ってのみ作られ、他の国語での製作は殆ど不可能と極言出来る幻妙な詩型である事は、広く知られているところであって、外国生れの子弟にとって今から六十年の昔の日のコロノ生活または原始林開拓の前線で、正しい日本語の骨格や普通用語ではない文語とそれに伴う文法の学習となって来ると、今考えて見ても気が遠くなる程至難な事柄である事は自明である上に、私が背負っていた人生の道程の中にはそれ以外の条件が悪く重なり合っていたために一口では説明出来難い状態だったと思えるので先ず家庭の状況に触れる事にする。

私は今更両親の悪口を書く意図は持たないのだが事実は事実として書く外はない。　父は明治の生れ、その当事の寺小屋で読み書きを習った程度の学歴であり、母は恥ずかしいけれど生れたままの文盲者であり善人であった事も悲しい条件の一つであった。

父の故郷は九州福岡の寒村、ひと握りの川畑と家はあったが村いち番の貧農の家で、一家族がやっと暮らせる地面しかなく、長男であった父は家を末弟に任かせて甘蔗園の出稼ぎ人夫として布哇に六年ずつ二回に亘って渡航しており、そこで産れた兄は米国の国籍を持っていた。合計十二年間に働き溜めた金で日本に帰り、先組から重なり積って居た負債の全額を整理した後ブラジルに再渡航をして来たと云う稀代な経験と実績を無視する事は出来ないとしても、人間としての教養と云う面から見れば殆ど無にちかく、若くから広く他国を歩き廻った一人の荒くれ者と云う形容の方が適していた。強情一徹の癇癪持ち、呑めば何時爆発するとも知れ

ぬ酒乱の癖、而もその酒を呑まぬ日はなかった父と云えばもう何あ書く必要はないだろう。

貧窮であったが大きいピンガのカルトーラが家の片隅に据えてあった。後年そのピンガが父の痔疾に悪いので布哇で覚えて来た地酒の一種を作って泣き泣き呑ませて居た悲しい母があった。

読む書籍雑誌一冊もない山小屋の家で昼間は過激な労働、夜の食事が終れば泥のような眠りがあるだけの毎日が開拓地の総ての人々に与えられた日課ではあったが、齢幼ない子弟達の日課にも変りなくそこで育つべき宿命を負っていたのである。

話の筋道が多少前後したと思うが、私が生まれたアララクワラ線グワタパラ耕地の近接駅のサンタ・オリンピア珈琲農園を離れ、現在のノロエステ線ペンナ駅にブラジルで最初の日系の平野植民地が創設され、ここに土地を購入した家族に連れられ移って来たのは一九二〇年、六才の時であった。この植民地の開発に先発した隊員や入植した家族が多大の犠健者を出してから数年後の移住であったが、原始林を征服して道路も馬車牛車道ながら開通もていて大した難渋は見られず、入植した翌年には掘立小屋であっても粗末な日語学校が始まり、代用教鼻による授業があって、読み書きと算術だけの二科目の小学校六年の学習を受けたのが、私の日本語に接触した微かな想い出となっている。

この程度の学習で幼年クラブが読めたかどうか、その当時手元になかったので試す術もなく年令だけは十三才になっていたのでそのまま家族労働者の一人に編入されて綿作地に鍬を引く身と

なった次第である。

前記のような家庭事情の中で私と兄は何とかして勉強して一人前になる事を願っている時に、突然起きた肉親の姉の情死事件があり、この事故は一生私が担ぐ事に成った枷であり墓標でもあった。

その頃の植民地の状況は、私を取扱う通り言葉として「君はブラジル生れか、第二世だね」と云う一種の侮蔑詞があり、「あの大酒呑みの子しかと云うひとつ言葉の他に「あの亡くなった人の弟」かと云われる被害妄想から逃れる術はなく、一身に刻んだ劣等感がいびつな性格を作り上げたのだと思われる。

晦冥の月日が巡るに任せていたとき、十五才一九二九年と記憶しているが、この不毛な植民地に一つの朗報が届いた。最近渡伯した高等師範を出た原篤（はらあつし）と称ぶ正式教師の赴任が決定し、この人は日本におれば校長の資格者で生活も保証されていた身で、海外に渡航している日本移民の子弟の教育を使命とする情熱家であったので植民地の父兄達に歓呼の声で迎えられた。今までの代用教員の日語学校とは違って眼の覚めるような児童教育が開始されて間もなく、今度は青年を対象とする無料夜間講座が週三回開始されたので集合した三十数名の青年にまじり兄と二人で参加した。

その当時私は最年少ではあったが、尋常科は形の上では終えていたので旧制高等科一学年から始まり、習おうとする者と教えようとする情熱が一塊りの炎のように燃え上り、持っていた忍苦も

懊悩もない世界を作り上げた。一夜の講義から一言半句も聞き逃すまじとして貪るが如き学習が続けられ、二学年が終って中学科に進み、国語の他に歴史地理を加えて教科書もここでは手に入らないので直接日本から取り寄せる手段を取り順調に一、二学年が終り後少しで中学科終了を眼の前にした頃、学者肌で気位が高く世渡りの術に慣れていなかった原先生に対してくすぼっていた一部植民者の有力者間の不協和音が高くなり、四年続いた夜学に終止符が打たれすべては終った。

恩師をリンス学園に送り夜学生は四散してしまったが、求めていた日本語の会話読み書きの基本を一応身につけた私達はそれほどの失望もせず、各自の道に就いたのであった。この恩師から日本の短詩型で十七音の川柳、俳句の手ほどきを受けて何回か句会を開いた経験はあっても、和歌短歌の三十二子だけはまだ君等第二世諸君には難しく永い勉強が必要との理由で取り止めとなり、短歌との縁はここですれ違いになり通りこしてしまったのだった。

何分何の予備知識のない者だったから損をしたとも思わなかったが、四年間頭上から照してくれた恩師を失った私は、書物を読めば理解出来る語学力は身につけでも書籍雑誌一冊もない家では方法がなく、何とか借りて読む方法をと次々と入植して来る面識もない新来移民の家を歴訪しては手に入る古雑誌、単行本を種類と系統を問わず書籍探索の旅を続けて恥も外聞もなかった。十八才から二十幾才の日の事である。

こうして雑多な本の中から自分の中に吸収出来る物を漁って行

く日、ある人の手引きで八キロ離れたコロニアの一軒に最近渡伯して来た若者夫婦の家を探し当て（森下と称ぶ姓であったと思う）、石油箱二箇にいっぱいに詰められた書籍を見つけた。

そこには新理想主義で有名な白樺派文学の武者小路実篤、有島武郎等の文学書級一群や哲学の倉田百造ものあり、純文学が何物であるかを教えられた貴重な読み物であった。今まで読んだ雑多なもののように一晩に一冊読める代物ではなく、二回三回と読み直しても呑み込めない文学書で、腰をすえて一年近くこの家を往復しているうちに、人間の思念を突き詰めて系統を自ら発見する過程が教えられる事、これらの書物の中に物事を考える習性と更に客観性を育てる方法が自分に最も必要だったということを気づかせる要件が並んでいたとも云えるので、この一年の中に自己意識の変化を覚えさせられたのだった。

ともあれ読んでいるうちに大衆文学と純文学の差とがやっと判断出来るようになった二十二才の私の心にも遅い青春期は芽ぎしていたのだろうし、その頃手に入った一冊の藤村詩集の中の落梅集の巻頭にある

小諸なる古城のほとり　雲白く遊子悲しむ
緑なす繁縷（はこべ）は萠えず　若草も籍くによしなし
しろがねの衾（ふすま）の岡辺　日に溶けて淡雪流る

に初まる一連の新体詩に限りない憧憬を感じ良く暗唱したもので、

それが七五調であった事は後で判明したのだったが、人間ひとりの思念が詩の分野に踏み分けてゆく過程を自分も持ちたいと念じながらも、高度な文語体のこんな詩型を模倣して見ようとは思わなかった。

ところがその次に手に入ったのが石川啄木歌集「一握の砂」であった。

はたらけど　はたらけど猶わが生活楽にならざり　ぢっと手を見る

砂山の砂に腹這ひ　初恋の　いたみを遠くおもひ出づる日

頬をつたふ　なみだのごはず　一握の砂を示しつ人を忘れず

こころよく　我にはたらく仕事あれそれを仕遂げて死なむと思ふ

石をもて追はるるごとく　ふるさとを出でしかなしみ　消ゆる時なし

このような作品群に目を通した時に今まで自分が持っていた和歌または短歌の概念とは全く駆け離れた発想と形体がすべて我々が使っている日常語で綴られていて、正月などの祭日に新来移民の家で習った百人一首の歌ガルタ遊びに出て来る、絢爛たる古近詞の大和詞、枕詞、古代の歌詞偏に飾られて現代の庶民には関連のない詩型であったものが改革され、文語調ではあっても通常語で生々と詠まれている実例を目の前にして一短歌がこう云う形体

で発足したのであれば幼稚な日本語であっても、努力次第では作れる可能性を示された気がした。

この日から一見何でもなさそうな三十一子の七五調の中に身を投じた。結果から見れば能力のない者がこの道に入った行動が如何に無謀だったかは思い知ったけれど、後には戻ることはできず、何処まで習っても限りのない日本語の広場の放浪者の群に連れ込まれたのである。

どんな貧しい歌を一首作るにしても習い覚えた幾許の日本語をただひとつの武器として葡語はグルッポの門も潜らぬ二世の畸形児として。

遠き日に父と争い家を出でて兄をも棄てし無法者われ

二十六才の時、六十アルケールもの土地のある家から裸一貫で飛び出して以来、父母、兄から一文の経済的援助も受けず、社会に身を投じて腕に職のない農民の子が生きの狭間に噛みしめた人生と云うものの味は、もう滅多にくたばる事のない異様な畸形児を一人育て上げたのであろうか。

ブラジルに生れし吾と釈迦牟尼は印度に生（あ）れし唯それだけの差に

多年自分の中に積み重ねていた自虐自嘲を風化させたもの。

ひとり居て夜のソファーに音も無し此処も地表のどこかの窪（くぼ）み

標高の高い快いそよ風に吹かれた事のない人生を持つ者の潜在意識。

筋書きも童話もどきに家ひとつ建てしばかりに終章となる

私は愚直ではあっても世に云う道楽者ではなく、何時も一途に日本語その他の事を与えられた場所で学び習いひたすら人間ひとりとして成長したい念願だけで何時も必死だった。大いに財を積んで裕福な生活設計を夢見る日がなかった故、三十七年間組合と云う企業体の勤め人として働いたが、定年退職年金生活に入り、住んでいた古い家が余りに傷んでいたので解体建て直しの工事がやっと終った時の微妙な感慨があり、物財は何ひとつ残さなかった一生の決算が一軒の家と云う次第であったと云うことである。

白き光り雲ににじませ登り来る日本人が初日と呼ぶ陽

少し古い歌ではあるが自分と云う世代意識が相当に自然に出ていてあまり前例がないと思われる。

私と短歌の関連もまた異様なもので、一生のうちただの一人も、

歌の作り方を教えてくれる人に出逢わなかったし、参考書としての歌集や辞書、短歌雑誌が自由に買えるのは一九四五年の終戦以後であり、年齢は三十一才頃となるが、「椰子樹」が創刊したのが一九三八年であり「椰子樹」だけを参考書として短歌に挑んでいたのだろうか。

最後に私の詠んだ賓しい短歌が母国日本の歌誌や小説の一部に関わりを持った部分に触れる事にする。

一九五〇年「短歌研究」の姉妹誌「日本短歌」に「椰子樹」のコロニア短歌の批評文が載つた事が一度ある。金狼子、白狼子と云う匿名批評ではあったが、終戦後初めて来伯した古橋を中心とする水泳選手団が、ロスアンゼルスで挙げた画期的な記録を背に南米でも素晴しい活躍を見せ、在伯邦人を大感動させたことを取材した「椰子樹」作品を総なめにして日本内地にもあるマンネリズムの標本と評した中で、私の歌一連だけを取り上げ、ここに作家と呼べる者がいると称讃した事がある。

飛魚の話題巷にひろがれば煩らわしき声また幾つ聞く
はらからの相せめぎ合う国に来て君等泳ぐは単純ならず
ひしめきて君等の前に争える同邦を見て皈(かえ)り行かむか
古橋を見に行く事は断念し産月近き妻を守りつつ
五人目のおみなを産めば友の誰彼よ皆ひかえめに祝いで呉るる
飛魚が世界記録を樹てし日もひそけくおむつ洗いて居たり

この記事は清谷肴が当時のパウリスタ新聞に紹介記事を書いたので一時の話題を呼び既に広く知られている筈であるが、評価を受けた私本人に取って相当に重大事であった。生活戦線が何時もギリギリである上に出産の前後の普通の家では母または外姑の世話がある筈であるのだけれど、自分で一週間はおむつを洗うところに異端者たる所以があり、その異端の臭いが作品の評価となるのかと分析すべきか否かを考えさせられたものである。

その次は一九七八年の「林野」十月号には共同研究「異色の歌人」の特集号が企画され日本全国から集めた十三名の記事が載せられている中で、「椰子樹」関係では故井本惇が選衡の委嘱を受けて、私の名を揚げ、前記の「日本短歌」に飛魚の歌が批評の対象となった例を引きながら、数首の短歌作品に説明を加え彼らしい口調で私の生い立ち素性に触れ二頁に亘推薦の労を取っている。「林間」誌は木村捨録発行編集人となっていて、パラナ方面には多数の投稿者と読者層があるらしいから、相当多くの人に読まれている筈である。

もうひとつは一九八三年、文学界八月号に発表された岡松和夫氏の小説「異郷の歌」があり、この小説の筋書きの主人公は、その昔遺歌集「微塵」が発行された薄命の歌人武田公平であり、彼の作品五首が物語りの中に配置され外人妻との短い悲しい人生が書かれており、更にコロニア万葉集に現れた移民の歌が作者の心の中に様々な形で影響したことを点綴したものであった。

引用されたのは井本惇一首、牛草茂一首、瀬崎涛声一首、岩波菊

治二首、植村かず一首、戸崎清作一首、秋永三郎二首で短歌は武田のと併せて十四首が引例されていて、私の二首は

日本人の血はかなしくもよひた恋えどはて無く遠し大和島根は

排日的法令は日に次ぎ布かれつつ吾を此の国になじましめざり

このような幼稚な旧作が日本との関連にひとつの役目を果した事になる。

ともあれこの国で享けた二世の取り止めのない不見目(みじめ)な一生ではあったが、短歌と云う絲に繋がれて思考の統制で救われた危うかった生命の実在に無限の感慨を秘めながら次の一首で締めくくりとする

。

咄々と短歌（うた）を綴りてひむがしの国のみ民の裔なり吾は

## ブラジルと私の短歌

## ー　歌集〃二世〃　から　ー

細　江　仙　子

歌集「二世」を出版してからもう二十年近くを経ようとしている。この歌集について今は亡き井本さんが書かれた「〃二世〃の

歌作によせるノート」という文章がある。そのなかの「細江仙子は滞伯中、自らのエトランゼについて、一行もふれなかった。そして、その化身のような、二世の歌作を残して行った。彼女は、彼女なりに、人生の哀歓はあった筈であるが……」という部分が、この頃しみじみと素直に受けとることができるのは、過ぎ去った長い年月のせいであろうか。

一九六三年、私は始めてブラジルの土を踏んだ。しばらくは興味と感激の日々であったが、やがて何らかの形式で表現せずにはおられない衝動を、駆りたてるものが目にはいりはじめたのである。それは開拓されてきたブラジルの大地であり、開拓してきた移民という名の人たちであった。私は日本を発つ時、ブラジルへいったらもう短歌を作ることもあるまい、と思うでいた。しかし、長い歴史を持つ「椰子樹」があり、各地で歌会がひらかれ、ブラジルの大地に短歌がすんなりと存在していることを知ったとき、迷うことなく短歌で表現する気持になった。自らのなまの現実が作品の対象とならなかったのは、私の作歌姿勢にもよるが、ブラジルの大地や移民にもつ感動の方がより強く意欲を燃えたたせたといえる。三十二年ぶりに会い、顔も．覚えていなかった父母との日々は、格好の素材であったかも知れないが、作品にする段階ではなかったし、その気持も全くなかった。

初めて出席した全伯短歌大会で、私は「私の見たコロニア短歌」と題するスピーチをした。着伯後一年がたっていた。まだ旅人の域を出ていなくて、表面的な見方であったが「ブラジルで短歌を

作ることと、日本で作ることとは自ら異ったものがあり、ブラジルの短歌はひとつの流れのなかで作らなければならない」といったものであった。その流れとは「ブラジルで短歌はどのような意味をもってはじまり、どのような形で出発したか。そして今後どの方向にゆかねばならぬのか」といったものである。当然のこととして、私がブラジルで作る短歌はこの流れのなかで作らねばならなかった。そうでなければ単なる旅行詠におわるからである。

短歌を通じて何人かの友人ができ、日系コロニアの全体像もほぼつかめるようになったとき、自分の作歌姿勢の思いあがりに気がついていた。ブラジルの大地と取りくんで生きてきた人たちの歌から受ける強い感動には、とても及ばない自分の歌を見て虚無的な気持におそわれた。真実には文句なく人を引きずりこむ迫力があり、私にはできないことであった。「自分にも開拓に従事した過去があればよかった」と強く思ったのもこの頃である。日本の友人にこの思いを書いて送った。その返事は「あなたは旅人コンプレックスにおちいっている。長いこと住んでいるコロニアの人達には見えない部分があるはずだし、反対に旅人のあなたに見える部分がある。それをあなたは歌えばよいのだ」というものであったが、私は素直に納得できなかった。

「イメージから創作へ」これはその頃、私の属していた同人誌「斧」でさかんに論議されていたことである。平井弘は実在しない兄を創作し、私性の克服による新次元の開拓といわれた。きびしい批判をうけていた前衛短歌とは異った次元であった。私も同じ

仲間として意欲を燃やし、祖父や母を創作した。日本でのこの姿勢が歌集「二世」の、「自分が軋みのなかの一人（二世）となって組像させてゆく」という方法になったのである。あとがきに「二世の代弁をしているのではありません。一つの国に異民族が同化していく、その過程にある人間の心の営み、そのものなのです」と書いているが、わかってほしい願いは切実であった。自分が日系コロニアの歴史と移民の世界にのめりこみ、コロニア短歌の持つ意義の重大さを思うほど、コロニア歌人は感じていないのではないか、と不満でもあった。日本の歌壇などを羨ましがらないで、歴史の証言としての　コロニア短歌に誇りをもってほしい、と友人に訴えたが、二十年近くを経た現在もその思いは強い。

移民七十周年を期に「コロニア万葉集」が出版された。いま、私はこの一冊の本の持つ重みをひしひしと感じている。私の属している結社誌に紹介したときも、読後ただちに感動を電話で伝えてくれた人がいた。又、機会を与えられて日系移民の話をするとき、必ずコロニア万葉集を中心にすすめることにしているが、多くの人々はブラジルで長い間短歌が作られてきたことに驚き、短歌を通して移民の心の歴史を知り感動するのである。

短歌でもやれぬことはない、という冒険的な気分で、軋みの部分からひとつの人間像をえがいてみた「二世は、読む人をどれだけ感動させたか、この問いを前に私には弱さばかりが目につく。コロニア万葉集に心うたれた後はなおさらである。長い時間を経て思うことは、「一世」は私のブラジル、私の二世だということで

ある。まざれもなく私自身のブラジルに生きた記録である。

去年の暮に「オスカルフレイレ街』という小さな歌集を出した。この中の歌はまさしく「二世の延長線上にある。井本さんの書かれたように「二世」が私の牝身ならば、今度の本は私の人生の哀歓である。ここで発表する気緒になれたのは、つきはなして冷静にみつめることができるようになったからで、最初に書いたように過ぎ去った長い半月のせいであろう。だが、単に自分個人の域にだけとどめておく気にはなれない。性こりもなく移民と結びつけたいのである。私の歌のような親子の別離で生じた心の葛藤は、移民の背景として珍らしいことではないだろう。この意味に私の歌を拡大して解釈してほしい願いが強い。

家族より他に人見ぬ日も続きコーヒーの花咲きて実となる

この歌から受けた強い感動は今もって忘れないし、帰国して十年余りを経た現在も新鮮に息づいている。現実のブラジルが・日系コロニアがどのように変化していようと、絶対かわらないものを見失なわないようにしていれば、私にブラジルの歌はできると信じている。ブラジルの土を踏み、かわらないもの、を丁寧にしっかりと見定めて歩きたい。私のブラジルは川を越えたごとく近いところに、いつも存在している。

# われらが心の遍歴

―椰子樹百五十号以後に出版された歌集その他―

水　本　すみ子

時差十二時間、地球の真反対のこの国へ、一家をあげて移住の決意をするということは相当な覚悟を必要としたことと思う。その勇気ある家長達も、日本移民七十七年を迎えた今はすでに故人となり、この地をまさに墳墓の地として永遠の眠りについた人々が大部分であろう。その父母に連れられて見知らぬ国へ渡ってきた少年少女たちさえもすでに多くの子や孫たちに囲まれてそれぞれの晩年を迎えている今日である。わが椰子樹誌はそのような歴史と地表の上に育まれてきた。一九三八年の創刊より四十七年という息の長さである。そのことは中心にある編集担当者の熱意は勿論、多くの歌人達の物心両面での強力な支持によることは明白である。そしてお互い生の証として作りつづけてきた短歌を或る時期に於てこれを一冊にまとめようとするのも自然の感情であろう。

「椰子樹」百五十号出版の一九七七年十月より現在までの八年間に、コロニア歌人仲間で発刊された詩歌文集の類は、歌文集八冊、歌集三冊、合同歌集九冊、詩歌一冊、文集一冊、詩集一冊、ポ繕訳歌集一冊、合計二十四冊である。これは椰子樹百号記念号発刊

の一九六二年より六九年までの八年間十二冊より格段の相違で、このことはコロニア社会の生活基盤の安定度を示すものではないかと思われる。（以下年代順に紹介）

歌・文集「山伐物日記」岩佐一歩（故）　　序・大泉源郎、清谷益次　　一九七七年十月発行　短歌三二九首、詩二籍、小説一篇、十八才で単独移住した筆者の体験した初期の開拓状況「山伐り日記」の生々しい記録小説を起点とし、その後みずから流亡とよぶ一青年移民の辿った苦闘の跡が淡々と、しかも実感を持って迫る短歌作品群がある。

雇い来し人夫が逃げて行きしより我が棉畑は草に埋れぬ

反古に混じる古手形にてその裏に利子記入あり傷痕の如くに

吾が残す血の裔遠く想う夜のこぼるるばかり星多き空

物理学び電子計算機操作する子に計られていむわれの生きざま

南溟に散りたる汝と流亡の我は還らず故里の地に

「ロデイラ明日また」　水本すみ子

序・武本由夫

短歌四五〇首、随筆二七篇

一九七九年十二且発刊

著者の生活と心の跡を残すものとして、それまでの約二十年間詠みためた短歌と折々に書き綴つた随筆をまとめたもので今読みかえすといろいろ意に添わぬ点があり未熟なもので恥かしいがその時はそれで一生懸命だったのだと思う。

手続きのひとつひとつをなしゆきつつかすかに軋み鳴りいづるもの

宣誓の胸に置く手に伝いつつ裡なる挽歌祖国喪失

夫子らに随きゆかむわれの不意を衝きて捨てむ祖国の意外に重し

知らざりし密なあものの剥がさるる痛みに耐うるわれの日本（につぽん）

帰化人とう馴染なき名にこだわりつつ歩みゆく町は異邦の如し

合同歌集「南回帰線」第二集

ロンドリーナ短歌会

一九八〇年三月刊行

ロンドリーナ短歌会所属会員の作品集で、先に（一九六一年）第一集を刊行している。各自五十音が収録してあり、作者名は、

森谷風男、高須きみ子、野中みや、久米光春、坂光男、瀬古義信、中西静世、古賀みつか、井唯澄子、後藤静、小川貴美枝、渡

部南仙予、荒崎百合香、毎熊百合、森田吉久、加藤喜代子、古北政次、中川原実、中川原正子、高原阿久里、土屋ゆかり、河崎節子、古田格三郎、坂本清人、森谷春男、宮崎多満江、桜井静江、大場時夫、二八人。

「面　影」　酒井雪江連歌集

一九八〇年刊、後記・酒井繁一　　跂・森重扶美　酒井繁一氏夫人の遺歌集で酒井氏みずからの肉筆で書かれ、それを子息嗣朗氏が複写印刷されたユニークな歌集である。作者の人柄の彷彿する清々しい作品群がみられる。

目醒むれば療院にして静かなる雨の降れるを一人開くなり
辛うじてのぼりし山は一面にカンポス菫咲きて息づく
次々にハブ茶鳩麦胡麻妙ればその実ほどなる音にはじける
傷つかず一生を過せと送り来し便りが兄の遺書とはなりぬ
足病める夫がひとりで持て余すトマトの仮植を手伝いし夢

「ジャバクワラ短歌会作品集」

一九八〇、八二年発刊

後記・開沼貴代

創設まだ日の浅いジャバクワラ短歌会が各自の一年間の労作を一本にまとめて毎年一回ずつ発行されることは、各会員の短歌にかけるなみなみならぬ熱意によるものとの感銘をうける。椰子樹

創刊以来の会員である開沼貴代、西田季子を中心に毎月歌会が続けられている。会員は三浦久和子、笠石春江、上野幸音、加藤かおる、中井益代、工藤善子、武由五百子、千葉美夜、梅崎嘉明（特別会員）名沢康子、藤田富代、渡部南仙子、渡辺松子、渡辺君江らである。

「こころの雫」　詩歌集　千葉美夜　　短歌六〇〇首、詩三八篇　序・酒井繁一、一九八一年一月発行も率直に自分自身の言葉でうたいあげた詠草は何のてらいもなく心よい。短歌ばかりではなく、詩の分野にも感性ゆたかな作品があり、心たのしく読ませる集である。

われはポ語に子は日本語にうとくして対話時どきとぎれてさびし
クヤバより野越えはるばる嫁ぎ来し子の嫁良子よき名と思う
鳥羽に来てためらいもなく真珠買う一代のおごりか海青きなか
欲しきものなしと言いきりふとさびし枯れし古木に花なきが如く
子らそれぞれ娶り嫁ぎて夫逝きてひとりの庭に木犀匂う

「コロニア万葉集」　同刊行委員会
一九八一年三年発刊
日本移民七十年記念日を迎えるにあたりコロニア短歌人の間から、われわれブラジル移住者たちの、初期より現在に到るまでの、

その生活様相、その精神史を如実に物語るわれらの短歌集大成を刊行しようではないかとの提議が出され、再三協議熟慮の上、左の刊行担当委員たちにより刊行された。

委員長～徳尾恒寿、総務～中江克己、　編集～清谷益次、米沢幹夫、会計～水本すみ子、選考委員～酒井繁一、武本由夫、井本惇、米沢幹夫、弘中千賀子、陣内しのぶ、小笠原富枝、企画協力～岩佐静雄、富岡清冶、他椰子樹社運営　委員一同。

刊行にあたっては戦前戦後のあらゆる刊行物に掲載されている短歌のすべてを掬い上げ、これを選して収録した。収録歌は六六三四首、作者数は三一七八人で、大型版三三二頁の装丁も美しいコロニア万葉集は、コロニア歌壇の総力をあげての壮挙であり、ブラジル国内はもとより遠く日本からの反響も大きく、当初二千部印刷のものが更に三百部の増刊を見る程であった。なお同書は一九八一年度のコロニア文学賞を受けた。

「たかむら」　河村哉太郎歌集

序・武本由夫、短歌六六三首　　一九八一年十一月発刊

序言にいみじくも記されたように「寡黙で謙虚な人柄」はしみじみとしたこまやかな生活感をうたいあげている。慎ましいひとりの人間の誠実な生活態度が各年代を通じてそれぞれの作品の上に見い出される。

巣ごもりの野鳩を今朝もかいま見てひそけき心をたむつ此の頃

野畑より戻りてせかせかと歌綴るあわれ手垢に汚れし歌帖
朝づく陽ほのかに差せば入念に作りし苗場に水蒸気立つ
我にあまけ物言わぬ子よ若かりしかつてのわれも偏狭なり
枯野ゆく貨車のひびきを背に聞きでさやさや青き篁に入る

「深　泉」　福博文芸クラブ合同歌集　　序・酒井繁一

一九八〇年九月第一集

一九八二年九月第二集発刊

故酒井繁一氏を指導者として特別参加の森重扶美らを中心にスザノ福博村に短歌活動をつづけ、歌会三周年を記念して第一集を、次に八二年九月に第二集を発刊している。会員は、石橋初穂、山崎益一、黒木松巳、花井信吉、高木まさの、桜井みつえ、高木政明、山田鉄男、黒木フク、田中みつ、原君子、滝夕起緒、青柳房治、青柳ます、高木富代、野村康、杉本鶴代、作道禎子、山田幸子、寺尾芳子、中沢綾子、尾道喜実柄ら二三名である。

詩歌文集「常燃の秋」　越村定雄

一九八三年二月刊　刊行者は遺族

歌集の部には先妻由多子の作品も収めである。詩篇と文章は宗教色の濃いもので、作者の過去の精神の歴史を描くものとみることが出来る。短歌には、苦難の多かった前半生の生活と精神の苦

渋を詠った佳品が多い。

世を終えて寂滅（ほろび）の光身に映ゆる期（とき）こそ聴かめ夕蛙の声

炭ほこりたち舞う竈（かまど）は暗けれど働く子らのかがやきて見ゆ

筆もちて拙き文字を書く吾の心稚（おさな）しひたむきなれど

仕事場へと心いそげど朝しばし子のうしろより文字書き教う

竈口に火を焚きおれば心澄む吾に清しき山鳥の声

歌文集「轍の跡」　小竹　清子

一九八三年四月刊　著者八十才記念一九六四年に歌集「波の跡」を出している。一生に二つの著作集を、一介の移民女性として出せるのは稀である。しかも作品は、静かでありながら格調高いものが多い。

漫然と歩み来て市の喧燥に至れば生生ともの買い漁る

怯儒とも思える吾の過ぎゆきに又コスモスの花咲くにあう

灰じろく波頭立つ渚にて潮のかおりをかげば安らぐ

拒絶とは思えぬわれの言葉にて破綻なければ老獪といわん

吾が存在を不意に無用と思うときも心必ずしも嘆くにあらず

合同歌集「南回帰線」第三集

ロンドリーナ短歌会

一九八三年八月発刊

第二集同様各五十首を収載している。

作者名は、

森谷風男、高須きみよ、加藤喜代子、　椎名千代子、小川貴美枝、久米川照明、　河崎節子、荒崎百合香、土屋ゆかり、　毎熊百合、宮崎多満江、桜井静枝、中西静世、久米光春、野中みや、高原阿久里、後藤静、森谷春男、古賀みつか、中川原実、中川原正子、森田吉久、瀬古義信、川久保タミ、渡部南仙子、小笠原正子、坂光男、井唯澄子、古田不覚、大場時夫。三〇人。

歌・詩・句・文集「郷愁の花」　浦田光馬

一九八四年七月発刊　短歌、詩、俳句、川柳、随筆と著者の各分野での多彩な活動を示す一冊である。

生きの日の折々を綴った文章にもひとりの青年移民の辿ったありのままの生活がもの語られている。

手にもぐと寄るハブ草のひと枝に触るれば筴実軽き音たつ

古靴を義足に履かせ耕してコーベ植え込み今日を終りぬ

鶴嘴を打ちて土塊起しゆく義足にしかと重心置きて

須臾の間のごと過ぎ去りし四十年今ぞ旅だつ父母の墓参に

日本間に満州帰りの旧友と膝交じえ合う訪日の吾は

歌・句・文集「この道」　内川愛季

一九八四年十一月刊

短歌を始めて十年を記念する意味で、著者自ら鉄筆を握り、裏紙、カットも描いた。

或るいちに人が、どのようにして短詩型と出会い、どのような態度をもってそれに対しているかを物語る内容である。作者の人間像そのものでもある。

術のなき心の揺れにたたずめば空に響きて冬の雷あり

深々と吸いて吐きだす息白くあかとき正しき心音打ちて

歳末に華やぐ街のひとところ母の傍えに眠る子があり

帰結なき独りの思い寒き夜を妻が編みたる靴下をはく

遠景に輝く吾の住む街を侵すファベーラの暗がりがあり

「あゆみ」サンパウロ新聞歌壇作品集

一九八四年十月刊行

サンパウロ新聞歌壇二百回を記念してそれまでの全投稿作品を選考して収録したもの。主な出詠者は、秋山るり、阿部俊美、荒永清作、安達梅野、安藤文子、橋本正義、長谷川美枝子、本間篤

草、浜田八重、畑本文子、岩本秋月、五十嵐末子、石塚玉枝、片桐睦子、楠木村治、久米川照明、川上大作、宮沢半次郎、森谷春男、宮下春成、村上喜文、村中ちづ子、長島多喜、沼島志郎ら他百七十名にも及ぶという盛況さで、担当選者は小笠原富枝、陣内しのぶの両氏である。

「オスカル・フレイレ街」
細江仙子歌文集（在日本）
一九八四年十一月発刊

幼い日に父母をブラジルに送り、ひとり日本の組母・叔父夫婦の手に残された作者が成人の後ブラジルをたずね、その鋭敏にして繊細な感性をもって生々しく描かれた父母の像、また断たれていた親身なものを呼び戻すまでの作者の傷々しいまでの惑いがじかに伝わる作品群である。加えて「移民のこころ」として異色、歌人新納時千代氏の境涯とコロニア万葉集所載の短歌が多数紹介されている。著者は朝日歌壇岐阜版の選者である。

たしかなる証となりて母といる断たれてながき歳月（とし）過ぎし果て

おのづからポ語の混りて苦しみぬ不意に異邦の人となる母

紅葉せぬいちょう葉落す土深く修羅なす帰化を父は見守る

ユーカリの梢夕やけせしままに夜となる一代限りの里の

ビフテキを喰い一望千里疾走の父とはぐれし道は続けり

「やまなみ」カンポス短歌会合同歌集

一九八五年三月発刊。最終号

序・酒井繁一

大部分が高原の町カンポス・ド・ジョルドンに療養する人達によって創られた短歌の集いで第五十回歌会を記念して合同歌集を発刊し、以来途切れがちながらよく病弱の身体を厚い友情でつなぎ合い結束して今年度最終号として第二十号を出版された。惜しむら（印字薄く解読不可７６頁画像）・・・・・・た

佐藤一英氏が「やまなみ最終号に寄せて」を絶筆として逝き、永年のよき指導者であられた酒井繁一氏も昨年七月ついに地上の生涯を終えられた。残された同志の方々の心は如何ばかりかと思われるが、今後は「椰子樹」と直結してカンボス歌会を守りがんばってほしいと思う。二十号の出詠者は、酒井繁一、安部米子、花城清栄、上原知水、春名宏文、佐藤一英、奥野精一、高原万里、原田耕作、桜井健三、北村省三、西川八郎たちであるが、その他物故歌人に正木思水、中田武男がいる。

「ひぐらしの声」　井本惇連歌集

短歌一四〇六首、評論一篇・

後記・清谷益次

一九八五年六月発刊

ブラジル歌壇随一の論説家として自他共に宥し、武本由夫氏亡きあとの衆望を担って歌壇を推進すべき筈の人であった井本惇氏、評論ばかりではなく作歌活動の上にも常に指導的啓蒙的立場で活躍されていた氏が突然、昨八四年六月七日死去されたことは誠に痛恨のきわみであった。その後遺族並びに親友たちの手で編まれた歌集はブラジル歌壇の頂点にあった人の深い考察と知的抒情に盈ちた人間そのものの記録で、終章近い頃の作品は殊に純度の高いものが多い。

よみがえる汝（いまし）が声は耳朶にありわが躯ながらにとわの悲しみ

現し身をかすかに過ぎる思いにも蕭条として過去未来あり

幸いて生くるならねど秋の日の柿は梢に熟れて明るし

年毎の花の記憶を重ねつつこの朝涼の遠きかなしみ

夕空の冴えくる頃かたやすくはひとに心をひらくことなく

「石川啄木、ＴＡＮＫＡＳ」

八巻培夫、パウロ・コリーナ訳

一九八五年七月発刊

啄木短歌を愛して人となった八巻培夫氏が詩人パウロ・コリー

ナとの共訳で啄木短歌をポ語で紹介したもの、発刊と同時にその適切な翻訳により好評を博し、広くブラジル人間に直截、そして普遍性ある啄木短歌と日本の心を浸透させたその功績は実に大きい。

東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる

Pequena ilha ao leste do mar, branco a luz da areia com um caranguejo a face molhada de lagrimas.

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを開きにゆく

Sotaque da minha terra vou a estacao ouvi-lo em meio ao povo.

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻と親しむ

Quando todos os amigos parecem me superar, compro flores e o intimo com minha mulher.

「遠い日々のこと」　清谷益次

一九八五年十一月刊行.

「コロニア文学賞」受賞作「遠い日々のこと」ほか新聞、雑誌に発表した随筆、紀行、評論に加えて、十代半ば頃からの短歌作品一千余首が収録されている。著者が後書に記している如く、これは〝子供移民〟の一つの記録と見ていいものであろう。四三〇

頁。

その他歌集ではないがわれわれ歌人仲間が出版したものの中に、随筆集「りんどうの花」坪内広代（一九八二年）、「移民の跫音」関東思吉（一九八四年）、詩集「黄色い夢」尾崎都貴子（一九八四年）、がありそれぞれの分野での活躍ぶりを示している。

なお、一五〇号以前の刊行であるが、同記念別冊号の「コロニア歌人歌集抄」で取り上げてないものに、一九七七年九月刊行の「軌跡」（梅崎喜明）がある。

付記＝福博短歌会五〇回記念歌集は一九八一年に刊行されている。

## 戦後移住者がみたコロニア短歌

### 椰子樹二百号に寄せて

石　橋　テル子

椰子樹二百号を記念して、戦後移住して来たものの眼で、コロニア歌壇に就て書くようにと編集部から御指示がありました。更に日本歌壇との比較、ブラジル歌壇への要望等と難問ばかりですが、日頃只毎号出詠をはたしているのみの己れに鞭打って身近の歌誌を調べてみました。

ブラジルの歌は七十年前後の椰子樹、日本の歌は椰子樹に掲載された斎藤史の歌と私が日本で教えて頂いた方々の歌を選びました。比較して云々する力もありませんし、又双方共おびただしい歌の中から幾首かを選んで挙げるに過ぎず、お答えにはならないとは思いますがー。

今度、音の歌誌を見ながら七十四年に不慮の事故で他界された新納潤魚師は武本先生も書かれて居る様にコロニア第一級の歌人であろうと今更の様に追慕の念を新たに致しました。片岡けい子姉、簀戸勝子姉の後に随いて二年程教えを享けた日が如何に貴重なものであったかを感じました。嘗て師はコロニアには流派を越えて集る椰子樹誌があり中でも女流歌人は実に良く勉強していると云われました。

現在、井本先生亡き後椰子樹誌の選者は三人の女流で何事も無く責任を果して居られるのを地下の新納師も思いやって居られることでしょう。

◎いのち生きし痕とどめいて日と月の永きがゆきぬ堂のいしぶみ

弘中千賀子

◎おおどかな回帰遂げつつ人間ゆ離りて堂は陽と風の中

同

◎ひと生るる仮象と想う黄の雲のひとひらひとひら湧き綴れるは

小笠原富枝

◎なべで過ぐる生（よ）にあらずやと頭上げエレベーターの中面

を正す　　陣内しのぶ

◎憧れの如き想いも湛えいでわがみもごれるひと日を過す

他に十指に余る秀れた方々がありますが紙面が足りず挙げる事が出来ません。

◎しぐれ来る冬枯山の翳り道諸神諸仏むぬれたもうなり

斎藤　史

◎ふたひらのわが土踏まず土を踏まず風のみ踏みてありたかりしを　　同

◎死の側より照（て）明ちせばことにかがやきてひたくれなゐの生ならずやも　同

この一連を読んだ時、人は何と云う寂かで又つややかな歌を歌えるものかと深く感動した事を思い出します。斎藤史の伝記に触れた事は無い様に思いますが父君の歌は戦前よく発表されていました。

史は歌人としての天性もあったのでしょうが四季豊かな日本の風物の中で歌を思う環境と移民としての辛酸の中で粗い風土に生きねばならない歌人の異質さをここに見る様に思います。果していづれが良しということをぬきにしてー。

宗教的な崇高さを秀れた歌には見る事が出来ますが、故新納潤魚師には、

◎裸木の溟き梢にちりばめる星を寂土の花と思わむ
新納　潤魚
◎アルファッセ玉と結びで掌に重くわれに残れるいのちを訊す
同
◎ひぐらしと動力鋸の音をつなぎ無明の如き仮睡ありけり
同
◎わが道を一人歩みて年を経ぬゆきつくと云う道にもあらず
酒井　繁一
◎金をやらぬわれよりいたく不逞にて黒く汚れし親と子は去る
井本　惇

ブラジルに来てからの師の御歌を挙げて次に日本の白秋糸香蘭の主宰者であった故村野次郎師、須田伊波穂師の歌、

◎今しがた霰こぼしてゆきし雲のさむざむとして夕焼けにけり
村野　次郎
◎半円がうつろとなりて捨てられし水瓜が川の底に据れる
須田伊波穂

椰子樹で毎号心打たれ乍ち拝見した酒井先生の歌はここに一首丈で残念ですが井本先生に御無沙汰のまま亡くなられたので酒井先生がお元気の間にと上げた手紙に返事を下さってから一月して

亡くなられた事が心残りでなりません。椰子樹入会後いつも暖いそしてきびしい眼で御指導下さいました。旧い歌語を読み直すい機会に思うこともさまざまありましたが、「選をする立場」「選をされるものの立場」等古くして新しい問題です。お互いに人間としての愛情があれば何事も円満にゆくのではないでしょうか。私個人としては不完全な歌であればきちんと問題点を突いて頂きたい。自信を以てお願いしたいと思います。社交界や営利的な関係でないのですから遠慮は要りません。

土に還る日迄素直に人の言を容れ、又人にもものの云える立場でありたいと思います。椰子樹誌の為に何事も出来ない心至らぬ会員ですが、今後益々発展してゆく様に祈りつつペンをおきます。

## コロニア短歌寸感

笹　波　北　陽

この度椰子樹二百号記念別冊号発行について何か書くようにとのことですが、私のようにほんの気紛れにたまたま思い出して作歌している程度で、まだ歌に根は張るまでには遠い者がコロニア短歌の批判とか日本の作品との比較など出来るわけはないがコロニア短歌について感じた事を書いてみることにします。

日本古来から伝わりいわば日本文化伝統の代表的なものでブラジル日系コロニアにも根を張って定着しつつあるものの中に、茶

の湯とか活花、俳句短歌、他に宗教など種々あるのであるが右にあげたものが主なものではあるまいか。こうした日本伝統なものどの部門にも特に感ずるのは女性の数がますます多くなって来ていることである。戦後は女性と靴下が強くなったなどと言われるが短歌の世界を見ても特にそうしたことが言える。

では何故そうなったのか分析してみるのも無駄ではなく何らかの為になるのではなかろうか。

先ず常識から言って女性は比較的に男より四年か五年寿命が長い。夫婦で言うならば夫の年齢より妻は平均して四才か五才若いから夫の死後妻は未亡人となって十年程生きている計算になる。短歌を始めるのはかなり高齢になってからとみて、右の数字上から女性が多くなるのは当然と言える。

次に見逃せないのは日系コロニアの経済的成長である。また老人福祉の改善などにより女性に生活のゆとりが出来たことは戦前戦後の苦難時代とは比較にならない。また精神面から言って日本女性の本能とでも言うべきか、古来の伝統習慣を守って生き抜くことに強く、それは特に戦前移住の女性に言える。こうした女性の教育よろしきを得て二世三世の子女にもそれはかなり強く残っているように思われる。これに伴って責任感念も男性よりはるかに強く、現在の日系コロニアの信用と成長は女性に負うところが多い。

以上のようなことから短歌の世界に於ても女性群の進出は誠に喜ぶべき傾向であると思う。コロニア短歌の将来を展望するとき、

選者または歌誌の運営、歌会のリーダーなど女性に移って行くことは必然であろう。歌誌の発行運営の問題などもコロニアの経済力からみて楽観出来ることであると思う。

次にコロニア歌人の数の問題になるが、

ここでひとつ四十年前の戦前戦後当時のことを振り返って見よう。当時は日本語などまさに風前の灯とされ、歌や俳句どころか日本的なもの一切必要なしとする人が多かったのである。ところが四十年後の現在はどうであろうか。消滅どころか日本文化に由来するものはあらゆる部門にますます盛んになって来ている。こうしたことは祖国日本が高度成長したことに起因しているとも言えるが、短歌にしても短歌教室とか少年少女短歌などあって少しずつにしても教えられている。

これも女流歌人に負うところが多い。

次に歌人の高齢を心配する向もあるがこれは心配の必要はないと思う。なぜなら例えば歌人の平均年齢が六十五才とする。それでは四十年前は二十五才であったかとなるとそんな勘定にはならない。

現在かなり高齢化したと言うことはコロニアの寿命がのびたこと、老人がますます元気になり意欲旺盛に作歌する人が増えたと言うことで大いに祝福するに値することと思う。終りに短歌の傾向であるが、この頃はわけの解らない思わせぶりな歌がいつの間にか姿を消して賢実で素朴な生活詠が主になっていることはコロニア短歌の喜ばしい傾向であると思う。

# 戦前と戦後

青柳房治

日系コロニアの中には、戦後既に四〇年経って尚、戦前戦後移住者を区別して考える人のなんと多いことか。この度椰子樹の編集者より、こんど二〇〇号記念特別号を刊行するので、あなたも戦後移住の作歌者として、一文をと依頼してきた。一体コロニアに於ては、戦前と戦後とは、どういう意味を持つものなのだろうか。

コロニアに於ける戦前とは、笠戸丸から敗戦までを指すのであろう。ということは明治四〇年から敗戦までが丁度四〇年、戦後が四〇年を経過したことになります。

戦前の四〇年は、振返って見ますと、昭和の十五年戦争と、その準備に費やされた時代、ということでしょう。

大正時代には、総力戦はなかったとはいうものの、第一次大戦、シベリア出兵などが、相次いで起こりユーラシア大陸を求めようとした軍に依って、その戦費調達は、重苦しく大衆の負担となってゆきました。

明治四〇年に始まった、日露戦の戦後恐慌を出発点に、米騒動、大正デモクラシー治安維持法、金解禁、満州事変、支那事変、第二次世界大戦と、民衆にとっては恵まれぬ暗い時代であった。

半封建的な地主制度と近代的な資本主義、天皇の統帥権と立憲

君主制、都市と農村、工業と農業、なにをとっても社会の中に、性格を異にする、二重構造が存在して民衆の生活を圧迫した時代、そういう時代が、戦前四〇年の時代相と云えましょう。

かかる重圧から逃れ、夢と明日を海外に求めて雄飛したのが、戦前移民の大方であったろうと思われます。

一方文芸面では、明治四一年十月アララギが発刊され、翌四二年には、北原白秋の「邪宗門」が発表された。長塚節の「土」も続いて発表されています。

大正に入って、藤村の「千曲川」、斉藤茂吉の「赤光」、と続いています。

コロニア万葉集の戦前編をひもといて見ると、前述したような、時代背景がうかがわれ、当時の生活がリアリテーに歌われていて、読むものの心に回想と感動を与えて止まないものがあります。

体裁をてらいてもよしなし食うことが出来ず日本を出でし我なり　酒井繁一

夜半にさめて乏しき銭をかぞえたるはかなしき心耐えて語らず　武本由夫

父母よ喜び給え我が生れし村の広さの山求め得し　岩波　菊治

病む妻を守りて久しも外つ国に来し鋭心も失せむとす今は　小田切　剣

切り倒したペローバの幹に跨りて空腹にうまし昼の飯喰う

井本　惇

表出作品から受ける、企みのない素朴さと、真実描写からは嫌味のない感動を沁々と感じさせられます。

又同編には、人間として飾らぬ、時代生活が赤裸々に詠まれていて、秀作が多くしんみりとした共感を誘うものがあります。

昭和二〇年の敗戦をさかいに、社会の二重構造が解消され、占領軍のおし着せ行政の結果ではあるが、「民主憲法」が制定され、農地解放が施行されて、伝統的な貧しさから一応解放され、自由にものがいえる時代がやって来たわけであります。それからの戦後四〇年間は、兎も角平和が保たれて来ました。

ブラジルでも勝ち組負け組騒動が、忘れられて既に久しいものがあります。

戦後移住者と呼ばれる人々は、一九五〇年代初頭から、一九七〇年代始め頃迄に、移住した人々を指すのであろう。現在五〇才代を中心とした人々で成立っていて、多少なりとも、戦後教育や、戦後日本の民主政治に触れて来た人々であります。そして、東京オリンピック、或いは万博後の日本の繁栄を余り享受していない人々でもあります。

戦前社会の、二重構造が民主憲法と農地改革に依って、解かれた影響は極めて大きいと思われる。

戦後すぐに始まった飢餓インフレが、割合早い形でおさまったのは、農業構造の改善と、技術の革新であった。

続いて、朝鮮戦争、ベトナム戦と、戦後の日本経済建てなおしに影響のあった時代が続くわけであります。

日本の戦後経済は、世界が驚く程の早さで、建て直されていったものの、海外からの帰還者と、ベビーブームで、日本の人口は増えるばかりであり、昭和二〇年代の終り頃では、景気はかなり好転したとはいうものの、工業生産は緒についたばかりで、大型の投資が行われるまでには至っておりません。

農村では、農地改革の結果、経営面積が細分化され、二・三男を吸収する場所もなく、戦前の二・三男の職場としての、軍は存在しておりません。又、海外引揚者の職の問題もからんで鍋底景気などといわれたのが、昭和三〇年代初めであります。

この時代背景が、戦後の移民をうながしたのでありましょう。

一方文芸面では、終戦の年の九月に、早くもアララギが復刊され、続いて日本歌人クラブや協会が結成されて、戦後の文芸復興に繋がって行きます。巷では「東京ブギ」「鐘の鳴る丘」が唄われ、ブームとなったのが昭和二二年の九月頃からであります。

一九五二年の二月には、斉藤茂吉、続いて釈迢空を喪っています。戦前の写実的な詠法がより心象、抽象的に詠まれだしたのも、戦後の特徴でありましょう。

コロニア歌壇でも、一時抽象から超現実まで詠まれた時代がありました。最近は余り見られなくなったのは、一つのおちつきなのでありましょうか。

最近の椰子樹から秀歌と思われるものを選んで見ます。

夕光の中にうするる足跡のわが身に近きものを愛しむ
大場　時夫

逝きし人病める友びと心処に徘徊りつカクトのありし辺りを
中井　益代

かなしみを断てと如くに春空にむきて黄に映ゆ金鳳樹の花
植村　かず

自らを支うる不文の掟ありてひたすらなりし一生と思う
小竹　清子

まろびゆく枯葉の音をききしより湿潤のわが想い深まる
水本すみ子

戦前と戦後の作品を対比して見ますと、その違いに驚ろかされます。又作品の傾向も、日本の作歌傾向に従って動いていっているようですが、戦前の作品には壮さといったようなものが感じられますが、戦後特に、最近の作品には、より心象的な傾向が目立ち、その上、老を感じせしめる作品が多くなっています。

最近の作歌傾向の中で、詩というより、報告短歌的な作品が数多く見受けられますのは、残念というよりありません。

「何を詠うか」、「何を詠むべきか」というのは、大命題でありますけれども、コロニアでも、そのことが今後の宿題でありましょう。単なる作歌から出でて、作品に思想性が加わり、詩に昇華する時、短歌を作って来た意味が、大きく開かれると思います。

振返って見て、その時代相が実によく現われていますのも、短歌の特徴でありましょう。

むさぼりてためゆくほどの執着もなければ淋し風のたまり場
はらてるよ
そらに居てみどりのほのほかなしむと地球の人の知るやしらずや　宮沢賢治

コロニアの作歌者の年令平均が六五才位だといわれていますが、年令に負けず、時代を超越して、作歌されんことを、又皆さんが、より自分の歌を作歌されんことを祈って駄文の筆を擱きます。

## わが生涯と短歌

翳をぬぐったもの　　植村　かず

夫を亡くしてからはやくも一年三カ月、その一年以上の月日を病いの床に過して終った。

アパートの狭い部屋の白い天井にじっと眼を向けていると、どうしようも無い虚しい思いの中に自分の七十年の生涯は何であったのであろうか、人間の生とは何と儚いものなのであろうかと、限りない虚しさに両の眼尻から冷たい涙が流れる。そうした慮いの中に身を揉ませていつつふと気付くと、渇いた唇で三十一文字を綴っているのだった。

あゝ、私はまだ生きている。自分には短歌があったのだ。もっ

と心を強く持たねばと再び眼尻から流れる涙は暖かく感じるのであった。

私の生地は北海道の小樽だが、育った地は、富士山に似た美しい山と言われる羊蹄山（ようていざん）の麓町倶知安で、父母は、町の駅前通りで食料品店を営んでいた。

昭和七年の春、父は突然家族に南米移住を宣言して、不景気とは言いながらまだどうにかやっていけそうな店を慌しく整理してしまい、私が十七才の夏移民としてブラジルに移住したのだった。

私達一家の乗ったサントス丸が神戸港を出帆した時、あの混雑の中で母の不注意から有金全部を盗まれてしまい、この時から私達の上に暗い翳が纏わり始めた。

船が香港に着いた夜私の下の妹が突然気が狂ってしまった。妹はブラジル移住を極度に惧れ、恐怖症状態になって何回も家出をしたりで、それをどうにか宥めすかしてやっと乗船させたのだった。

発狂した妹は船尾の病室に隔離され、妊娠していた母はつわりと船酔いで頭が上らず、下の幼ない弟二人が肺炎に罹り、三人の病人の看病、狂った妹の看取り、この四人の食事の世話事々、私は船内の多くの人々の憐れみと蔑すみの眼を意識しながらも、それを振り切るように毎日朝から晩まで船内を走り廻ったのだった。

当時天理教に凝っていた父は、人前も憚らず大声で天理王命（てんりおうのみこと）の祈祷をあげるのに憎悪を感じながらも、急に老け込んだ父の姿が憐れでならなかった。

長い航海も漸く終って船がサントスに入港する直前、狂人の妹を伯国官憲の眼にふれないようにと、船医が鎮静剤を注射して二十分後に妹は眠りと共に息が絶えてしまった。十四才であった。妹の死を悲しむ間も無く、護憲革命が鎮圧された直後のまだ険悪な空気の中に、移民達は慌しく港から移民列車に乗せられて配耕先に向かった。妹は船が次の寄港地ブエノスに向かう海に水葬されるとかで、船底に近い暗い一室に置かれてあったが、汽車が動き出した時、ぎっしりと身動きもできない車内の窓から、妹の置かれてある辺りに掌を合せ、「許してね、許してね」と母と私は声を殺して泣き咽んだ。

配耕されたS耕地で私達一家は珈琲樹四千本を受持った。鍬の持ち方も知らず働き手の少い私達の珈琲畑はいつも大草で、耕地のカマラーダが入り、その賃金は私達のメザーダから差引かれ、あまつさえ借金になっていった。一家の口のりの為に指輪、時計、蒲団等次々と米や芋に変えられていったのだった。

この七人の一家の窮状を救う道を私は結婚に求めた。結婚式の翌日からフォイセを持たせられた私の結婚生活は厳しいものであった。やがて夫は綿作で儲け、農産物仲買商を始めたが二年目で失敗して、年子四人の幼児を抱えて聖市に移り、ピネイロス区の町外れで細々と野菜作りを始めた。貧乏の中に子だけは増え、九人の子達の為夫婦は身を粉にして働いた。

そうした或日手に入った「椰子樹」によりコロニアの短歌を知った。このコロニアの短歌はオアシスの泉の水となって、乾き

切っていた私の心を豊かに満たしていったのだった。
上の子達が漸くグルッポに入学し、下の子達はまだ幼ない或夜、ふと子達の部屋を覗いて見ると、幼ない子達が膝まづき壁に貼ってあるキリストと聖母の絵に向かって、小さな掌を合せ一心に夜の祈りを唱（とな）えているのであった。その頃終戦後の勝組負組の騒動は治まったとはいえ、日系人の間にはまだその暗い翳が澱んでおり、力にする祖国は敗戦国となり、自分達の子の将来はどうなるのであろうかと暗い慮いに閉ざされていた胸が、幼な子達の翳持たぬ祈りの声に明るく開かれてゆくのであった。
その夜、「夜の祈りポ語にて誦する幼な声移民の裔の翳はなかりき」と書き記しながら私は胸を熱くしていくのだった。
貧しい生活の続く中で九人の子達は、親の気持などに関りなく明るく育ってゆき、親の貧乏はよく納得しているように或年齢に達すると、きょうだい達が相談し合い助け合って、昼は勤めに夜は学業にとそれぞれ成人していった。
「生れたるこのブラジルは佳き国と若き眉あげ子はきっぱりと言う」、生れた国ブラジルに誇りを持つこの子達の姿を頼母しく思いながらも、この子達に取って日本はもはや他国であり外国であるのだと想うと、母国を忘れ得ぬ移民たる親としての心に湧く寂蓼感はどうしようもない。
この国に半世紀以上を住みつき、老齢になって今は病む身、病床から見上げる白い天井に次々と追憶の中の歌友の顔が浮んでくる。中江さん武本さん井本さん、それぞれ特徴のある笑顔岩佐さ

ん富岡さんの笑顔も浮ぶ。過ぎし歌会の日々が想い出される。「あの頃は楽しかったわねぇ1」と声に出しながら熱い涙が溢れる。

暗い翳を背負ってこの国に移ってきた私にとって、コロニア短歌との出会いは大きな救いであった。私の生涯に得た最大のものは短歌であったと思わずにはいられない。

## 人間関係の広がりに…　　加藤　操

去る五月に古稀を迎えた私にとって、人生とは何んであったかと思うに、ただ七十年を生きた、と云うに過ぎない人生であったが、その内に淡いながらも短歌があったと云える。私と短歌の出会いは一九五七年であるから、約二八年前である。下手な短歌ではあるが、これを詠んで来た二八年と、それ以前の私を思い合わすと、短歌を詠んで来た二八年の方が、色々な点で脹みのある人生であった、と思えるのである。

では私にとって短歌とは何んであったかと思いめぐらす時、苦吟の末に満足出来る歌が詠めた時の喜びが一つあり、またある時の心の支えとなる事もある。

失策の顕ち来る寝床に忘れんと歌を詠みいて何時しか眠る

６２・４（数字は上～年、下～月。以下同）

こんな愚作もあるように、私の短歌は何か煩い事のある時、それを詠む事に依って紛らすと云うような宗教的な面もある。そしてまた、人間関係の広がりがある。短歌に繋がる人間関係の広がり、或いは旧友とのつきあいの一層の深まり、等に短歌の意義を感じ、人生の潤いを感じるのである。ここに古い歌帳の中から歌友を詠んだ愚作の幾首かをとり出し、それに一筆の回想を書き添える事にして、テーマの責を果し度いと思う。

歌帳には亡くなった歌友の歌もあり、私には短歌に繋がる暖い思い出の歌友等であり、何時迄も私の裡に生きているので、亡友の事も二三書く。

私の短歌を云う時、第一に挙げるのは酒井繁一先生であるが、先生の事は何回か書いたので割愛する。

グアイラ短歌会の発足当時の思い出に吉本青夢氏を歌ったのがある。それは、グアイラ歌会の一周年記念の折りだったかと思う。その日聖市から五、六人の先輩諸氏が来られた中に、吉本さんも一緒であった。吉本さんとは、大会で一度会っただけで、それも話し合ったのでは無く、彼のアベックの呼が出しの名司会ぶりに印象の深い人であったが、吉本さんの方は、私など名前もろくに頭になかったはずで、云わば初対面とも云える程であった。そんな吉本さんであるから私は、いくらか緊張してお迎えしたのだが、吉本さんは拙宅に着くなり「ピンスケ無いか」と云って酒を所望された。その時の吉本さんの打解けた振舞いが、私には嬉しかった。すぐウイスキーを出して飲んで貰った。その時の作にこんな

のがあった。

初対面であれど歌友は親しけれ旅来しままに酒を所望す

６５・６

その晩のジャンタの時も遠慮なく振舞われて漬物などを注文された。それを開沼さんが気遣われていたようであったが、私は、かえってそんな淡白な吉本さんに急に親しみを感じた。その故もあって先輩方の接待も気楽にさせて貰った古い思い出がある。

短歌の故に親しさが一層増したと云える友で、故八幡与三兄がある。当時彼はバレットス市に住んでいて、よくグアイラに仕事に来ており、折々「何うかね」と云って訪ねて来た。そして世間話や短歌の話などしたのであった。

気さくなる友の来たりて商いを忘れて一刻話がはずむ

６９・

そんな時は仕事の息抜きになった。

ある時は吾が傷心の支えとし語り合いたる友でありしが

７９・５

この歌友八幡兄が生きていたら私の一生は聖市で送る事になっていたかも知れない。故佐藤一英兄との交際は文通に依っての方が多かったが、それでいて心から親んだ歌友であった。この交りも短歌の縁りからである。

筆まめな友の返信今日も来ず心待ちせし十日は過ぎつつ

８５・４

佐藤さん程、手紙を呉れた者は私には他にない。この歌はそんな筆まめな佐藤さんから返事がないので、寝込んでおるのではないかと心配した時の歌だが、後から聞けばそうでもなかったらしい。

己が身の弱きは云わず誰人にも尽せし友の安き眠りは

８５・５

この佐藤さんも私の裡に何時迄も生きておる歌友の一人である。

友の手と吾が手を左右の手に固く振りて君の握手は温し

８１．１０

少しごたごたしておるが、安部栄子氏の握手である。私との握手の手を放さぬ侭、八幡兄の手も同時にとって歓迎してくれた時の歌である。安部さんは何時会っても変らぬ温顔の人で、情味豊かな歌友である。握手もまた安部さんのは心暖まるものがあり短歌に繋がる親しい一人である。

心通う一人の友に出す手紙親馬鹿と思うこと一つ書く

上原勇次郎兄に出した手紙のことである。愚息三人共学校を出た頃の手紙であったと思う。上原さんに出す手紙に、つい愚息の事を書き込んでしまったのであった。上原さんは恐らく悪く思わず受けとってくれるだろうと、自分勝手に決めこんでおった。その時の歌である。私としては、それ程上原さんを親しく思っておる。これもやはり、短歌が深めた友情である。

はるばると友が持ち来て呉し蘭匂い豊かに今朝を咲きたり

７９・９

山崎益一兄から戴いた蘭である。山崎さんは、約十年間酒井先生と一緒にグワイラ歌会の年二回（新年歌会と六月の記念歌会）の催しに出席してくれた歌友である。最後の五、六年は先生は神経痛が昂じて歩行困難であったので一人旅は危ぶまれる状態になった。その頃山崎さんは先生の杖となって来てくれた。山崎さんのお蔭で、先生の旅が安心出来たのであった。歌の縁りの深さを思う。

その他私の歌にはないが、心の通う歌友が幾人もあるのだが、書き出すと限りがない。

私は現在、仕事から退いておる身であるが、もし短歌が無かったら退屈な時間があるのではないかと思う。その意味から、短歌は私の今からのよい道連れと思っておる。そして短歌に繋がる人

間関係は、なお大切にしてゆき度いと思っている次第である。

## 自らと夫の生に

西田　季子

与えられたテーマ「わが生涯と短歌」この七ツの文字をじっと眺めていると、文字の背後からゆらゆらと、過ぎ去った移民の日日が浮び上って来る。

「私の生涯とは何であったろうか」、「私にとって短歌とは何であったろうか」この二つのものはいつどこで、どうしてからみ合ったのであろうか。今改めて表題の前に思い沈むのである。

二十才で既に母であった私、幼児を背に弁当を肩に、カフェザールに通った日日、借地農、コーヒー園のメイア農と奥地を転々とした日日、働く事以外に体力や精力を尽くす事を罪の如く思われた雰囲気の中にあって、吾子へのいとしさと哀れみに涙をこぼしながら夫を信じ未来を夢見た若い自分を思い出す事が出来る。

「短歌が好きだから」と私達は云う。では私達は短歌のどこが好きなのか、詩では、俳句ではいけないのか。この点をこれと指摘できないまま生涯を三十一文字の短詩型の中に埋没する事になっ

た。

肉親の縁にうすく内攻的性格であった私は、独りでいる事に何よりの心の安らぎを覚え、手当り次第手近な文学書を読み漁った。夏目漱石、菊地寛、有島武郎から西条八十、白秋、藤村と全く乱読であり、実（み）にも肥料にもならない。九条武子夫人、白蓮女史、啄木、晶子等の歌人の名と短歌のいくつかを心に刻んで移民となったのが私の文学の下地である。過去を捨てて移民となった以上、郷愁も労働のつらさも、当然の事として面（おもて）を上げてうけ止めなければならない運命にあると思っていた私は短歌など自分には程遠い存在であった。

野の果てにかくれて住める拓人の悲しみ乗せて秋風ぞ吹く

或日この短歌をブラジル時報の紙上で見出したのはいつ頃であったか、はっきりした記憶はないが、奥地のサッペー小屋の夜明けの竈の火朋りであったと思う。

私は自分の心の中を詠まれているような共感に胸がしめつけられた。そしてその頃から漸くブラジルの新聞に文芸欄のある事を知り注意して読むようになった。坂根総領事がいくつかの雅号を巧みに使いわけて作歌される事、徳尾氏が短歌欄の選者である事を知った私は自分の作品を恐る恐る投稿したのであった。徳尾氏の手引きで三、四回位新聞に投稿して、漸く興を覚えた頃武本氏と選者交代となり、一寸ショックを覚えたが、武本氏の熱心な選

歌態度に打たれて短歌へと文学指向が定まっていったのであると思っている。

炎熱の砂地に裸足焼かれ居りマンガを探りにゆきし吾子等
ムダンサの高荷の揺れに触れたりしパイナは弾じけて白く飛びたり

二十七、八才頃の作品であったと思う。こうして私の裡に短歌は根を張っていった。日本への想いを断った筈の私が「横地」という旧姓で新聞歌壇に投稿している事を知った夫（西田）はよろこばなかった。衆目に触れる新聞等に投稿するのは顕示欲の強い人間のする事で、創った作品は心に収め秘すべきであると云うのである。それが短歌に対する彼の考え方であった。

しかし、やがて、旅先からの彼の便りには不思議にも短歌らしいものが書かれているようになった。

彼は日本では工業学校出の一介の技術者であるが、関東の大震災に生地横浜で遭遇し、九死に一生を得た後、英国人の牧師と共に天幕生活を続けながら伝導生活をした青春の或時代があったという。だから彼の性格の中には明治生れの頑固さと、大正時代に教育をうけた若者のデカダンスと、キリスト教の謙虚な愛の精神がミックスされていたが、日本文学の知識は短歌は俳句の親類で十七文字を三十一文字に引き伸ばしたものくらいに思い、私の作歌にも理解を示しながらも深入りする事は警戒する様子であった。

その彼がいつの間にか私以上に短歌の魅力にとりつかれていったのは一体何であろうか。短歌や文学を語る事によって人生を語り、酒を語り、或時は女性をも語り、欝積した彼自身の内部のはけ口を求めた行動ででもあったろうか。それはそれで女の私の知らない男同士の心の繋がりの一面である。

こうした関係の中に彼の作品は私と全く次元の違った作品として成長していった。韻文の持つ微妙さと優雅さ、陰影と光りの交錯の輝きにひかれていった彼である。かつて私にトルストイ、ゴーリキ、ドストエフスキーのロシャ文学、ツルゲネーフ、ビクトルユーゴー等翻訳文学の中に含まれる精神と思想を熱っぽく語った彼がである。七十一才で脳滲皿で倒れ、口も利けず身動きも叶わず、小犬に噛まれて傷をうけながら助けも求められなかった恐怖の中にも、歌に心を寄せていた事を見るとき私は一種の云い難い感銘をおぼえるのである。

夕風に吹かれて尻が冷たかり野原に立ちて小便すれば

襁褓での排尿の不快さ、冷たさ、自力で用を足したい一念が野原の立ち小便となった錯覚の作品である。

たまたまの外出によく知る道ながら我は皇太子の如く手を挙ぐ

移民七十年祭の頃、テレビ新聞で皇太子のニュースがしきりに伝えられていた。見舞いに来た息子の車に乗って一巡した街筋、萎えた体ながら、死から甦ったよろこびに溢れていた頃の作品、応えてくれる人もないのに、誰彼に夫は生の挨拶を送ったのであった。

## 更生への転機に

米川　久

一九四〇年、私が二十才の歳でした。右頬に出来た皮膚病の治療を受けていた際、医師の不注意からか私に運が無かったのか、故障中の太陽燈とは誰も知らずに私への照射が行われたのです。五分で自然停止する筈が止まらず二十分程続けられました。私は不審に思ったが医者のする事だからと我慢していました。傍にはいる筈の看護婦もおりませんでした。間もなく医者が走って来てスイッチを切りましたが、様子は慌てていました。私の顔は真紅に焼けて、丁度四谷怪談のお岩のようでした。

この日より私の行くところ人々の視線がつきまといました。遠慮のない子供は私を囲んで目をはなしませんでした。見世物のような存在となった訳です。私は人の前に出るのが怖くなり極度の小心、恐怖症となってしまいました。

こんな状態の日が二年過ぎた頃、私達一家はプロミッソンよりリンスの奥地のアリアンサ植民地に移住しました。

この植民地に、それも隣家に井本惇氏が住んでいました。勿論短歌に興味など持たなかった頃の私ですから、彼が歌人だとは知りませんでしたが、会って話をしている内に彼が歌人で文芸方面の知識にも詳しい青年であると思うようになりました。

或日曜日、惇氏に連れられて近くに住むやはり歌人の浅田今日志氏を訪い紹介されました。二人共私のお化けのような容貌には一言も触れませんし視線も注ぎませんでした。私には「地獄で仏に会った」気持でこの二人の暖い雰囲気の中に浸るように時を過ごしました。

「歌を作る人はみなこんなに心が暖いのだろうか」と感心し、「この人達とつきあう為に私も作歌を始めよう」と決心するに至りました。この頃より私の小心恐怖症が快方に向いました。

作歌を初めて二年くらい経った頃作品を日伯新聞に投稿してみました。選者は岩波先生でした。初投稿にもかかわらず選後記には「素質がある頑張るように」とありました。私が覚められたのである、それも小声でなく新聞紙上である。恐る恐る投稿した私の歌も活字となって発表されているのである。世の片（かた）隅（すみ）に隠れるように生きていた私には大きな悦びであった。その瞬間私の心に兆したものは「私でも人並みに生きることが出来るのだ」と云う自信でした。この時より私は更生の道に立ったのであります。その後は生甲斐の如く作歌に一心を打ち込みました。

この年一九四五年リンス歌会が初まり、それが広がってリン

ス・カフェランジア合同歌会となって催されるようになりました。この歌会で天津夢城、中山稠子、安良田済、武田公平、小石茂行、島田晋、竹山一郎、岡本早実、高峰、青木忠雄と云った諸氏とも識り合い、この人達の友情の豊さ、口には出さぬが知識の深さ等に接して私は拙ない歌作りながら歌人として参加出来る光栄をつくづくと感じとりました。

この会が続くに従って全伯に有名な歌人が顔を見せはじめました。サンパウロより清谷益次氏、小田切剣氏、ビリグイの開沼貴代氏、地元の多羅間絹氏と歌壇上層部の名の売れた人ばかりなのに初心者の私にまで分け隔てなく話かけて下さる温厚さは私の心に沁み透りました。

私の作歌が一九五一年まで続いた或時、日毎歌壇の武本先生に送稿しました。何カ月か経って先生より「君の歌には個性が無い」と云われました。私には〝個性〟と云う意味が判らず「先生個性とは何ですか」と質問しました。直ぐ返事があって〝人間各自にはそれぞれ違った思いがある筈だ。その違ったおもい、それが個性だよ」と説明されてありました。判ったような判らないような思いのまま日が経って行きました。

一九七八年に私は白内障を病み同時に狭心症を患い、その上に十五年来の糖尿病がありました。だが勤務にはさしつかえなく通勤していました。だが運の悪い事は重なるもので、或朝信号を無視して疾走して来たオートバイにはねられて頭を強打して七針縫われました。医者は「もう勤めは出来ないよ」とINPSのエンコスター

ドに編入してくれました。それからの収入は半減しました。やって来たのは貧苦と病苦でした。五人の家族を支える収入を病苦の中より考えねばならぬ日々に私の前に現れる歌材は”切実な苦しみ〃でした。二三の友人は「君の歌は悲壮すぎる」と忠告してくれました。この悲壮と云われる私の歌に私の個性がのぞいていたのでないだろうか。

一九八四年にはいって私の歌が「椰子樹」の人集に推されはじめました。この欄に推される事は私の夢であったのです。が私の力量では到底見込みはないと諦めていました。だが夢は実現しました。私は目指した地点に辿りついたのである。小さな望みと笑われるかも知れません。でも私はこれで満足です。

私は今年で六十五才を迎えました。歌歴は四十二年くらいでしょう。この長い過去を顧みて短歌は私を救ってくれたと信じています。これからも短い余生の心の支えとなってくれるでしょう。編集部より送られた題材をまとめると以上の如くになりました。生れて初めて書いた文章です。間違いだらけと思います。何卒お許しの上御判読下さいますようお願い申し上げます。

## 衝撃と支えの中で…

藤　田　美　砂　子

一九四九年、よみもの柳壇に主人が投句し始めたころ、ただ育児

にかまけている毎日では、いずれ置いてけ放りにされるおそれが目に見えるように思えたので、柳壇に少しおくれて設けられた歌壇に生れて初めての投稿を試みた。私にとって出足は思いの外順調で、未知の分野に生気を与えられてうれしかった。

ところが、間もなく私の一首が新聞紙上で俳人石川芳園女史の鑑賞にあい、全身がカッとする恥ずかしさ、やりきれなさを味わわねばならなかった。ーあとで考えるとこれはただ傷ついたと言うのとはどこか違う、未知の分野に分け入った戸惑いも多分にあったと思ったけれどー。

不意に受けたこの衝撃は、主人の思いやりと武本先生から励ましのお手紙を戴いたことで心が凪いだと言えそうである。と同時に、芳園女史の一文によって感じたことは、取り上げられた一首に対する男性側の寛容さと女性側のそっけなさであった。

これは恐らく生理的現象で止みがたい感情であろう。ーとこれも後に気付いたことであるが、当時は初心の悲しさが身に沁み、せめて、「子を生まぬー」を、「身ごもらぬー」とでもすればよかった、などの悔いはあったけれど一首の内容はその後も一貫して私自身であった。

この事により、一度公表された作品の性質を知り耐えることと反省を教えられた。その後、断続的に投稿していた日伯歌壇では、選者の武本先生から停滞は退歩を意味すると訓され、椰子樹に入会してからご教示いただいた瀬崎先生からは謙虚の大切さを教えられた。全き家妻の私は短歌を窓口として少しずつ世間へ眼を向

けて行ったとも言えよう。

一九七一年、墓参が目的の訪日のささやかな土産のつもりで私共は、拙い旬歌集「移り来て」を刊行した。その後、椰子樹のご好意でこの書の合評があり、前記の一首が抜けていると言うことや、「思春期の子の上に過ぎゆく日月を眼の底に追いて疲るる」の一首の眼の「底」は不必要との陣内、小笠原両先生の説に対し、清谷、井本先生は必要と認めて下さっていることを読んだ。私としては「底」の一字にこそ心を盛ったつもりだったので、認めていただいたことがとてもうれしく、その気持も含めて井本先生に長い手紙を認めた。芳園女史の鑑賞に打ちひしがれてから二十年、私は始めてあの一首にふれ、あの鑑賞にふれ、鑑賞の批判にふれ、そしてあの一首が墓参に不必要と思い「移り来て」に載せなかったこと等々、それらを「エレガンス・オフ・ウーマン」と言う女性許りがモデルの写真集の中の一葉と、それを写したカメラマンの一文を引用し、それに私自身の女としての内部にも問いかけながら書いたものだった。

返書はなかった。けれど思いきり胸中を吐露したあとは清々しかった。約一ケ年後、先生から封書が届いた。怪我をされて動けないところから私の手紙を再読して下さったとのこと、以前には迎合の危うさを感じてすぐには返信できなかったとのこと等が認めてあり、私には一年を経て戴いたこのお手紙に却って・重みを感じていた。

四人の子等が次々に一家を成して離れてゆき、これから私共の

残りの人生を少しは充実させたいものと思っていた矢先力尽きて主人は逝った。彼との死別は同時に私の人生の終りを意味し、残されたのが淋しがり屋の彼でなかったことをせめてもの慰めとしていた時、武本先生から、主人の想い出は大切にするように一加えて先生ご自身の晩年に対する心算りを細々と認められたお手紙を戴いたことは傷心に沁みてありがたかった。

人とのえにしが死別によって全き過去となった時から、その人の全貌がおもむろに浮き彫りになり、至らなかった自分が反省される。月日が主人の死の悲しみを漸く和らげてくれた頃、相次いだ先生方先輩方のご逝去は新たな衝撃だった。死は早晩に確実にくるとは知りながら、心の依り処を?ぎ取られたように幽明世を隔てられ残された者の厳しい現状が余りにも心に痛かった。

美しい想い出、楽しい想い出をより多くつくっておくことが晩年の仕合せだ、と何かで読んだことがある。その意味では今私の胸中に溢れる程甦る思いがある。だけど亡き人への話しかけにはどうしても一抹の淋しさがつきまとう。

よみもの歌壇で、徳尾、清谷両先生のご指導を受けてから実に三十六年の歳月を経た。ただ長い年月を重ねたと言うだけで実績が伴ったわけではサラサラないけれど、その間、直接的にせよ、間接的にせよ、よき方達に巡り逢えたからこそ今古稀を迎えながら恙なく、陽のあ実る緩い坂道をゆっくり下って行く心境にあるのではないかと思う。

編集部より与えられた「わが生涯と短歌」のテーマは、とてつ

もなく身に余り過ぎてコッケイにさえ思ったけれど、それとは別にこの拙い一文を認めながら私は溢れくる涙を拭いつづけていた。

それは改めて瞼に甦らせた亡き人々への限りない思慕であり、現存の方達も含めて長い間私を支えて戴いたことへの言い知れぬ感謝の涙であったと思う。

## 全き生活の一部

川　原　比露思

ブラジルの日系コロニアに生まれた「椰子樹」という純短歌誌が、今年十月に発行する号を以て二〇〇号に達し、これを紀念して別冊記念号を刊行するという。

私に与えられたテーマは、「わが生涯と短歌」である。私の生涯にとって短歌とは何であったか、そこから得たもの、失ったものは何であったのか、といったことをポイントにして随想風に回想のページを繰りながら断片的に書き綴ってみたい。私と「椰子樹」とのかかわりは創刊号からつづいているので随分と古い方である。

その当時からの歌の仲間が現在は幾人ぐらい生き残っていることだろう。特に最近は椰子樹を盛り上げて来た大切な人達が相次いで鬼籍に入り、変らぬ人間的信頼をもち続けてきた歌の仲間であるが故に、限りない哀しみと寂しさを感じるこの頃である。嘗て私は椰子樹百五十号記念号で、「物故歌人作品集」というのをまとめながら潔い寂蓼感に捉えられたことを今も生々しく思い出す。

私の生涯に於で短歌の占める位置は意外に深く、且つ重いものである。生活の一部でさえあったと云っても過言ではない。それは内向的な心情を表わすのにもっとも適した詩型であったともいえる。

短歌に親しむようになり多くのよき友人と親交を結ぶことが出来たことは、私の人生にとって大きなプラスになったと信じている。作歌のむずかしさ、批評のむずかしさなど、試行錯誤の動物である人間にとって迷いは必然的な避けられないもので、その間周囲の人達に啓発され歌自体の魅力や、鑑賞者の鋭い目による引力など大きな影響を受けだ。これは芸術的自己実現の発揚に繋がったことを否定できないと思う。

私はある期間「椰子樹」の選を担当しているとき、当時日系商社に勤め何かの都合で選歌作業を徹夜でやったことがある。

まだ五十才前後でそれほど疲労も覚えなかった。夜中に妻が熱いカフェを出してくれたりして朝まで頑張ったこともあった。若い時はサンパウロ短歌会にも熱心に出席した方であったが、時には妻の淋しそうな表情をみてこれでいいのかなと思ったこともあった。私の作歌活動には理解をもっていてくれたが今思いみて多少の感慨なきを得ない。

第十一回の全伯短歌大会で初めて、同人選一位に人選したとき一番よろこんでくれたのは妻であった。偶然にも妻を対象にした作品で、「冷凍魚水にもどしつつさりげなく過ぎし平安を呟ける妻」というのであった。もう一首の、「濾過されし如き想いのきざ

しつつ銀婚の夜を妻と親しむ」が高点歌四位に人選し、総得点でも一位で、意外な好成績に自信をいくらか持つことが出来た。

またこの大会に寄せられた日本短歌社の木村捨録氏のメッセージの中の「短歌を作るということは決して遊びではありません。現代短歌は私ども日本人と日本人に直結するなまなましい生活詩であり、この生活詩をとおしていかに秀れた人間を形成するかに短歌文学の前進があるのであります。」の言葉が印象的であった。第三十回全伯短歌大会の席上で幸運にも私は大会無欠席ということで表彰された。ある大会の前夜など風邪熱でとても出席は無理と自分ながら残念がったが、妻の熱心な看とりのお蔭で大会の朝はすっかり熱が退き、とにかく不安ながら無事に大会に出席出来たというようなこともあったのである。

現在老境に入った私の胸中に去来するもの、違い日の回想がなつかしく浮び上って来る。若い時私と妻は日曜日となるとよく映画を観賞したものである。それも初めに日本映画を観賞し、帰途別の映画館で外国映画を観賞するという具合にいつしか習慣になっていた。その中で今でも鮮明に浮んで来る映画がある。アメリカ映画の「愛情の花咲く樹」というので、主演女優はエリザベス・テーラーであったと思う。画面が美しく、感動を呼ぶカラー作品であった。思いがけぬ素晴しい名画に妻はすっかり上機嫌だった。その妻も今は亡い。ー人間（人体）は機械だとはじめていったのは愛娘フランシーヌの死に慟哭したフランスの哲学者デカルトである。死は決して精神の欠如によって起こるのではなく、

単に身体の或る主要部分の破壊のため一に起こるのだ。肉体の死は、時計におけるゼンマイの停止にひとしい。ならば肉体の死を死んだ妻はいま、病苦や雑用のすべてから放たれ、西方浄土とやらで今もハミングしているだろうか。いつも厨ではたらきながら愉しげにハミングしていたように。短歌が独白的なものになり勝ちであるのは止むを得ないが、永い私の作歌生活に於ける作品の中に流れるすべての哀歓は私のメモランダムでもある。

歌を作るのには相当の時間がかかる。人によってはたちまちに三十一音の型に叩きこんで事終る類の人もあるだろう。

私など何時間もかかって遂に一首なく呆然と立ちあがった時、脈絡もなく別の素材で一首を得ることがある。この一首で先の空白を充たすことが出来る。私は人生をこのように切りとって生きてゆくのである。作歌のために苦闘した時間が最も充実した私の人生であると思う。

「椰子樹」に拠点を置き活躍した若き日の一時期を今もなつかしくおもいみるのである。

## 六十年を共に生く

開沼　貴代

「椰子樹」百五十号記念号が内容の充実した立派な本になり刊行されたのがつい先頃のように思われるのに、今度は二百号記念号

が出ると云う。あれから八年経つうちに、幾人もの会員が逝きこの二三年の中には「椰子樹」にとって大切な武本、中江、井本、酒井の諸先生が逝き今年は富岡氏も亡くなられた。

椰子樹にとり悲しい期間となった。しかしその反面「椰子樹運営」に適任者を得て、経営は着実なものとなり会員が増え、大会は年々参加者が多くなり昨年、今年は百三十名と云う盛会であった。短歌の将来性は当分楽観できるのではないかと思われる。

私は幼い時より読書が好きであった。小学三年の頃から新聞を読み慣れてきた。友達と雑誌を交換して読み漁ったものであった。新聞雑誌にはそれぞれ文芸欄があるので、早くより短詩型文芸に馴染んで来た。見よう見まねで詩らしきものを作り文芸好きな友達仲間で見せ合っていた。十四、五才の頃は歌らしきものも作り回覧誌にして廻し読みしたものであった。歌は初めの頃は九条武子、啄木、牧水などの歌を愛唱したのであった。

十六才の春、家で購読していた札幌市の北海タイムス歌壇におそるおそる初投稿したところ、五首出したのが三首載せられた。選者は私の好きな歌人若山牧水であったがその中の一首は今でも覚えている。「ある時は夜の河畔に涙する暗き心の吾なりしかな」で、これが私の歌が活字になった第二号であった。

当時思春期を迎えて人間は何故年頃になれば結婚しなければならないかと、人生の大問題に頭をつっ込んで悩んでいた頃だった。

この頃より詩をやめて短歌にうち込んでいった。この北海タイムス投稿は私の結婚後もおりおりながら渡伯するまで続いた。こ

の頃は九条武子を卒業し、牧水、節、啄木、庄亮、迢空などに魅かれていた。啄木の歌は今でも読み返して見ることがあるけれど感動は昔と変らない。一九三四年三月に着伯し、ブラジル時報が新年文芸を募集したのに応募し第二位に入賞した。「童らと野風呂のほとり焼芋を賞でつつ語る満月の宵」で、ブラジル生活第一年の開拓村風景であった。間もなく徳尾渓舟氏が選者となられ親切に指導されるようになった。自作農家の主婦は畑仕事が主で、家事育児は片手間なので大変忙しい。農繁期には歌どころではないので休詠すると、貴女の投稿がないので淋しい。早く歌稿を送って下さい、と励ましてくれたものであった。この時報歌壇とのつながりで、待望の「椰子樹」が生れた時私も同人のはしくれとして参加したのであった。

戦後「椰子樹」の復刊も成り故国の雑誌も入ってくるようになった頃、徳尾氏のすすめでアララギ誌の会員となり、初投稿したところ土屋文明選に思いがけなく二首採られてかなり上位に載ったことを、岩波先生はとても悦んで下さり、折から右手を痛められて農繁期を休んでおられたにもかかわらず、早速悦びの手紙を書いて下さった。それが当のアララギ誌よりもひと足先に入手できたので、よけい嬉しくて感激の涙が出た程であった。

その頃選歌欄に載った歌に「三年も毎月歌を送ったのに一度も採ってくれない意地悪文明」という意味の歌が載っていたので、それ程厳選の文明選なら容易なことでは入選出来まいと思っていたので張りきって投稿した。時には文明選と推薦欄両方に五首

載ったこともあったが何分にも市から四〇キロもはなれているので郵便事情が悪く二年程で中止した。

若い時から詠み続け消長はあったものの、よく飽きずに六十年も作歌を続けてきたものと思う。凡庸な性格で歌の才能があると思うのではないが、好きで続けているに過ぎない。多い兄弟の中から離れ身寄りのない私は孤独であった。

移民として渡伯し直面したさまざまの困難や、押えようのない望郷の念いも、何も知らずに連れて来られた幼らを守るためにも暗い顔は見せられない。苦しいにつけ悲しいにつけ一心に歌を想うことに依って、心の苦痛は軽くなり、悲しみにうっ屈した想いが発散され、精神の平衡を保ってきたように思う。言わば短歌は私の場合不信心な私の宗教であり、作歌することは自らへの鎮魂賦でもあったとも思われる。一九七九年、日本の講談社が刊行した「昭和万葉集」に応募した私の短歌が一首採用され、入選のお祝いにと、カラー写真入りの花鳥小事典が贈られてきた。何万首と云う願大な数の中では砂山の中のひと粒のゴマに過ぎぬのだけれど、この時は本当に嬉しく、心が充たされた如くほのぼのとした念いが幾日も続いた。

ふり返って見ると苦労のみ多くて、報われることの少なかった私が、孤独な一生を真面目に人生を辿って来れたのも、歌に支えられてきたからのように思われる。「作歌するには謙虚な態度で……」などは、人生の教養にも通ずるので、教えられることが多かった。短歌に関りを持ったことで、人間的にも勝れた多くの仲

間を知ることが出来、三十年四十年もの長い間を、変らぬ友情を持ち続ける幾人もの歌友をもつことは、歌を詠む者の一つの幸せとしみじみと想う。私の魂に触れた数ある古い手紙を折りに読み返してみる時、当時の時代情況まで鮮かによみがえってくる想いがするのである。

## 爽かな生涯のために

山崎　益一

「吾が生涯と短歌」の主題で執筆せよと編集部からお言葉を寄せられたのですが、このテーマだけを人に読まれると、如何にも私が短歌に親しんで良い物語でもあるように思われる事と存じます。処がこの山崎には短歌に繋がったご縁は残念ながら甚だ薄いのです。

と言って、全然和歌と言い、短歌と呼んで目にしなかった口に呟かなかったと言うのではありません。ただ「椰子樹」誌同好者先輩の方々のように若い時から、または幼年時代から身を入れて三十年五十年と努力精進された方々のような物語が無いと言う事なのです。日本での学生時代、学友の中では文芸に心を寄せ短歌を好む者、音楽を、画を、書を好む老等々十人十色の好みを撰り取ったものでした。

このような中で私は音楽と政治に魅力を感じ音楽同好者仲間に

入り楽しんで、七五七五又は七七七五と歌詞を並べて見た事もありました。月日が縫っにつれて突然十九才の頃政治に傾き、私の念頭にあの時代の日本では許されない思想を抱き、考えを深くすればする程、他人は勿論兄等にも反対され、反対されればされる程思いは深まるばかり、遂には学窓を追われ、郷里にも国土にもおられぬ人間となり、遠い遠い地球の裏へ身を避ける運命となったのです。

屯田兵の父が軍人、長男次男三男皆軍籍に在った家のこと、また生れた野幌兵村（のつぽろよぼろむら）は二百四十家族の軍人村、このような環境の中に四男坊の私が一人抱いた思想は一層自身を狭ばめなければならない事になったのです。一九二三年八月郷里北海道を発って、東京小石川山の手に在った親戚の家に旅装を整えていた九月一日午前十一時五十八分、あの関東大震災に出逢いましたが幸いにして小石川区山ノ手は上野公園同様火災を免れました。然しブラジル行きの船は以後横浜でなく神戸港から出る事を騒ぎの中に聞き出して、今度は阪神電車の沿道に在る天が崎市の親戚に身を寄せ、郷里から持って来た荷物を震災で失ったので、再度身仕度をし、一九二四年一月二十六日母国を離れ、七十二日を費やしてサントス港に上陸したのです。丁度この日が四月八日でお釈迦様の誕生日。

一年八カ月の耕地生活も私の将来を考えると、他国に移った身とは言え、帰国は許されず、邦人の間では絶対受け入れて頂けない思想の持主の私、何れは伯国の土とならなければならない人間

であれば極力伯国々民と交わって生きる一途あるのみ。
それには第一伯国語を習得すべきであると決心、一九二六年五月当時の聖州義塾々長であった小林美登利氏を頼り出聖し、氏の斡旋で幸いにも時のブラジル時報社に籍を置かせて項き、義塾の夜学で葡語文法を四カ月真剣に習得して中学に入り、一九三一年終了、あの当時はコロニアの二世で日伯両語を会得して社会に出ていた者が少なかったので、私の思想を知らない二、三の有名邦人会社から招きを受けたのですが、自分を知る私には受けられず、一先輩の紹介で聖市中心街の独逸人経営種苗商会の招きを入れて一挙邦人社会から遠退いた心地で、第一カタログの翻訳、通信の訳、新種子輸入、その発芽及び品種試験を担って一九三六年迄勤め、この六カ年の間に州農務局及び連邦農務省に三、四人の友人が出来ていたので、招きに応じ一九三七年から嘱託の名称の下に政府の仕事に携わり、農業に関して伯国領土を農業を追って三十一年間旅行を続けたのです。
　この間に、私自身の身の廻りも変化が有り、同時に世界中にも、特に一九四五年以後の日本及び日本人の立場も急転し、私は一九五八年暮れ停年となるし、してこの機会に生れ変った気持で邦人の多いスザノ市に住宅を求め愛妻と末の男子と三人で移って来たのです。
一九六七年、妻が血圧で病み伏したのが機会と言うか、五十幾年前顔知りであって、今は短歌の大先輩である八巻耕土さんが、私の淋しさを慰めて下さる意味だったのでしょう、突然スザノ短歌

会に入るよう誘って下さったのです。子供九人を月給生活で育て上げるのに夢中で、好きな音楽にも手が出せず過ごした私。八人の女子を一人前にした今、私の身辺に空間が出来たような立場だったので、心良く受けさせて頂き、一九六八年五月五日丁度節句の日のスザノ歌会に出席し、席上で私が旅行して居た時イタニャエン市でお顔を見受けた吉本青夢さんに会い、また新聞紙上でお名前だけ見て居た酒井繁一先生に初めて顔合せをさせて頂いたのです。その時先生から一度自宅へ来るように申されたので、二、三日してお宅を訪問し窪田空穂先生の著になる「短歌入門」と言う本を一冊頂いて帰り読まして頂いて、爾来下手なまま十五日間に二十首、月に四十首の作歌を欠かさず、十二年間短歌に上らなかった熱を上げ、大した進歩もせず過ごしたのです。一九八〇年からは先生の承諾を得て、以後作品は下手でも上手でも自力独歩する事にして、歌会にも歌語にも自作のまま「椰子樹」誌に東京の「まひる野」誌、郷里札幌の「原始林」誌にも各先生達の指導の下に発表させて頂いております。

間もなく、酒井先生が神経痛を患われ、以前はお一人で方々地方歌会に赴かれ指導されておられたのですが、歩行に自信が無くなったからと言われ、なお病いを押して出向かれるのに誘われるままに同行してカンポス・ド・ジョルドン、グワイラ、サントス、遠くはロンドリーナ、アサイ、それに酒井先生最後の新短歌会創立と言うべきスザノ福博短歌会と、度を重ねて永い間参列させて頂きました。その都度歌友と言う名の下に和やかな雰囲気、愛情

籠ったお友達を知ることが出来ましたのは私の生涯の中で最も幸福と感じている事です。

幼年、少年、青年初期迄郷里で親しんだ友もありましたが、前記の如く淋しく出郷した私、今八十才の老齢に至り、社会生活を始めてからの三分の二の年月を邦人社会外に身を置いた私には、現在は昔と違って私の嫌われた思想も噛みしめて項ける邦人社会に爽かに生きて居ることは、余生少ない吾が生涯に短歌を通じて本当に明るい生活を送っていると言うことです。

## わが裡なる息づき

森　重　扶　美

黄イペーの花が野山を彩り、人家の庭にも明るいかげを落しているブラジルの春。

毎年、この時季に催される全伯短歌大会であるが、今年は第三十七回目。九月八日に全伯から参加した歌人は、百二十名余であった。清谷、安良田氏を始め、大会実行委員の方々の、行き届いたご配慮のおかげで、盛会裡に終了することを得た。

わたくしが夫の羊鈴と共に、短歌大会に初めて出席させていただいたのは、第六回目であった。今から三十年むかしのことになる。

それにしても、ここ四五年のうちに、出席者の顔ぶれが、随分変ってしまったように感じられて、一抹のさびしさを拭うことが

できなかっか。余りにも多くの師友方が、相ついで逝かれ、幾人かは病床に在る。今年の大会ほど時の流れということが、身にしみたことは今までに無かったと思う。

しかし、こうして新しい歌人が増えたということは、やはり喜ばしいことに違いない。中堅層の作者たちが、作品の向上をめざして、精進していただきたいと切に希うものである。自分をも含めてー。

この度「椰子樹二百号別冊記念号」が刊行委員方の手によって発刊されることになり、私にも「わが生涯と短歌」という題で書くようにとのお達しがあったので、思いつくままペンを進めることにした。

生涯を通じて、私の裡に短歌が占める位置は大きい。というより、若し短歌が無ければ、私の人生の意義は有り得ないのではないかとも思う。たとえ活動している時でも、停止している時でも、短歌は私の裡に息づいている。

記念号に文を書くに当って、「百五十号記念号」に眼を通して感慨を新たにしたことは、故中江克巳氏が、「椰子樹を動かした人々」＝地方歌会の推進群＝と題して克明に執筆されている中に、「バストス短歌会」について紹介もあったけれど「地方歌会の動静」の部では、「バストス歌会」の名は既に無い。

顧みれば、バストス短歌会が発足したのは一九五〇年であった。一時は二十名内外の会員に依って毎月例会を持ったが年々歌友の他地方への移転が続き、「創立二十周年記念作品集」の刊行を最後

に、例会二百三十回後は、残る者六、七名となり、それもまた一人欠け二人欠け、夫の羊鈴や残りの二三の歌友も遂に作歌から遠ざかってしまった。ひとり私は間歇的ながら「椰子樹」「コロニア詩文学」に出詠し、余命を保っている現状である。

私が「椰子樹」に入会したのは、一九五〇年のことで、二四号に初投稿して以来会員としての歩みが始まった。毎月の歌会出席と椰子樹への出詠が、貧しい家庭にあって育児に専念する私の支えとなっていた。

また、短歌を通して関わってきた多くの人たちとの恩愛の絆は、いまも尚強く固い。「椰子樹」と供に歩んできた三十五年という年月の重さを噛みしめている今日この頃である。

それにつけても、創刊から二百号に至る今日まで、中央の師友方の無償の愛、献身に依って保たれてきた「椰子樹」であることを思うとき、ただただ額を垂れて感謝する他に気持を伝える言葉は無い。

短歌を知ったおかげで、自閉症的性格で世間知らずの自分であったのが、徐々に眼を開かれ、先生方、先輩の皆さんから、温かく、時には厳しく導かれ、励まされて、何とこころ豊かな日常を過ごしてきたことか。短歌によって失ったものは何一つないけれど、社会生活の上で、絶えず心の中に葛藤があったのは事実だ。

葛藤を解くすべ あらぬ夕庭に寺塔の鐘は刻ながく鳴る

の一首を残している。自分自身の裡なるものと、或る時は対人関係で。しかし、うたに執する時、苦しみすら救いであったことを思う。

短歌に対する理念のようなものを「椰子樹」百号記念号に書いたが、今読み返してみて、それは現在でも変っていないのだけれど、心身の衰えは覆うべくもない。

しかし、短歌と共に果てたい、という希いは切実で捨てることは出来ない。

私の生涯で忘れてならないことは、徳尾渓舟氏を委員長に、刊行委員諸氏の総力を集めて「コロニア万葉集」刊行という世紀の大偉業がなされたことである。

コロニア歌人にとって何ものにも替えがたい貴重な宝であることを、衷心から感謝して止まない次第である。この一冊の中に、自分の分身としての作品が収められてあることを思う時、思い残すことは無いような気がする。

昨年、半世紀ぶりに母国訪問が叶い、帰郷した際、この一冊を寄贈してきたが移民の辿ってきた足跡を、郷土の人々がどのように受けとめているかと思うと、興味深いものがある。

記念すべき「椰子樹二百号別冊」の刊行を前に、中江、武本、井本、酒井の諸先生、また多くの歌友の相ついでの長逝は、返す返すも惜しまれてならないが、二百号を機に、清谷、安良田氏を先頭に各選者の方々と共に、会員一同意欲を新たにして、椰子樹発展のため尽したいものである。

記念号の刊行を祝し、併せて刊行委員諸氏の労に感謝を捧げ、擱筆とする。

## 個人史そして生活記録

住　吉　光　雄

短歌とは私の生活に於ては一体何であったろうか。この疑問を私は各段階に分けて解明してみたいと思う。第一に青年期のそれについては実作を示してみることが早道ではなかろうか。

私は青春前期すなわち十七才から二十五才頃にかけて文学に親しむ機会が多かった。それは雑誌社、新聞社の生活がそうさせたのではあるが、殊に石川啄木の三行短歌に強い興味を持ち、甘美な声調の世界に夢幻の陶酔をおぼえていた。

然し現実は決して甘美な世界ではなかった。マットグロッソ州境近い寒村で農業就働一年もたたぬうちに肋膜炎を患った。闘病の生活と医師のすすめもあって私は出聖の決心をした。それは未知の世界に踏込む私の自分との対決の第一歩であり、農生活との袂別でもあった。

兼ねて申し合せてあった武本氏との連絡のため私は至急電報を打って置いたのだ。

早朝の霧のホームの霧の中駆け来るは武本、樋田両先輩

松下路ゆけば松思い竹下路ゆけば竹思う日本荘の庭

貯水池の赤錆水をかき分けて羽搏く白き水禽の群

今にして思えば優雅なる時代であった。日米開戦を中にはさんでの逃避行ののち終戦の年に結婚式を挙げた。あわただしい不安な結婚式であった。

動作軽く弾ませながら小柄娘がふかぶかと礼す黒髪ゆれて

会釈せし娘がまなうらを過ぎゆきぬ夜空の月の冴え冴えし夜に

ちさきその手もて引き寄せ父われに見よと云うかも猫のしぐさを

幼な（さを）子に荒髭わざと打ち寄せてむずかり泣けば妻に渡しぬ

望郷の思い切なり荒磯に立ちてひととき波の声きく

私もすでに四十才を越え風塵逆巻くなかで揉みくちゃにされながら何か生きる目処もつくようになった。そうした転々ののち銀行員生活が始まるのであるが、第二段階の壮年期の私を勇気つけ励ましてくれる貴重な人物とめぐり合うことができて、私の個人史、また「生活の記録」ともなった粉飾のない一途な・短歌道をつき進む決心をつけたのである。

その人は津野博喜氏と云って陸軍特務機関、中野学校の出身者であったが短歌とはおよそ縁の遠い存在であった。彼は短歌に対する印象を五七五七七の風格を備えた格調高い優美なものと考え

ていたが、真実に裏打ちされた生きた記録を読むに及び短歌に対するイメージを一変したと云い、終始一貫何物をも恐れない磁石（じしゃく）の針が南北を指して変らないように、良心が義務に忠実なそして粉飾のないありのままの記録こそ人の心を打つと説くのである。

吾が各呼ぼる大講堂に起立して感慨ふかし吾が名呼ぼるる
（銀行勤続十年）

厳し自戒のこころ沈めて持ちたれどわが心底に泡立ちし海
いきり立つわが狭量を吹きぬける風ありて常に後のむなしさ

津野氏は続けて説く。銀行と云う奇怪な組織、即ち冷酷非常な資本主義体制の中でかくも長期勤続出来得られたのは、文筆活動、就中短歌と云う心の憤懣を叩きつけられるものを持っていた賜であると云っても過言ではなく、もしこれを持ち合せていなかったならば憤死をも辞さない事態を招いたかも知れない、と。正に津野氏の指摘の通りなのである。

ただに必死となりて生き来し才月は過ぎ去り淡く残るものなし

つきつめて思うことなき平安を幸とし我の日日が過ぎゆく
二男二女無事に巣立ちて飛翔する浮かぶ節目となりし日日思う

喪いしもの限りなく浮かび消えしばしば漏るる深き溜息
僅かづつ積み重ね来し歳月の重みは深く老に傾く
妻と子を守り引摺るごとき過去遥かに遠き旅を来にけり
単調な原始の生の明け暮れを鍬引きて過ぎしかの十年は
暁闇の肘掛椅子にふかぶかと偲ぶ流離転生の日日
鮮緑の野を渡り来る風すがし野鳥のこえのひとしきりして
新壁の匂い漂う厨辺にカトレア蘭の花鉢は冴ゆ
丘に残照の余光がありて淡々と引く影うすきこの土の上
動き尠き夕映えの空仰ぎつつわが定年に思い至りぬ

私の壮年期はかくの如くに過ぎ去った。最初は青春の感傷から、壮年期には現実直視また逃避の手段として、晩年は自己内臓の核心に迫りたいと思うこころ切である。

昨年は訪日旅行をすませ五十二年目に父母の展墓を行い、帰伯してすぐ血管静脈の移植貴術と云う誠にやっかいな病気に取りつかれ、何とか死線を抜けはしたが体調はまだまだ復元とまではいっていない。手術後は医者のすすめで毎日散歩に行っているが、足のしびれが続いていて心底おだやかではなく、生涯連れ添って来た短歌を杖とも柱ともたよりにして生き続ける毎日である。

魑魅魍魎夜毎出で来て苛める夢次々と朝まで続く
手術後の特別病棟に幾時間醒めたる夜とも昼とも分たず

# 自らを現わす影

安部栄子

わが生涯と短歌は一言にして切っても切れぬ己れについて廻る影のような存在だと思っている。と言う事は何も六十年に近い歳月の間連綿とつづいて来たと言うわけではなしに、昔昔、気の合った文学少女の友と一しょに誰ひとり指導者もなく、啄木の歌にひかれてこの道に入ったのであったが、それから六十年もの月日の中で面もこのブラジルの果てへ来て迄つづくなどとは夢にも思いみなかった事である。

その友は短歌、唄う歌、劇もやり絵も書くと言うような万能者であったが、当時農民運動に熱を上げていた好青年と一緒になり、子供を二人置い亡くなってもう五十年もの古い歴史の中の人となってしまった。

私の短歌も幾度かの起伏を越え長い時には七～八年もの空白時代もあったが、ある時のあるキッカケから小さな芽を吹き、この「椰子樹」の発刊以来は何とか細々ながら四、五カ月から二、三年の休眠はありながらも現在のようにつづいているわけで、この「椰子樹」も今度で二〇〇号とのこと、思えば長い月日の流れの中で私はこの短歌に依って何を失い何を得たであろうか。私の場合失ったものは全然ないと断言出来るし、得たものといえばこれに依ってどれだけ多くの良き師良き友に恵まれて来たことであろうか。今や歴史の中の人となった岩波先生をはじめ、近くは中江、武

本、井本、酒井先生方、よき友の誰彼の面影が去来して胸を熱くしている昨今である。

私が初めて大会に出席したのは第三回目であったろうか。その前の七月頃に山を訪問された、岩波、酒井、瀬崎先生に西日、大原、植村さん方、山からも大分集まって約三十名程で山としては初めて歌会と名のつく集りを持ち、それを第一回としてカンポス歌会はつづいている訳で、あの時の二十名程の中殆ど半数に近い人たちを失っている。

その時一泊された岩波先生がやおら取り出された矢立の筆で絹地の短冊へ例の「ふるさとの信濃の国の山河は心に沁みて永久に思はむ」と親しみのある大らかな字で書いて下さった短冊が残っている。

この大会で今の秋永三郎氏が、大会の一寸前にでも亡くなられたのか、武田公平氏ーと云っても今は名も知らぬ人が多いことと思うが以前カンポスにも居られ、カフェランジアへ移られていた人ーについて語りその大会入賞歌で絶筆となった「病む吾に食わすと友が釣りて来し魚鱗は光る夕光の中」を読むとき立ったまま絶句されて涙を流された場に会い、歌につながる人の肉親にもまさる友情の深さに感動したのであった。私も遂この五月に佐藤一英氏を逝かせて心の底から哀惜の涙を流し、あの時の秋永さんの事が思い起こされたのであった。

私と療院の歌会とも深いつながりがあり、岩波先生の来られた時を第一回として歌会は連綿と三百数十回に及んでいるが、これ

以前、寮には酒井先生と寮の人たちだけの「静芽」と云う集まりのあった事も知っている。凡張面であった正木、中田、戸崎さん方の面影も忘れられない。その後山の五十回歌会の時には中央から武本、中江、吉本、樋田、米沢、西田、開沼、小竹、高橋さん方が来られ、狭い佐藤さんの借家の二階で寝食を共にした事であったが、その帰りに吉本、西田小竹さんが馬の通う細い坂道を登り降りして私の処へ一泊され、風呂は煉瓦で積んであって台所で火を焚けばひとりでにお湯の沸くようにこしらえであったのに入って、吉本さんの大満悦だった顔が昨日の事のように思われるのに、吉本さん小竹さんも今は世に亡く、あの頃の面影をなお残す西田さん一人となってしまった。

それからグワイラ歌会にも数度招待を受け渺茫としたグランデ河畔の吟行や杉本千代さん宅ではピシーナに釣り上げておいた大鯉を目の前で料理をされ一同で招ばれて和気アイアイの中での歌会の楽しい思い出。よろこんだ吉本さん、唄うやら踊るやらで流石芸達者なグワイラの面々も顔色なしと云うような場面もあった。あの時の酒井先生、吉本、井本、杉本、藤永さん方等々相次いで亡くなられたが、思い出はただただなつかしく温かく私の胸に生きている。

こうした数々の短歌につながる人々のあたたかで豊かな心を胸にし、加えて夫をはじめとする家族たちの理解と支えによって今も作歌をつづけている私ではあるが、さてその作品価値となると御覧の通りで遅々として進まず何一つの新しい展開もない。短歌

は好きではあるが私には才能としてはないのだと沁みて思うことである。しかしそれとは別に私は歌を詠まずにはおられない。

雲の流れに、湧く朝霧によせて自分の気持を拙いながら三十一字に綴ることが、老いた今の私の何よりの充ちた喜びである。それがほんとにはかないかすかな成果しか私の上にはないにしても。

一人の人間としてこうした一生の中で作歌をつづけること、而も喜びを以てつづけて行くことは、私の場合、云うなれば人間性を豊かに深く高めることにはつながらないであろうか。老いたりとは言え人間としての成長がこれに依って少しでも得られるものとすれば以て瞑す可しではあるが、こんな事を意識して作歌するなどと云う事は一度もないけれど。

斉藤茂吉は一首を完成するのにのた打つ程の苦しみをすると云うのを読んだ事があるが、私にはそうしたことは甚だ少ない。毎年何賞彼賞と出れば、山があるから登ると云う登山者の心理のような思いで参加はするが、私は賞を望んだ事はない。全然ないと云ったら嘘になろうが、だから失望しない。賞に入らずとも少しもこりずに出来た時には参加するがただ私は選者の方々の眼に心に少しでもひっかかるものがあれば満足だと考えて今後もあせらず余り苦しまずに一生涯作歌をつづけて行く事であろう。

# 最大の生甲斐

大西阿哲

春はきぬ万物流転の花と見て心にふるるさみしさのあり

白蓮

壁に掛けてあるこの短冊を読んでいた歌人某氏が、「これは白蓮のほんとうの自筆でしょうか」との質問に私は、この白蓮女史の短冊が私の手に入った経緯を一通り語るのであった。一九七〇年四月、私の年来の念願であった郷土訪問の夢が叶って、訪日した時のことである。郷里の新見市から大阪万博を見物の途次須磨の叔父を訪ねた。

叔父は父の兄弟ただ一人の生き残りで、当時九十三歳、部屋の中でも車椅子に乗らなければならぬのであった。応接間に入り一番に眼についた大きな額に、二枚の短冊が不釣合にあり、読むとこの白蓮女史の歌であった。

叔父は専売局出身で、世界二次大戦の終戦時まで支那山東省の葉煙草株式会社の重役を勤めていた。若い時から彫刻類や鋳物像などの蒐集家で、支那から多くの鋳物像を持ち帰り部屋狭しと飾っているのであった。万博見物を終え二日滞在して辞去する際に叔父は、「ブラジルに帰る土産にどれでも気に入った好いのがあれば持って行けよ」と鋳物像など指差して言ってくれるので、私は早速「そうですか、それではお言葉に甘え餞別にあの額の短冊を一枚下さい」と所望した。

これを聞いて側にいた従姉妹が、「あの短冊は白蓮女史に書いて

頂いて、二十枚有ったのを次々に譲って二枚だけになったのだが、ブラジルに持って帰って部屋に飾って下さい。女史もお喜びになるでしょう」と心よく譲ってくれたのであった。そして「この歌は女史の晩年、家庭の寂しくなられた哀愁の情を詠まれたのでしょう」と、その時の女史の様子を聞かすのであった。従姉妹は東京女子医専卒の医博で女史とは親しい交を重ねた間柄であったらしい。新見に帰り短冊を見せてこの経緯を話すと、弟や従兄弟達は「その短冊もよいが、それより叔父が日頃自慢している中国製の金色の像をなぜ貰わなかったかあの像は高価な物なのに」と口惜しがるので、「いや自分はあの像よりこの短冊の方が好いのだよ、短歌がすきだから」と笑って言ったのであったが、今あの時のことを顧みて金色像より一枚の短冊を選んだ自分の心理など、短歌に関心をもたない彼らには理解出来ないことであったと思う。

然しいま回顧して、短歌が好きだからと言い切った自分に、過去から現在にかけていったいどのように短歌活動を実証する実績が実在しているであろうかと自問し、八十三歳の生涯を振り返って見るのである。

私と短歌の関りは、歌が好きであったから青年時代すこしは詠んだこともあったが渡伯してからは殆ど作歌していなかった。一九三〇年代に聖州新報歌壇に二回投稿した記憶があるが、判然と残る程の歌ではなかった。一九四〇年代マリリアの植民地に在住の頃、現コロニア歌壇の先輩歌人開沼貴代様が指導の中心となって青年層のあいだに短歌熱が勃興し、以前「椰子樹」に盛んに短

歌を発表していた、井出弘、渡辺護、また故人となった有田市治、渡辺春洋の諸君その他が「春秋を創刊回覧などして一時盛んに活動していた。自分も好きな短歌だから関心をもってはいたが歌会に出席する機会を得なかった。義弟土香から活動状況や発表作品などを見聞して楽しんだものである。一九五〇年スザノに移転居住するに及んでその頃から全伯短歌大会に応募作品を投稿するようになり、何回目かの応募作に予想外の得点を得た歌が問題作品であったため難点を指摘されて、こんなことでは歌が好きなどとは言われないと発憤する気持になったものである。一九六一年「椰子樹」第六九号から開沼様の紹介により「椰子樹」に入会、第十三回全伯短歌大会の応募作品「小児麻痺に冒されて吾子二十年今法大の王冠を受く」があるくらいでめぼしい作品はない。一九六七年日本の「まひる空きに入会、七〇年頃「まひる野人集欄」に採録され気をよくしたものである。

私の短歌は、この頃から関心を深め、真剣に取り組んで欠詠しないように心掛け励む気拝になったのである。

このようにして、私の短歌遍歴は空白の年月を過ごし充実した歌を詠み得なかったことをつくづく思考し、その過ぎ去った空白の年月が惜しまれてならない。

生涯のはたての壁に突き当りなさねばならぬ事に苛立つ

この歌が焦燥感にかられる現在の私の偽らざる心境である。

八十三歳と言う私の生涯も、或る一定の極限に到達していると思う。もう何を成すにも手の施しょうのない手遅れ期に入った重患の状態である。過去においていますこし作歌に真剣に打ち込み励んでいたら、少しは纏まった歌を残すことが出来たのではないかと、悔悟の念に堪えない。

短歌による自己批判に紙面を費したとはいえ、私の生涯の生の証として短歌が心の糧となったことは否定する事は出来ない。今にして思えば短歌を作り続けるようになったことは私の人生にとって最大の幸福であり生き甲斐であると思いつつ、老骨に鞭打ってなお僅かな残生の心の支えとして詠み続けてゆきたいと希うものである。　以上をもって限定された紙数が尽きたので擱筆する。

## 培われたもの

簀　戸　勝　子

あの日から既に三十年は経ったでしょうか。ある日隣植民地のイタグワイ球場へ、野球の試合に行っていた主人の甥が一人留守番をしている私の所へ、「おばちゃんの友達を連れて来たよ」と言って入って来ました。友達のない私は時には索莫とした気持ちで、思わず吐息をつき、日本で別れて来た友達のことを偲んだりしていたので、不審に思って表に出てみると、お茶の垣根の処に一人のつつましい婦人が佇っておいでになるのでした。

初対面の挨拶を受けると、それが「椰子樹」誌に毎号良い短歌を発表なさっている小竹清子さんであることを知り、思いがけないことでもあり、遥かな存在の方だと思っていたので、その時の感激は今も忘れることが出来ません。小竹さんは次男の方が試合に出られるので、一緒においでになったということでした。そして甥と知り合って自転車の荷台に載せられて訪ねて下さったのでした。歌を作る方でお逢いしたのは小竹さんが初めてですよ、と私は繰り返し言ったようでした。その時、間もなく片岡けい子さんがリオへ越しておいでになると聞き、胸のおどるような喜びを覚えましたが、お忙しい片岡さんとお近づきになってからは二十八年になるようです。

第十一回の短歌大会に出席するようにと、小竹さんからのお誘いをおずおずと受け、一人では出かけたことのない私を片岡さんは、リオ中央線の駅迄送って下さって、モジの駅には小竹さんが迎えに来て下さっていました。その日小竹さんは吉本青夢さんの処へ案内して下さいましたが、歌人に逢ったのは私で何人目？と聞かれ、歌人にひっかかって聞き返えし、コロニア歌人のことと気付き、三人目です、とお返事したのもせんだってのような気がしています。

次の日は第十一回短歌大会へ、小竹さんの後に添うようにして出席しました。

その後片岡さんがお知り合いだった新納潤魚さんを伴って訪ねて下さったことがありましたが、矢張りリオへ移転しておいでに

なったのでした。それから何年後だったか忘れましたが、新納さんの発案で「燠」という歌誌を出して下さることになりました。「燠」とは何時消えるか分らない歌誌だからそう名付けました、ということでした。お知り合いのペトロポリスの方も投稿され、四者程のところへ途中から石橋テル子さんがお入りになり六号ばかり出たでしょうか、新納さんのお仕事が忙しくなって、名の如く消えてしまいました。それから間もなくだったと思いますが、リオ日系協会のサロンをお借りして、月一度の歌話会を持つことになりました。歌会にはならないでしょうから歌話会にしましょうと新納さんはおっしゃって、片岡さん、石橋さんと私の持ち寄った歌を、丁寧に批評添削して下さいました。

新納さんを訪ねておいでになった親友の井本さんと片岡さんを伴なって私の家へ来て下さって、歌を見て頂いた時の喜びも、忘れることが出来ません。そのまま新納さんとの歌話会が続いていれば私の歌もいくらかは上達していたかと思いますが、新納さんは思いがけず事故死をなさってしまいました。それきり歌会を持つこともなく今日に至っています。

片岡さんと同郷の開沼貴代さんが森重扶美さんと共に訪ねで下さったのは、その後だったと思います。

授協から巡回診療で私達の植民地に来て下さった細江先生と御一緒に、細江仙子さんがお見えになって親しくお話をしたことがありますが、後日頂いたお手紙に、「思わぬ所で歌のお友達にお逢いできるのは本当にたのしいことです。歌友だけは、たとえ未知

の方でも長い間の知りあいのように心安く、これだけは他の人たちにはわからぬ心境でしょう」と書かれてありました。私もそう思いますが、歌を通じてその方の俤が伝わって来る故の親しさではないでしょうか。イタグワオの知人をお訪ねになった酒井先生が、私の家へもお立ち寄り下さったことがありましたが、私一人ではお話相手が出来ないことと、新納さんへご案内したこともありました。子供の時にブラジル移住の父に従って来た私が、下手ながらもどうやら字を書くことが出来るのも、短歌を作っていたからではないかと思っています。物を観察する目も思考力も作歌することによっていささかは培われているのではないかとも思います。

短歌を作ることによって失われたものはないようですが、どうしても歌が出来ない時は、作歌を止めたいと思い、また思いかえしたりしています。

才能がないから作歌を止めたいと言う私に、作歌は才能ではない、修練によるものだ、とおっしゃった酒井先生と新納さんの言葉が甦って来ます。

## 病いの記録が一転機

小　石　茂　行

「捲揚機運転すらもトランスの音の変りし其のたまゆらを」古河久根鉱業所に働いて居た当時、二十才になるかならない時の歌が

労力新聞に当選し、それが病みつきで短歌を作るようになった。当時同鉱山には上七（うえしち）の坑口に一〇〇馬力のモートルを据付けて坑内の換気をする為に終日大扇風機を廻転さしていた。このモートルは同期電動機と云い始動の時は少し手間がかかるが一旦廻転し始めると周波数と同期に働くので負荷は全然変化しないものであった。

然しエレベーターで鉱石を捲揚げる方は三相誘動電動機と言い七五馬力のもので最初のトルクに力を入れるように設計してあり、運転し出す時はすごく電力を食うのでスイッチオンの時には変圧器にその変化が現れる音がして如何にも力限り働いているような音がするのであった。これは坑内五〇〇メートルも入った所に備えられており、五〇〇ボルトの電圧を以て取扱われていた。下七（しもしち）の七〇〇尺の地下の坑道から鉱車共に二トン以上の鉱石を捲上げて電車に二〇台を一回として連結し坑外の選鉱場へ運んでいたものであった。電車は直流なのでコンバーターが終日廻っていたが、これは時々整流子をパラフィンで拭ってやる程度で良かった。

私と久根鉱業所の関係はこうしたものであって昭和八年十一月迄勤めて十二月退職、昭和九年二月二十二日にマニラ丸でサントス港に着き直ちにパルミッタール植民地に入り、三カ月目にはマラリアに患り苦い経験をした。当時川向うのタンガラに秋永君がいた事をブラジル時報の歌欄で知った。「椰子樹」が発刊されて岩波先生の選に入ることを楽しみとした。私達は九人程で共同で七

○アルケールの原始林を伐り払って焼き、米や綿を作った。当時は雨の調子が良く蒔いた米も人間が隠れる程に成長したものだった。「雨降れば雨を讃えて陽の照れば良き日と云いて稔りの近し」は当時の感懐である。

時に手当り次第に作った歌に対して岩波先生から乱作をいましめられたこともなつかしい。「椰子樹」には三号辺りから投稿するようになり、先生を師と仰ぎ光南極の号にて投稿し一四号に三首、一五号旻天集に四首、十六号には上天集に入り「椰子樹」は切っても切れない伴となった。五二号に望郷と題して「コンクリートの乾く過程の発熱が凄じければものものし冷却装置」と故郷の「佐久間ダム」のシネマを見て発表した。この佐久間ダムは豊根村と佐久間村をはさんで堰堤を築き高さ一五〇米、アメリカ工法で二トンのパワーシャベル、一五トンのダンプトラック、D八型ブルトーザ一台を各組とし二五〇〇人分の仕事をする。これを四組、外に二〇台のダンプトラック、D八型ブルトーザ八台、二五トンのケーブルクレーン一台によって三年半の歳月を費やし一九五六年完成した。九万三〇〇〇KWの発電機四基を備え総出力三五万KWの当時日本で初めての米工法による工事だったのである。上記作品を次号で住吉光雄氏が批評していたことに思うところあって五九年三月五八号迄欠詠することとなった。

元来病弱な私は病床にあってこのことを歌に残して置くべきだと思い病中吟として発表した。この時の一二首を初めとし六〇号には二五首、六二号に一二首、六二号に一三首発表、六三号に一

一首、六四号一三首、六五号一三首、六一年六七号には農産展と皇太子夫妻の事等一〇首、六八号には「歴史」と題し一〇首、六九号に「アントリューム」をテーマに一〇首が載った。

こうして見ると病気を転機として体の中にくすぶっていた歌に対する衝動が触発されたわけで、ねっからの歌好きと思わざるを得ない。今は亡き井本君がいみじくも「君は全く短歌が好きだなあ」と言ったことを思い出す。思えば岩波先生から乱作だとたしなめられて、何くそと思った事も幸いして、「椰子樹」と共にある事を感謝せずにはおられない。一時期「はちどり」に誘われた事もあったが、自分は「アララギ」の伝統と子規、茂吉を崇拝している老であるから写実を基本として「アララギにつながる我等茂吉大（う）人（し）の師法進展に感銘探し」と詠んだ事もある者だから参加出来ないと、かたくなに「椰子樹」一本槍で来たつもりで他の結社には入らない事をモットーとして来た。今に至る迄その気概は持ち続けている。

昨年九月五十年振りで望郷の的であった佐久間ダムを訪れて、かつてその完成に殺気立っていた場所を見極めて、湛えられた水が如何にも穏やかな様子で波一つ立っていず、排水は直径三米にも及ぶ伝水管に依って遠く尾張の地の田畑を潤しているのを見て気を良くし、日本の将来は安泰である事を確信して帰って来た次第である。

# 総て作歌によって得た…

中　井　益　代

「椰子樹」百五十号記念特集号に、回顧録めいたものを書いたのは、ついこの間のように思うのに、あれから既に八年の歳月が流れた。「歳月人を待たず」である。

当時、古稀を迎えた私は、百五十号が私にとって、最後の特集号になるであろうとの思いから、米沢さんにすすめられるままに、初めて随想集に載せて項いたのであったが、今、二百号特集号が刊行されるに当り、編集部より、「短歌とわが生涯」ー「短歌によって得たもの、失ったものーを回想風に書くように」と指名され、恙なく生きてこの日に遇うことの出来た喜びを沁々と心に受けとめ、感慨無量である。

創刊より四十八年、殆ど半世紀に近い歳月、その間、戦争による数年間の中断があったとは言え、異国に在って、細々ながらも命脈を保ち、再刊後の困難をも克服して、今日の隆盛を見るに至ったことは、関係者諸氏の「椰子樹」に対する深い愛情というか執念のようなものの然らしめた結果に外ならないと思う。　顧れば、百五十号特集号に、それぞれ健筆をふるわれた先輩、中江克巳氏「椰子樹概史」、武本先生の「コロニア短歌界展望」、井本惇氏の「女性時代への移向」、酒井先生の「椰子樹相聞歌考」などの方々が二百号の記念刊行を待たず相次いで他界されたことは、「椰子樹」会員一同にとり致命的な打撃であり、前途に暗雲のただ

ようが如き感を抱かしめたものであったが、幸にして、編集者、選者、会計、その他の運営委員方の一丸となってのたゆまぬ献身的な努力により、会員数も漸増し、愁眉を開く思いの昨今である。悲しみ、苦しみを乗り超えて前進してこそ発展は約束される。今こそ創刊号より、今日に至るまでの先進の遺された最後の砦を守り抜かねばならない。

それは、母国を遠く離れた、異国での伝統短歌を志向する者の義務感とでも言えようか。

私が短歌と関りを持ったのは、一九二六年頃で、女学校の必須課目として、週一回、作歌の時間をあたえられたのがこの道に入った始まりであるが、好むと好まざるに拘らず義務づけられたもので、私の場合、「仕方なく」と言った方が本音で、今にして思えば、そのような作歌態度で、真、深、新味な作品など出来る筈はなく、他にそれだけの理由はあったにせよ、ただ時間を遣ろう程度に過ぎず、思えば恥多き怠惰な私であった。

真剣に作歌するようになったのは、渡伯後からのことで、それも数年間だけで、家事、育児、生業の煩雑さに追われて自然に作歌から遠ざかって行き、遂には年間僅かの作品を成すのみで、十余年、全く中断のまま過ぎて行った。その上過労から健康を害し、死を覚悟したことも一再ならず、そうした日々の中にあって、ある日、突然、短歌への郷愁とでも言ったものが油然として心の中に湧いて来たのだが、それは間もなく還暦を迎えようという頃であった。

初心にかえり、心を謙虚に、再び詠みはじめたものの、十余年の後退は取り返せる術もなく、遅々たる歩みながら、歌友の方々に支えられつつ大過なく生かされてただひたすらに詠み続けて来た私であるが、顧みて「短歌によって得たもの」と言えば、現在の私の総ては「作歌することによって得たもの」と得心している。それほど今の私にとって、短歌は生きていることの総てであり、遇い難きに遇うことの出来た交友関係は言を俟たず、このことは作歌するにあたり、対象を視る眼の心の懇ろさ、つまり、愛情を自ら訓えられ、私の生きて行く上での信条としているのであるが、これらは長い間作歌しつづけて来たために培われたとでも言えようか。けれども及び難く、到り難いことを歎く心は今後とも熄むことはないであろうが、短歌による人との出会いを大切に、と常に心に言いきかせている。

また、特に「短歌によって失ったもの」など、今日までの長い年月の間、聊かも思ったことはなく、私にとって作歌しつづけることは、自己の心を研くことに外ならないし、自分の生活（物心両面に於て）を犠牲にしたなど、思ったこともない。

人それぞれに、思考の在り方、身の処し方も一様ではなく各人各様であって、一概には言えないけれど、恐らく「椰子樹」に拠っている同志の人達は「失ったもの」など思う人はいないのではあるまいか。もし、仮りにあったとしたら、自分を深め、高めることは望めないし、短歌界から疾くに身を退いている筈である。

今、「椰子樹」創刊二百号を数え、特集号の刊行にあたり、重ね

て来た四十八年の歳月のずっしりと心に重く、経て来た道の何と杏かであったことか。今でこそ、順風満帆の状態で、多少の危機感があるとしても、その都度、どうにか切り抜け得られるというのも、つづまりは、異国に短歌の灯を絶やすまい、との会員諸氏の熱意と努力によるものであり、それにもまして、直接誌の運営の実務に携っていられる方々の無報酬の労に対して満腔の謝意を表すると共に、私自身も最後まで「倒れて後、熄む、椰子樹誌と共に」という心構えのもとに、明日に向って前進しよう、と老いの心に言いきかせている現在である。

## 田舎に遣る歌一首

オンダ・ベルデ　　鳥井　稔　夫

オンダ・ベルデ平和植民地に宿りて　　坂根　準三

亡き人の功偲びて野に佇てば夕陽あまねく児等の歌聞ゆ

昭和十三年十月十五日

総領事　準三　書

椰子樹創刊と関連あったと聞いた人。元サンパウロ総領事坂根準三氏が歌人であり、同誌の初期に盛んに短歌を投稿されたことは、現在椰子樹誌に拠って活躍中の多くの短歌人の記憶に残っていると思われるが、前掲の歌のあることを知る歌人は寡いのではないか。徳尾渓舟さんに一度この歌のことを質したが、知らないとの答であった。

旧サンパウロ・ゴヤス鉄道がパウリスタ本線ベベドゥロ駅を起点として北上、オリンピア市を経てノーバ・グラナーダ駅を終点としてサンパウロ州最北地方の一動脈をなした頃、オンダ・ベルデ町は該鉄道終点の一つ手前駅につながるこじんまりした町であり、その町からおよそ一・五キロばかり西寄りに平和植民地は現存する。

椰子樹二〇〇号が刊行される今年から逆算して四八年前の一九

三七年一〇月一五日に、この地方に活躍する邦人の実状視察の主旨で時のサンパウロ総領事とその従の人福川氏の来訪があった。

当時のオンダ・ベルデ町近傍には概算して二万ヘクタール以上の沃土が波状緩傾斜地形で広がり開拓を待つばかりであり、折から日本よりの移住は盛んでありまたモジアナ線パウリスタ本線沿いのカフェ耕地のコロノ契約を終り、独立を目指す人々がどっと雪崩れこむ有様で、三～四年のうちに五〇〇戸を越すかといわれる邦人集団社会が現出、主として棉作に従い、サンパウロ州有数の生産高を誇った。

こうした状況がサンバウロの商社や日語新聞、日本の出先機関に注目されたのであろう。しかし急激に増加する周辺の人口に町の施設が伴わず、ホテルさえもなかった。また日本人が寄り合えばすぐ会が作られるといわれでいたにも関らず、ここでは通用しなかった。その殆どが借地農で、永続性のない過渡期的な生活という自覚が皆にあり、日本人会も作られなかったが、青年層にはいち早く数団体が作られ青年連盟が結成されでおり、これが唯一の連絡機関であった。このほかにも孤立してではあったが戸数の多い部落では日本語学校も設けられその父兄会、後援会も数個所存在した。

右のような事情で突発的な総領事の訪問を受け入れる責任団体もないので、オンダ・ベルデ町在住者及び近郊農家の有志に青年連盟からも代表を出して歓迎プログラムが作られ、宿泊所には、当時平和植民地内唯一の煉瓦作りの家だった紺野菊子郎氏の住居

があてられた。

総領事の希望による数部落訪問後、夜は小人数の歓迎宴となったが、筆者はこれに列席したので、機をみて、この地方の開拓の歴史、開拓先没者やその遺族の奮闘状態などを説明、歌人といわれる総領事の感懐の一首を乞い、これを快諾されて、一植民者の行李の底に残されていた白絹の一片に冒頭に掲げた一首を墨痕鮮やかに書かれたのであった。

最近、徳尾渓舟さんとの話の折、この歌の存在に触れると、「へェー、そんなものが、そんな奥地に残っているのか・・・・」ということであった。

渓舟さんの若い時代は、歌人坂根嵯峨（花瀬群寿の筆名もあった）とは度々酒席を共にし、風流談を交したことがあると聞き及んでいたことから、或いは既知の作品かと思っていたが、彼知らずとなれば、二〇〇号記念別冊号に何かの役に立てばと拙文を投じる訳である。

註～鳥井稔夫氏は丁末子と号して詩に　秀れた作品を残している。因に坂根準三氏は、経木文也氏と共に「椰子樹」の創刊に経済的援助を与えた人。なお文章はかなり省略させて頂いた。

別冊販布に協力願う

二〇〇号記念別冊は、短歌という一短詩型分野だけでなくやがて八〇年を迎えようとする日系コロニアの歴史の文化的一遺産たり得る文献でもあります。会員方は、会員外への販布にも極力ご協力下さい。

# 一輪の白椿のように

大浦　文雄

失ったものは
お前が捨てたのでなければ
どこかで
お前を待っているだろう

宵やみにうかぶ
一輪の白椿のように

# 統計に見る
## 椰子樹概史
### ― 一五一号より二〇〇号まで ―

米沢幹夫

椰子樹はこれまで五〇号を一つの区切りとして、記念別冊号を編集してきた。今回はその四つの節目を迎えたことになる。一九三八年一〇月の創刊であるから年令としては四八才、倦まず弛まず、よくぞ歩みつづけて来たといえよう。

ここでは記事の重複を避け、一五一号から二〇〇号を通覧して、作品、歌論、エッセイ等を、統計的にあげることを目的とする。

まず、本の体裁に触れるとしよう。型は一六〇×二三〇で、A5判とB5判の中間変形型である。印刷はポイント活字で隔月発行、一五一号から二〇〇号までの期間は八年四カ月で、平均ページが三六・九六となっている。表紙は毎号富岡清治の好意を受け、その版画を使用している。

「椰子樹」誌は会員制に依って維持し続けられている歌語であり、徳尾渓舟が代表責任者となっている。一五二号から一六二号までの会計を中江盛治、一六三号以降を陣内しのぶがこれを継いで今日に至っている。編集は清谷益次、安良田済のコンビで、これは前期から今期へと息がながい。作品欄担当は井本惇、小笠原富枝、陣内しのぶ、弘中千賀子の四名が各号一名ずつ交替制で選

をしている。

（一九八四年六月七日、井本惇逝去後は補充を入れず、残りの三名がその任に当っている）。

特別選歌としてのシツ（金偏に質）欄は、一五一号から一九三号までを酒井繁一が担当、一九四号以後を大場時夫がこれを継いだ。他に毎号題詠欄があるが、これの選者は特定ではなく、毎号編集部からの依頼によって決める。現在の会員数は二二〇名前後で、今期中に物故された会員は五〇名近くを数えるが、新加入者もそれにちかく、総数においての会員の増減は殆どない。

一五一号から二〇〇号まで発表された短歌作品は総計二万六九六八首である。歌人は一八五名で延べ数にして三一四九名である。断っておくが、この統計は作品欄のみで、大会作品、岩浪菊治賞作品、（シツ欄―該当漢字なし―）、題詠等は別掲となるのでここには含まない。

第一期（　一　～　五〇）が　一万七八一二首
第二期（　五一　～　一〇〇）が　二万九六四四首
第三期（一〇一　～　一五〇）が　二万〇七一九首
第四期（一五一　～　二〇〇）が　二万六九六八首

一つの節目毎に変った数字が出ており、大変興味が深い。

# 数字に見る椰子樹の動き

| 号数 | 発行年月 | ページ | 作者数 | 作品数 | 摘要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 151 | 1977.08 | 45 | 414 | | 第10回岩波菊治賞発表 |
| 152 | 1977.10 | 47 | 428 | | 第29回全伯短歌大会号 |
| 153 | 1977.12 | 57 | 540 | | |
| 154 | 1978.02 | 57 | 485 | | |
| 155 | 1978.04 | 57 | 488 | | |
| 156 | 1978.06 | 55 | 433 | | |
| 157 | 1978.08 | 63 | 532 | | 第11回岩波菊治賞発表 |
| 158 | 1978.10 | 53 | 453 | | 第30回全伯短歌大会号 |
| 159 | 1978.12 | 55 | 477 | | 中山稲子追悼号 |
| 160 | 1979.02 | 54 | 483 | | |
| 161 | 1979.04 | 59 | 495 | | |
| 162 | 1979.06 | 63 | 525 | | |
| 163 | 1979.08 | 62 | 563 | | 第12回岩波菊 |

治賞発表

164　1979.10.42　60　546　第31回全伯短

歌大会号

165　1979.12.42　66　560

166　1980.02.32　62　554

167　1980.04.28　56　480

168　1980.06.32　64　573

169　1980.08.34　67　552　13回岩波菊治

賞発表

170　1980.10.36　62　511　第32回全伯

短歌大会号

171　1980.12.40　63　530

172　1981.02.36　66　547

173　1981.04.32　64　542

174　1981.06.32　59　510

175　1981.08.34　63　580　第14回岩波菊

治賞発表

176　1981.10.36　68　459　第33回全伯短

歌大会号　中江克巳追睡号

177　1981.12.38　68　538

178　1982.02.32　62　469

179　1982.04.38　66　510

180　1982.06.38　57　478　中江克巳追悼号

1881　1982.　0836　49　367　第15回岩波菊治賞発表

1882　1982.　1032　54　474　第34回全伯短歌大会号

1883　1982.　1240　62　514

1884　1983.　0232　57　484

1885　1983.　0436　63　528　武本由夫追悼号

1886　1983.　0628　59　509

1887　1983.　0834　70　595　第16回岩波菊治賞発表

1888　1983.　1038　62　534　第35回全伯短歌大会号井本惇追悼号

1889　1983.　1240　63　557

1890　1984.　0230　66　592

1891　1984.　0436　68　611　第7回地力全伯短歌スザノ大会号

1892　1984.　0632　70　579

1893　1984.　0844　75　679　第16回岩波菊治賞発表・井本惇追悼号

1894　1984.　105（）　77　680　第36回全伯壇歌大会、酒井繁「追悼号」

1895　1984.　1246　73　649

1896　1985.　0232　80　649

1997　1985.　0428　71　652
1998　1985.　0630　75　703
1999　1985.　0832　77　685　第18回岩波菊治賞発表
2000　1985.　1036　78　672　第37回全伯短歌大会号

次に、誰がどれだけの短歌作品を発表したか、個人別に数えてみる。

×印は物故者、上段の数字は掲載回数で、下段の数字は合計歌数である。順は回数順とする。

大場　時夫　五〇　四九九
開沼　貴代　五〇　四八八
千葉　美夜　五〇　四二七
川上　美枝　五〇　三六三
弘中千賀子　四九　五一〇
陣内しのぶ　四九　五一〇
小笠原富枝　四九　五一〇
中西　静世　四九　四五七
大西　阿哲　四九　四三三
山崎　益一　四九　四二一

滝　夕起緒　四九　三五五
中井　益代　四八　四八〇
関東　忠吉　四八　三七一
清水さかえ　四七　四三四
×富岡　清治　四六　四三四
桜井正巳（北谷まがた）四六　四二五
清水　節子　四六　四〇八
西田　季子　四五　四三九
安部　栄子　四五　四三五
渡部南仙子　四五　三九九
秋永　三郎　四四　四三一
柴倉　知余　四四　三六六
×酒井　繁一　四三　四五〇
穂島　千代　四三　三七二
×井本　惇　四二　四四〇
古関　俊枝　四二　三八二
椎野トノエ　四二　三七六
石塚　やす　四二　三五八
森谷　春男　四一　三九三
森元　三山　四一　三七五
奥野　精一　四〇　三三〇
山田　朴　四〇　二四五

小野寺郁子　三九　三七〇
久米　光春　三九　三六六
X岩佐一歩　三八　三四二
竹内千枝子　三七　二七三
×飯田　義勝　三六　二〇四
加藤　操　三五　三三七
川久保タミ　三四　二九六
入江　美津　三四　二八〇
小石　茂行　三二　二七四
椋野寿美（なでしこ）　三二　二四一
藤田美砂子　三一　二九二
八巻たけ子　三一　二九〇
田口　愛子　三一　二〇三
宮沢半次郎　三〇　二五四
三浦久和子　三〇　二四七
水本すみ子　二九　二八九
植村　かず　二八　二六二
本間　篤草　二八　二三三
大平　綾子　二八　二二六
武田息一郎　二八　一五〇
葦戸　勝子　二七　二六五
中沢　綾子　二七　二三三
秋山　瑠璃（るり）　二六　二一六

笠石　春江　二五　一六七
米川　　久　二三　二二〇
高原ます子　二二　一九一
渡辺　松子　二二　一六一
名沢　康子　二一　一七三
佐藤　いち　二〇　一七九
鯨岡　梅司（祐司）　二〇　一三二
×中江　克巳　一九　一〇七
石橋テル子　一八　一六五
高橋よしみ　一八　一四三
山本　　操　一八　一二七
安達　梅野　一八　九
遠藤すみえ　一七　二二五
森垣　正利　一七　一〇一
住吉　光雄　一六　一二五
森重　扶美　一五　一五〇
遠藤　浩　一五　一四六
東海林　寛　一五　一一〇
小野　政子　一四　一三九
八巻培夫　一四　一三八
阿部　玲子　一三　一二六
×知花　清　一三　一二二
×須田　子徳　一三　一一六

村上　喜文　一三　九二
多田　邦治　一二　一一九
小池美佐子　一二　一一六
笹波　北陽　一一　一〇〇
椎名千代子　一一　九六
上田　幸音　一一　九二
内川　愛季　一一　八二
松尾　紫郎　一〇　九七
酒井　祥造　一〇　九二
古川　信子　一〇　八四
梅崎　嘉明　一〇　八三
坂　光男（河口古錨）一〇　七三
緒方　新男　一〇　六六
上村　正治　一〇　五五
大城　俊子　九　八八
三原　洋樹　九　八三
浜田　八重　九　八一
水田　龍資　九　七六
植中　朝子　九　六五
山田　露人　九　五八
×楠木むらじ　九　五二
八巻　耕土　八　七三
常本　唯生　八　七〇

吉原　千苗　八　六七
×土屋ゆかり　八　六二
×佐藤　貞一　八　六二
×新宮晋作（丹帆）　八　五七
堀内　秀子　八　五五
大和田幸男（浦田輝星）　八　五四
秋村蒼一郎　八　五二
河村哉太郎　七　七〇
下津　てる　七　七〇
寺岡　晃児　七　六七
内田　笑子　七　六四
島植　晋　七　六二
末岡　芳三　七　六二
×山室新太郎　七　六一
福田　のぶ（信子）　七　四七
越雲　耕村　七　四七
渡辺　貞子　七　四七
春名　宏文（景永）　六　五九
木村　正和　六　五六
中山　清風　六　五四
石橋　初穂　六　四九
武藤　玉水（水田）　六　四四
大月　博　六　四一

| | | |
|---|---|---|
| 関口ちか子 | 六 | 三八 |
| 渡辺　要三 | 六 | 三五 |
| 柳沢津奈代 | 六 | 二七 |
| 坪田　義雄 | 五 | 四八 |
| 比良　恵川 | 五 | 四七 |
| 太田　かよ | 五 | 四五 |
| ×川上千代三郎 | 五 | 四一 |
| 寺尾　芳子 | 五 | 四一 |
| 茅根　哲子 | 五 | 三五 |
| 本山美智子 | 五 | 二二 |
| 五味さつき | 五 | 二六 |
| 中村　教二 | 四 | 三九 |
| 高橋　暎子 | 四 | 三九 |
| 蓑毛　正淳 | 四 | 三八 |
| 山岡樹代子 | 四 | 三八 |
| 田中恵美子 | 四 | 三六 |
| 玉木　五男 | 四 | 三四 |
| 榑松　四郎 | 四 | 三三 |
| 篠田真佐子 | 三 | 三〇 |
| 井本司都子 | 三 | 二九 |
| 設楽　昭五 | 三 | 二九 |
| 森田　吉久 | 三 | 二七 |
| 徳永　悦子 | 三 | 二六 |

滴草ひろし　三　二五
吉本　浩　三　二三
佐藤三つ農　三　二一
井出　弘　三　一五
高達　友猪　三　一五

◆二回＝中川荒記・二〇、橋本元江・一八、志伊良二世・一七、平木明子・一六、辰巳幸・十六、山田鉄男・一三、　×西田孝徳・一〇、関戸香代子・一〇、　須内常子・一〇。

◆一回＝青柳房治・一〇、長谷敏江・一〇、河井美津子・一〇、松井正巳・一〇、宮崎多満江・一〇、溝口かおる・一〇、佐藤みつ子・一〇、土屋哲子・一〇、平田政子・九、室伏誠二・九、　西山陽都・八、花井信吉・七、下村絢子・七、徳永京子・七、稲空穂・五、　村上正治・六、佐伯さと子・六、山水あきら・六、小原睦子・五、土屋春雷・五、上妻博彦・四、内木ふみ・四、中林俊二・四、×高野十念・三。

◎推薦欄にとりあげられた作品回数

◆四八回＝中井益代。

◆一九回＝西田季子。

◆一八回＝森谷春男。

◆一四回＝水本すみ子。

◆一一回＝加藤操、簀戸勝子。・

◆一〇回＝秋永三郎、大場時夫、小野寺郁子、米川久。
◆八回＝大城俊子、中西静世、多田邦治、　知花清。
◆七回＝安部栄子、藤田美砂子、下津てる。
◆六回＝清水さかえ、植村かず、中江克巳。
◆五回＝岩佐一歩、富岡清治、八巻たけ子。
◆四回＝河村哉太郎、三浦久和子。
◆三回＝小石茂行、森元三山、桜井正巳。
◆二回＝遠藤浩、春名宏文、石橋テル子、木村正和、宮沢半次郎、松尾紫郎、小野政子、寺岡晃児、山室新太郎、八巻培夫。
◆一回＝阿部玲子、秋山瑠璃、本間篤草、穂島千代、浜田八重、石塚やす、入江美津、久米光春、川上千代三郎、小池美佐子、森重扶美、武藤玉水、椋野寿美、中沢綾子、中村教二、大西阿哲、佐藤みつ子、上田幸吉、未岡芳三、笹波北陽、椎野トノエ、坂光男、須田子徳、高原ます子、高橋暎子、渡部南仙手、山崎益一。
○全投稿作品が推薦の対象となったのは中井益代(四八回)、下津てる（七回）の二名のみである。

## 題　詠

題詠の歴史は古く、一九五四年に始まった。三六号から五一号を中山稠子選　五二号から五三号を開沼、安部、森重、東野、光田、本庄の共選、五四考から六一号を大場、大島、森重の共選、現在の形式となったのは六二号以降である。担当と出題は毎号交替制となし、それを決めるのは編集部である。

左に、一五一号から二〇〇号までの一覧表を掲げる。上段から号数、題名、選者、作者数、歌数。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 一五一 | 言葉 | 遠藤　浩 | 二六 | 五三 |
| 一五二 | 暁 | 加藤　操 | 三八 | 六六 |
| 一五三 | 茜 | 森谷　風男 | 二八 | 五八 |
| 一五四 | 潮 | 大城　俊子 | 二七 | 五六 |
| 一五五 | 縁 | 小野寺郁子 | 二四 | 四九 |
| 一五六 | 湧水 | 安部　栄子 | 二九 | 五七 |
| 一五七 | 余光 | 森谷　春男 | 三二 | 六七 |
| 一五八 | 遠火 | 森重　扶美 | 四一 | 七五 |
| 一五九 | 芽 | 坂　光男 | 二七 | 五一 |
| 一六〇 | 乾季 | 開沼　貴代 | 二七 | 五八 |
| 一六一 | 足跡 | 高橋よしみ | 三一 | 六八 |
| 一六二 | 窓 | 永本すみ子 | 四〇 | 七二 |
| 一六三 | 木霊 | 植村　かず | 三〇 | 六六 |
| 一六四 | 願い | 編　集　部 | 三四 | 六六 |
| 一六五 | 営み | 加藤　操 | 四六 | 九七 |
| 一六六 | 訪れ | 森谷　風男 | 三三 | 六六 |
| 一六七 | 新萌 | 中井　益代 | 三一 | 六二 |
| 一六八 | 泉 | 水本すみ子 | 三六 | 七二 |
| 一六九 | 凛迢 | 北谷まがた | 四〇 | 八〇 |
| 一七〇 | 旅 | 大城　俊子 | 四三 | 八六 |
| 一七一 | 霜 | 青柳　房治 | 五〇 | 九九 |

一七二　茜　森谷　春男　二五　五二
一七三　家族　小野寺郁子　三五　五二
一七四　隣　開沼　貴代　三六　七九
一七五　声　安部　栄子　三一　六六
一七六　錯誤　秋水　三郎　二五　四九
一七七　悔恨　八巻　耕土　三九　六六
一七八　残照　西田　季子　三六　六四
一七九　影　森重　扶美　四三　八二
一八〇　憧憬　大場　時夫　三二　六三
一八一　種子　木村　正和　二五　四九
一八二　限界　植村　かず　二八　五七
一八三　戦い　加藤　操　三〇　六〇
一八四　世相　森谷　風男　二八　五六
一八五　憤り　中井　益代　三三　六六
一八六　憎悪　水本すみ子　二九　五二
一八七　移民　秋永　三郎　三六　六九
一八八　混迷　小野寺郁子　三六　六七
一八九　追憶　開沼　貴代　三四　六四
一九〇　日記　西田　季子　三五　六四
一九一　海　森重　扶美　四一　七一
一九二　絆　多田　邦治　三五　五六
一九三　齢　大場　時夫　四一　八五
一九四　焚火　八巻　培夫　四三　八五

一九五　躊躇　森谷　春男　三六　六八
一九六　野火　中井　益代　四三　八七
一九七　街頭　水本すみ子　四二　八三
一九八　歩み　秋永　三郎　三二　六四
一九九　交わり小野寺郁子　二七　五〇
二〇〇　微光　河村哉太郎　三八　五八

## 質　欄　（文庫注・質は金偏に質）

単一選者に依る特別選歌欄が設けられたのは一〇二号からである。「椰子樹」選歌の名称で一〇二号から一二四号を米沢、一二五号から一四二号を大場が担当した。一四二号以降は酒井繁一担当となり、名称も「質」特別選歌と改められ、会員であるとなしにかかわらず、一人三首までの自由投稿を認めている。新人養成の意味も含め、酒井繁一はこの欄に意欲を燃やし続けたが、一九八四年八月に惜しくも他界した。一九四号以降は再び大場時夫の担当となって現在に至っている。次に一五二号から二〇〇号までの実数をあげる。

| 号 | 作者数 | 作品数 | 選者 |
|---|---|---|---|
| 一五一 | 八三 | 二〇六 | 酒井　繁一 |
| 一五二 | 八〇 | 一八〇 | 〃 |
| 一五三 | 七六 | 一七一 | 〃 |
| 一五四 | 五四 | 一三〇 | 〃 |

一五五　六一　一三九　〃
一五六　六三　一五七　〃
一五七　七二　一八二　〃
一五八　五七　一四三　〃
一五九　六一　一五一　〃
一六〇　五八　一四〇　〃
一六一　六二　一六〇　〃
一六二　六四　一七〇　〃
一六三　七五　一九二　〃
一六四　七八　二〇四　〃
一六五　七九　二〇四　〃
一六六　七二　九七　〃
一六七　七四　八五　〃
十六八　六八　九〇　〃
十六九　八〇　一一　〃
一七〇　七一　一〇六　〃
一七一　七二　一一七　〃
一七二　七四　一二九　〃
一七三　七八　一二二　〃
一七四　七八　一二七　〃
一七五　六八　一一五　〃
一七六　八〇　一二五　〃
一七七　七九　九一　〃

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一七八 | 八五 | 九八 | 〃 |
| 一七九 | 六五 | 八二 | 〃 |
| 一八〇 | 六八 | 八九 | 〃 |
| 一八一 | 七三 | 九一 | 〃 |
| 一八二 | 八二 | 一〇一 | 〃 |
| 一八三 | 七八 | 一〇五 | 〃 |
| 一八四 | 八〇 | 一〇〇 | 〃 |
| 一八五 | 八七 | 一一三 | 〃 |
| 一八六 | 八三 | 一〇六 | 〃 |
| 一八七 | 八四 | 一〇六 | 〃 |
| 一八八 | 八六 | 一〇四 | 〃 |
| 一八九 | 七三 | 九〇 | 〃 |
| 一九〇 | 八一 | 一〇一 | 〃 |
| 一九一 | 八一 | 九八 | 〃 |
| 一九二 | 八二 | 一〇三 | 〃 |
| 一九三 | 八九 | 一〇六 | 〃 |
| 一九四 | 五四 | 七一 | 大場時夫 |
| 一九五 | 八三 | 一三〇 | 〃 |
| 一九六 | 八一 | 一四三 | 〃 |
| 一九七 | 七八 | 一七〇 | 〃 |
| 一九八 | 七七 | 一三七 | 〃 |
| 一九九 | 七六 | 一四〇 | 〃 |
| 二〇〇 | 八四 | 一四八 | 〃 |

◆歌人は延べ数にして三七二七人。
◆掲載歌総計六三七六首。

全伯短歌大会

全伯短歌大会の起源は一九四九年二月一〇日である。「椰子樹」創刊一〇周年と岩波菊治五〇才の誕生を記念してパウリスタ新聞主催、椰子樹後援でその第一回を開催して以来、コロニア歌壇の年中行事の一つとして定着した。一回から二〇回までをパウリスタ新聞主催、椰子樹後援であったが、二一回からは椰子樹主催、パウリスタ新聞後援となって今日にンで開催、参加作品二六〇首。一般選高点歌・山田幸子、ほか（五九）、代表選高点歌・山田鉄男、ほか（一〇）、席題「旅・花」・寺尾芳子、ほか（一〇）、アベック歌合せ（三）、計八二首。

岩波菊治賞

岩波菊治賞の前身は椰子樹賞であり、椰子樹賞の前身は坂根賞である。坂根賞は一九五〇年に企画され、椰子樹短歌年度賞として作歌活動の実績を基準として選考された。一回から四回までを吉本青夢、井本博、川原比露思、河村哉太郎の順で受賞したが、五回からは該当者なしが続きそのまま消滅した。

これに代って設置されたのが椰子樹賞である。一人二〇首の応募形式をとり、一九五八年から一九六七年まで一〇回続いた。入

賞者は小笠原富枝、梅崎嘉明、小竹清子、弘中千賀子、陣内しのぶ、なし、水本すみ子、高橋よしみ、佐藤博三、南条由喜夫の順である。

椰子樹賞は一〇回を区切りとして解消したが、一九六八年新しく設定されたのがこの岩波菊治賞である。形式は椰子樹賞をそのまま踏襲したもので、毎回数名の選考委員がその衝に当り、入賞作品を決定した。一回から九回までを見ると、

木村正和、岩渕静子、内田笑子、なし、なし、なし、森谷春男、小野寺郁子、なし、の順で、該当者なしが続いた。次に一〇回から一八回を詳述する。括弧内は選考委員、入賞者の下段の数字は椰子樹に発表された入選作品数。

◆第一〇回・一五一号発表、応募作品四四〇首、二二名。（酒井、井本、小笠　原、陣内、弘中、本庄、大場、森重）

賞　畏れ　小野　政子　１４
佳作　無題　河口　古錨　１５
同　風　加藤　操　１０
同　母の忌　清水さかえ　１１
同　森の秋　多田　邦治　９

◆第二回・一五七号発表、応募作品三六〇首、一八名。（酒井、井本、大場、小笠原、陣内、弘中、森重）

賞　逃げ水の移り　河口　古錨　１６
佳作　旅　加藤　操　８
同　種の起源　八巻　耕土　９

同　赫土の染みたる掌　青柳　房治　９
同　来る日去る日　中西　静世　１２
同　生きて行く　国兼まさ恵　１１
同　老暗　清水さかえ　１２
同　無題　知花　清　１１

◆第一二回・一六三号発表、応募作品六六〇首、三三名。（酒井、大場、小笠原、井本、森重、陣内、弘中）

賞　無題　北谷まがた　１４
佳作　冬の部屋　多田　邦治　１２
同　昏迷の坂　知花　清　１２
同　秋の旅　中川原　実　１２
同　日記の余白　森田　吉久　１１
同　歓喜樹の花　清水さかえ　１２
同　旅愁　八巻　耕土　９
同　雨　安部　栄子　１３
同　白き浜砂　青柳　房治　１２
同　旅　篠田真佐子　１１

◆第一三回・一六九号発表、応募作品五八〇首、二九名。（酒井、大場、小笠原、井本、森重、陣内、弘中）

佳作①草の穂　青柳　房治　１５
佳作　虹　国兼まさ恵　１１
同　南聖旅情　八巻　耕土　１０
同　露　青柳　ます　１０

同　カーロ・デ・ボーイ　中川　荒記　１０
同　旅　中西　静世　１０
同　ふり返る　藤田美沙子　１０
◆第一四回・一七五号発表、応募作品六八〇首、三四名。（井本、森重、小笠　原、陣内、弘中、酒井、大場）
佳作　山河歴程　八巻　耕土　１０
同　水底　多田　邦治　９
同　雲の流れ　寺尾　芳子　１０
同　秋の彩　青柳　ます　９
同　余光　青柳　房治　８
◆第一五回・一八一号発表、応募作品五四〇首、二七名。（酒井、井本、小笠原、陣内、弘中、森重、大場）
佳作①ロンドリーナ紀行　清水さかえ　７
佳作　夜の川　多田　邦治　６
同　パルマの花　青柳　ます　５
同　獣の声　中川　荒記　４
同　媼　中西　静世　４
同　草もみじ　青柳　房治　４
◆第一六回・一八七号発表、応募作品六〇〇首、三〇名。（大場、酒井、小笠原、陣内、水本、弘中、井本）
賞　夜のコスモス　多田　邦治　１５
佳作①野良靴　青柳　ます　１３
佳作　高原余情　安部　栄子　１２

同　南聖旅情　八巻　耕土　１３
同　錆しるき船　森田　富久　１０

◆第一七回・一九三号発表、応募作品五六〇首、二八名。（酒井、大場、小笠原、陣内、弘中、水本）

賞　地平線　高橋　映子　１５
佳作①黒き貨車　寺尾　芳子　１５
佳作　湖底の故郷　森田　吉久　１３
同　啄木抄　八巻　培夫　１０

◆第一八回・一九九号発表、応募作品六四〇首、三二名。（大場、河村、小笠原、多田、水本、弘中、陣内）

賞　離農してより　松尾　紫郎　１６
佳作①朱の曙光　下津　てる　１５
佳作　わが身のめぐり　安部栄子　１６
同　周辺　高原ます子　１１

## 作品批評

「椰子樹」作品の批評は、毎号交替制となっている担当者二名が、作品の選にあたると共に、全作者に触れて書いている。一五一号から二〇〇号へかけて、作品欄のページの延べ数が六七一ページでこれに対する批評が二五四ページとなっている。二六％強という数字から推して如何に多くの比重をかけているかがわか

る。担当者の労を多とする以外言葉はないが、惜しいことには第三者側からの評言は見あたらない。

批評回数は二七回・小笠原富枝、二六回・弘中千賀子、二六回・陣内しのぶ、二一回・井本惇の順となっている。次にその明細をあげるが、数字は号数、括弧内は批評者であると共にその号の選者でもある。

一五一（小笠原、弘中）、一五二（陣内、弘中）、一五三（小笠原、井本）、一五四　（井本、弘中）、一五五（弘中、陣内）、一五六（陣内、小笠原）、一五七（小笠原、井本）、一五八（井本、陣内）、一五九（陣内、弘中）、一六〇（弘中、小笠原）、一六一（井本、小笠原）、一六二（陣内、井本）、一六三（弘中、陣内）、一六四（小笠原、弘中）、一六五（小笠原、井本）、一六六（陣内、井本）、一六七（陣内、弘中）、一六八（弘中、小笠原）、一六九（井本、小笠原）、一七〇（弘中、井本）、一七一（陣内、弘中）、一七二（陣内、小笠原）、一七三（井本、小笠原）、一七四（弘中、井本）、一七五（陣内、弘中）、一七六（小笠原、陣内）、一七七（小笠原、井本）、一七八（井本、弘中）、一七九（小笠原、弘中）、一八〇（井本、陣内）、一八一（陣内、小笠原）、一八二（井本、弘中）、一八三（井本、小笠原）、一八四（小笠原、陣内）、一八五（陣内、弘中）、一八六（井本、弘中）、一八七（小笠原、井本）、一八八（陣内、小笠原）、一八九（弘中、陣内）、一九〇（弘中、井本）、一九一（小笠原、井本）、一九二（陣内、小笠原）、一九三（弘中、陣内）、一九四（小笠原、弘中）、一九五（陣内、小笠原）、一九六（陣

内、弘中)、一九七(小笠原、弘中)、一九八(弘中、陣内)、一九九(陣内、小笠原)、二〇〇(小笠原、陣内)。

歌論・論説

一五二号から二〇〇号に至る期間は、コロニア元禄とでも形容すべき時代で、進取性にとんだ論争や、明日を目差した建設的な研究への発展が乏しかった。

次に比較的に自説の見解を示したと思われるものを、発表回数順にあげる。

◎井本惇＝△作歌の基底をなすもの(一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九)、△写生、写実ーレアリズム(一六〇)、△生きた心ーレアリズム(一六一)、△批評についてーレアリズム(一六二)、△岩波賞についてーレアリズム(一六三)、△趣味への回帰ーレアリズム(一六四)、△写生、写実ーレアリズム(一六五)、△宮柊二を追う(一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二)、△おしろい花の歌ー宮柊二補遺(一八四)、△作品へのメッセージ(一八九)。

◎酒井繁一＝△短歌一首の中の作者ー石川啄木(一五四)、窪田究穂(一五六)、与謝野晶子(一五八)、若山牧水(一五九)、九条武子(一六〇)、斉藤茂吉(一六一)。

◎安良田済＝△作品の背景(一七二、一七三、一七四、一七五、一七六)。

◎陣内しのぶ＝△思想が結晶した作品(一五九、一六〇、十六一、

十六二)。
◎川原比露思＝△よい言葉、わるい言葉　(一五一、一五二、一五三)。
◎武本由夫＝△そこが気にいらない(一五四、一五五、一五六)。
◎弘中千賀子＝△言葉の遍歴(一五八、一五九、一六〇)。
◎木村正和＝△形式の上での冒険(一六〇、一六一、一六二)。
◎住吉光雄＝△言葉の探究(一八九、一九〇)。◎西田季子＝△自分が傷つく作品(一七二)。
◎秋永三郎＝△日本歌壇百首選(一九三)。
◎無記名＝△歌が〃詩〃であると否との分れ(一五一―巻頭言)、△極限にたつ者の歌(一五二―巻頭)、△こころぎし(一五三―巻頭言)、他に、「茂吉秀歌鑑賞」佐藤佐太郎著(一六六から二〇〇まで)と、△「文法をめぐって」田谷鋭(一八三)、△「批評のなかでのびる」岡井隆(一九八)等の抄出転載がある。

小　論

この小論は、編集部の企画によるテーマに対して応えたという形の執筆で、半ページから一ページの短文でリレー式に書かれたものである。
◎危機の周辺・佐藤一英(一五一)、◎いま摸索しているもの・小野政子(一五一)、藤田美砂子(一五一)、◎わが危機感・加藤操(一五三)、◎改作したい自作品・佐藤いち(一五三)、◎今一番詠みたい歌・内川愛季(一五四)、◎対決しなければならないもの・

中井益代（一五四）、大場時夫（一五六）、植村かず（一五六）、小野寺郁子（一五八）、北谷まがた（十六〇）、◎男のいる風景・小笠原富枝（一五四、一五五、一五六）。◎女の風景のある歌・米沢幹夫（一五四、一五五、一五六）。◎一期一会の歌・田中朝子（一五四）、高橋よしみ（一七八）、久米光春（一七九）、加藤操（一八〇）、藤田美砂子（一八二）、木村正和（一八三）、桜井正巳（一八四）、開沼貴代（一八六）、植村かず（一八七）、寺岡晃児（一八九）、簀戸勝子（一九〇）、宮沢半次郎（一九二）、古関俊枝（一九四）、小野政子（一九五）、松尾紫郎（一九六）、酒井祥造（一九七）、阿部玲子（一九八）、佐藤いち（二〇〇）。◎作品の中の自分・岩佐一歩（一五五）、千葉美夜（一五六）、簀戸勝子（一五六）、青柳ます（一五七）、高原ます子（一五八）、大平綾子（一五九）◎わがふるさとの短歌・水本すみ子（一六一）、大城俊子（一六一）、八巻耕土（一六二）、土妻博彦（一六三）、梅崎嘉明（一六三）、中井益代（一六四）、安部栄子（一六五）、三浦久和子（一六五）、青柳房泊　（一六六）、中川荒記（一六六）、北谷まがた（一六八）、穂島千代（一七一）、開沼貴代（一七一）、千葉美夜（一七四）。◎私の短歌開眼・清水さかえ（一六一）、清水節子（一六一）。◎移民が詠んだ短歌・弘中千賀子（一六六）、植村かず（一六七）、大場時夫（十六八）、西田季子（十六九）。◎曲り角の作品・小野寺郁子（一七八）、清水さかえ（一七九）、奥野精一（一八一）、青柳ます（一八三）、川上美枝（一八四）。

◎思索室・西田季子（一八四、一八六）、小野寺郁子（一八七）、多

田邦治（一八九）、坂光男（一九一）、弘中千賀子（一九二）。◎一首一言・小笠原富枝（一九六、一九七、二〇〇）。◎秀歌の再発見・弘中千賀子（一九六、一九七、一九八、二〇〇）。

## 追悼・遺稿

一九七七年八月から一九八五年一〇月へかけて、物故者は五〇名を数える。「椰子樹」は数回、特に関わりの深かった物故歌人の追悼号を編集した。

▲中山稠子追悼（数字は号、以下同）＝　△もう十年ぐらいは・徳尾恒寿、一五九、△短歌はむしろ余技・秋永三郎、一五九、△思い出・安艮田、一五九、　△連歌十首・中山稠子、一五九。

▲富吉好人追悼＝△富吉好人の死に寄せて・岩佐一歩、一五九。

▲桜井健三追悼＝△桜井健三君の長逝と歌集「つぶやき」・富岡清治一七二。

▲脇坂一迫悼＝△眼鏡をかけたキリスト・小野寺郁子、一七三。

▲中江克巳追悼＝△中江克巳君を悼む・徳庵渓舟、一七九、△詩「悼」・K、一七九、△中江克巳の「椰子樹」における歴史・清谷益次、一八〇、一八二　△中江克巳の思い出・武本由夫、一八〇、△まごころ、住吉光雄、一八〇、△嗚呼・中江さん・植村かず、一八〇、△中江先生を憶う・藤田美砂子、一八〇、△中江克巳の略歴。

▲武本由夫追悼＝△武本由夫君を悼む・徳尾渓舟、一八四、△偉

大である悲しみ・井本惇、一八四、△言葉に憶う・小笠原富江、一八四、△一巻の了り・陣内しのぶ、一八四、△嗚呼恩師武本先生・河村哉太郎、一八四。

▲山室新太郎追悼＝△届くあてのない手紙・米沢幹夫、一九一。

▲井本惇追悼＝△「今日に生きる」歌・、陣内しのぶ、小笠原富枝、一九三、△井本厚の訃・秋永三郎、一九三、△追悼記・中井益代、一九三、△井本さんと私・細江仙予、一九三、△井本君を追悼・徳尾渓舟、一九三、△椰子樹・井本・私・清谷益次、一九三、一九四、一九五、一九六、△逝く日々・井本惇　連歌六九首、一九三。

▲酒井繁一追悼＝△酒井先生との別れ・山崎益一、一九四、△酒井先生を悼む・石橋初穂、一九四、△悼・酒井先生・加藤操、一九四、△酒井先生とカンポス歌会・春名宏文、一九四、△酒井先生とグワイラ歌会・中川荒記、一九四。

▲阿部青杜追悼＝△阿部青杜氏の逝去・徳庵渓舟、一九五。

▲富岡清治追悼＝△ご苦労さまでした・清谷益次、一九九。

▲岩佐一歩追悼＝△発想の人・安良田済、一九九。

●遺稿・タヌキの書方、中江克巳、一八〇、●短歌と六十五年・酒井繁一、一九四、一九五。

## 書評・紹介

「椰子樹」がとりあげた歌集は、随想集を含めて十六冊である。上段より書名、著者、評者、号数。

△歌集「軌跡」・梅崎嘉明、（井本惇・一五三）。
△歌文集「山伐り日記」・岩佐一歩、（中　江克巳。一五三）。
△歌文集「ロデイラー明日また」・水本すみ子、（小野寺郁子・一六七）。
△合同歌集「南回帰線」第二集・ロンドリーナ歌会、（陣内しのぶ・十六八）。
△遺歌集「面影」・酒井雪江、（陣内しのぶ・一六八）。
△詩歌集「こころの雫」・千葉美夜、（井本惇・一七四）。
△歌集「たかむら」・河村哉太郎、（清谷益次・一七九）。
△遺詩歌文集「常燃の秋」・越村定雄、（清谷益次・一八五）。
△歌文集「轍の跡」・小竹清子、（清谷益次・一八六）。
△合同歌集「南回帰線」第三集・ロンドリーナ歌会（清谷益次・一八九）。
△詩歌文集「郷愁の花」・浦田光馬、（清谷益次・一九四）。
△合同歌集「あゆみ」・サンパウロ新聞社、（K・一九五）。
△合同歌集「やまなみ」二〇号・カンポス歌会、（K・一九七）。
△短歌・俳句・川柳・文章「この道」・　内川愛季、（小野寺郁子・一九八）。
△遺歌集「ひぐらしの声」井本悼、（清谷益次・一九九）。
△他に、随想集「移民の跫音」・関東忠吉、地域歌集「深泉」・福博短歌会、「八〇年歌会作品集」・ジャバクワラ歌会等の紹介がある。

## エッセイ・感想

運営経済の都合上、こうした分野へのスペースは甚だ少い。

△萩の咲く季から・西田季子、一五一、一五二。△私の歌歴・須沢志げ子、一五一。△第２９回全伯大会に初参加して・三原洋樹、一五三。△大会と名札・山田朴、一五二。△感想・柴倉知余、一五二。△予期しなかった喜び・山崎益一、一五三。

△「椰子樹」百五十号を喜ぶ・パウリスタ新聞社説転載、一五三。△若き日の池田重二・西山恒雄、一五四。△私はかく思う・三原洋樹、一五六。△作品上の死について・石橋テル子、一六〇。△蝶絵を頂いて・千葉美夜、一六一。△絵と短歌・富岡清治、一六二。△歌集「閑放集」の作者は・滝井康民、一六二。△私と短歌・斉藤広志、一六四。

△晩学・山田朴、一六八。△イペの花・森久子、一七八。△「ミッドウェーの歌」にふれて・水本すみ子、一八一。△三十年ぶりに帰って見たコロニア短歌・八巻培夫、一八八。

△我や先、人や先・岩佐一歩、一八八。

△ホビー・コメルシアル・小野寺郁子、一九〇。△コロニア万葉集・一話・「いばらぎ新聞」より転載、一九〇。△「歌会始」に人選して・多田邦治、一九一。

△「一握の砂」ポ語訳の周辺・八巻培夫、一九八。△コロニア万葉集と作家岡松和夫さん・K、二〇〇。

## 座談会・小品・詩

今期間を通して座談会が企画されたのはただ一回だけである。◎座談会「選をされるものの立場から」出席＝大城俊子、小野政子、小野寺郁子、遠藤浩、多田邦治、一五五。◎敢えて質問します・藤田朝日子、一五二。◎わたしはこう考える・弘中千賀子、一五二。

◎古いことながら・八巻汀石、一五三。

◎作品の理解訂正・武本由夫、一五八。

◎椎本文也さんの手紙・富岡清治、一六〇。◎某氏にお答えします・藤田朝日子、一六一。◎詩学もどき・「塚本邦雄ノート」より、一六一。◎悲しき鶏闘・村上喜文、一七四。◎立噺・富岡清治、一七四。◎共同の話題・富岡清治、一九五。◎連想・富岡清治、一九七。◎詩「淋しい誕生日」・村上喜文、一九六。

## その他

●表紙裏に毎号（一六一号を除く）日本の知名歌人の作品を紹介。計七五一首。

●昭和万葉集に収録されたコロニア歌人の作品再録。（一六四号、七首。一六六号、二四首。十六七号、九首、一六八号、七首。一七一号、二五首。一七二号、七首。一七四号、一首。計八〇首）。

●「歌会始の儀」多田邦治の入選歌と来年の御題「旅」、「日本語を学ぶ児童らスコールのあとのみどりの丘帰る見ゆ」（題「みどり」）で、多田邦治はコロニ　アの入選者としては初めてこれに出

席した。二九〇)。

●「コロニア万葉集」の刊行に就いて・　清谷益次、(一五九、一六〇、一六三、一六四、一七〇)。

●「コロニア万葉集」贈呈に対する林間短歌社からの礼状(一七七)。

●名刺交換・(七八年度・一五九名、七九年度・一七九名、八〇年度・二一一名、八一年度・一九二名、八二年度・一九四名、八三年度・一九二名、八四年度・‘一九二名、八五年度・二一五名)。

●厨房記・(一五一から十六二を中江盛治、十六三から二〇〇を陣内しのぶ、一五六と一七四は欠)。

●一五〇号記念別冊号の会計報告(一五一、一五二、一五四)。

●「コロニア万葉集会計報告・水本すみ子(一七一、一七二、一七三、一七五、一八二)。

●全伯短歌大会作品、岩波菊治賞作品、その他の作品募集、並びに大会プログラム等の記事は除く。

## 結　び

ぼくの担当になる項目は、二〇〇号が出てしまわないことには、どうしても整理がつかず、他の原稿が出揃っているのを聞いては、気の急くことしきりである。

概史とは言っても、殆ど数字の羅列で始まるこうした統計的なものは、無味乾燥の一語に尽き、所謂、読ませるという類のものではない。しかし「椰子樹」の歩みを識って戴くには、歴史的な

面で幾らかの手助けになるのではないかと思う。二〇〇号が出るのを待って、あわてて整理した関係上、充分、気配りはしたつもりでも、脱落したり、重複したれりした点もあろう。会員諸氏のご寛容を乞う。

汽車の窓
はるかに北のふるさとの山見え来れば
襟を正すも
Da janela do trem ao norte distante
Cume da montanha minha terra
Preparo a reverencia

あはれかの我の教へし
子等もまた
やがてふるさとを棄てて出づるらむ
Pobre crian?as que lecionei
Em breve tamb?m deixar?o nossa terra.

ー八巻培夫ーパウロ・コリナ共訳　「石川啄木」よりー

# 地方歌会

## ジャバクワラ歌会

三浦　久和子

ジャバクワラ歌会は一九七九年二月、出席者七名によって始められました。月一回の例会は殆ど欠かす事なく続けられ、満六年をすごしこの一九八五年七月をもって第八〇回の例会を持った事になります。人数は少い時で七～八名、多い時は一二～一三名の集りとなります。会員中にはクリスチャンが多く従って日曜日は不都合のため、例会日は毎月第三火曜日となって居ります。

この会は二、三の人がこの近くに住む人達で勉強し合う会を作っては、と呼びかけたのが丁度時宜に叶ったと云うか、短歌をやってみたいと考えていた五、六人の人があって参加され、古くからの仲間と共に勉強を始めたのであります。

会の最初より熱心に指導の労をとって下さる開沼、西田の両氏、又八三年頃より「椰子樹」の選者であられる小笠原、陣内、弘中の三氏が都合のつく限り出席していただき御指導を受けて今日に至っております。又時折り出席して励まして下さった梅崎、富岡、中井、森重の諸氏、女流ばかりの会中黒一点であった南仙子氏についで、八二年頃より木村、大西氏等男性が続いて加わり批評なども活発になり会もいよいよ充実して来た感があります。

八〇年初めに作品集第一号、八二年に第二号を発行した事は、一つの実りと云う事が出来ましょう。八一年二月には会員千葉美夜さんが、詩歌集「心の滴」を出版された事も記念すべき喜びとして、共々に祝ったのであります。

又この会によって初めて短歌の道に入ったと云う会員が、全伯短歌大会において最高点を得られ、他にも上位入選された人も幾人かありましたが、これはとりもなおさずこの会が育てたと云える事であって、ささやかながらこの会の存在が、無意味ではないと云えましょう。これまでにご指導下された前記の方々のご苦労に対し、深甚の謝意を表わしてここに書きとめておきます。

八三年二月には西田居において、亡き夫君孝徳氏の一周忌追悼歌会がなされ、特別参加の歌友あわせて一七名の盛会でありました。新年歌会は上田さんの山荘で味覚の方も大いにたのしみながら、山と水と空の青一色に浸っての集いは会員のこの上ない待望の行事の一つ。又喜寿、傘寿と共々に祝い合う喜び、或時は花の種苗交換と短歌のみならず友人としての交りも合せて続けられております。丁度この稿を執筆中の七月一九日、この会の作品集第一号を作成する際、毛筆をもって見事な原稿を書いて下さり、時折りには出席されてその温顔を見せて下さった富岡氏が永眠された事を記してご冥福を祈ります。

現在出席される会員は左記の通り。

開沼貴代、木村正和、渡辺松子、千葉美夜、上田幸音、武田五百子、渡部南仙子、工藤善子、三好紀美江、西田季子、鈴木美代子、

三浦久和子、大西典二、加藤かをる。以上一四名。他に二、三名ありましたが病気その他の事情で休止されております。

## クリチーバ短歌会の　創立と現状

久米　光春

一九七九年あわただしくロンドリーナ市からクリチーバ市へ移転して早や六年を過ぎた。三十二年近く住みなれたロ市から離れる時は実にふるさとを後にブラジル移住を企だてた時の感傷に似たものが少しはあったのだが、まだあの時は海外雄飛の大和民族の先駆者などと云う美句に酔わされる幼なさの一途なものが手伝っていたのだが、六十才と云う年令的な消極性から転住後切この南パラナの気候条件と対人関係ゼロのパラナの首都で三年と少し殆ど無為に過ごしてしまって一寸後悔している。環境にあわない動植物がその地域に順応するのにもある期間が必要なのと同じであるがそんな中へ、古北政次商銀転勤や荒崎三朗、百合香夫妻が転住してくるに至り既住同人本庄研一、米川久らと計り折から子息のもとを時々訪れる大場時夫の来クを機会にクリチーバ短歌会創生の気運のもり上りを見て一晩本庄研一夫妻、米川久、古北政次、荒崎三朗夫妻らと具体案が出来上り一九八三年二月二十日カルナバールの喧噪もやっと収まった十九日、クルゼイロのマキシ切下げ三十％、ブラジル経済の行詰りを暗示する先行き不安の出発点

であった日の翌日、クリチーバ文授協に於てまず本庄研一、同真津緒、米川久、古北政次、荒崎三朗、同百合香、西崎落実、山本あきら、久米光春与に加えパラナグワから藤田美砂子、吉岡晴夫、聖市より千葉美夜、地元の摩耶晃がかけつけてくれて記念すべき発会をみたわけである。

以来回を重ねる事三十二回あと四回で石の上の三年を迎えるところまで漕ぎつけた。途中一九八四年七月十日、本庄研一宿痾にたおれ不帰の客となる。翌十一日葬儀にかけつけた米沢幹夫、岡本喜代子と聖市歌会の趨勢を聞く機会に恵まれたが本庄研一を失った事はクリチーバ歌会運営に一頓座を来す痛恨事であった。その上真津緒夫人がその後健康勝れず出席も途絶え勝で憂慮している次第であるが、その後渡辺政三、前田富士雄、小堀行雄、古田益子、梶田きよ、竹田かよ子、更に最近渥美みよしを得て、新風吹き入る感あり愁眉を開いた様な状態である。男性八名女性七各ここにも女性優勢時代が来そうである。何としても詩質向上とか詩芸術の追求とかむつかしい事は遥かに遠い彼方の事にして同好の集りをつづけてゆく事が大切なことと思っているのが当歌会の現状である。

## モジ桃蔭短歌会の動静

河　村　哉太郎

現在のモジ短歌会が復活すべくして復活したのは、去年の八四年の正月である。

復活といったのは三、四十年以前に二回に分けて、歌会が催されていたからである。その事には触れず、現モジ短歌会の動静を記す事にする。モジ管内の植民地に永らく住んでいた私が、市内に移ったのは八二年の末頃であった。それ以前から歌人からも勧められ、自分も是非これは一つ短歌会を興そうと秘かに心懸けていた。市内には普からの歌友で、三昔前までは椰子樹の編集を手がけ、旺盛な作歌活動をして来た則近君が居る。が彼は今詩作や創作に精力を傾け、一向に短歌を振り向かずにいる。でもベテランの小竹さん、平松さん、中堅の椎野さん、内川、青柳夫妻さん等、錚々たる連中が居る、と心強く思っていた。

丁度その頃則近君が突然訪ねて来て、武本先生の病床を見舞ったところ、君は作歌から随分と遠ざかっているが、やる気を起こせ、とひどく叱られた。僕は今に思うと、遺言のように聞こえて、心に決するものがあった。是非この際皆に呼びかけて、歌会を復活させよう、と熱っぽく言うので、私も渡りに舟と早速賛同して、その具体案を相談して別れた。

既成歌人は勿論、文学に関心を持っているような人たちを、二人で何日かかけて勧誘に歩いた。こうして歌会が発足した。これが復活すべくして復活した、所以のあらましである。

さて発会は、小竹さんのたっての希望でその居で行った。小竹さんは既に車椅子の生活であったが、事の外喜んで下さって、何

かと気を配られた事が、今目に浮かぶようである。出席者十二名で、欠席投稿者四名であった。

当日は歌会の方は簡単にすませ、会則を協議し決定した。歌会の名称を、岩波先生のかつての山房の名を貰って「モジ桃蔭短歌会」とした。年二三回郊外で吟行会を行い、新風を取り入れる。後継者発掘のため、二三世層に呼びかける。会場は毎月第二日曜日十三時より、モジ文協会館で行う。役員は、幹事・会計・河村哉太郎、渉外広報・則近正義、第一書記・内川愛季、第二書記・青柳房治とする事になった。二回目（二月歌会）は二人の加入者を加え、出足も中々順調であった。瀬峰先生は老齢の上病気のため、欠席続きである。中には今まで発表もせず、作歌していた人も加わり、ベテランあり新人ありの、混成チームの感のあるものになった。第五回目は、吟行会を郊外の生田農場で行った。生田さんは農学博士で、遺伝学の権威である。改良レポーリョの畑を見学しながら、改良についての専門的な説明があった。当日は詩話会の永田さん、蔵光寺さん、その他四五名が合同した。（以後吟行には、詩人も参加）。生田さんは、会員の中の二人の二世の一人である。

六月に入り、内川君が或る都合から脱会したので、第一書記を中山さんが替った。三月頃から欠席を続けていた小竹さんは、その宿痾がいよいよ悪化、遂に七月三十日、八十歳を一期に永眠した。小竹さんは病床の身ながら、最後まで意欲的な作歌活動をなし、皆に深い感銘を与えた。ここに又一人のベテラン歌人を失っ

た淋しさをしみじみ味った。会葬者の大勢の中に、陣内、弘中、水本、米沢さんなどの聖市よりの歌友の顔もみえた。

九月吟行会は、モジ在住の州譲ドトール・マウリシオ所有の豪荘で行った。小雨の中であったが、谷村神父による樹霊祭があり、州議も大へんな満足のようであった。ここの荘園は約半アルケールもあり、則近君が二年がかりで、造園の粋を集めつつあるところである。

十月に入り、青柳君は事業拡張のため脱会。それと竹林、吉田君が入会。又貞松さんが入会し第二書記を引き受けた。

十一月は岩波先生の二十三回忌に当たり、元の桃陰山房で吟行会を催した。墓参後山房で歌会。時移り人は変って、当時の面影は見られず、長男の椰子男君の家族が、ひっそりと住んでいた。門口のプリマベーラが、枝を張れるだけ張って、今を盛りと春陽に映えて、深紅に炎えていた。昔のままの金気水の池に、折からの時雨に、小さな波紋を鏤めていた。

年が明けて八五年一月下旬、モジミリンより古関さんが市内へ移って来て入会。

三月より歌会へ出席しはじめた。一般的に言えることは、どの歌会でも女性の数が優勢のようで、当歌会も男性との比率が、二対一ぐらいの集合である。その活発な意見の発表には、私などたまたまじろぐ程の場合がある。お互い練磨し合い、和気藹々の中に浸る事も、歌会の持つ一つの意義というものであろう。

四月に入り、郊外の太田さんの農場に吟行をした。あたかも柿

の出盛りの時で、鈴成りの柿が秋の陽に映える柿園を一同見学しながら、熟れ柿を採っては食べなどした。太田さんは管内でも有数な篤農家で、南伯組合より毎年柿や枇杷の優良賞を受ける程である。

九月は恒例の樹霊祭を則近君のシャーカラで行った。造園師の彼の居とあって、名も知らぬ珍らしい植木や草花などがあり、一同楽しくその日を過ごした。本年度の岩波賞応募者は、下津、中村、太田の三名で、下津さんが佳作の一位に入り、大会で受賞した。大会への参加者は、下津夫妻、太田、平田、椎野、古間、河村の七名であった。発足以来椰子樹社に入会したのは、中村、中山、太田、平田、越雲の五名である。

以上動静といっても、吟行会のみを書いたようになったが、普段は毎月文協会館で歌会を行っている。会員は老人が多く、全員揃うことはないと言ってもいい。

約二カ年の間、可成りの出入りはあったが、手を結んで行ける、かたまった歌会になったのは、うれしい事である。次に会員名をあげておく。瀬崎涛声、河村哉太郎、則近正義、生田博、中山清風、太田かよ、平田政子、椎野とのえ、南とみえ、赤池進三、谷佐稚子、河奥きみ、竹林光、下津てる、下津武治、古関俊枝、吉田秀継、中村教二、平松霞。

# スザノ短歌会過去・現況

八巻　耕土

椰子樹誌第二百号記念号刊行にあたって実に感慨無量である。第一五〇号の頃は当スザノ短歌会も熾んに張切っていたのだった。張切りすぎて同号に中江兄から「短歌の優雅さなど何処にもない。只激しい闘志を感ずる許りの歌会だ」などの好評？を書かれた位隆盛であったスザノ歌会も、地元歌友らの転住が多く、かっては三〇名近かった歌友も今は十名そこそことなり、辛うじてサント・アンドレ、サン・ベルナルドの清水、秋山、入江とモジに転住した青柳夫妻やイタクワの篠田と新人光瀬が例会に列しているが多田はコロニア人として公私共に多忙となり欠席がちとなった。

勿論酒井師の他界に依って少しは緊張度が薄れたことも事実である。それに今年は実に明朗な歌友だった野上とし子が急逝した。悼まれてならない。

然しそんな抹香くさい話ばかりでもない。いざとなれば今年の全伯大会で示したように作歌力はまだまだ廃れてはいない、とみられる。またスザノ歌会の分会のようにして発足した福博短歌会も酒井師亡きあと、河村哉太郎氏の指導で堅実に向上しつつあるからもう大丈夫である。発会当時は酒井師、青柳、滝らと何処までやれるかと不安であったが、今となれば杞憂であった。

殊に去年三月の全伯地方大会には福博歌会と共催だったが、よく歌友らが協力してくれて一二〇名の応募歌稿が集まり、実に盛

会に催すことができたのは、福博歌友たちの協力に負うことが多かった。その上あの歌会の成績は福博が断然他を圧して瞠目に値するものがあった。

下って私事になるがスザノ歌会の再興のためにと当市の母の会にも勧誘してみたのだが末だ期が熟せぬという処である。どうもこの頃のコロニアは実に多忙であり、文芸などは見向いてもくれない。

宗教方面は実に多彩で、仏教の堂宇が四寺院と生長の家教会などいつの土・日曜なども満員の盛況、文協会館や沖縄会館などもいつでも満杯であり、ゲートボール、カラオケ、ビデオなど頭を痛めないで愉しめる趣味が多いから文芸など誰も見向いてもくれない時代になった。

私自身も「椰子樹」や歌会の世話をもう三十年もやって来、齢正に七二才余となりそれに数年前から薬草研究という途方もないジャングルに迷い込み遭難一歩手前の方向探知中で、夜も日も研究、調査や日本などとの交流や福祉方面からの要望などで、月例歌会なども今月まで二一二回、一七年間無欠席できたが、何とか隔月にしたい等と言っては歌友から叱られているこの頃である。

また当スザノ歌会と植博歌会の特異性として両歌会共、俳句会を併催してることである。歌会か句会かの中どちらかを中止すれば良いのだが、それも許されそうになくどちらにも惰性で続けているようなものである。それでも音楽の仲間から脱けさせて貰ったので助かっている訳である。

スザノ歌会は発会以来いまだ歌集とか月会歌集などというものは出したことがない。殊勝にも福博は毎年「年間歌集」を出しているのには感心に堪えない。

カンポスの「やまなみ」も永年続けた歌会集を廃刊したと同時にその牽引車だった佐藤一英兄の早逝は惜しまれる。

去る八月十一日に先師酒井繁一の一周忌追悼歌会を当本願寺で修し、全伯から多数の悼歌あり、出席も四十数名で、師の偉大だった指導力を追想久しくしたのだった。師の遺子嗣朗兄が父母の遺志を嗣いで夫人ふみ子と共に福博歌会に席を得て作歌をはじめたことが、また福博歌会の慰めとなってる事は否めない。

特筆すべきは故酒井師夫人雪江姉の自歌集「面影」を先師と嗣朗兄とに依り、姉の一周忌、八〇年五月一日に上梓された事である。先師が手書きのゼロック印刷が却て親しみの湧く歌集であり、よくもこれ程沢山の作歌をしておられたかとよく読み進めば、生涯を清貧に甘んじて、コロニア文芸に尽された酒井師の家庭事情が詠われてあり、正に移民妻の哀しい金字塔である。

仄聞するに故酒井師の遺歌集編纂の事情も牛草茂氏の奔走に依り、〃師産土の宮崎県方面からの協賛にで実現可能の目安となりつつあることを欣ぶと共に、牛草氏に弛緩なき日本との交渉を続けられるようお願い申し上げます。

以上のようなスザノ短歌会の動静で、曽っての闘魂は幾分弱っていますが、来る二五〇号までと命の続く限り、残った歌友らと継続するつもりであります。

# 一五〇号以降のグワイラ短歌会

中川荒記

ひと頃、廃刊か継続かと言われた「椰子樹」も、この十月には二〇〇号に達し記念別冊特集号を発行するという。半世紀に近い年月をあらゆる面に支えて来た中央の人達と喜びを共にし、一五〇号以降のグワイラ短歌会の主なる動静と現状を報告し編集部への責を果たす事にする。

（文中敬称略）

一九七七年一〇月発行された一五〇号記念別冊特集号では会員一九名となっており、その後の動静を探ると、その年の一二月にリオ・プレット在住の五味さつきが入会して二０名となったが、七八年九月には歌会発足当時から会計と書き役を長年担当され、聖市に移転してからも欠稿された事のなかった持永勧治が逝去。七九年四月には八幡与三が逝った。彼は自動車事故で二度も瀕死の重傷に遭いながら死を脱がれ不死身とまで言われたが病気には勝てなかった。ガン手術後一時回復し、好きな釣りや歌会には聖市からわざわざ馳せ参じたのであったが、再発の病魔には打勝つ事が出来ず不帰の客となった。生前、短歌のポ語翻訳を思い立ったこともあり実現を見ず他界されたが、今回八巻培夫の手になる啄木歌集のポ語訳出版を喜んでいることと思う。八幡は聖市に移ってからも、加藤を授けてよく世話をしてくれた一人として心に残

る。七九年六月には素直な詠風で、その人柄を想わせた松隅先代、またおしどり歌人の桜井よし（北谷まがた夫人）もピッコ・デ・パパガイオと言う厄介な病気に取りつかれ、一時に二人の女性会員が退かれ寂しく思ったが、七月に亡夫の後を継いで八幡章栄が入会。八〇年四日には一時休詠していた金子八十八も複帰心たので埋め合わせが出来たところで九月には五味さつきが退会、ブラスコット・ユニチカ出向社員の伊藤久雄も本社勤務となり帰国するため退会されたが、八一年になり、唐沢の紹介で、ユニチカ・ド・ブラジルのすがはらとしゆき（菅原利郎）が入会されたので大きな動きはなかったが、八三年七月に、紅月伯舟、割鞘たけ、十一月には加藤操が停年と同時に聖市へ移住するので退会。二〇年近く物心両面に会を育て上げた加藤の移転は、グワイラ歌会にとって大きな衝撃であったが、八三年アチバイアに永住の居を構え悠々自適の日を送るようになってからは、毎月歌稿を出してくれており、事ある毎にわざわざ車で来てくれる事を感謝している。

会員の動静は大体以上の通りで、この外に主なる行事として七八年七月「移民七十年祭にちなめる歌」で人選した北谷まがたの祝費歌会を加藤宅で催し、七九年六月には一五周年記念歌会を唐沢宅で行い、スザノから酒井先生ほか山崎、内川、青柳、小野、高木、山田、多田、滝、またサンパウロの開沼諸氏の出席を得て、地元会員を含め三〇名近くで盛会であった。

北谷まがたは一九七三年度「岩波賞」に入選したが、「まひる野」に載った作品があったとかで、取消しに会ったのであるが不治と

言われるよし夫人を看護しながら堪ゆまね精進をつづけて　七九年度の入選となったのは特筆に価する。長年親しまれた北谷まがたのペンネームを返上し八二年の中頃から桜井正巳の本名で作歌をつづけている。

岩本秋月は九十四才の高令ながら筆まめに毎月の歌稿選歌を誰よりも早く届けてくださるのには頭が下がる。杉本千代が第一歌集「緑葉」、第一歌集「白房」を刊行されたのは、一五〇号以前のことであるが書き加えて置く。

八四年八月一五日、酒井繁一師逝去。酒井先生のご指導を仰ぎつづけて、昨年歌会の二〇周年を迎えたので、その喜びを頒ち合うべく記念歌会を企画し準備を進めて居たのであったが、その日を待たず他界されたことはグワイラ短歌会にとっての痛恨事であった。

加藤の移転につづき酒井先生の長逝で両手をもぎ取られた形となり、グワイラ短歌会は一時進退に迷ったのであるが、幸い九月には新たに米沢幹夫先生をお迎えする事が出来、八五年三月には米沢先生を始め故酒井先生の息嗣朗、同ふみ子夫妻、山崎益一、加藤操、すがはらとしゆき諸氏の出席を得て、二五〇回記念歌会を催したことを記しておく。

現在の会員は、斉藤武雄、西村佐太夫、唐沢弘直、未岡芳三、金子八十八（三郎）鹿毛正護、中川荒記、桜井正巳、高野愛子、岡野でん子、岩本秋月、佐藤義男、すがはら・としゆき（菅原利郎）、加藤操、八幡章栄の一五名。最年少で五四才、最高年は九四才で、

平均年令七〇才。

八五年度の会費は、毎月三〇〇クルゼイロ、月例歌会は特別の事情がない限り第三日曜日、会場は会員の家を順廻りする事は以前と変りない。歌稿は三首づつを謄写版刷りにしたものを前以て配布し、欠席者は選歌十首と歌評を出して貰う事にしている。高点歌順に遠慮のない歌評を交わし、その後先生選と作品全部の先生の評を披露して締めくくり、作者名発表となる。それからは歌を離れた座談会となり、これも楽しみの一つ。

グワイラ短歌会も発足以来二一年の歳月を経て、この一〇月には二五七回の月例歌会を準えるのであるが、この間、昨年長逝された酒井先生に二〇年間、その後を米沢先生に師事し、マンダカルの第一人者唐沢弘直を中心に地元会員が雑務を分担し、老骨に鞭打ちながら例会をつづけているのがグワイラ短歌会の現状である。

## 変遷激しいカンポス歌会

春　名　宏　文

一九七八年＝一月・酒井先生、森重さん、山崎さんを迎えて新年歌会を開く。

この年安部栄子病気勝ちにて欠席多し。「救急車に乗せられ降る新道より見ゆる我が家に炊煙上る」もこの頃の作品である。　十

一月・花城清栄逝く。「やまなみ」一九号は殆ど佐藤一英の手で印刷・発行。会員の健康すぐれず二〇号をもって休刊と決定。

一九七九年＝二月・酒井先生、青柳房治夫妻、山崎氏を迎えて、花城清栄追悼歌会を催す。

奥野精一、店を娘夫婦に譲って、Ｓ・Ｊ・カンポスに移転、その新居にて二七三回歌会を開く。

一九八〇年＝十一月・酒井先生、山崎益一、多田邦治氏を迎えて歌会。

一九八二年＝三月・Ｓ・Ｊ・カンポスの奥野宅にて酒井先生、山崎氏を迎えて第二九七回歌会。カンポスからも全員出席。

一九八三年＝二月・小野政子気管支治療のため入院、歌会にも出席する。四月・西川八郎はじめて歌会に出席、会員となる。八月・酒井先生、自作の稗搗節記念碑揮毫のための訪日より帰伯されたのを機会に山崎益一、加藤操両氏を迎えて歌会。

一九八四年＝黒木松巳気管支治療のため入院、歌会にも出席す。四月・北村省三、入会。八月・酒井先生逝去。皆で葬儀に参列。十二月・佐藤一英の健康すぐれず、花舗を譲って、Ｓ・Ｊ・カンポスに移転するので送別歌会を催す。「やまなみ」二〇号の原稿が集

めたままになっていたのを春名が手書にてまとめ、佐藤夫妻への餞とする。

一九八五年＝手書の「やまなみ」二〇号をＸＥＲＯＸにて三十部作り、諸氏に送る。四月・同門親睦歌会をさくらクラブ会館にて催す。出席～加藤操、山崎益一、杉本つる代、原君子、高木富代、滝夕起緒、黒木松巳、森重扶美、奥野精一、安部栄子、上原知水、高原万里、北村省三、春名宏文。出席出来なかった佐藤一英は来月の歌会をサンジョゼの自宅で開きたいと言って来ていたが五月十三日ついに逝く。六月三二三回歌会をＳ・Ｊ・カンポスの佐藤宅で開き、佐藤一英追悼歌会とする。出泳者三十八名、出席十四名となる。

「やまなみ」一七号以来作品を発表していなかった佐藤みつ子は一英追悼のため再び作歌をはじめる。八月・酒井先生一周忌の法要に出席出来なかったカンポス歌会は墓詣りをすることになったが、当日になると安部栄子狭心症にて安静、佐藤みつ子クリチーバにて手術、上原知水、北村省三共に風邪、腹痛などにて半数となる。

カンポス短歌会はこの九月で三二五回となったが、一番若かった佐藤一英が逝って、高齢者が多く、安部栄子～八〇才、西川八郎～八〇才、北村省三～七八才、上原知水～七七才、奥野精一～七〇才、高原万里～六七才、春名宏文～六二才、佐藤みつ子～五三才。この辺で若い新人でも入会しないかぎりこの歌会もあと何

年続けられるものか。思えば心寒い感じである。

## ロンドリーナ歌会の人々

大　場　時　夫

三十五年というロンドリーナ歌会のつきあいを思うとき、よくもまあ続いて来たものだと感慨無量になる。それもこれも友人に引かれてと言う事に他ならないだろう。

この三十五年間に次々と多くの友人を失ってしまった。大倉正友、毎熊空母、神田笹波、岩本錦川、西岡字乃、大月澄了、田上みづほ、大釜七蔵、有田市治、井之盛一翠、風早峻、南崎稚草、野中みや、本庄研一、中川原実、土屋ゆかり、一寸拾ただけでも十指に余る。それぞれ一癖も二癖もありながら、歌にかかわる限り忘れる事の出来ないお人良し達であった。

また他の地方へ移って行った人も大ぜいいる。山口茂、大倉芳子、吉永流藻子、住吉豊、椎名千代子、坂本清人、高山一枝、徳永京子、久米光春、荒崎三朗、同百合香、古北政次、別所慧、小坂桜雪、米川久、まだまだいると思う。

そうしてまだ会う機会も少ないままに作品のつながりを持つ人達が居る。プ・プルデンデの後藤静、井唯澄子、レゼンテ・フェジョの青野妙子、オウリンニョスの富岡のぶ子、聖市の寺田雪恵、サン・ジョゼ・ドス・カンポスの大月博等の参加があり月々の歌

会を支えている。

地元のメンバーは創立当時からの瀬古義信、森谷風男、森谷春男、大場時夫らをはじめとして高須きみ子、加藤喜代子、小川貴美枝、河崎節子、毎熊百合、桜井静枝、中西静世、高原阿久里、古賀みつか、渡部南仙子、坂光男、古田不覚、箕輪新七らである。

こうして振返って見るとお互にわが道を行く者達の集りであって時には重苦しく感じられる時のあった事も否定出来ないが、それ以上に強い絆で結ばれていたことをつくづくと思い知るのである。

合同歌集「南回帰線」を発行した。この歌集の命名者が本庄研一、彼ももう亡くなったが忘れる事の出来ない一人である。坂本、住吉、有田、久米、皆んな若くて積極的であった。

良き歌と褒められしより病みつきてあやうきまでに熱あげて居り

坂本

全く傍目にも危うく大変な時代があった。この危ういまでの熱がこうじてこんな事があった。全伯短歌大会に確実に出席出来るにはどうしたら良いか、と聞かれ飛行機だと答えたのである。後にとんでもないことを言うやつだと怨みを買ったが、あの当時、汽車は時間が当てにならず、バスは雨が降れば立ち往生するのが常のこと、ごく当然のことを言ったのつもりだったのが冷静に戻ってみればそれ程までにしなくともと言う事であった。

熱にうかれていた彼は飛行機で出かけて行って居りながらひどい奴だとかみついて来た。お人好しの助言は時にペテン師の言葉と同じ結果を生むことになる。

第二歌集出版の時には一番口喧ましく費用のことを心配してくれていた銀行マンの古北が、転勤と言う名目で逃げ出したと言う口惜しい一幕もあった。彼は現在クリチーバの方で頑張りつづけている。

こうした動きの他に瀬古義信の歌文集「半世紀」が日本で出版され、また当ロンドリーナで詩集「農夫の詩」を出しており、故人野中みやの歌集「余光」もある。

夢は膨らみつづけ、第三歌集を出版し、第四へとの望みもあるのだが、問題はまず第一このインフレに加えて少々疲れをおぼえる昨今である。この気力のおとろえにしょげている矢先、に「大場の選は身贔屓が過ぎる」と直向からやられた。しかも吾が足下からである。この度の岩波賞の選考に私が上位に推したのがパラナの者ばかりであると言うのである。「椰子樹」一九九号を取り出して驚いた次第である。だが事実である。

いつの間にか私の好みが身近な人達のリズムに浸りこんでいたと言うのであろう。笑っただけでは済まされないことだが、今読返してみでもこれを改める気になれないのも事実である。

歌は理屈や説明ではない。韻文である。短歌のリズムに多くの比重を掛けている私の連歌が、他の人達との間に隔たりが出来たと言うことであろうと思う。

三十一文字はこわれ易くこれが過保護になれば気取りにおわる。三十五年余をこの歌に魅かれてやって来た僕のまわりにこうした苦労を共にして行く人達がいることも幸せだと思っている。

この稿を書いている折に、小坂桜雪が来て二十余年振りの話が出た。古い友人との再会は嬉しいものだ。又新しい人が参加しょうかとの話も小耳にしている。

歌会も常になにかの刺激になるものが待たれている昨今である。

（敬称略）

## 福博短歌会について

石橋　初穂

椰子樹創刊二百号に至り心からお慶び申しあげます。

コロニア文芸の最高峰「椰子樹」を盛り立てて下さった、先輩諸氏に深く感謝いたすものであります。

私共植博歌会もこの十月で九十八回を重ねてまいりまして、大変嬉しく思います。

私共福博短歌会は、一九七七年九月十三日に、当時の福博婦人会の文芸部長だった杉本鶴代さんに依って発案され、当時当植民地在住の青柳房治ご夫妻の熱心なお奨めに依りまして、初心者ばかりの集まりで発足いたしました。

幸いにしてコロニア短歌界の重鎮でスザノ在住の今は亡き酒井

繁一先生の出席を仰ぎ、歌会を開くことになり、ほんとうに幸せでした。

先生は歌道のために一生を捧げられた方でありました。元々余り健康なお躰ではなかったのですが、病苦を一切語らず、創立以来亡くなられるまでの八年二カ月、私共新人のために欠かさず歌会に出席され、親切に添作、推敲にまたは発想に着想に用語の使い方に、やさしくまたきびしく指導をして下さいました。

私共には、師であり父であった先生が病魔には勝てず、一九八四年八月十五日に遺族始め歌友、文芸界に惜しまれて他界されました。

私共は父とも親とも尊敬していた先生に逝かれて一時途方に暮れたものでした。

皆の暗涙のうちに、翌八月十六日スザノ墓地に永遠の眠りに就かれました。

でも遺された歌友は、先生の残された歌会を今くじけてはならない。悲しみの中よりお互いに励まし合って歌会をつづけることが先生の霊とご恩に対して報いることにもなると話し合いまして、歌会は今に至るまで続けてまいりました。

これも「椰子樹」の歌人の方々の激励のお蔭と感謝いたします。また遠くのバストスの森重先生始め、サンパウロ、スザノ、モジ方面の歌友の方々が毎回馳せつけて応援していただいているお蔭であります。特にモジ市の河村哉太郎氏は、亡き酒井先生同様に出席下さいまして歌の道を拓いていただいております。

高邁で奥深い文学の道をのぞき見ることも覚束ない私たちですが、学習のつもりで亡き酒井先生への供養のつもりで作歌に励みたいと思います。

「椰子樹」二百号発刊の祝いの言葉と思いましたが、外れて失礼いたしました。

今後共福博歌会のために「椰子樹」の歌友の方々の激励ご指導の程をお願いいたします。

## 禍福糾える八年間

サンパウロ歌会

高　橋　よしみ

椰子樹二百号記念号刊行に当って一五〇号から歌会記録に目を通しながら万感胸に溢れた。八年の歳月はサンパウロ歌会に厳しい変動を齎している。中でもまだ壮健であるべき、中江克巳、武本由夫、井本惇氏ら指導者層の長逝は天を仰ぎ地を打ちたい程の痛恨事であった。その他、川上千代三郎、城田つたを、知花清、西田孝徳、岩佐静雄、富岡清治、須田子徳、山室新太郎（入会二年）、ら優秀歌人数名を失っている。休会員の復帰と新入会員によって人員の衰退は免がれて居るものの一抹の寂しさは拭いようもない。四〇才以下の会員皆無の現在、歌会の将来性に就ても考えさせられる。

この八年間六回に及ぶ会場移動の煩瑣を経て現在山形県人会々館に落着いている。毎月初めの日曜年後二時から二〇名を越す出席者が互選による高点歌順に忌悍なき批評研鑽を進めており、欠席投稿詠も含め歌会が盛んである事は喜ばしい。

忘年会や吟行ともなると四〇名近い参加者があると云う事はまだサンパウロ歌人健在の証左であろう。厳しい会則があるのでもなく短歌愛好者の出・欠席自在なので年間一、二回顔を出すのみの会員も多い。雑用の多い歴代幹事のご苦労は言うまでもなく、安艮田氏の長年に亘る歌稿整理も一方ならぬ労役に相違ない。一つの会が運営されてゆく蔭には並々ならぬ無償の働きがある事を思わずにはおられない。

一九七八年〜七九年＝幹事・梅崎嘉明、会場・文協小室十月ブラジル棋院。七七年来の研究会は自然消滅、歌会のみ隔月毎、出席者十名足らずの時期がある。吟行も試みながら不振状態を脱し得なかった様子がうかがえる。六月歌会では三年後に逝去された中江氏の歌「中指の節々疼き左手は斯くて麻痺に犯されゆくか」に発病の兆候を思わせられる。十二月歌会の作品で知念氏の歌が絶筆となっている。「青き灯の点れる坂道帰りゆく長き孤りの影凝視（みつめ）つつ」。

一九八〇年＝幹事・水本、植村。会場・ブラジル棋院。会費五〇クルゼイロ。

歌会に活を入れるべく研究歌会を復活させたが、これは四回で中止。以後毎月歌会に切りかえでいる。二月・水本シャカラへ吟

行、気を取り戻し始めた。山室氏入会、八月デルフィン・サロンへ移転（無償）会費三〇クルゼイロに下げる。

この年より歌稿が印刷されるようになり専ら安良田氏が担当して今日に至る。

一九八一年＝幹事・水本、植村。会場・デルフィン。幹事の努力と本年刊行された「コロニア万葉集」の反響によるものか新会員増加と休会員の復帰が見られる。地方歌人の移住入会もある。二月歌会での中江氏の作「老い二人声低く居り表には満つるが如く夏の日明るし」はその絶筆となった。七月歌会・千葉美夜様の詩歌集「心の雫」の出版祝賀会を開く。

一九八二年＝幹事・水本、植村。

一月歌会で我等の慶事として「コロニア万葉集」のコロニア文芸賞受賞祝賀会を行ない、武本氏は杖で、木村氏も松葉杖で参加。三九名の歌人が徳尾代表の音頭で祝杯をあげた。喜びの宴に夜は更けて「蛍の光」合唱散会。

三月歌会は山室氏の絶筆となった「陽に透きで紅さやけきベゴニアの花房いくつかの花首散らす」がある。ロンドリーナ歌会へは十四名が出席親交を深めた。

三月五日沼貴代様の喜寿祝賀会、三月十九日中江氏逝去し五月の追悼歌会には四二名から歌が寄せられている。四月歌会には河村氏の歌畢「篁」の出版祝賀会があった。

一九八三年＝幹事・植村、岡本。会費五〇〇クルゼイロ。三月、赤毛活花教室へ会場移転。長期帰病にあった西田孝徳氏一月七日逝

去。また武本師は昨年忘年歌会に「瀕死の床にてソーロ打ちつつ作歌するこの業病の果つる日は何時」を遺して一月二一日永眠された。武本師の追悼歌会には四六名の出席者を数えた。三月はサンパウロ歌会二百回記念歌会を兼ねて故越村氏夫妻の詩・文・歌集「常燃の秋」の出版祝賀会。七月、小竹様の歌集「轍の跡」出版のお祝いを兼ねてサンパウロ歌会からモジへ病気見舞に訪問。昨年に続いて悲喜交々事多き年であった。

一九八四年＝幹事・植村、岡本。会場・赤毛活花教室、会費一千。三月に山形県人会々館へ移転。スザノ地方短歌大会へ応援出席。六月七日井本惇氏急逝。七月歌会を最後に須田子徳氏死去。ここ二、三年サンパウロ歌会に不祥事が絶えない。

反面中井様の喜寿、岩佐氏の古稀、高橋峰子さんの岩波賞受賞と河井美津子様の伯団児童文学院人席の会同祝賀会など喜び事も有った。十一月には茅根様のお招きで久方ぶりに行楽を兼ねた楽しい歌筵を敷かせて頂いた。十月歌会を最後に五年間勤務された植村幹事が発病、阿部玲子さんが代行する事になった。

一九八五年＝幹事・岡本、阿部。会場・山形県人会々館。会費三千。三月、西田様は短歌部門で、寺岡氏は体験手記の部で各々武本文学賞受賞。尾崎都貴子さんは詩集「黄色い夢」内川氏は歌集「この道」を出版され四人合同祝賀会を催す。

六月、加藤氏のご好意によるアチバイア吟行では会員多数が車を連ねた。

昨年古稀を祝われた岩佐氏七月逝去。八月、故井本氏の連歌集

「ひぐらしの虫だ出版を未亡人を招待して祝った。顧るにこの八年間は禍福糾える年月であった。九月恒例の全伯短歌大会では地元サンパウロ歌会は大童、短歌牙城の灯を守って　延命への努力を続けて居る。

## 「椰子樹」の運営
### ～運営委員会決定事項から～

「椰子樹」の運営方針、年間計画等は毎年全伯短歌大会の前日に開く運営委員会によって決められているが、一九八五年九月七日に開かれた前記委員会の決定事項を一つの記録として、ここにとどめておく。何といっても、「椰子樹」の発行継続の上に大きくのしかかって来るのは印刷費の問題である。年間インフレはここ数年二二〇１三一〇％という高率（即ち年に三倍以上騰る）で而も印刷関係は概してこれよりなお高率の上り方をしているのが実情である。（以下八五年一〇月発行二〇〇号より）

◎一九八六年度会費の件＝ここ数年の印刷費の高騰状況は年間二〇〇～二三〇％（三倍以上）に及んでいる点を考慮して、一九八六年度は払い込み期によって一～三月＝　八〇、〇〇〇ＣＲ$　四～六月＝一一〇、〇〇〇ＣＲ$　七～九月＝一四〇、〇〇〇ＣＲ$

一〇～一二月＝一八〇、〇〇〇ＣＲ$　（この期間内の分割払いも可。因みに一九八五年度のそれはあれぞれ二万五〇〇〇、三万五〇〇〇、四万五〇〇〇、六万ＣＲ$であった。なお本年（八五年）一一月末までの払込みの場合は六万ＣＲ$とする）。

一現在の印刷費（八五年度後半は一頁六万五〇〇〇ｃＲ$、年六回発行、平均三四頁として）その他の支出を基にして来年（八六年）度の総計費を算出すると約四〇〇〇万ＣＲ$を必要とし、会費収入のみではその半分にも達しないが他は預金利子、寄付、リファその他の不時収入でまかなう方針で臨む。

◎名刺交換＝任意。八六年度分（八五年一二月発行の号に発表）一万五〇〇〇ＣＲ$（但し一～三月払込み）。四月以降の払込みは三万ＣＲ$。団体の場合でも、その中に個人で出す人があれば大いに歓迎。

◎経営スタッフ＝代表～徳尾渓舟、編集～清谷益次、安長田済、会計～陣内しのぶ。

◎作品欄選者＝陣内しのぶ、小笠原富枝、弘中千賀子。

◎しつ（金偏に質）特別選歌欄＝大場時夫。

◎岩波賞選考委員＝河村哉太郎、大場時夫、多田邦治、小笠原富枝、陣内しのぶ、弘中千賀子、水本すみ子。

# 一五二号以降の物故者と作品

陣　内　しのぶ

一九八二年三月十九日、椰子樹にとって長年の間、常に重要な裏方的役割で、運営を支えて来ろれた中江盛治氏を失ったことは、何かしら悲劇の予感を思わせた。翌八三年一月二十一日暁方、病い改まった武本由夫氏が不帰の客となられた。両氏は若い頃からの友人であり、武本氏は、椰子樹創刊者の一人であった。

更に翌年八四年六月七日午前一時、直前に腸の手術を終えた井本惇氏は、麻酔の醒めぬまま、心臓麻痺をおこし急逝された。予想だにできなかったこの打続く不幸に「椰子樹」に関わる人々は、一時茫然となった。更に又、幾程もない八月十五日午後四時、「しつ？」の選者であった酒井繁一氏が、かねて入院中のスザノの病院に於で長逝された。

椰子樹創刊以来、四〇年近いわけであるが、この度のように短い年月の間に、続いて重用な人々を喪うという不幸は、かつてなかった事であった。四人が四人、甲乙つけ難い大切な人々であった。

中江氏が母的立場で会員の一人一人に接して下さった、と考える時、対蹠的に浮かぶのは、父性的な強さと温情を短歌と歌人に注いだ感のある武本氏であろう。

酒井氏はすでに老齢であったが、長い間椰子樹に協力される傍

ら、自らの著述やら歌集も多く出され、思い残きれる事もなかったと思うが、他の方々は、自ちの事を省るより、他の者の為にのみ尽くして一生を終ったと云う感じである。殊に四人の中で年若であった井本氏は、油の乗り切った時期であった。事業の方も他に譲って身軽となり、余生を充分に文筆に打込む心算りであったことを知る者にとって、痛ましいの一語に尽きる、と云えよう。

この四人の方々と前後して物故された人に、かつて椰子樹の中堅として華々しい活躍を見せた脇坂一、山室新太郎、本庄研一、越村定雄、小竹清子、岩佐静雄（一歩）片岡けい子の諸氏がある。又、異例の人として、今年七月十二日午後三時に眠るが如く大往生をされたと聞く富岡清治（耕村）氏がある。九十二才と云うお年に不足はないが、毎号手にする椰子樹の表紙が氏の手に成った版画であった処から、やがては、長年親しんだこの温い絵を見ることができなくなると思うと、実に淋しい。

中山、富吉のお二人は、それぞれ一度ずつお目にかかった事がある。まさに、一期一会、何れも印象深いものがあった。お二人は創刊当時、或いはごく初めの頃からの会員であり、中山氏は帰国、富吉氏は歌壇を離れて可成り長かった人であるが、お二人共に精神的に椰子樹との繋がりの切れない人々であった。

阿部太（青杜）氏は、椰子樹創刊時の一人であるが、早く帰国していられたので、作品は創刊号から抜粋した。

その他の諸氏のいづれも新旧の違いはあれ、それぞれに繋がりは濃く、椰子樹に依って歌境を展き、磨かれた人々である。

この度、二百号記念号にその名を止どめると共に、作品を抽出した。主に、椰子樹一五〇号以後を中心とした。作品は、作者の代表作と言うに当たらないかも知れないが、私なりに目を止めたものであり、責を果たさせて頂きたいと思う。

（一九八五・一〇・一五・記）

（解読不可　原本１３２　―　１３３頁は印字がほとんど消えている。）

星ひとつ流れゆきたりゆくりなく野良への道にて尿りするとき
清々と鳴くなるサビアの声したし語る相手もなき畑中に

田中　正実（サンパウロ・旧会員）

青々と三つ重なるパンの果の下なるは熟れつ落ちなんばかり
アルコオルの廻るにつれてわが顔のカメレオンの如色変り行く
正月三日雨季の蛙の鳴き出せしアマゾン日記の懐しさはも

佐藤　貞一（サンパウロ）

木葡萄の未だ熟れざるに小鳥らは何時しか来りて啄ばみ落とす
鼓笛隊先頭に立ち日語校の児童粛としてこれに続けり
召さるる日に備えむとして二年余り無精髭生やさず剃りで来しかも
使命未だ残りしならむかにかくに病苦に耐えてわれは生き来し
盆踊りの稽古にあらむ小夜更けて花笠音頭の音律聞こゆる

脇坂一（サンパウロ）

二十日余り街に過ごして帰り来し我が家の態の哀れなるかも
カンテラの油煙よけつつ子の足の砂のみ掘るが日課とはなる
海というはどんな物かとの子等の問いに六人の大人答えがてなり
忙しく刈る暇なき吾が髪の耳にかむさるを摘まみて切りぬ
畑うちて生くべく我は生れ来ぬはるばろここに移り来て又

芳賀　芳朗（モジ・旧会員）

茫漠たる麻州平原の中にしてわれより低き落日に立つ
ジープにてひと日走るを山もなく麻州の曠野は天につらなる

楠木むらじ（サントス・旧会員）

海に倦み人間に倦みて冬の園アララの前にしばしからかう
心まで惑い出で来し渚辺にあまたのウルブーわれを見控える
披露宴嫁ぐ吾娘の晴れ衣裳哀しみ秘めて席に連なる

中江　盛治（サンパウロ）

つむぐ如き吾の日頃よ夏きびし病めば体の衰えかなし
新年を祝うと計る君達に背を向け戻る肩に雨降る
日に一度祈るが如く嚥み下す錠剤は生きの躯あつく溶けゆく
ボトン一つようやくかけたり残る四つ思えばまこと心に重し
左側の痺れに眼ざめ闇深き臥処に不治のかなしさ思う

西田　孝徳（サンパウロ・旧会員）

輸送車に運ばれて行く若き兵ら戦にあらざれば明るき顔して
新教の牧師毎月来たれども話す事なくただ祈りでかえりぬ
八年間病む花積氏たづねたけれど歩めざれば我は叶わず

緒方　明光（サンパウロ）

さすらいの果てに吾が来しこの国を子はふるさととしつつ育ちぬ
ぎりぎりの生活を子に強いて居り農村不況の声も久しく

土屋為五郎（アメリカーナ）

朝まだき梨の根本に抜けし蝉まだ頑に穀に縋りおり
過ぎ去りし日は泡沫に似たれども想いみるとき沁みて恋しく
再会を約して往きにし我が友の俤がつよく心に残れり

川上千代三郎（サンパウロ）

末だ消えぬこころの染みをけずるごとく老斑浮きし顔朝あさに剃る
季後れの雨降りつづくこの日頃垣根の挿木青み増したり
工房の隅に横たわる石膏の首無き女神がわれを見瞠める
暫くは動けぬ床に海恋えば耳底に砕けて猛る潮鳴り
一進一退の予後の闘病に送る日日眼のみ食欲に燃えて痩せいる

武本　由夫（サンパウロ）

ものみぐさく夜半の厨に水飲めり酔いたる我とはらめる猫と
夜半にさめて乏しき銭をかぞえたるはかなき心は耐えて語らず
土産店の片隅暗く居竦みて人を拒めりひびある壷は
うなじ垂れて聖典黙読の後姿（うしろで）は朝の渚のウルブー三羽
瀕死の床にてソーロ打ちつつ作歌するこの業病の火消ゆる日は何時

飯田　義勝（ＳＪカンポス）

葉隠れに小さきふくらみ見し日よりイペーの花は日々に色たつ
ふくらみを仄かに開く紫の庭のイペーに心ほぐさる
降霜の畑の隅々見廻りてものをも言わず帰り来し父
夕茜湯窓開くれば一望を枯牧戻る牛群の声
柔き土の窪みに雀等の砂浴び止まぬ雨の晴れ間を

中川原．実（ロンドリーナ・旧会員）

彫刻ののみ屑靴にけ散らして寒き日暮れの工房を出る
豊漁の網を干したる軒低き漁師の集落茜射したり
病みあとの吾が影ほそくひきながら友訪うと来し朝の舗道を

山室新太郎（レジストロ）

愚かなるあやまちなせし過ぎ去りへ罵声を放っ独り酔い居て
消え残る野火を遠くに見さけつつ歯音さやけく林檎を食めり
幼くて移り来たれる我なれば恋うべき故郷の山河を知らず
兆しくる鬱気のありて眼交の梅檀の枝の緑重たし
身を苛む思いのあれば白日の下にひたすら草をむしりおり

井本　惇（サンパウロ）

おりふしに思い出でつつとむらうに非ざる一つ菩提のゆくえ
ゆくりなきものの如くに曇り日の暮近き日が窓にさしたり
ひとひとり悵む思いも長くしてあわただしきは逝く歳のこと
泣きてすむことにあらねば泣かざりき昼を降りしく荒雨の下
暁に覚めたるわれに月蝕のまさにかけたる月は傾く

本庄　研一（クリチーバ）

制約の多き私信を入れに行くひすがら濃霧に昏らき冬空
みのることあらぬ季節に芽を吹きて葡萄よわれも無駄のある日日
顕微鏡に拡大さるる蝿の眸よ告白もなく過ぎて行く夏
ポインセチアの朱の炎群よ平安の晩年にしてきざすいらだち
生きのびて行末知らぬ日日なれど今日を悦ぶ病床の春（遺稿）

酒井　繁一（スザノ）

喘息に苦しむ妻よ足病みて吾の動けぬ時に死ぬるな
初盆に妻に供うるバラを剪る共に育てて半年の後
再びは帰ることなき日本に一生をつなぐ国籍がある
駈けて来る声に呼ばれて振り向きぬ四十年前に死にし子の夢
倒産のいわれを告げし夜の父の面の不憫は一生を消えず

須田　子徳（サンパウロ）

暁け早くわが窓に来てくぐむ鳩いつよりか日日の安らぎとなる
目の前の灰皿に水を溜めでありその可否などを思うひとときき
庭の隅にまた水仙の咲き出でて時たがえざる花をさびしむ
妻と居て覚えざりける波の音一人となればとどろに聞こゆ
宿の夜のテラスに佇てば暗きよりかすかに軋むぶらんこの音

阿部　太（青杜・日本・旧会員）

汐風の服にさえざえと吹きぬくる広き食堂に一人飯食す
渓川の水音さびしも匐い上る汽車のとよみにまざれつつきこゆ
しじみ汁しじに食べまく思い居り病めばはかなきねがいなるかも

小竹　清子（モジ）

子の上に執して深き生き方も最早微力となりて老いゆく
穏かな河の流れの極みにて滝となる水ここに轟く
夜の明けて湿りも固き渚辺を名残りの星の消えるまで行く

製紙工場のヘドロの上に浮く水の風に動けり青く光りて
心してわがしら髪を結いくるる汝が手に安し生きの限りは

向井　恒夫（サンパウロ）

同じ頃嫁ぎし友の幸福を語れる妻の顔のやつれよ

五十嵐末子（サンパウロ）

蝉しぐれ開きつつ遠きふるさとの想い出をしばし心追いいる
カーニバルの喧噪も過ぎ青空はあくまで澄みて太古のごとし
ブラジルの銘木と聞くジャカランダの鶴を購う日本みやげに
点々と数増してゆく街の灯を眺めつつ遠き娘を想いいる
その人を目に浮かべつつ年賀状あまた書き終え心やすらぐ

岩佐一歩（静雄・サンパウロ）

ようやくに師走となりであわただし吾が定命の古稀は来たりぬ
くる年の一月八日わが誕生日人生七十古来稀なり
中風にて右の手足はしびれつつ右眼抉ぐりて吾は生きおり
五十年異土に住まいてなお恋しふる里の浜のハマナスの花
ジャカランダの筴実が風に揺れており葉むらの中に小鳥がひそむ

富岡　清治（サンパウロ）

剪定したる庭木のイペはこの歳を僅かに花つけすぐに散りたり
鍋の乳わく間見守るこの時も我が人生は過ぎ去り行くを

搬入の日の迫り来し出品画気のむかぬ日も少しづつ描く
展覧会に売約となりしわれの絵を奇蹟のごとくわが耳に聞く
移民われ移民と云う肩書を一つ背負いて死にゆく運命（さだめ）
か

佐藤一英（ＳＪカンポス）

石灰を混ぜて堆肥をつみたれば今宵吾が手が夜着にざらつく
風落ちし秋の日暮れを堆肥場にこもりてすだくこおろぎ二つ
指図して花置く柵を作りつつ病む身も釘を二本打ちたり
花の棚作らせ乍ら鋸執れば病む身に伝う生きの弾みが
病みこやる身は安らぎて見るものか窓ほんのりと暁の色

新宮　晋作（トレメンベー）

学終えて農継ぐと言う孫の長（おさ）老い兆す吾に心優しく
パライーバの平野吹き捲くる南風雲を片寄せるミナスの山へ
堤防を崩せる濁水の奔流は青き畑を次々と呑む
畑つもの眼路の限り水底に部落声なく雨は降りつぐ
東空は仄か朱の色暁闇の天心に冴える上弦の月

野上とし子（スザノ・旧会員）

帰り来る夫迎えむとひそやかに化粧をするも年に幾度
掃除終え花をばかえて母の日を子無きが故の静けさにおり
靴音に女の思いこめてゆく夫のかたえに歩を合わせつつ

八巻　梅夫（サンパウロ・旧会員）

カテドラールの角にてゆきあいし年若き婦警はフランス風の帽かぶりいき

音たてて風すぎゆけり人夫らがビラ貼り急ぐ夜の板壁に

おどろくばかり幹の下方にひしめける木葡萄の実を朝は見にゆく

片岡けい子（リオ）

病む夫に代りで今日は仕入れすと吾のみ女の始発バスに乗る

父母の感傷は知らず混血の児を娠りて娘の絆明るし

怠惰なる逃避などあらず赫々とひと日の果てを陽は燃えて落つ

葡語のみにはずむまどいの様みれば吾には遠き子等の如しも

木杯の選に洩れしも知らずして君は鍬打つ昨日も今日も

土屋千恵子（ロンドリーナ・旧会員）

さなきだに心重たきこの夕べ寒気ともなう雨はふり出づ

これよりは登り坂なり痛む足いたわりパイナのかげにいこえり

再びは渡ることなきこの海かふる里想えばひたよせる波

## 昭和万葉集の　コロニア短歌

一九八〇年に講談社が刊行した昭和万葉集に収録されたコロニアの短歌は次の通り。（新かなづかに統一）

### 岩　波　菊　治

救世軍の兵士となりし吾が友は富山の薬売りて世すぎす

いついつと帰る日知らぬ故里の信濃の国の山川を恋う

ふるさとの信濃の国の山川は年経るなべに恋しさまきる

蚕を飼いてミシン購わむという妻の願いはあわれ三年越しなる

現し身の心づかれかふるさとの夢をぞ見つれ三夜さつづけて

涼しげの日本の浴衣うちほぐし妻は作るも吾子の産衣を

幼子の笑まい姿のうつしえを遠き故国の父母に送らな

コーヒーの値は下押して底を知らず蚕飼いの事に思い及ぶも

### 岩　佐　一　歩

珈琲の樹海の果つる山裾に一すじ白く霧なびく見ゆ

### 酒　井　繁　一

天皇と秩父宮と反（モ）れ給う風説も海を渡りで聞こゆ（二・二六事件）

日本より取寄せたりし樟の実は幾度播くとも生ゆることなし

霧島の峰のこなたを渡る雲たらちねの乳のごとくゆたけし
椰子酒を振舞うことを誇りとしニグロ煤けし土器に持ち来る
沼べりに隣りもあらず住む土人鰐を魚族のごとく恐れず
太平洋を二度と見ることありやなしや妻子を連れて今日を見に来ぬ
病める子を担架に乗せて下船する我がむらぎもの千切るる思いに
時々の父が帰心は我が家を旋風（つむじ）の如くゆすぶり止まぬ
夏空のかかる深さは今日までに我知らざりき国を出むとす
井戸端に血を吹きし手を洗うなり移民の悲しさ言うこともなく
足元にとぐろを巻ける毒蛇をも殺して今日も原始林伐る

## 瀬尾涛声

米作りやめてはるばるこの里にトマテ作ると来りけるかも
正月にふさわしからぬ此の国のこの蒸し暑さ雑煮食しおり
移り来しこの国にはや十六年百姓をして侮ゆることなし
夕霧は谷間に蒼く沈みいて澄みとおる靴工（サパテイロ）の声
辛うじて出でしぶどうの稚な芽を日にいくたびも来ては愛しむ
なかぞらに旋回飛翔していしが南下しはじむ死屍食鳥の群は
エコノミックアニマル来りて忌々し伯国松材　大豆買い占む
利に絡み帰化する人の多けれど我は果てなむ日本人として
地球うらゆくるかと思う白雲の絶え間なくとおる裏山の上
ピシャリと列の外れで音がした　いつもの輸卒が殴られていた
落書にインカの神殿けがしたる日本観光アニマルどもら

小田切　剣

国遠く子に従いて移り来し嘆きは母の一生もちけむ
ユーカリの山いくうねり続くはて夕雲赤しソロカバの山
高原のいづらに帰り行く人か雨にぬれつつ馬並めて行く

新　納　潤　魚

ガザ派遣ブラジル部隊に日本人二世混れば何を頼まむ
港より船の汽笛のとどく窓移民なること忘るるならず

中　山　稠　子

天皇は如何に在すや言いさして息呑む友のこえは咽びぬ
地に空に毒気流して驕る世のよきいましめぞこの原油危機

行　方　正治郎

夜くだちて冷え著し南の空に定かに見ゆるマゼラン雲は
ふり仰ぐ時雨の空につらなりて鸚鵡の群は鳴きつつわたる
ブラジルの奥なす森に並み建てる吾がはらからの奥津城どころ

三　好　綱　一

ブラジルに松を育てて二十年老いゆく年も忘れいたりき
ブラジルの高原広し広く吹く風に吹かれつつ祖国を偲ぶ

高　林　明　雄

日本語を話したびたび入れられし留置場みゆ夕陽の中に
屠殺場にやっとつれ来し牛の群食い足りたらむ静かに坐る
「この国の子供」と言い切り育ちゆく吾子達に日本の何残るらむ
佐野　鍋山の思想転向を新聞紙しるく書きたり何の意とぞ思う

梅　木　幹　弘

紀伊水道をひた南下する移民船の祖国を離るる水脈をみつむる

中　江　克　巳

籾を売りて僅かに得たる金なれど今日一日は嬉しかりけり

鴨　川　声　夢

工学士の肩書き持てる我が友は此処に十年米作りおり

武　本　由　夫

得意の時も無かりし我等酒のみて渡伯当時の話に耽る

開　沼　貴　代

幾度も旱りに枯れしコーヒーを雨降ればまたきおい種子播く

晶　山　　充

椰子の葉を抱えて集う土民らにドミンゴラモスの鐘鳴りわたる

中　井　小　鴨

刈られたる青草の中ジュアの実の赤く照れればもぎ取りて見し

武　田　公　平

午後の熱はまた昇り来る兆あり独り臥しきく山鳩の声

中　井　益　代

辛うじて吾子らに教え来し日本語いつまでここに保ち得べきや

福　田　夕　月

遠くなる雷をききつつ旅ゆきて幾日かえらぬ夫思いおり

東　野　暁　風

パチンコも一台持ちてアマゾンへ戦後はじめで日本移民来る

青きものすがれ果てたる牧の馬あしたかたみにたてがみを噛む

桐　原　八重子

子等の心遠く通いてブラジルに初めてを咲く赤きれんげは

脇　坂　一

移り来て二十年すぎし年月よ牛殺すことも今はなれたり

小笠原　正　好

日本製カレンダーを貰うには二百ミル以上買わねばならぬ

小　松　修五郎

帰るなき日本恋おしくよる窓のアバカテ青葉夕かげりして

植　村　か　ず

夜の祈り葡語に誦する幼声移民の裔の翳はなかりき

望　月　左呂女

はるばるとイペの花咲く国に来て頭髪白く我は老いたり

小　竹　清　子

街はずれよりただちに展くる珈琲の樹海の果に湧ける白雲

信　太　千恵子

野火の音ま近に迫り牧の中声をからして吾が馬を呼ぶ

田　中　あ　い

夢に見し日高の浜は変らねどわが生れし家は厩となりぬ

川　田　幸　子

霧白く流れ始めて涯果の我が住むアマゾン雨期明け近し

織　田　真　弓

霜に荒れしアバカッテの葉叢ほの暗く乾季の雨が音たてて降る

青　柳　ま　す

諍いて帰りしニグロも戻り来て火祭の輪にサンバを唄う

響もしてサンバ流るる土民らの屋台に火酒（ピンガ）提げ夫も入りゆく

山　崎　益　一

還暦も古稀も因縁を知らずして祝うことなき二世と生きおる

堀　田　　栄

ふるさとの山の名つけて住み古りぬコーヒー樹海の中の小山に

志伊良　二　世

日本語は使わぬ子等にかこまれて老母が

（解読不可　１４０画像ファイル－原本１４０　－　１４１頁）

（以下　あとがき）

の短歌とのかかわりについての視点を取り上げ得なかった点である。

「準二世」をどう定義するかということも細かくみれば甚だ難しい問題であるが、或る時期以後のコロニアの短歌は、この準二世とそれに近接する年令層によって支えられて来た、といっても誤りではないのであり、準二世とこれらの層が（忽論総てがそうだったと言うつもりはないが）これほど強く〝短歌世界〟に繋がったかということも考察に価するものと思うのである。

記念別冊号企画の年に、私共はこの層の数人の有力な作歌者を喪った。かつまた生きて在るものは、記録的な記事の執筆に精一杯という状態で、「準二世と短歌」という一つの命題に触れ得べき人を求め得なかったことも事実であった。

昔から、移民が作る短歌は郷愁の所産だと言われて来た。確かに、或る年令以上に達した段階で移住して来たものにとっては郷愁は直ちに短歌表現につながったかも知れないが、〝子供移民〟たちにとっての短歌とは、郷愁と一口に言ってしまえない、もっと重い、さし迫ったものがあった、と私は考える。準二世といえども、故郷の姿とそこでの生活は、年令の層と個々の性格差による違いはあっても、心に刻みつけて来ているから、全く郷愁が短歌につながらなかったとは言えないが、それよりも、覚束なく心に抱いている「日本」が、時を経るに従って益々薄れてゆくことへの怖れがあり、それが自覚されるようになると同時に、失われて行くものへ縋りつくような思いでの日本語の勉強があり、その

行為のひろがりとしての短歌表現があったのではないかと思うのである。この点では、準二世と短歌の関係は、一世移民のそれよりも、より〝純二世〟（つまり二世）の思いに近接している、と考えられるのではあるまいか。移民の短歌が郷愁からばかりではなかった、とする私の考えはそこから発している。

短歌を作ることは、準二世にとっては「自己を日本へつなげるもの、自分とは何かを確かめ探るもの」といった自己存在に関わる一大事だったとも言えるようで、この詩型式に縋らなければ自己発顕の道はない、喪われ行こうとするものと自己とを結びつけるてだてはないしというほどの切羽つまったものでさえあった、と私は自分の貧しい経験に徹して言えるように思うのである。

いずれにしても、二〇〇号記念別冊が、一五〇号から現在に至る〝コロニア短歌〟の姿と問題点を俯瞰し、また将来を考察する一つの手がかりたり得れば、ささやかながらも喜びとせねばならない。会員皆さん方の絶大な協力を感謝する。

―清谷　益次―

## コロニア万葉集の位置づけ

椰子樹一五号以後のコロニア短歌界の価値ある事業として、コロニア万葉集の刊行を挙げることが出来る。この集の価値は年を経るにつれて愈よ大きくなる性質のものだが、刊行当時これがどのように迎えられたか、一、二の文章（抄）をこの別冊に留めることにした。　（清谷）

### 「移民の心の歴史」　半田　知雄

コロニア万葉集は、私にとってはとても便利なものです。これだけまとまったものは今まで出なかったし、おそらく出せなかったでしょう。

コロニア史上、文華はなやかだった一九三〇年代すら、私の記憶によりますと聖州新報歌垣の人たちの作品を集めた「移り来て」（一九三八年）という小冊子だけです。その頃は今白のようなせっぱつまった気特が、一世にはまだ無かったからかも知れません。

「今まとめておかなかったら、自分たち一世の心の華はついにこの世から消えて行くのだ」、ブラジルの歴史の上からみても、日本移民の足あとは、余りにもむなしいものとなることでしょう。

われわれが慣れない異国に労働移民として一攫千金の夢はもちながちも生計をたてるため、めまぐるしい日々を送り、多くの文化生活を無視して来た中で、歌や俳句は日本人の心のデリカシー

を持続したものとして移民史上重要な位置を占めています。

コロニア万葉集は移民の心の歴史です。私は行きあたりばったりページをめくって「ああそうだった」と、そこここに昔の心をひろいあげて、なつかしさに胸のおどりをおぼえることがあります。ただものたりないのは、契約移民として渡伯し、コーヒー農虜に働いた頃のことがあまりみられないことです。だが植民地開拓の意気ごみに接したときからは、ああいう希望のない生活からは詩は生まれなかったかも知れないと思いました。

初期出稼ぎ移民は、花より団子で自分の生活をふりかえって詩の世界にこれを昇華させて心をいやすようなことより、のめばすぐ酔えるピンガをあおって、前後不覚のねむりをむさぼる方が、どれだけ苦労に耐える力がやしなわれるかしれないし、ピンガが過ぎて体をいためるようなことがあっても、私たちはそれを移民のふがいなさとしてさげすむ気持にはなれないでしょう。

だが本来は、自作農に心のおちつきをみだすわれわれ農耕民族は、移住地の生活の中に、ほんとうのブラジルを見出したことがわかります。そこには、ことさらエキゾチズムをもてあそぶ気味はあるとしても、また、それ故にこそ祖国日本の人にも、また後世の日系人にも、移民らしさを、ほほえましい気持でみだすことができるでしょう。

コロニア万葉集は、日本では生むことのできない日本人の海外における心の動きを示すものとして尊重されるにちがいないと思います。ただしわれわれの心の歴史は今大きなまがりかどに立っ

ています。場合によっては、自分のコトバの通じない孫や曾孫の行く方をみまもる時に至っています。だが、ここに到達するまでの気持こそ、移民史の重要なページです。一世であってこそ、移民とよばれるにふさわしい人間なのですから。

―一九八一年七月二三日　日伯毎日新聞

## 時代の証言としての移民の歌

移り来て七十三年―コロニアの、さまざまな感概をよみこんだ短歌選集「コロニア万葉集」がこのほど出来上がった。移民の歌による時代の証言を静かに聞くよう、母国の人たちにも、またコロニアの若い人にも勧めたい。

コーロニアの歴史は七十三年という長い年月を経ている。期間が単に長いだけでなく、その間には排日問題で圧迫を受け、移民二分制限で苦しんだばかりでなく第二次世界大戦があり「これから自分たちはどうなるのか」と悩んだ。終戦後は現在にみられるような太平を含んでいる。

歴史は集団の記録だといわれている。そして集団は個人の集まりであり、その個人の記憶は思い出であるとすると、思い出の集大成が歴史になるわけだ。その思い出の証書として短歌や俳句がある。しかも証書は多いに越したことはないであろう。ここにこの証言を集めた「コロニア万葉集」が作られた意義があるといえ

るだろう。

「万葉集」が、日本の教科書にとりあげられるだけでなく、広く愛読され、しかも心をうつのは、その歌が、大化改新、新羅・唐との対外戦、壬申の乱から古代国家の完成に至る激動の時代を背景にした哀歓の表現であることに、一つの理由があろう。そこで甘美な恋がうたわれようと、それは激動の時代の証書となった。

このほど出版された「コロニア万葉集」を二、三日前に受け取ったが、移民が歩んで来た激動の時代の証書として読むことが出来る。ー略ー

応募、抽出を合わせて選考対象者数は一五九九人（戦前三一一人、戦後一二八八人）、同作品数は一五〇六二首（戦前一六〇〇、戦後一三四六二）で収録された作者は一三七八人（戦前二六九、戦後一一〇九）、同作品教六六三四首（戦前九九一首、戦後五六四三首）と膨大な数となっている。これらの歌に触れるとき、そこには移民がたどった激動の時代の明暗、移民の苦悩というべきものを知る。　ー引用作品、略ー　こうした三つ四つを拾ってみても、短歌という小窓からみた移民の足跡は、時代の体験者の身にしみ、身につまされるものであろう。

ー一九八一年五月七日、サンパウロ新聞社説

(椰子樹会員住所録　１４５―１５０頁)

(次の翻訳はほかのページの囲み記事)

非凡なる人のゔりとゝにゃるまくる

後のそびしそは

何にたゞくむ

Como comparer essa tristesa depois de ter sido o senhor de todas as trevas

函館の青柳町ゝりそかなしけれ

友の恋歌

矢ゞるまの花

Cidade de HAKODATE, bairro Aoyagui, poema de amor, de amigo, tristeza, flor de loio

病のゔりと

思郷のゝゝりろ湧ゝ日なり

日にあをぞらの煙かなしも

Fumaca no ceu azul, o inverno sobre os olhos.

Uma doenca, a nostalgia.

呼吸すれば
胸の中にて鳴る音あり。
風よりもさびしきその音ー
Quando respire, canta meu peito mais melancolico que o vento frio de inverno.

頬につたふ
なみだのゝはず
一握の砂を示しし人を忘れず
Nas maos, um punhado de areia.
Lagrimas a escorrer pelas faces.
Como te esquecer ?

砂山の砂に腹這い
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日
Deitado de brucos na duna com um passado distante a dor do meu primeiro amor.

(de TAKUBOKU ISHIKAWA ∽ Masuo Yamaki e Paulo Colina)

椰子樹二〇〇号記念
別　冊　特　集　号
一九八六年二月
発　行　所　　椰　子　樹　社
サンパウロ市セナドール・フェイジョ街三〇番
九階九〇五号室　ＣＥＰ＝〇一〇〇六
印　刷　所　　サガ美術印刷サービス
サンパウロ市ムニース・デ・ソウザ街二五九番
（１９８５年１０月現在）